



図 206 棕櫚 -1

「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」部分図



図 207 棕櫚 -1「妙喜庵茶室袖摺松（草偃）」部分図

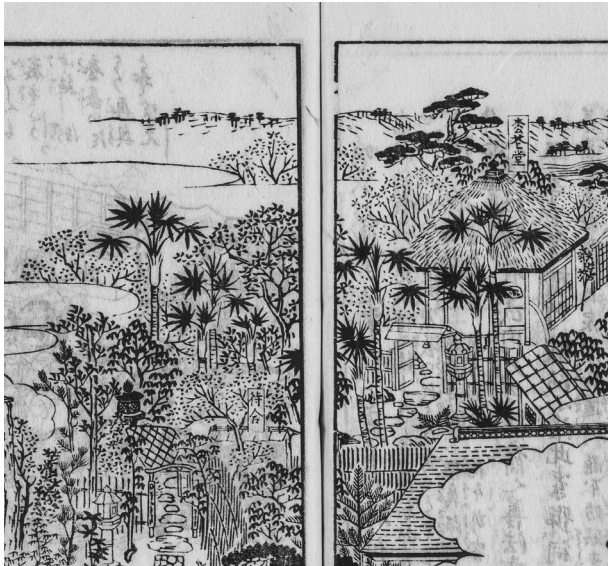


図 208 棕櫚 -2「八幡泉坊（文鳴）」部分図

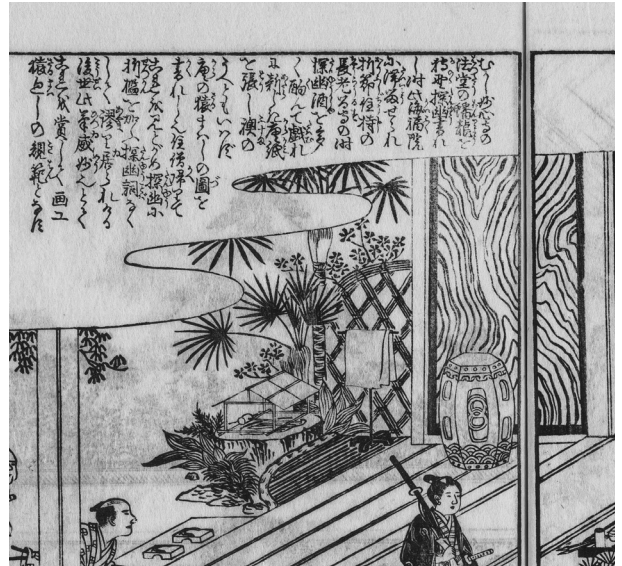


図 209 棕櫚 -2「妙心塔頭海福院（文鳴）」部分図



図 210 棕櫚 -3「伏見龍徳庵（中和）」部分図

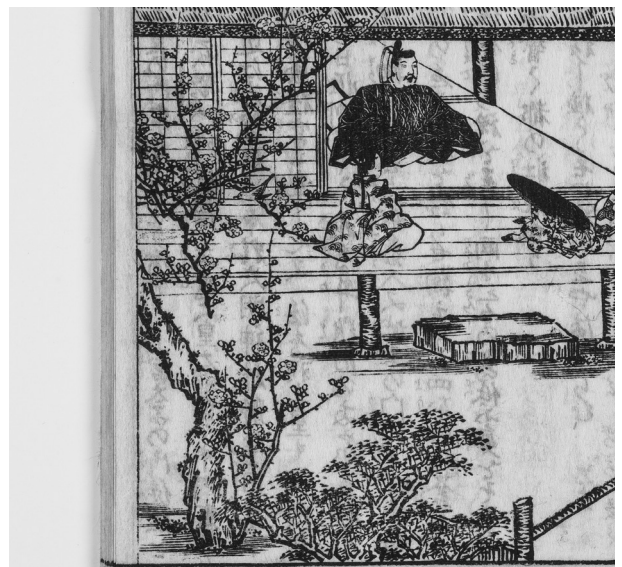


図 211 近景の梅の描写「相国寺林光院鶯宿梅（草偃）」部分図

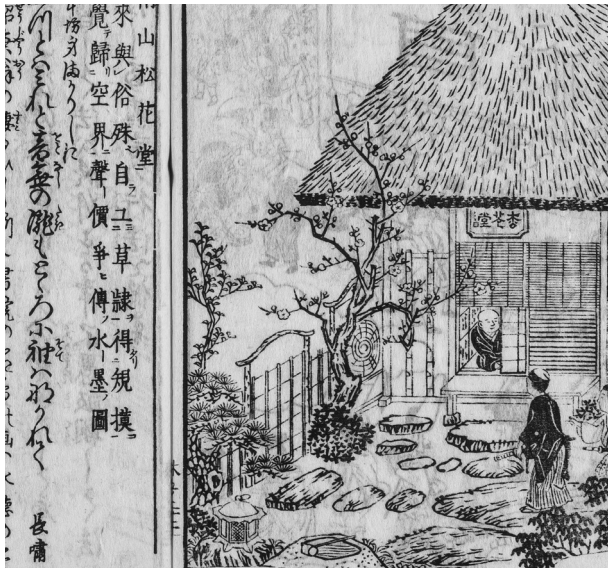


図 212 近景の梅の描写「松花堂全圖（文鳴）」部分図



図 213 『芥子園画伝』に描かれた梅の描写
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)

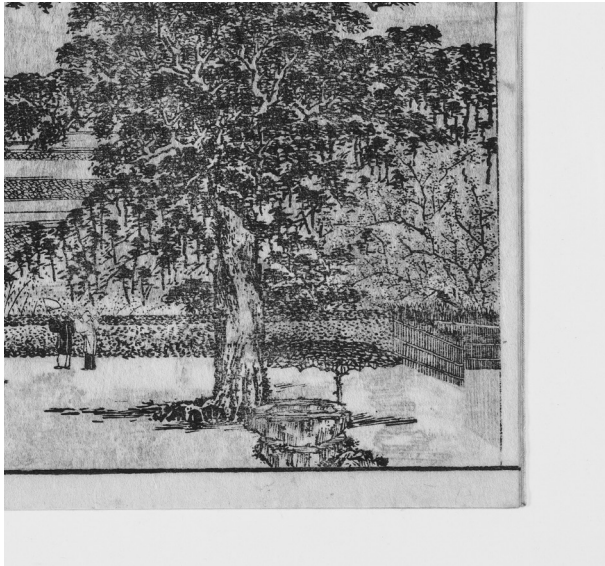


図 214 中景の梅の描写「成就院其二（草偃）」
部分図

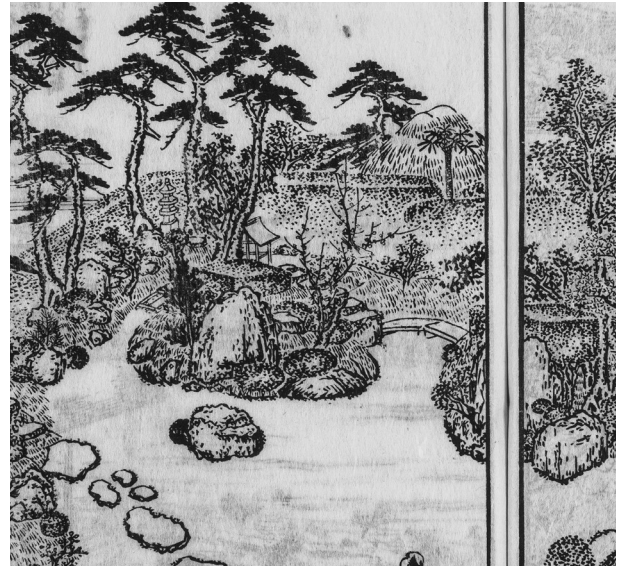


図 215 中景の梅の描写「伏見龍徳庵（中和）」
部分図

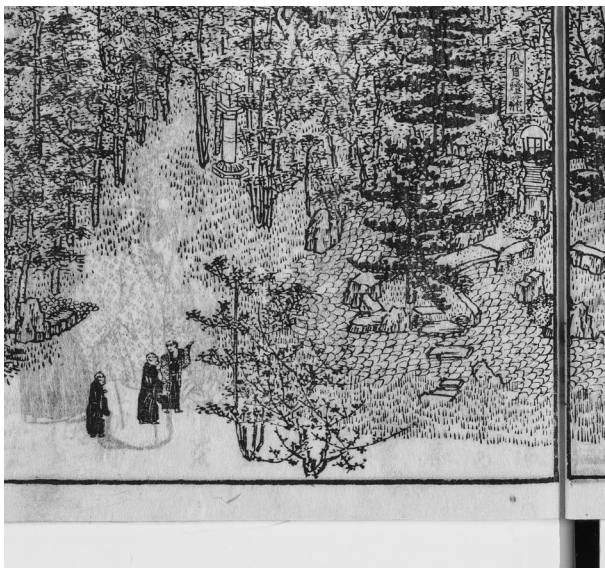


図 216 中景の梅の描写「本因寺中真如院（草偃）」
部分図



図 217 蘇鉄-1「西六条本願寺對面所林泉（中和）」
部分図



图 218 蘇鉄-1「圓山勝興庵正阿弥書會（中和）」
部分図

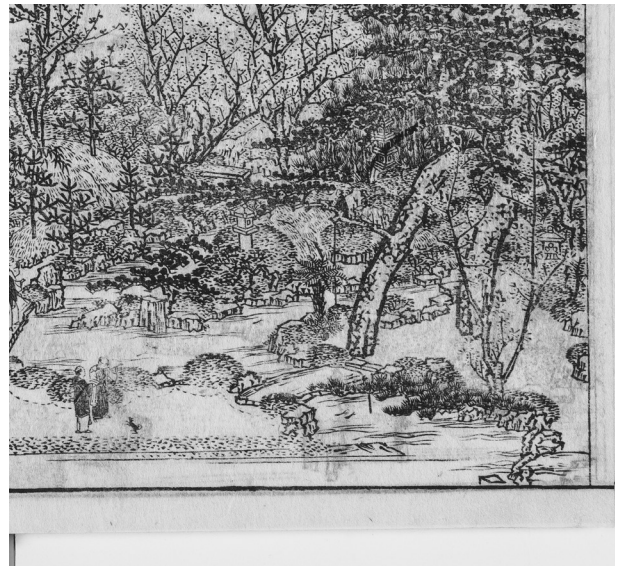


图 219 蘇鉄-2「圓山多福菴其貳（草優）」部分図



图 220 蘇鉄-3「稻荷社初午詣（文鳴）」部分図

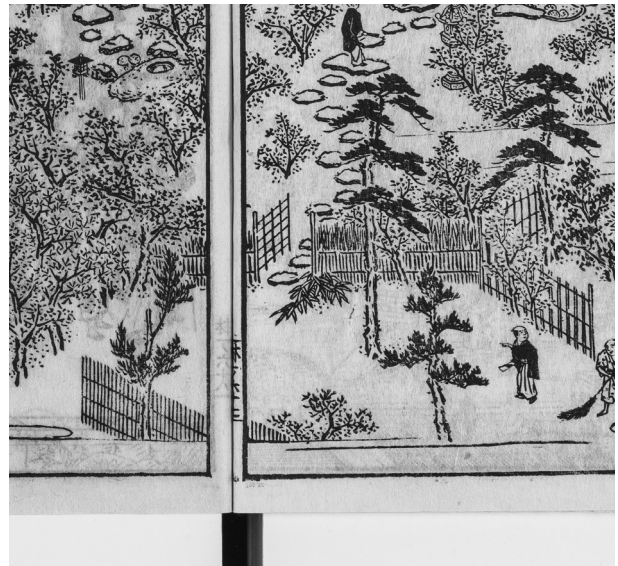


图 221 笹-1「宝輪院茶亭庭（中和）」部分図



图 222 笹-1「龍馬献上（中和）」部分図



图 223 笹-2「建仁寺門前十日笑姿参（中和）」部分図

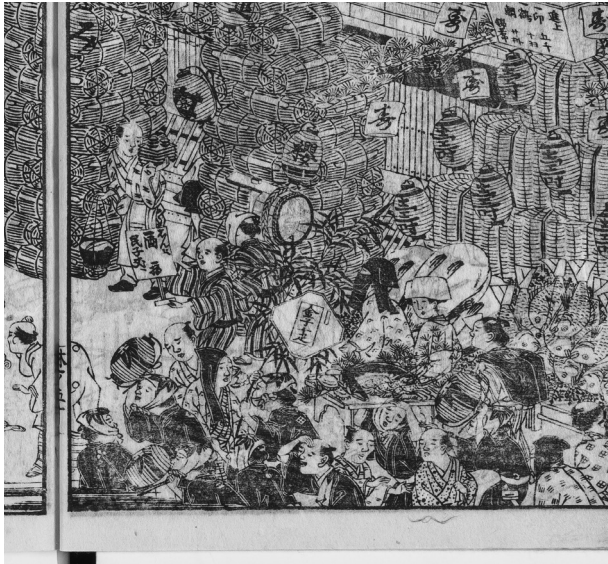


図 224 笹-2「顔相見（文鳴）」部分図



図 225 平地に描かれる地被類「南禅塔中牧護菴（草偃）」
部分図



図 226 平地に描かれる地被類
「建仁寺正伝院（草偃）」部分図



図 227 平地に描かれる地被類「赤山社（中和）」
部分図



図 228 斜面に描かれる地被類
「圓山延寿庵連阿弥其一（草偃）」部分図

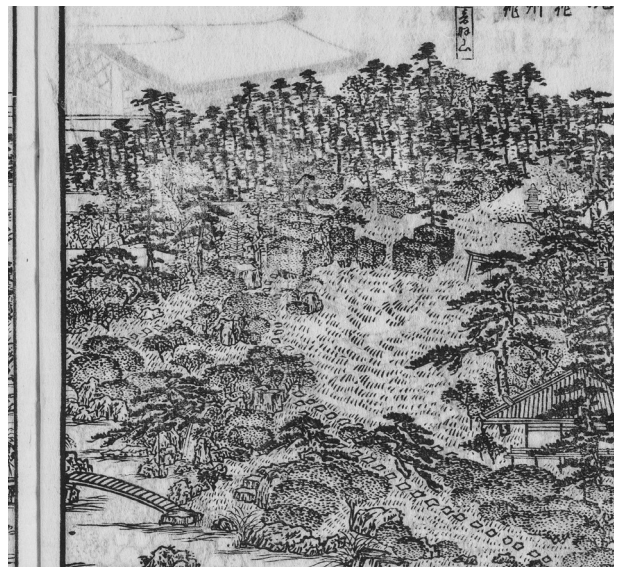


図 229 斜面に描かれる地被類
「清水成就院其一（草偃）」部分図

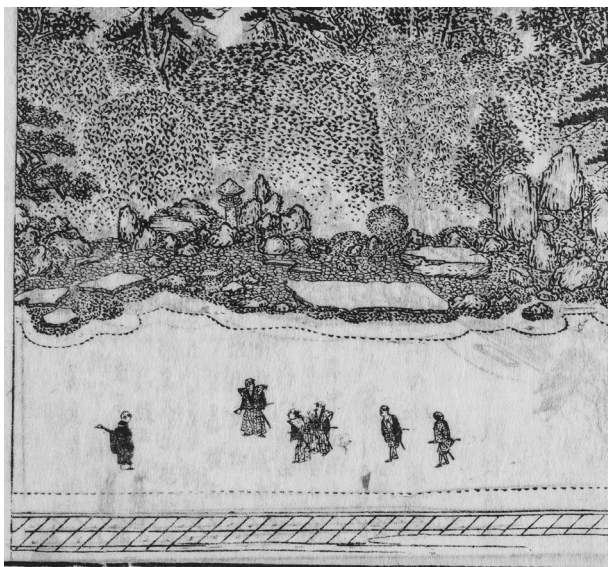


図 230 苔の描写「南禅金地院其一（中和）」部分図

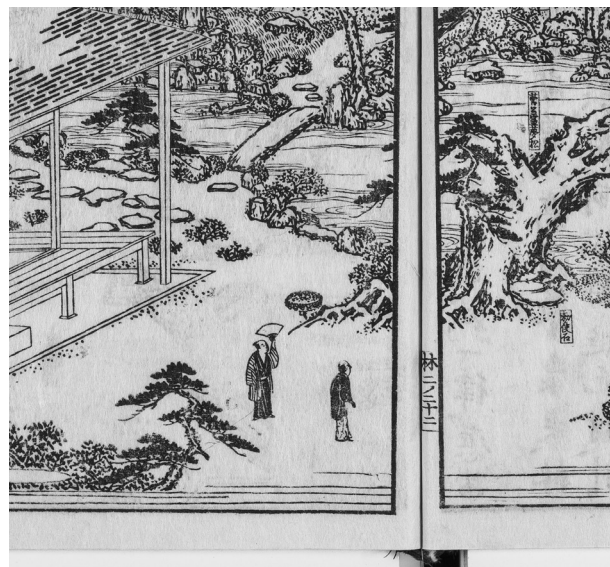


図 231 苔の描写「南禅塔中聴松院（中和）」部分図

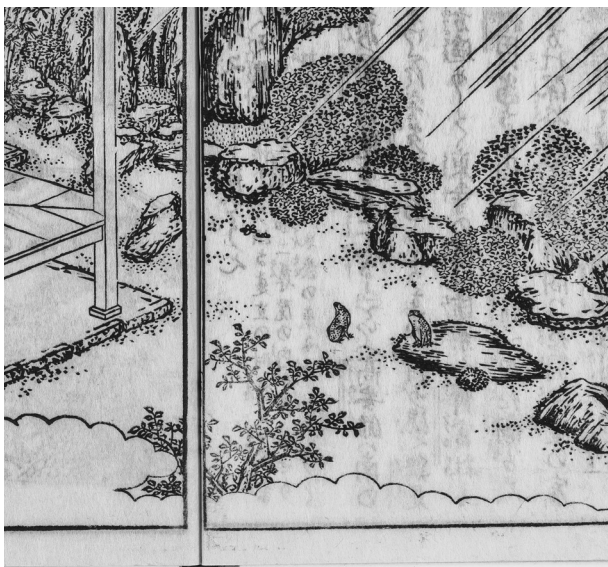


図 232 苔の描写「妙心塔頭靈雲院（中和）」部分図



図 233 『芥子園画伝』における点葉法・介字点
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)

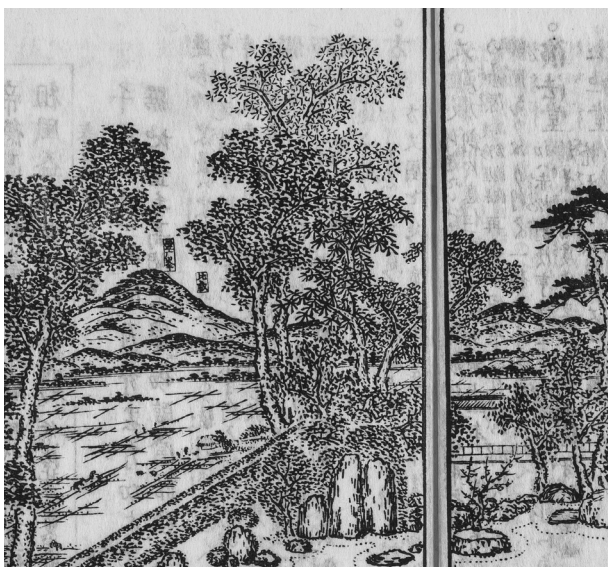


図 234 介字点を用いた樹木「大徳寺方丈（中和）」
部分図

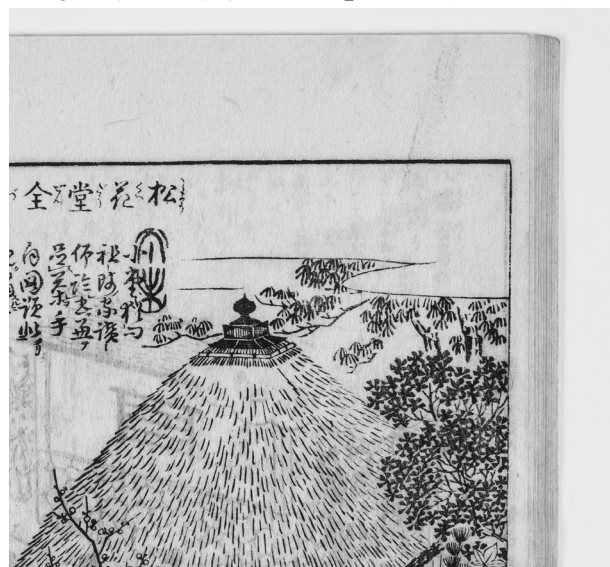


図 235 介字点を用いた樹木「松花堂全圖（文鳴）」
部分図



図 236 『芥子園画伝』における点葉法・胡椒点
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)



図 237 胡椒点を用いた樹木「大徳寺塔頭寸松庵 (草偃)」
部分図

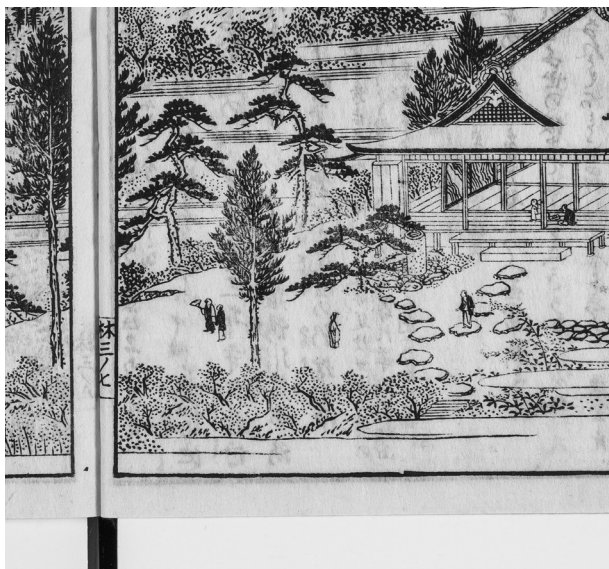


図 238 胡椒点を用いた樹木「清水寶生院 (中和)」
部分図



図 239 『芥子園画伝』における点葉法・一字点
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)

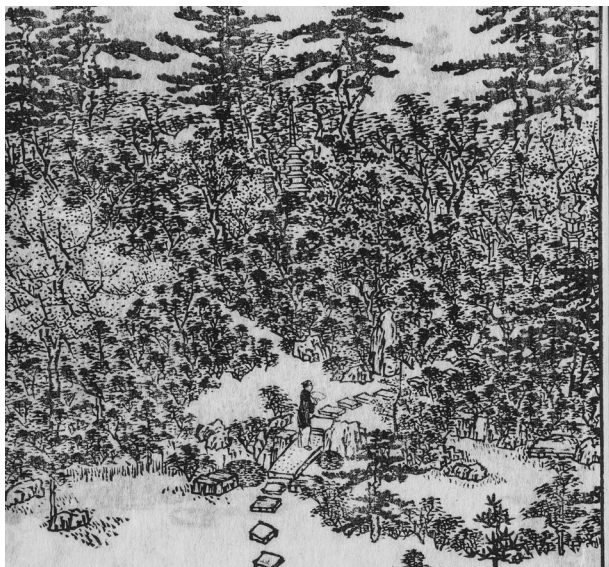


図 240 一字点を用いた樹木
「大徳寺塔頭寸松庵 (草偃)」部分図

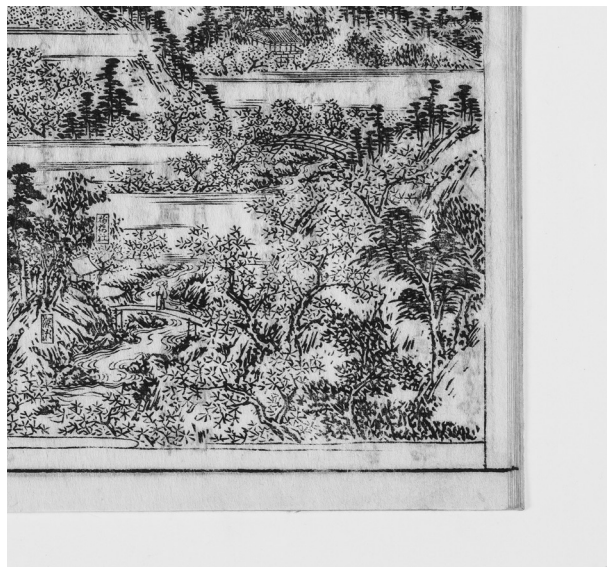


図 241 一字点を用いた樹木「梅尾高山寺三尊院 (中和)」
部分図

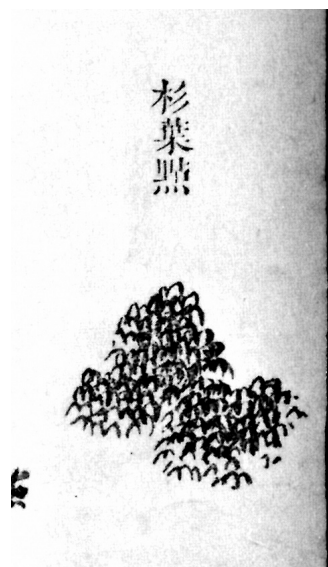


図 242 『芥子園画伝』における点葉法・杉葉点
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)

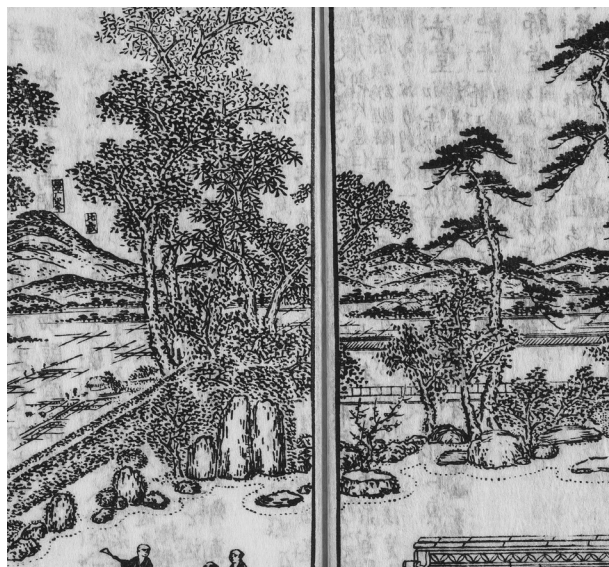


図 243 杉葉点を用いた樹木「大徳寺方丈 (中和)」
部分図



図 244 杉葉点を用いた樹木「南禅寺亀山法皇古墟 (中和)」
部分図



図 245 『芥子園画伝』における点葉法・夾葉法
(王概『芥子園画伝 初集 山水樹石』下 筑摩書房 1975 年より)

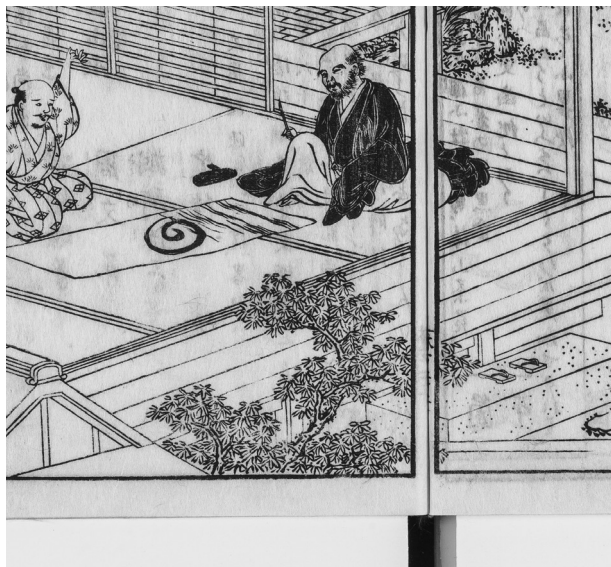


図 246 夾葉法を用いた樹木「大徳寺一休和尚 (中和)」
部分図



図 247 夾葉法を用いた樹木「赤山社 (中和)」部分図



図 248 夕立の様子を描いた『都名所図会』「御所八幡社」
(国際日本文化研究センター所蔵)

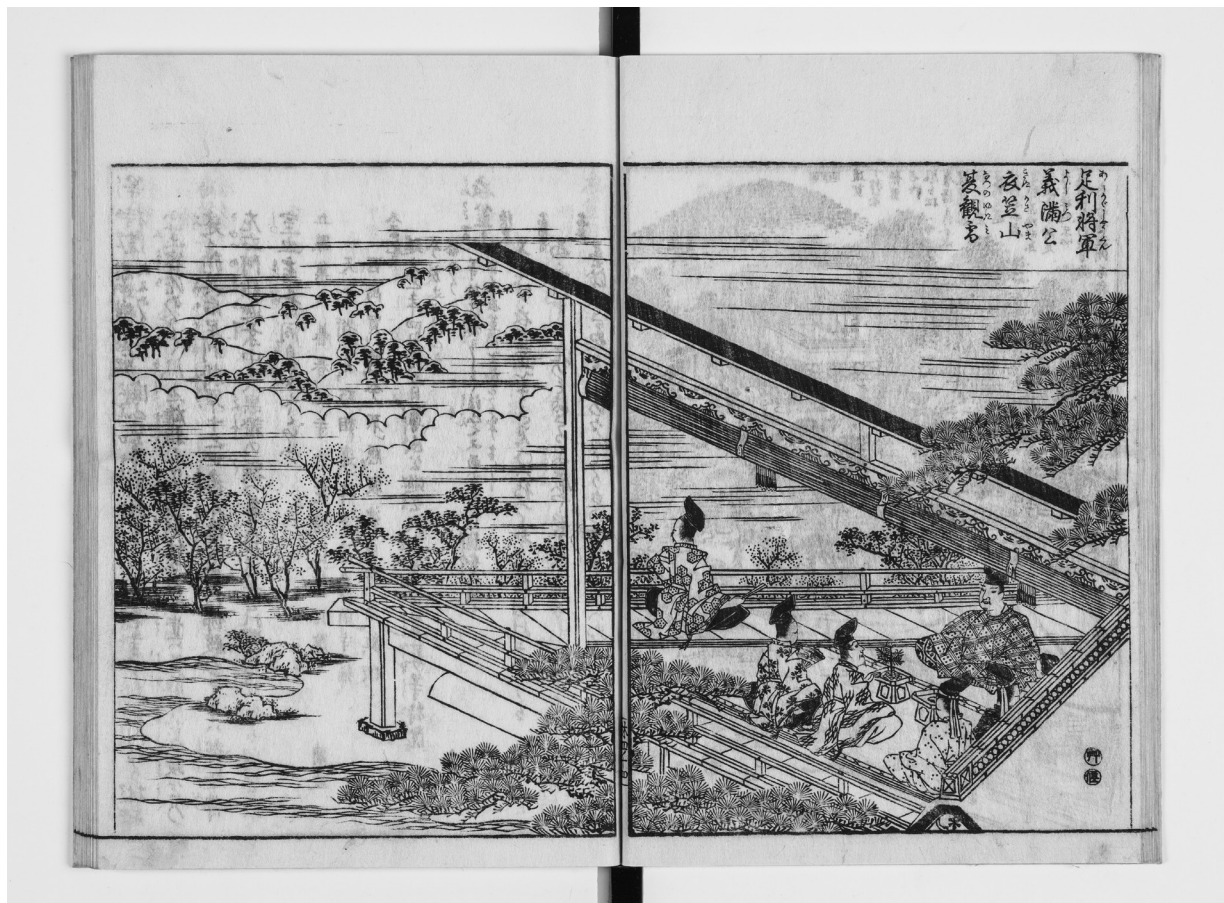


図 249 草偃の雪の描写「足利將軍義満公衣笠山夏観雪（草偃）」



図 250 中和の雪の描写「建仁塔頭霊洞院（中和）」

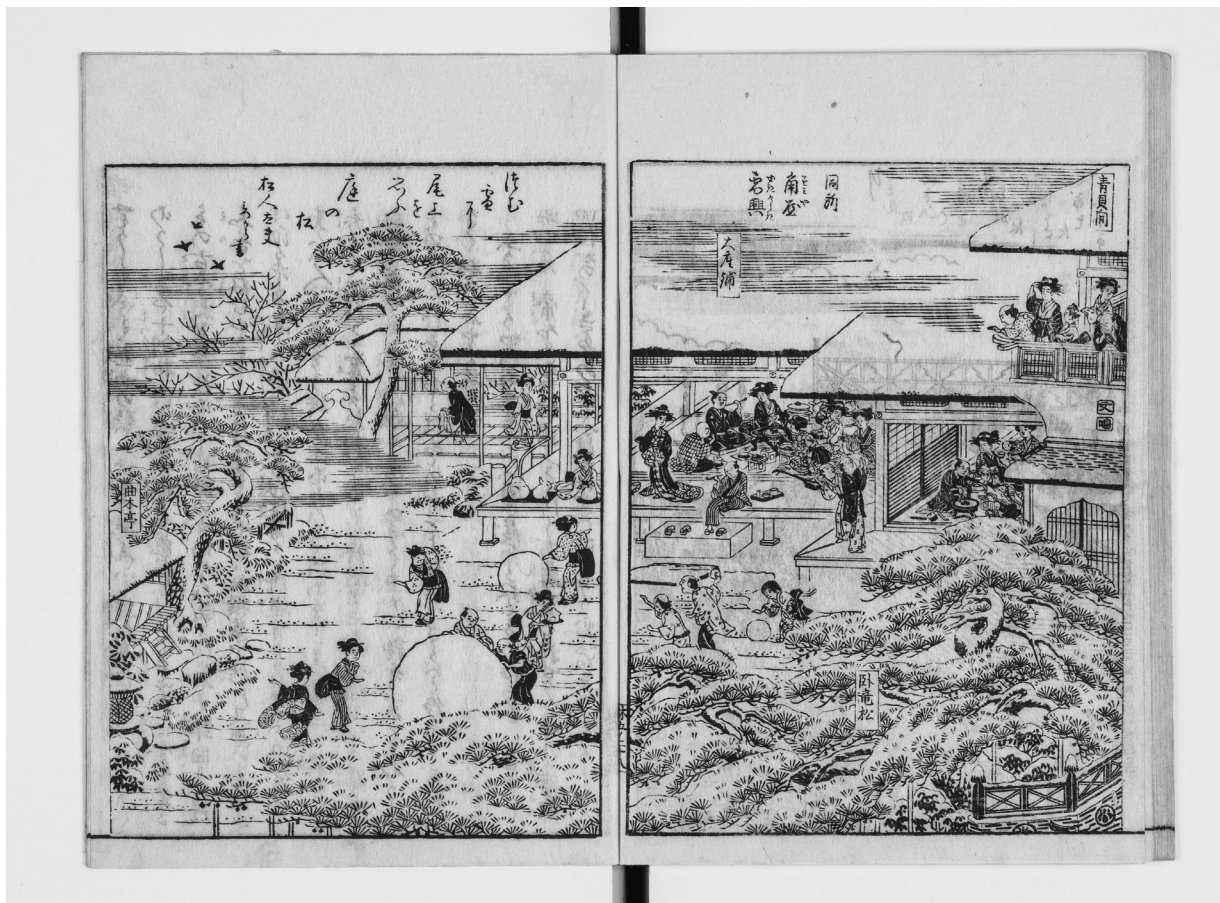


図 251 文鳴の雪の描写「同所角屋雪興（文鳴）」

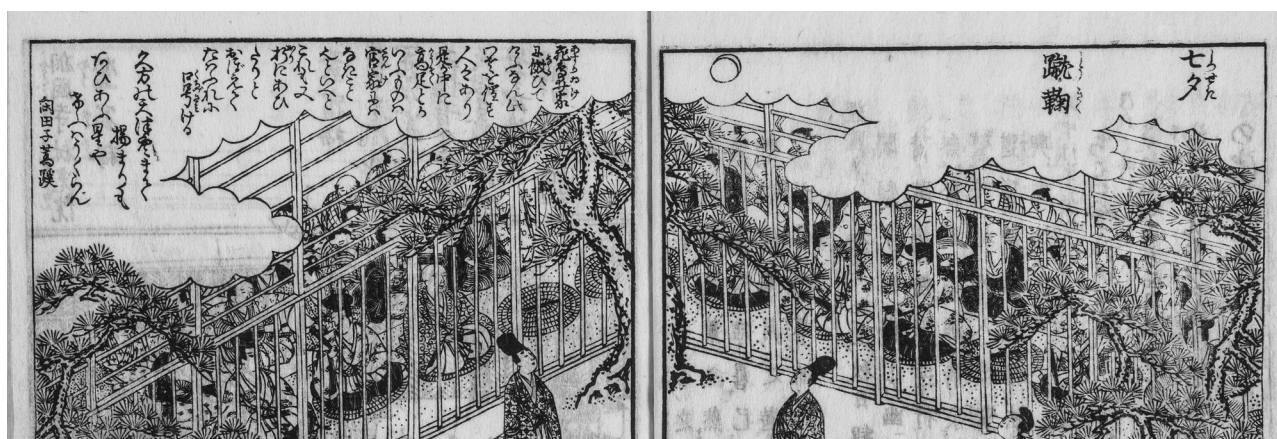


图 252 雲 -1「七夕蹴鞠（中和）」部分図

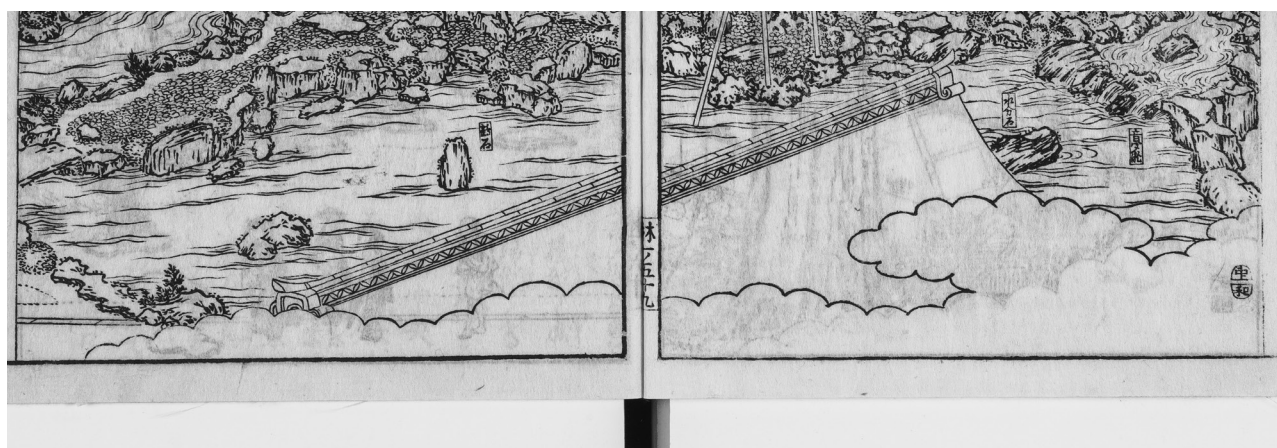


图 253 雲 -1「八條遍照心院方丈其一（中和）」部分図

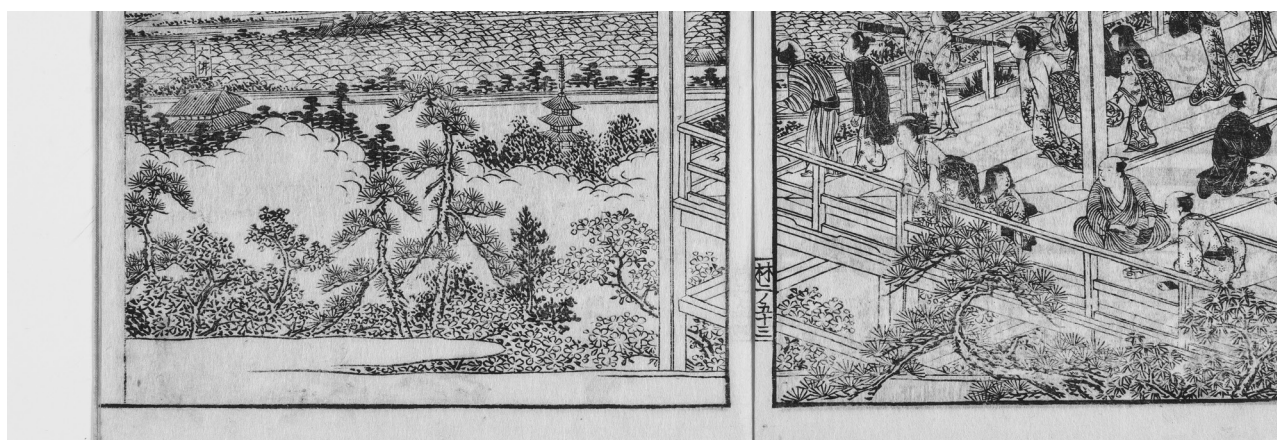


图 254 雲 -2「靈山珠阿弥（中和）」部分図



図 255 雲 -2「高雄地藏院（中和）」部分図

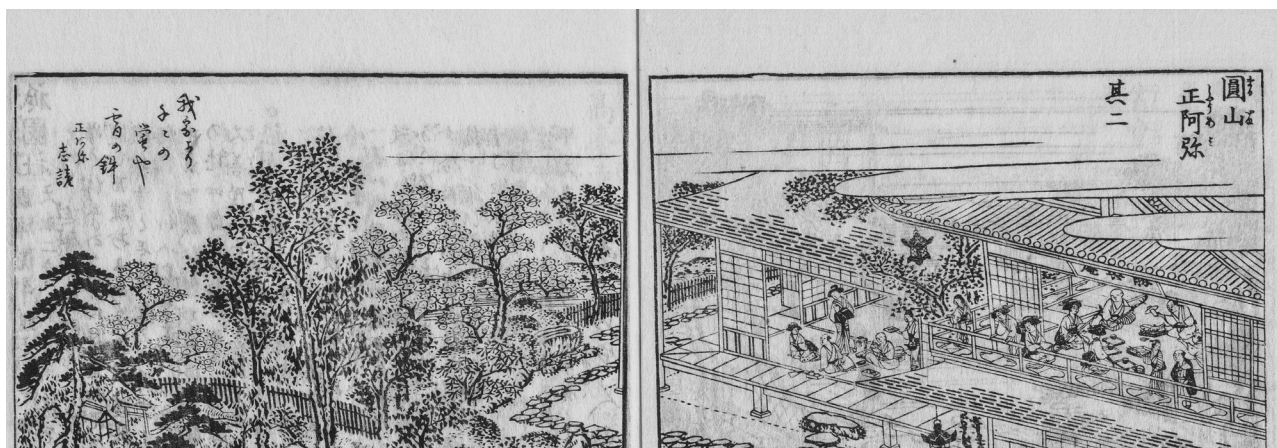


図 256 日中を表す霞 -1「圓山正阿弥其二（中和）」部分図

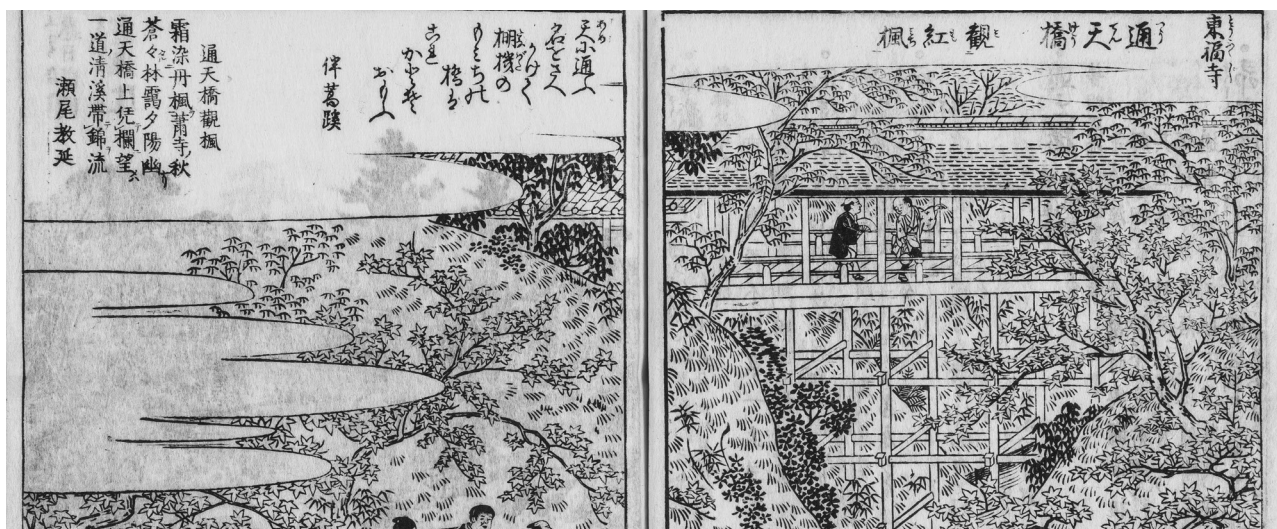


図 257 日中を表す霞 -1「東福寺通天橋観紅楓（文鳴）」部分図

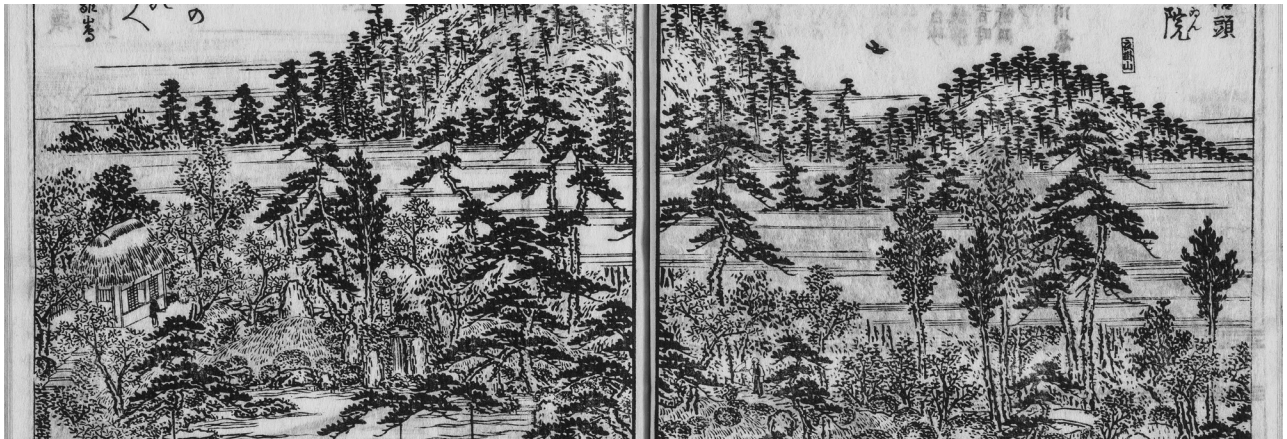


図 258 日中を表す霞-2「龍安塔頭西源院（中和）」部分図

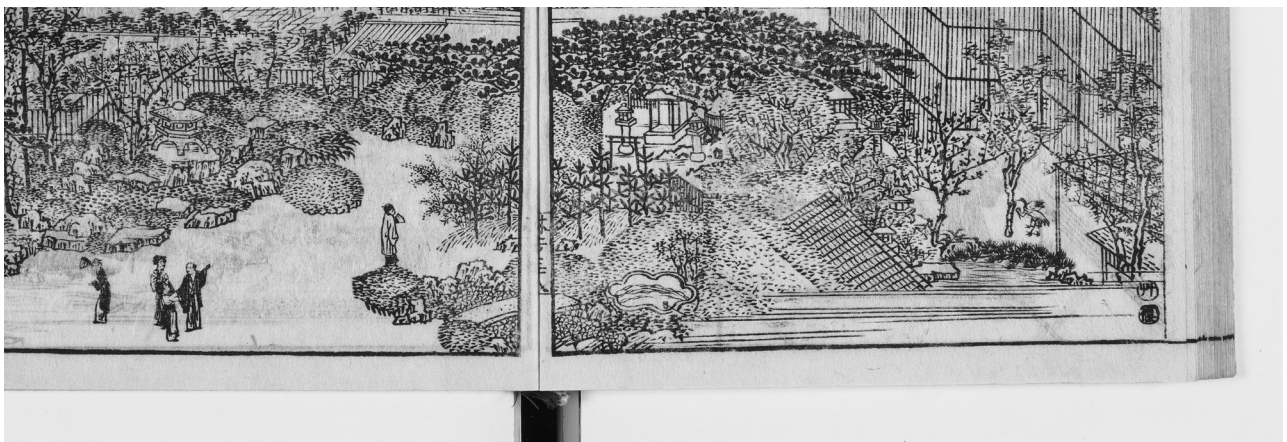


図 259 日中を表す霞-2「圓山多福菴也阿弥其一（草偃）」部分図



図 260 夕暮れを表す霞「龍安塔頭大珠院（中和）」部分図

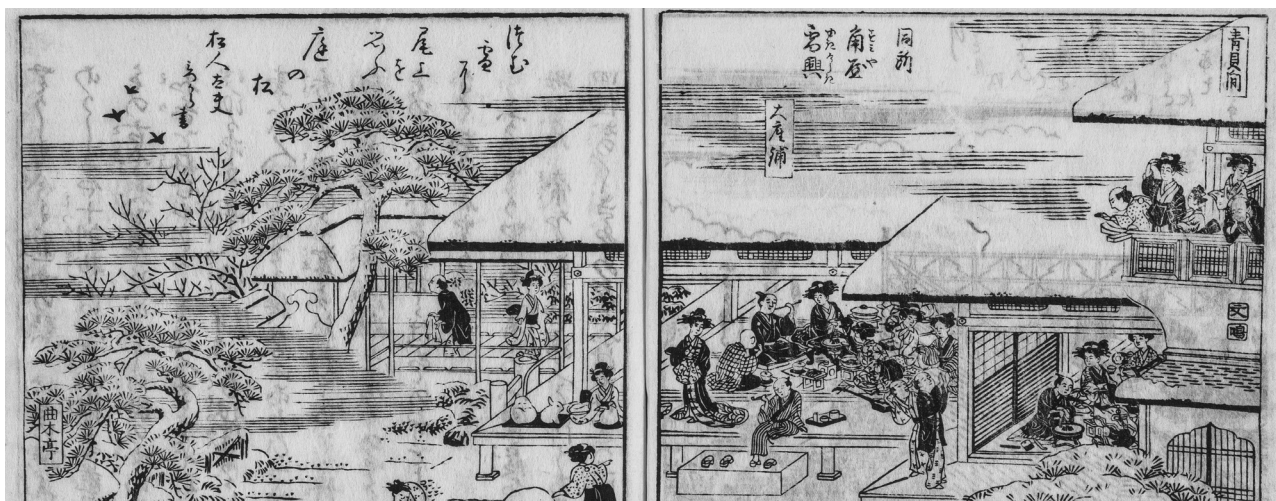


図 261 夕暮れを表す霞「同所角屋雪興（文鳴）」部分図

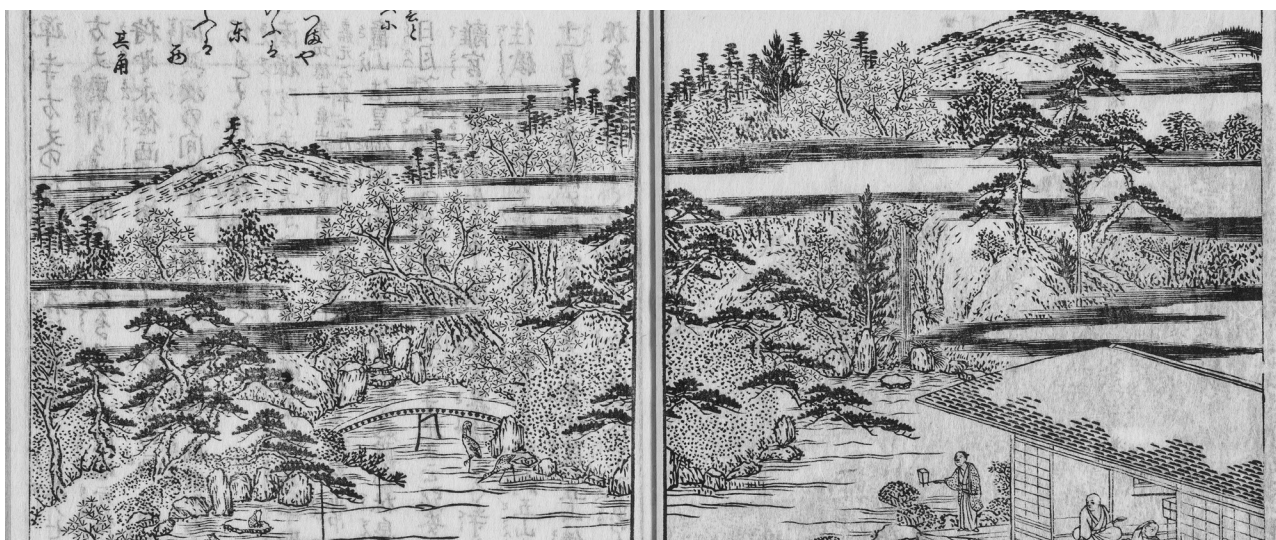


図 262 夜を表す霞-1「光雲寺（中和）」部分図

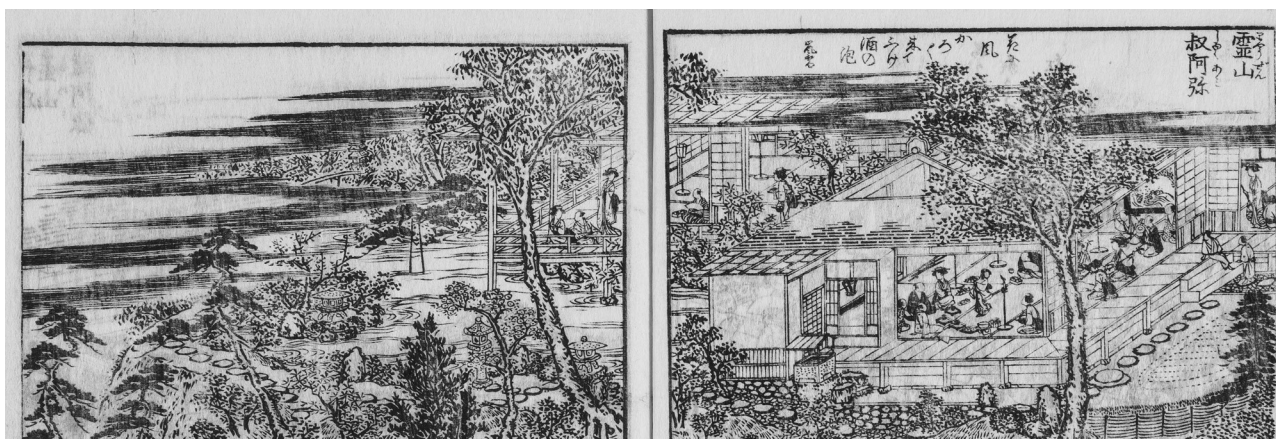


図 263 夜を表す霞-1「靈山叔阿弥（中和）」部分図

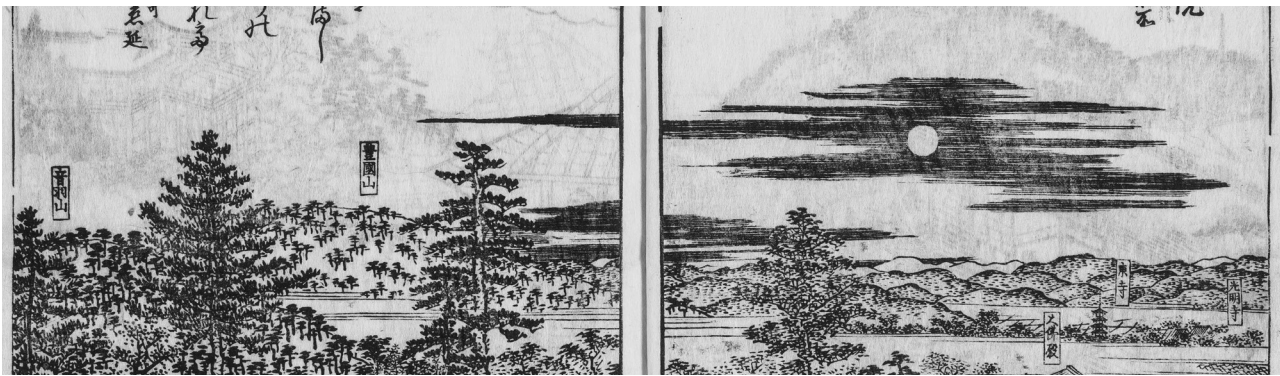


図 264 夜を表す霞 -2「清水園養院（草偃）」部分図

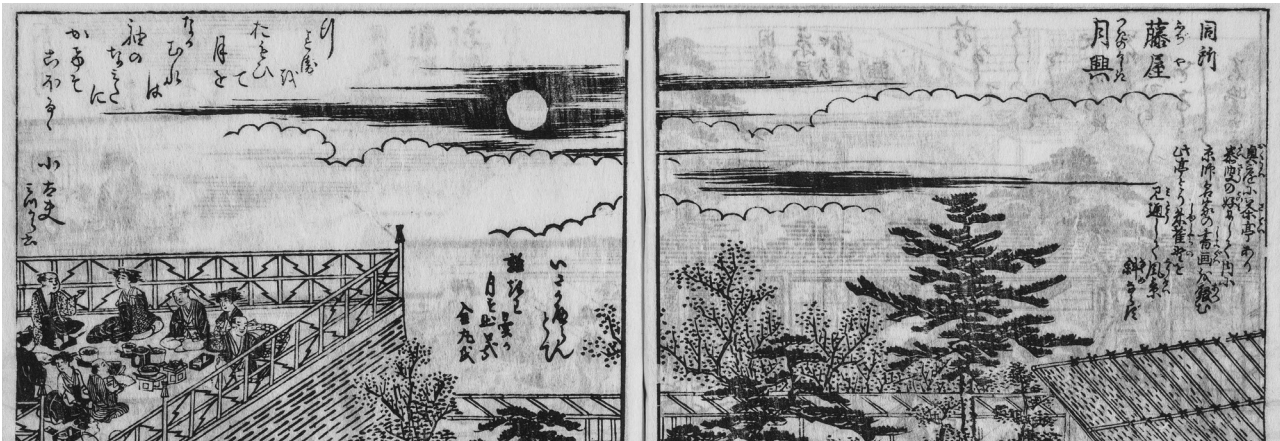


図 265 夜を表す霞 -2「同所藤屋月興（草偃）」部分図

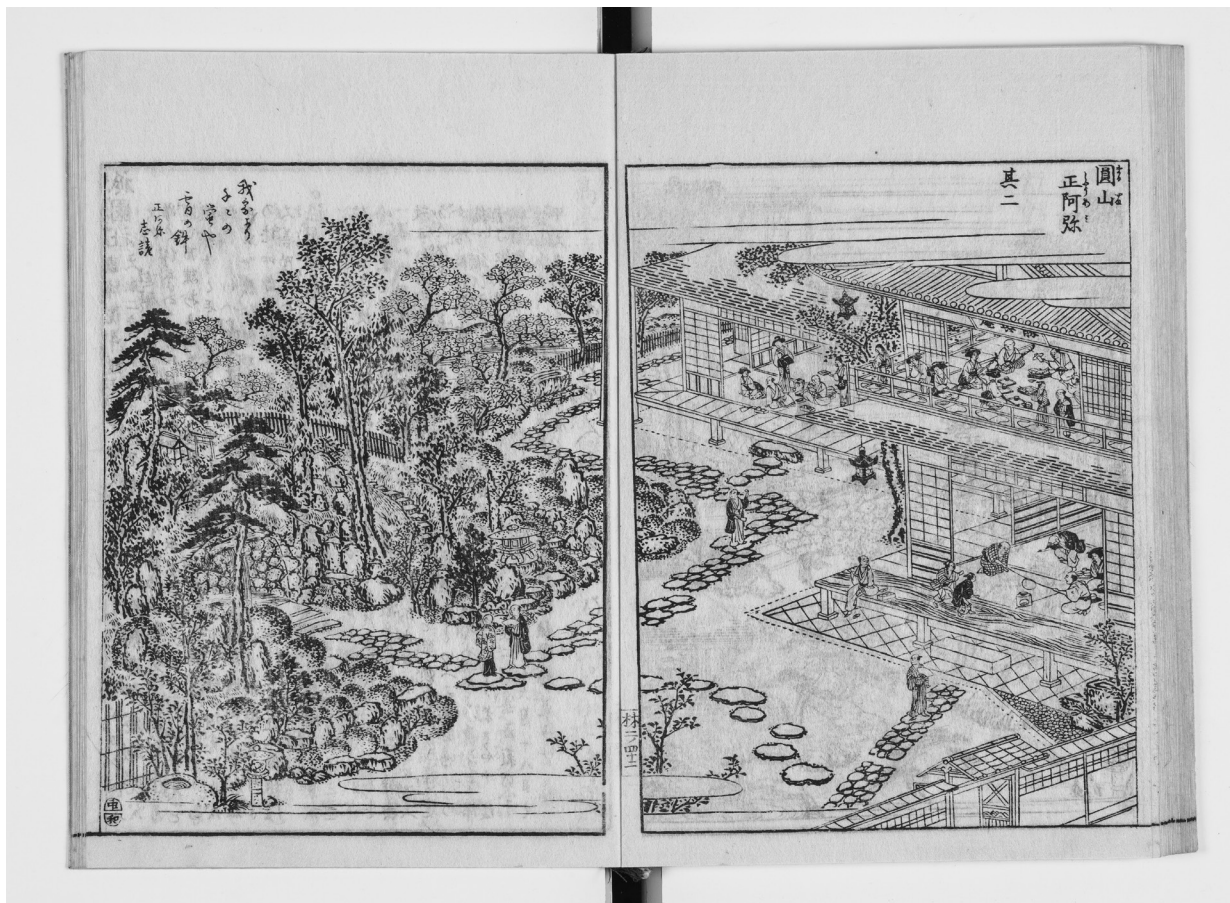


図 266 「圓山正阿弥其二（中和）」



図 267 「南禅金地院其一（中和）」



図 268 「其貳（中和）」

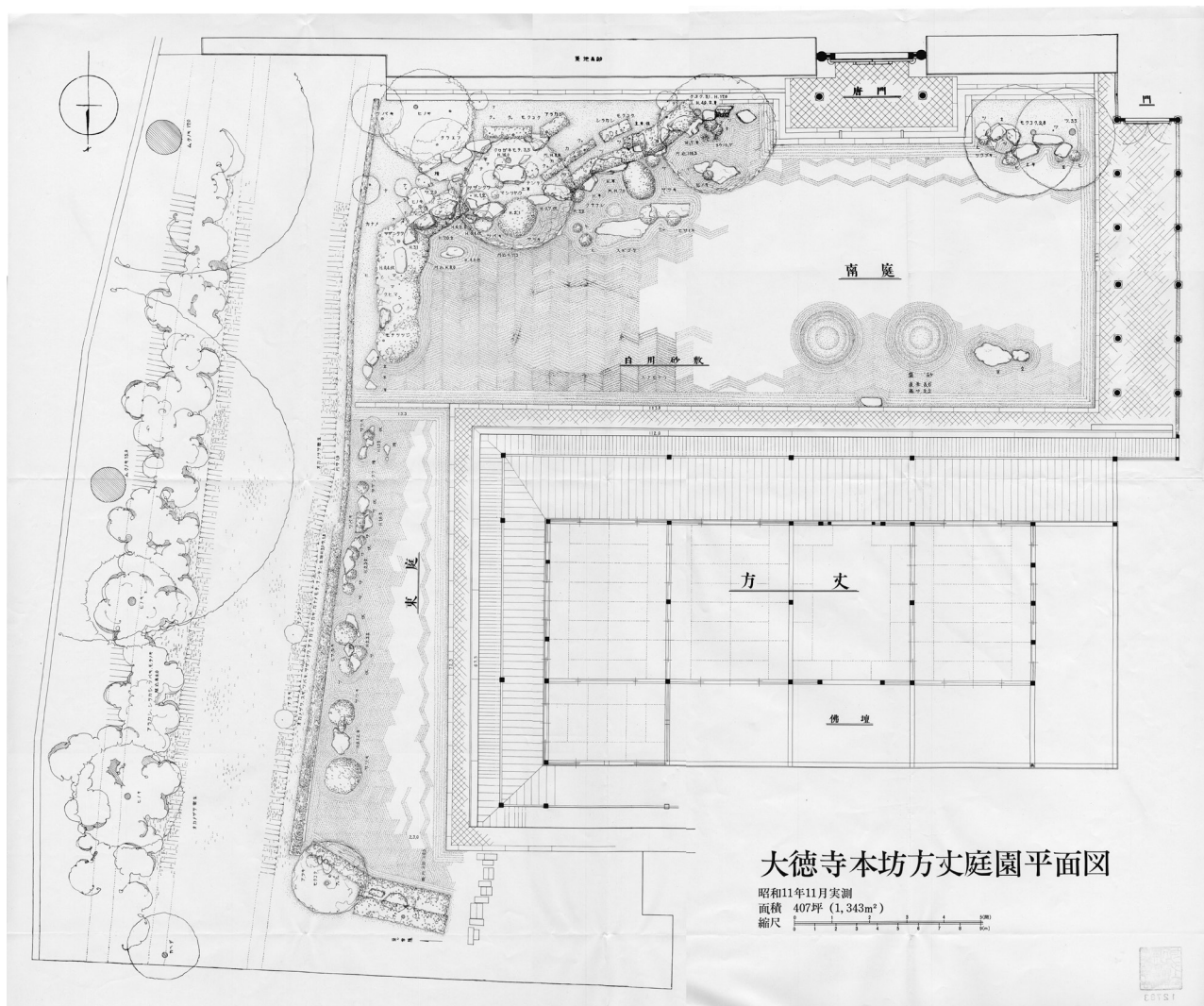


図 270 大徳寺方丈庭園平面図

(重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』20 江戸初期の庭 (7) 社会思想社 1942 年 より)

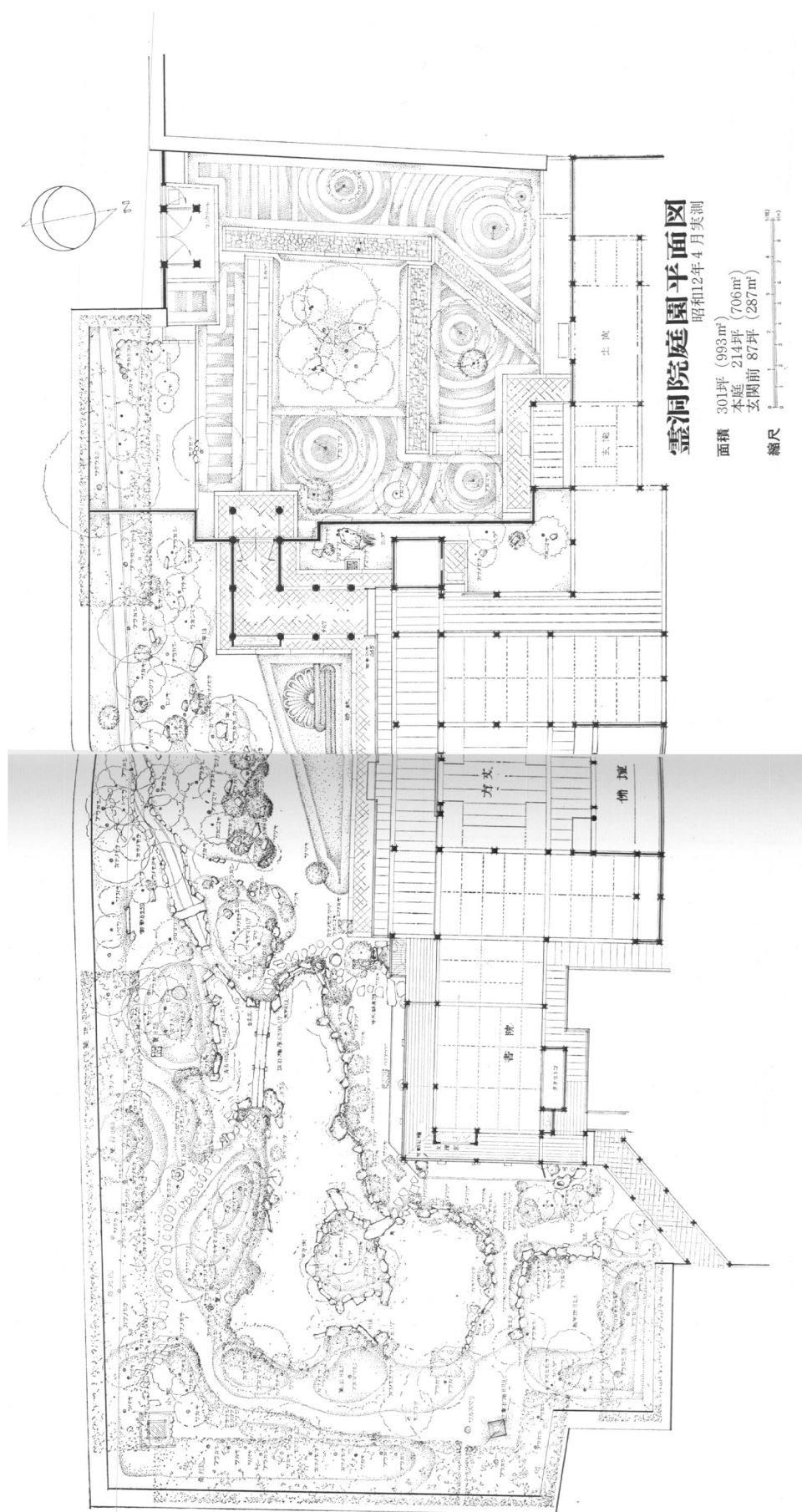


図 271 霊洞院庭園平面図

(重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』24 巻 江戸中末期の庭 (1) 社会思想社 1973 年より)



図 272 中島に架かる石橋の様子 (2016 年 2 月筆者撮影)

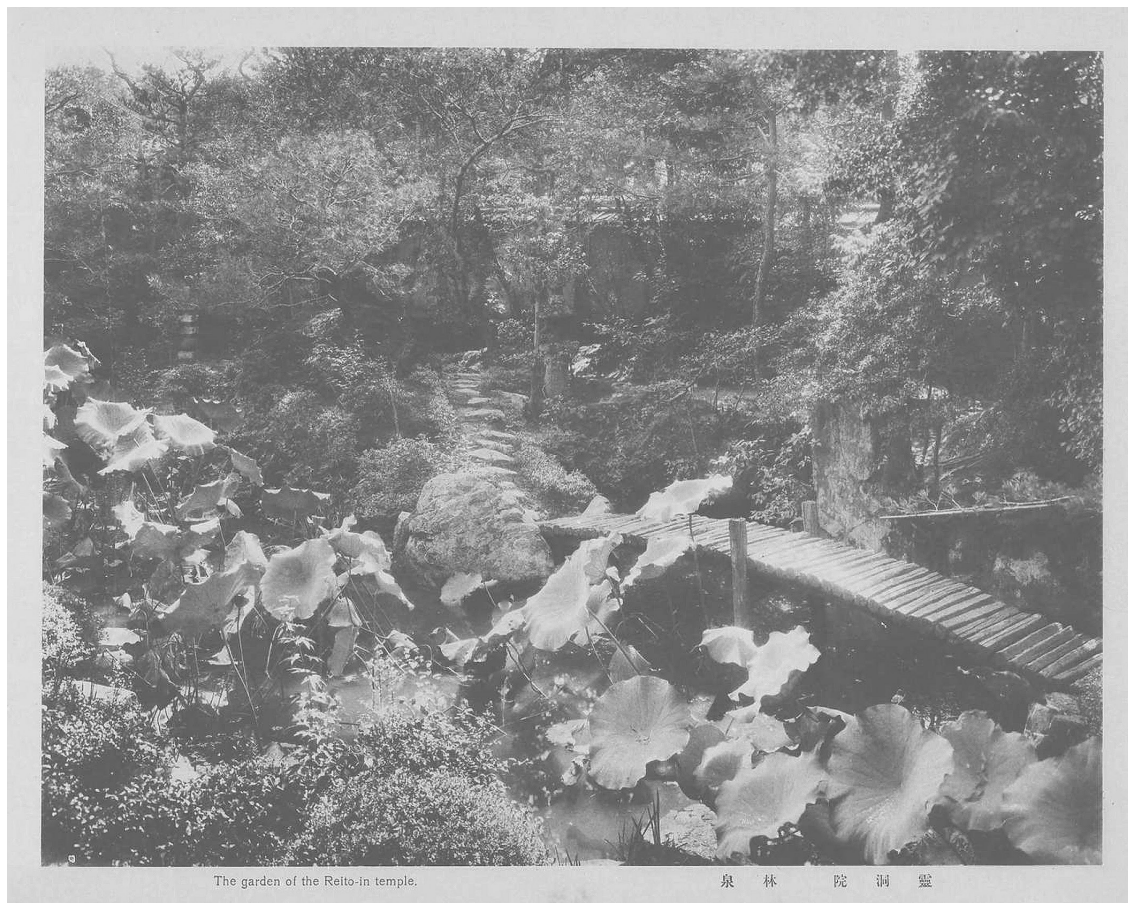


図 273 『花洛林泉帖』「靈洞院庭園」(国立国会図書館デジタルコレクションより)

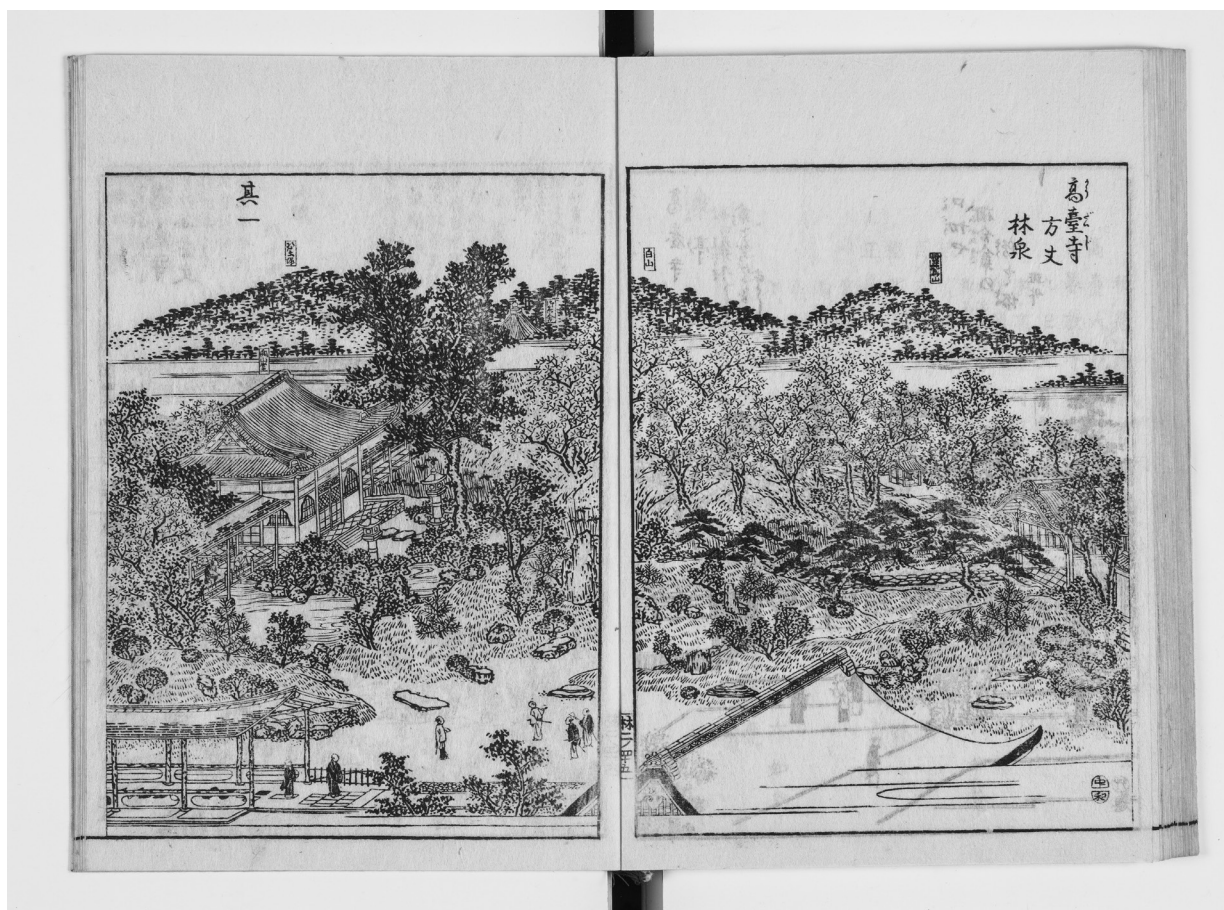


図 274 「高臺寺方丈林泉其一（中和）」



図 275 「歌中山清閑寺（草偃）」



図 276 現在の要石付近の様子 (2017 年 7 月筆者撮影)



図 277 清閑寺庭園からの眺望 (2017 年 7 月筆者撮影)



図 278 現在の光雲寺において見られる瑤瑠手水鉢（2011 年 11 月筆者撮影）

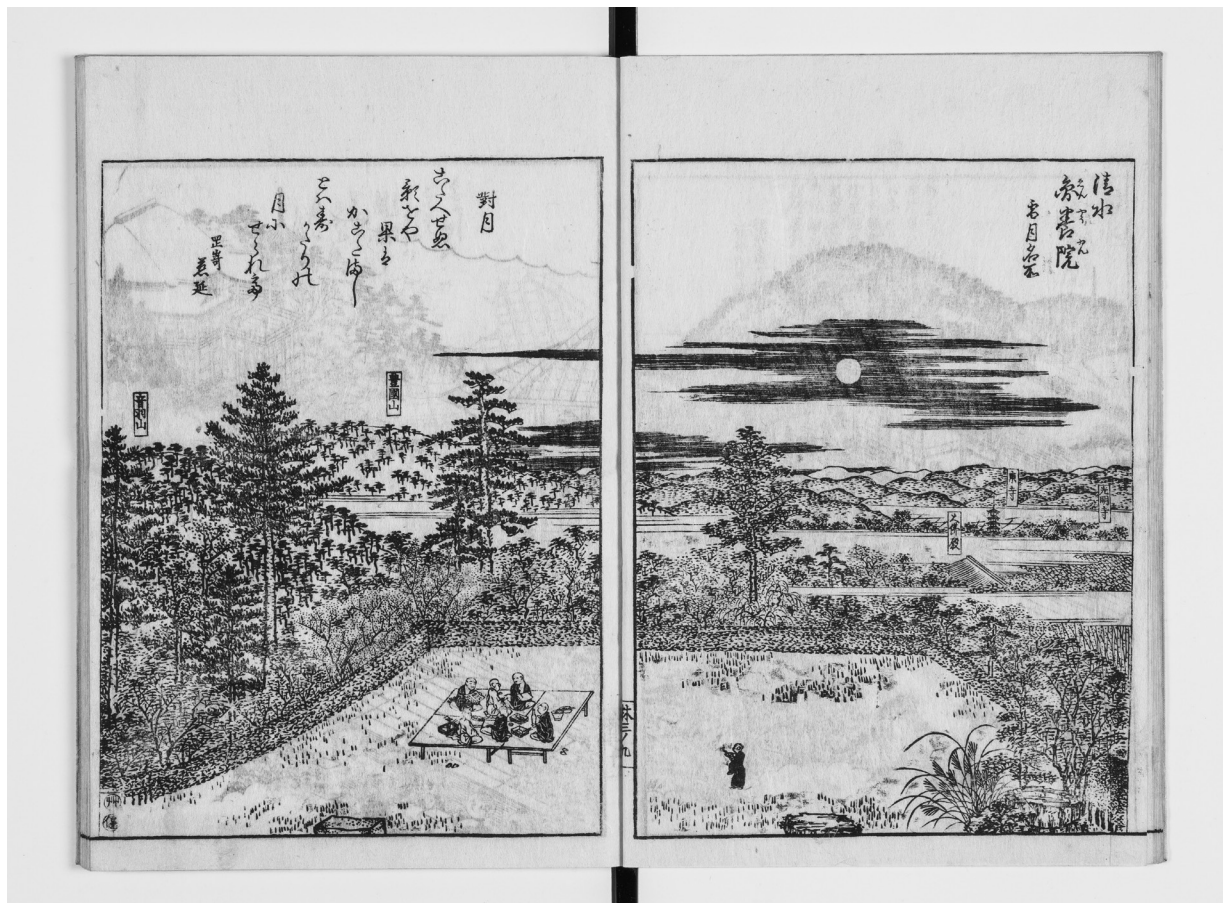


図 279 「清水園養院（草偃）」

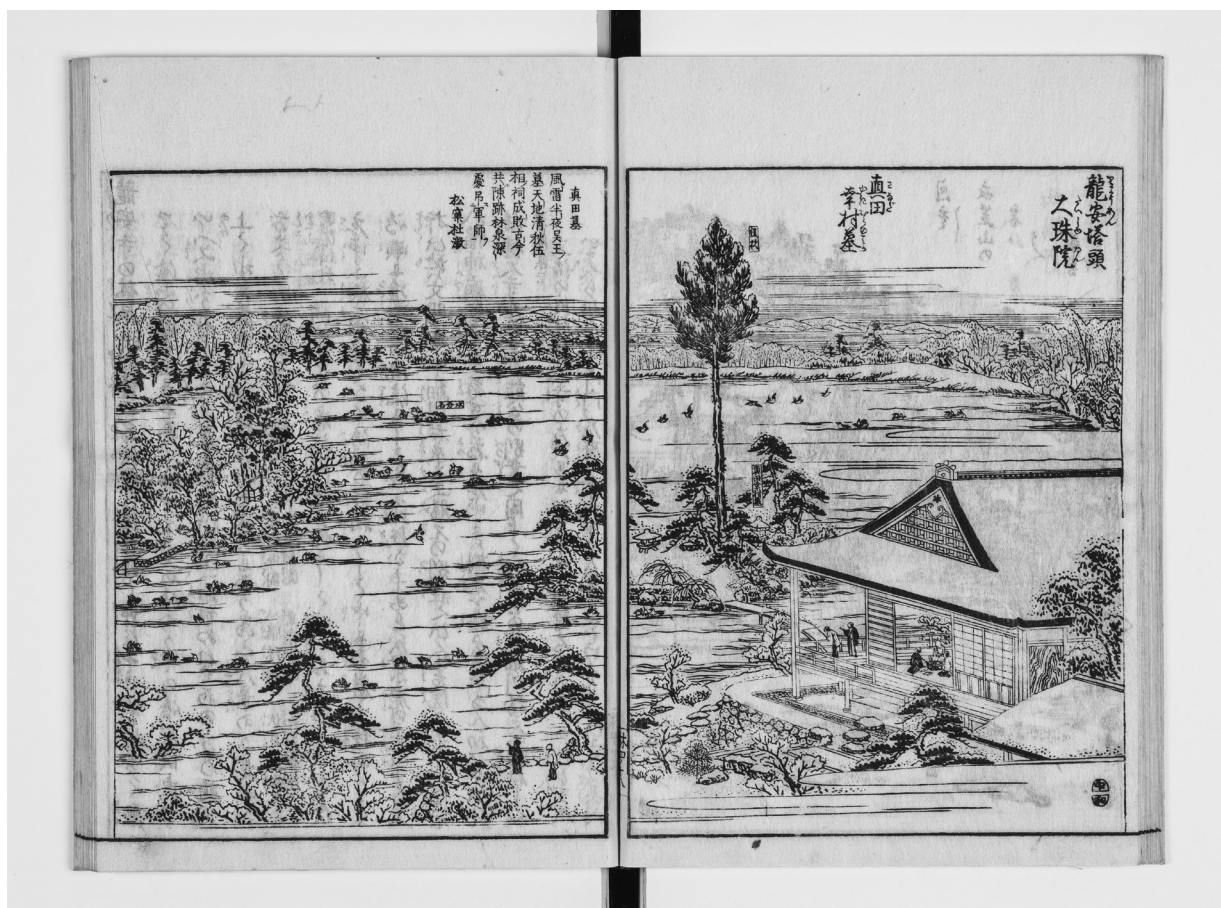


图 280 「龍安塔頭大珠院（中和）」



图 281 「等持院（中和）」



図 282 中島に架かる石橋の様子（2015 年 11 月筆者撮影）

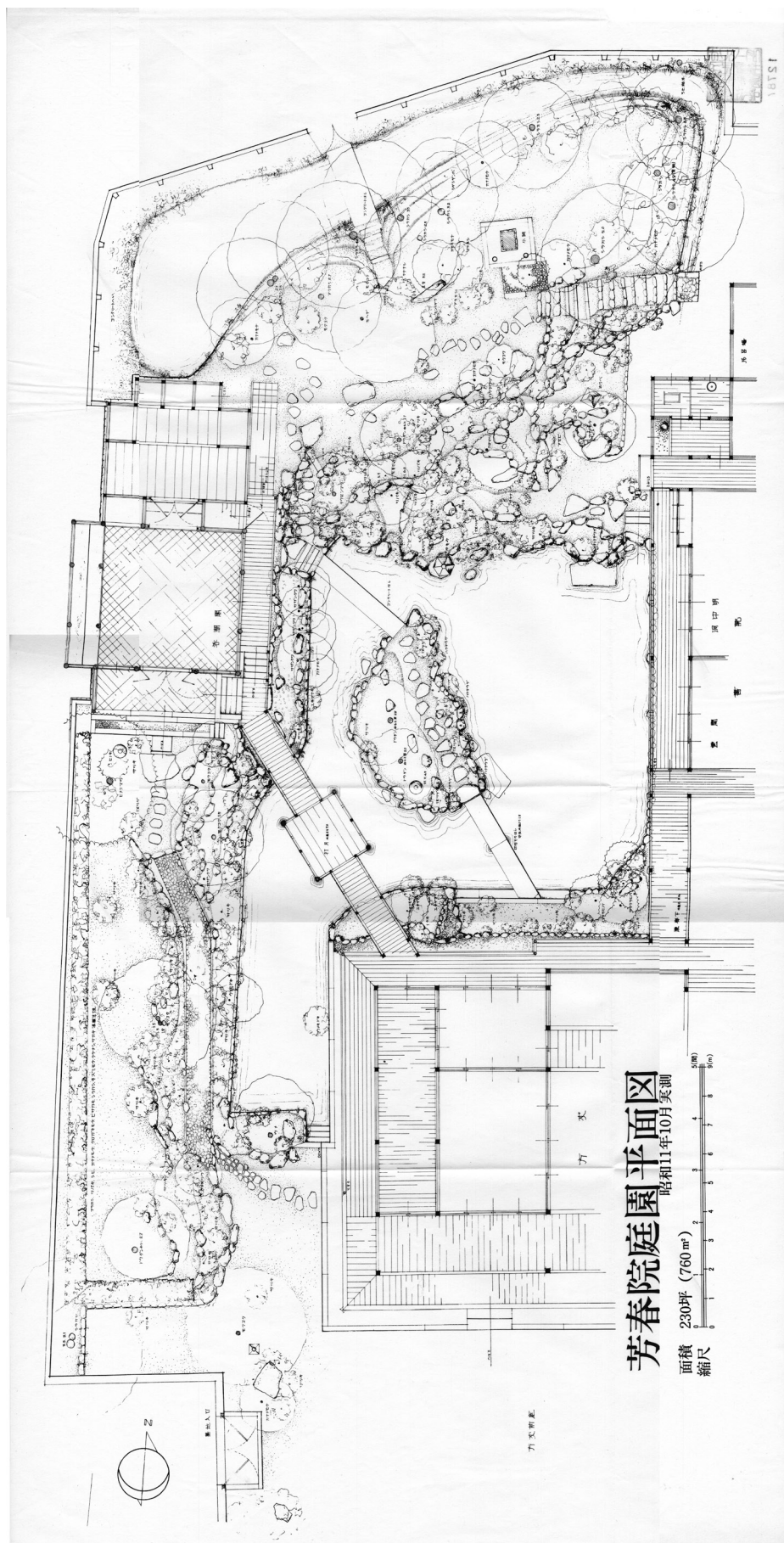


図 283 芳春院庭園平面図

(重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』24巻 江戸中末期の庭 (1) 社会思想社 1973年より)

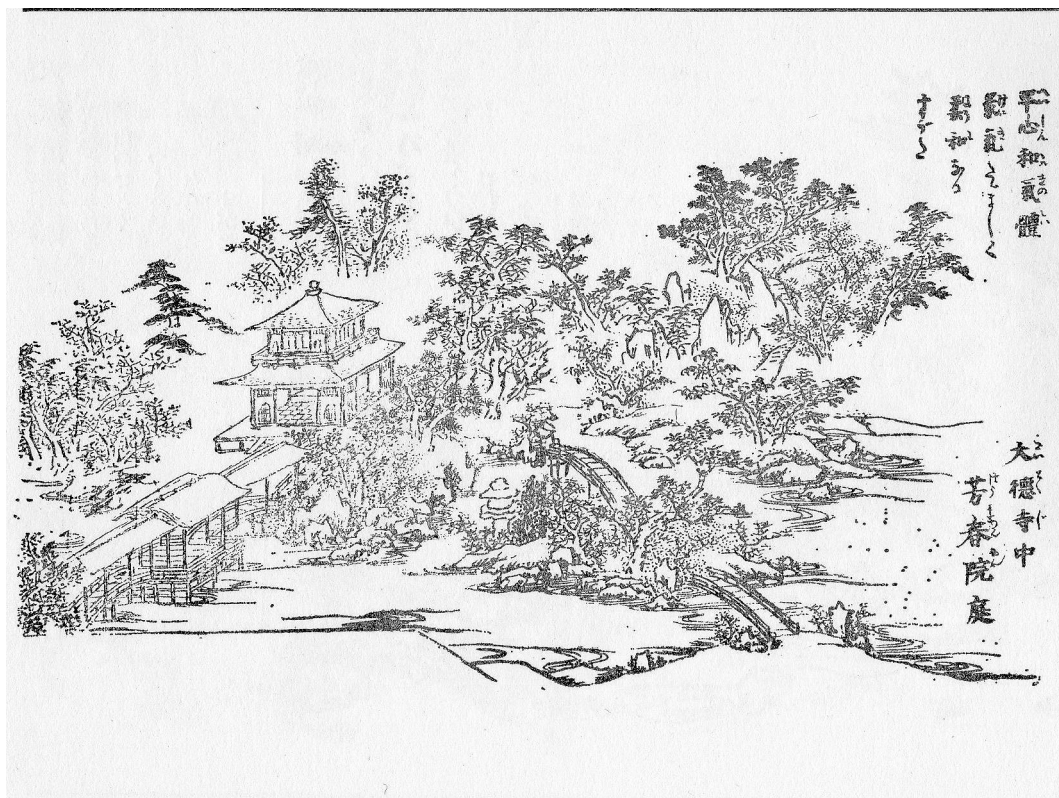


図 284 『築山庭造伝』「大徳寺芳春院庭」（上原敬二編『築山庭造伝』下 加島書店 1975 年より）

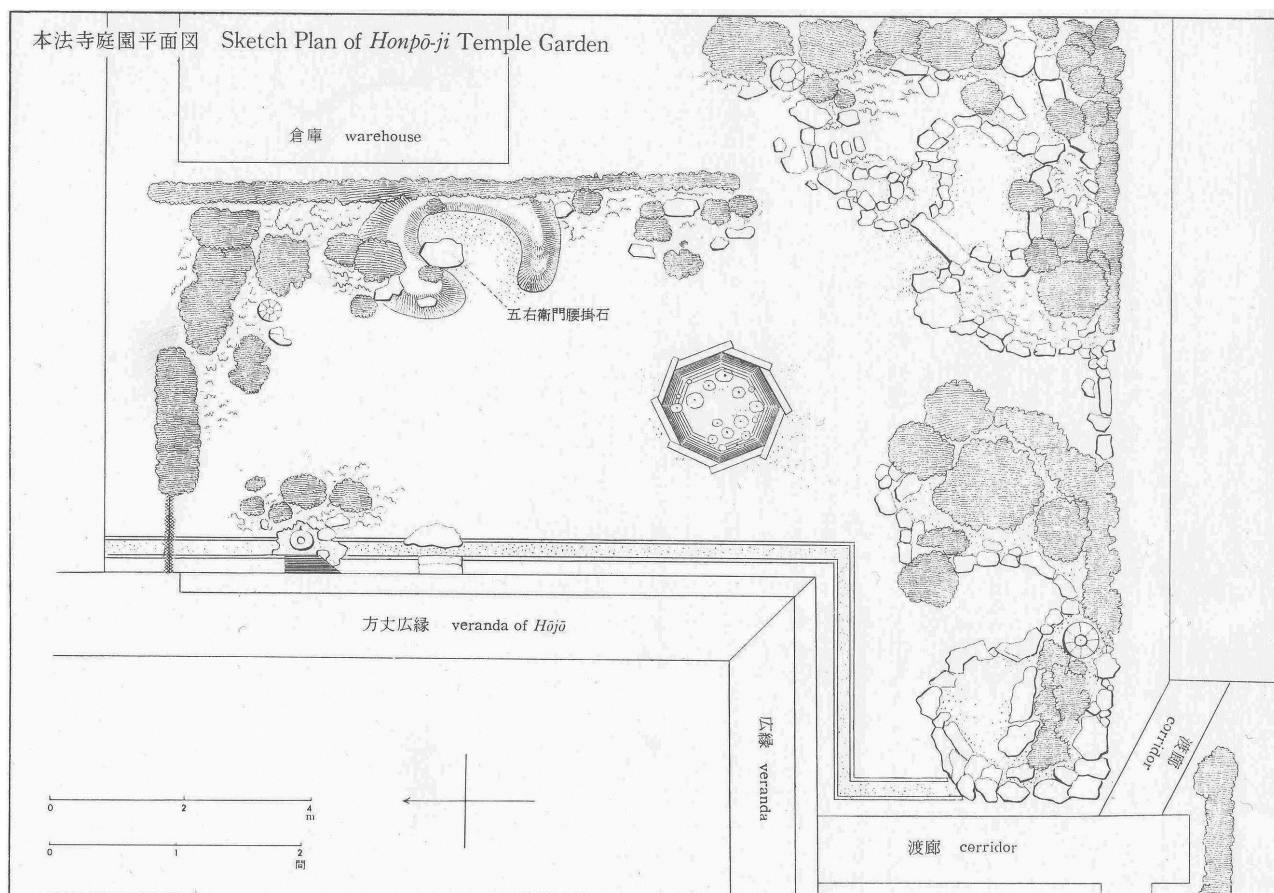


図 285 本法寺庭園平面図
(本多錦吉郎『日本名園図譜』 平凡社 1964 年より)

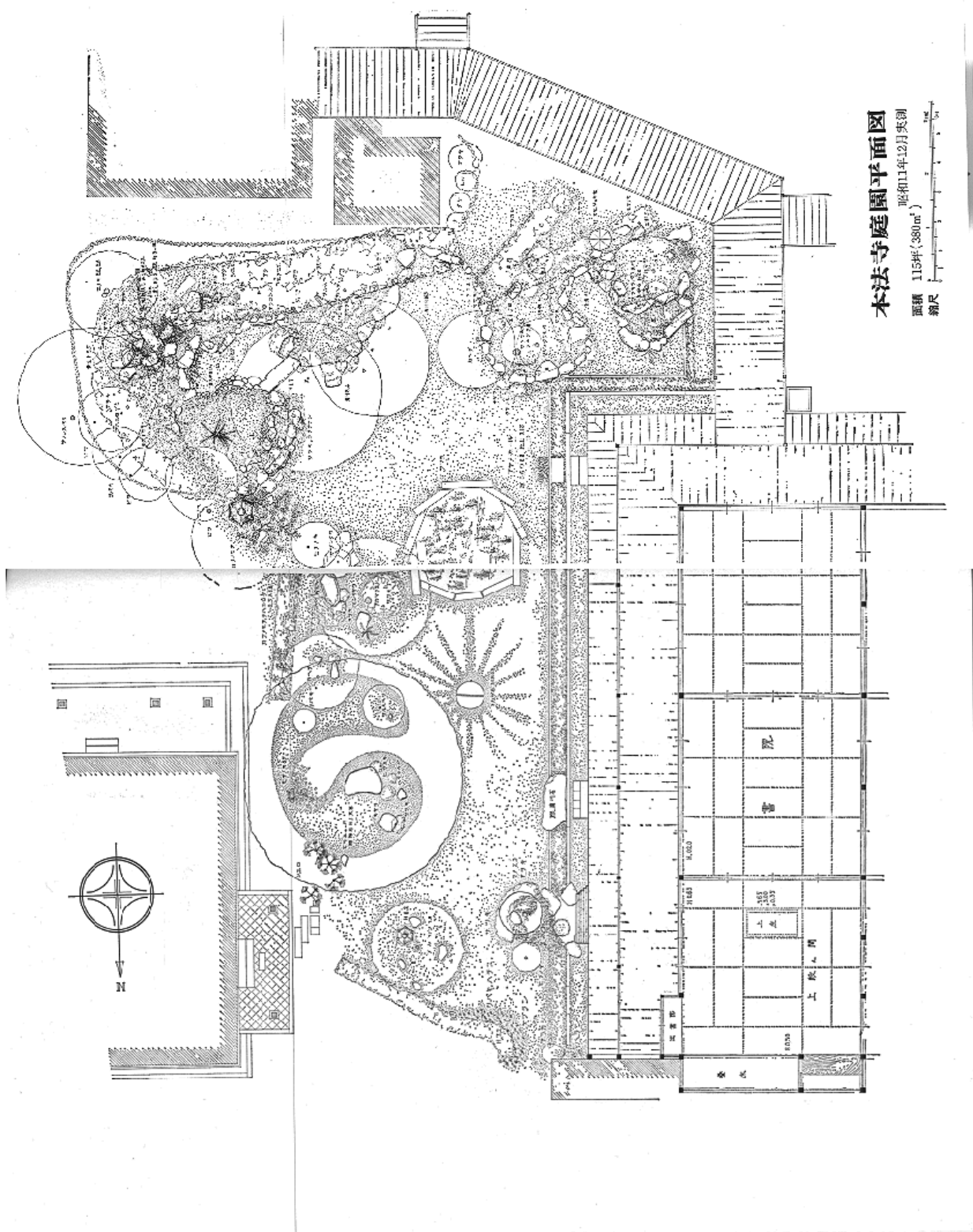


図 286 本法寺庭園平面図

(重森三玲・重森完途『日本庭園史大系』9巻 室町の庭(2) 社会思想社 1972年より)



図 287 本法寺庭園 蓮池 (2011 年 11 月筆者撮影)

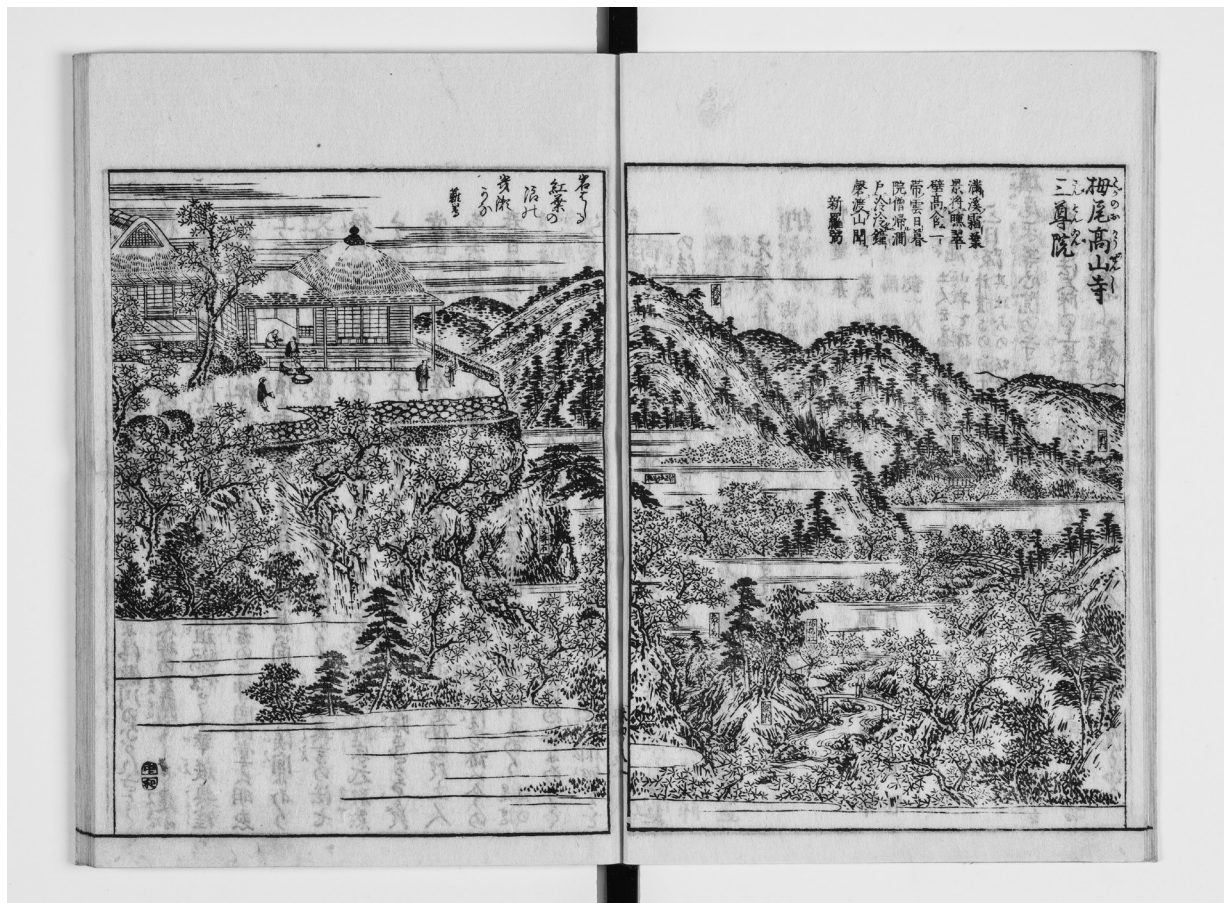


図 288 「梅尾高山寺三尊院 (中和)」



図 289 「東林院其貳南谷師書齋幻華庵（草偃）」



図 290 現在の東福寺霊雲院庭園に見られる滝石組（2012 年 11 月筆者撮影）



図 291 現在の東福寺霊雲院庭園に見られる遺愛石（2011 年 11 月筆者撮影）

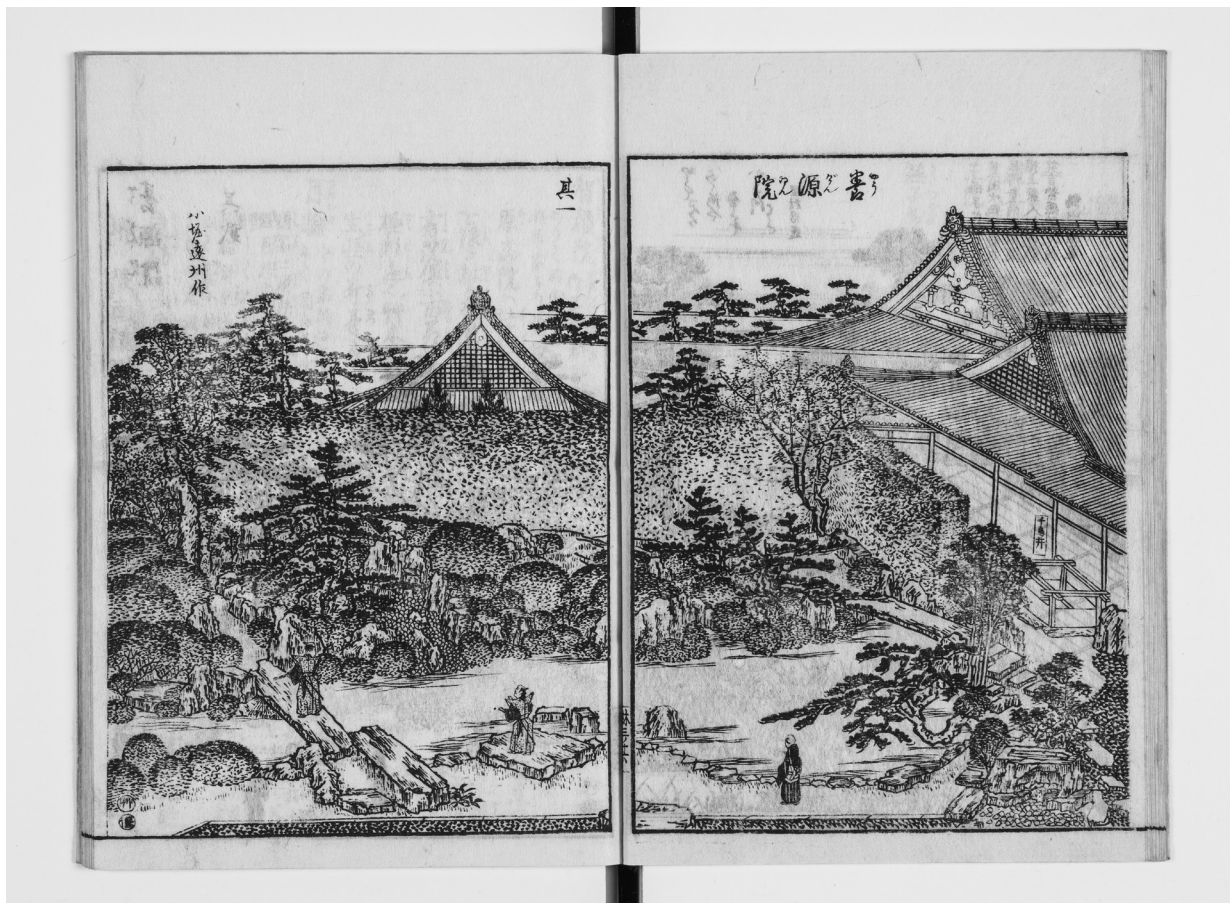


図 292 「養源院其一（草偃）」

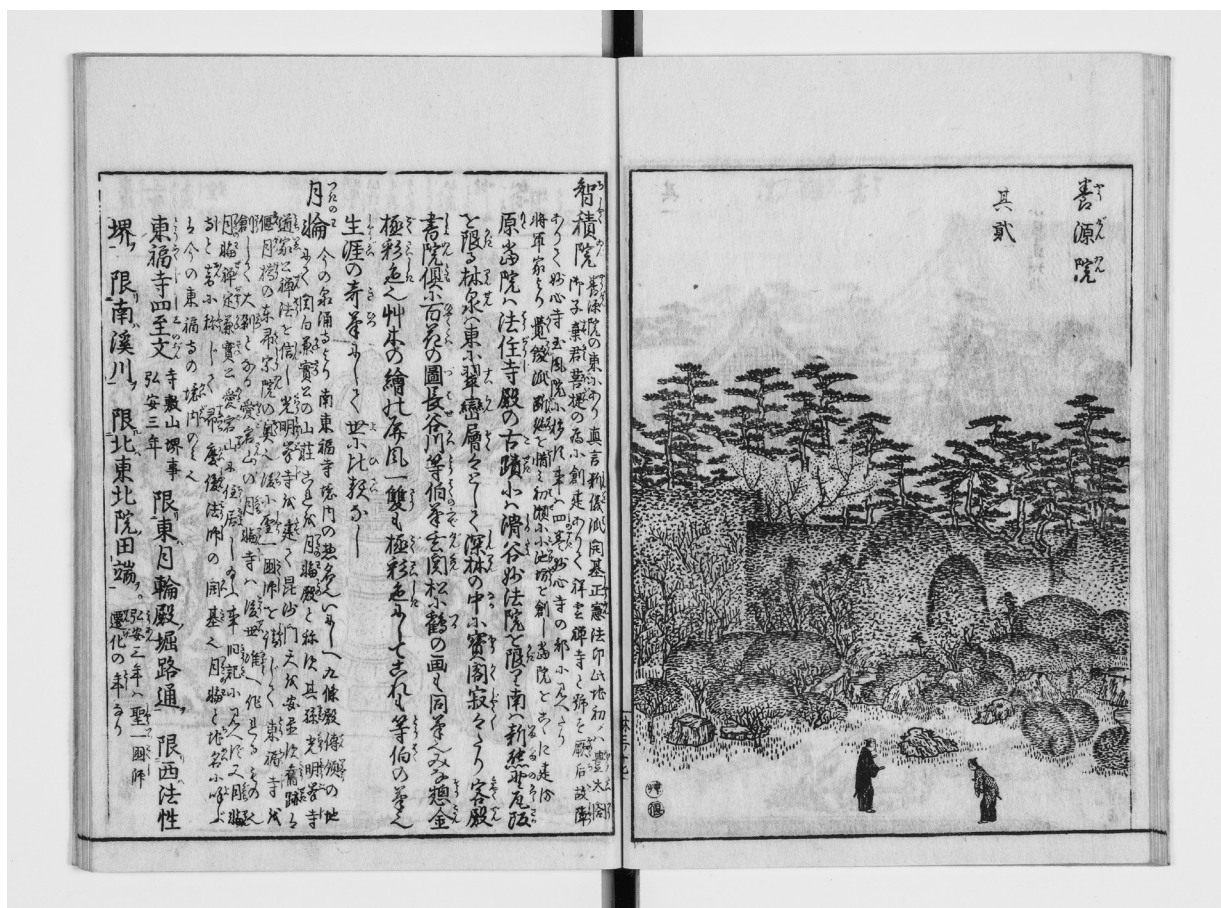


図 293 「其二（草偃）」



図 294 修理事業において補植された滝添松

(仲隆裕「養源院書院庭園の整備」『日本庭園学会誌』5 日本庭園学会 1997年3月より)

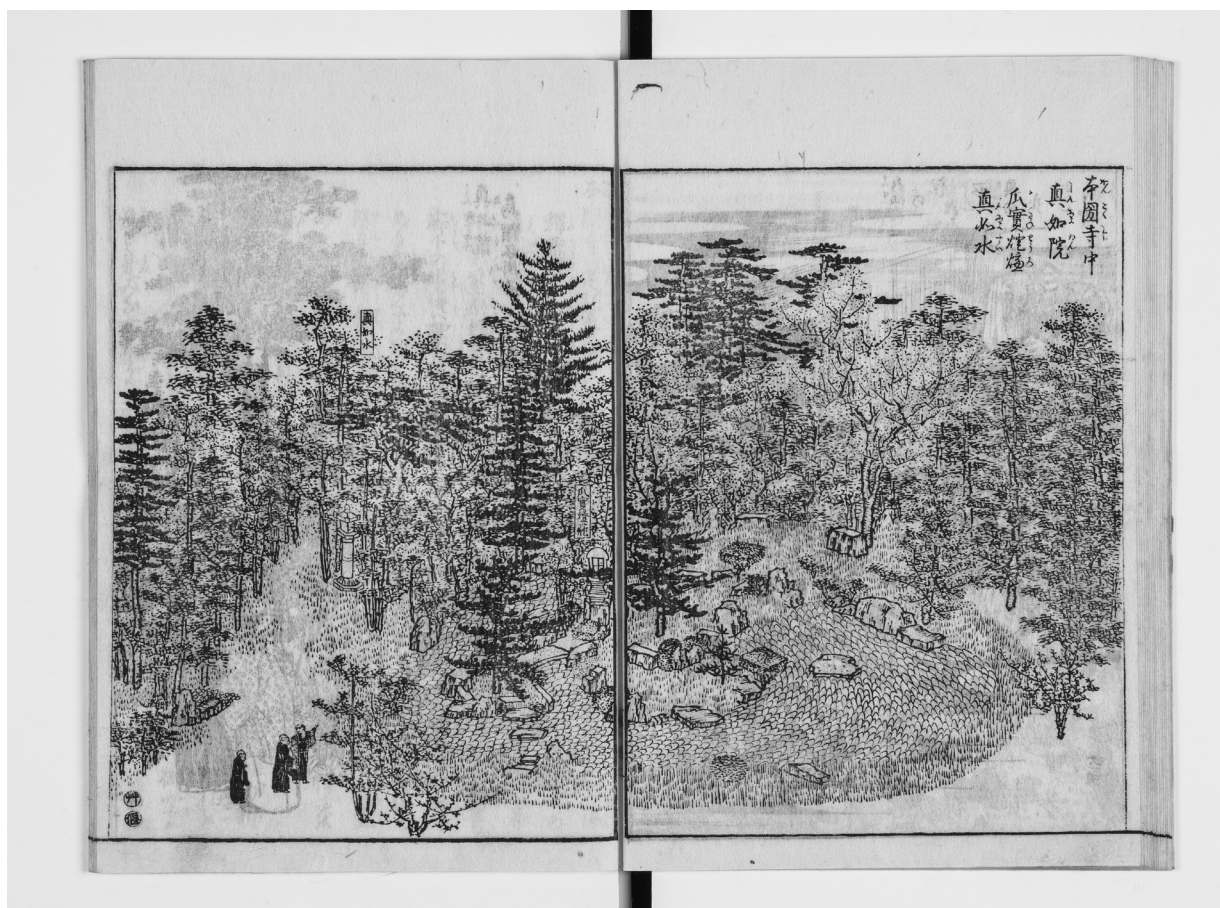


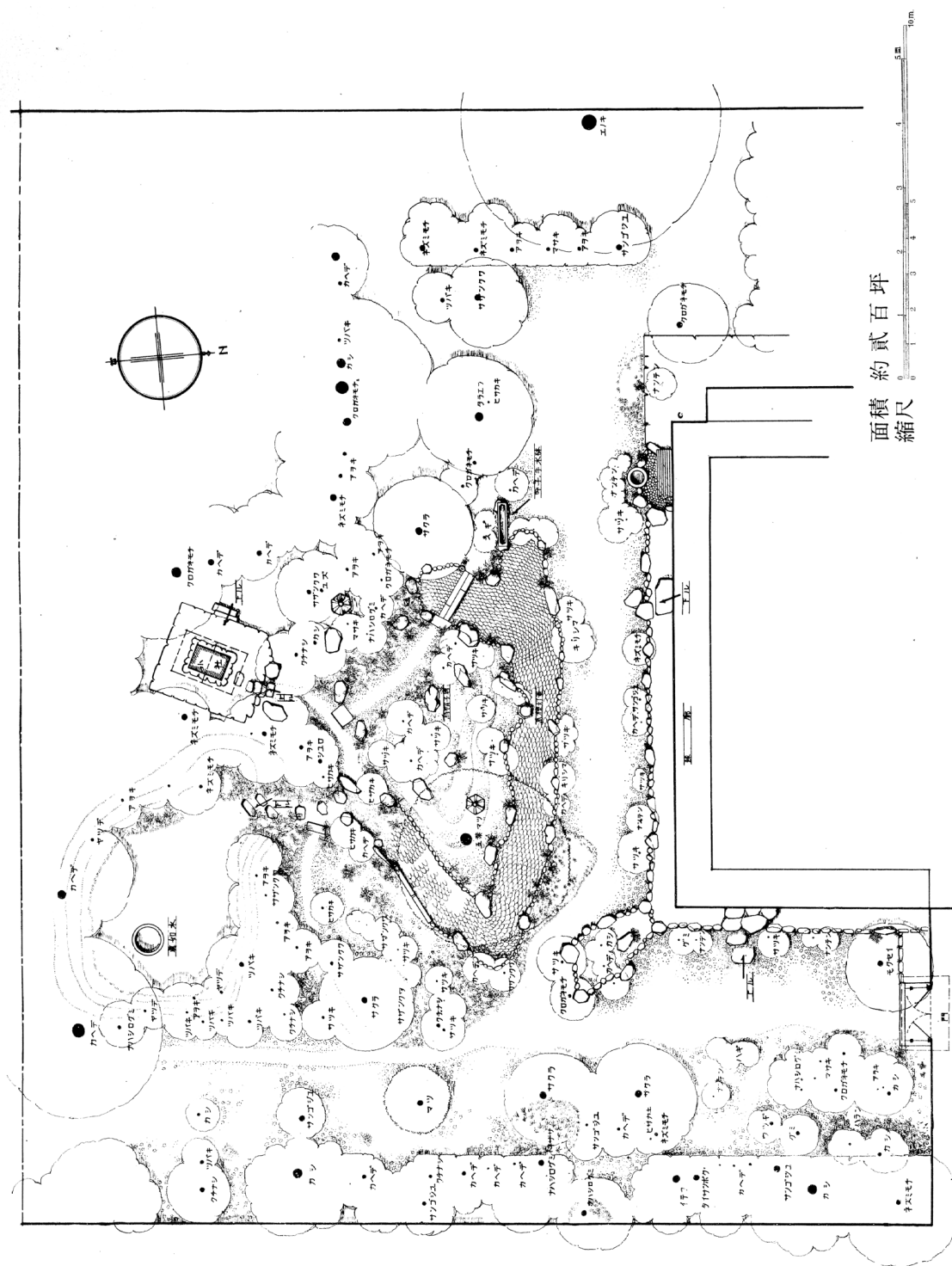
図 295 「本國寺中真如院（草偃）」



図 296 「真如院烏帽子掛石（草偃）」

本國寺眞如院庭園平面圖

昭和拾壹年貳月實測



面積 約貳百坪
縮尺

図 297 昭和 11 年の実測図

(重森三玲『日本庭園史図鑑』第 7 卷 有光社 1937 年より)



図 298 現在の烏帽子石の状況（2019 年 10 月筆者撮影）

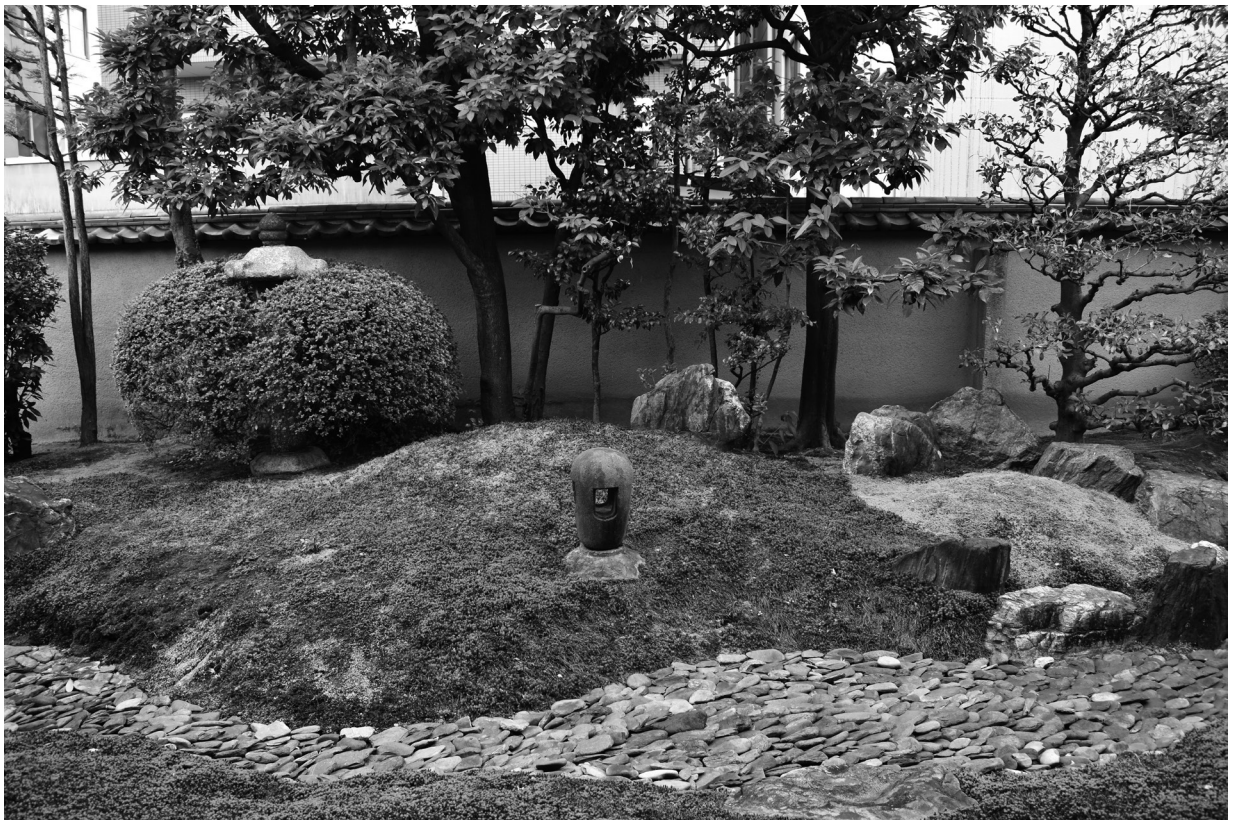


図 299 現在の瓜実燈籠の状況（2019 年 10 月筆者撮影）



図 300 『都名所図会』巻之一「東殿」（国際日本文化研究センター所蔵）

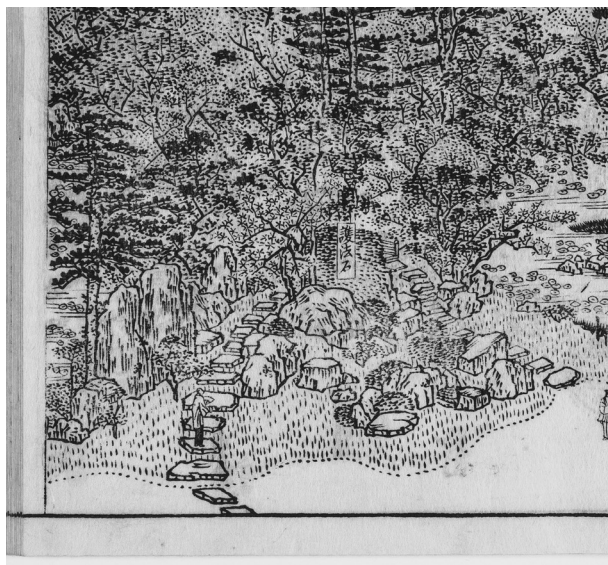


図 301 「知恩教院方丈林泉其一（草偃）」護法石

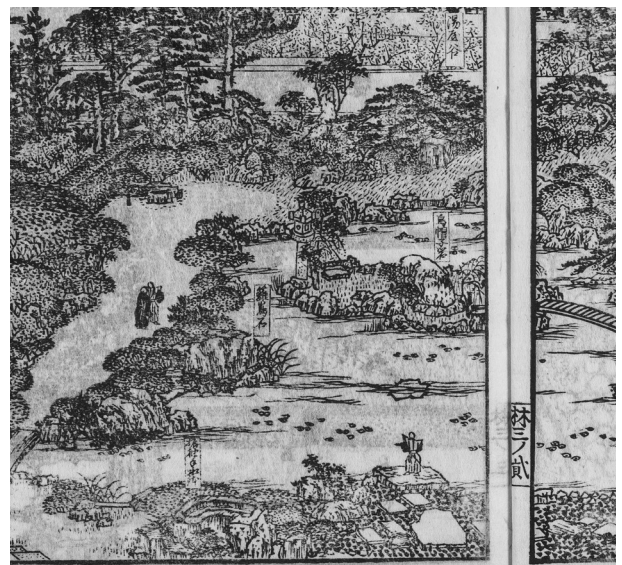


図 302 「清水成就院其一（草偃）」籬島石



图 303 「惠日塔頭莊嚴院（中和）」双峨石



图 304 「天龍寺塔頭妙智院林泉（中和）」シン石



図 305 「圓山正阿弥其二（中和）」滝の鑑賞



図 306 「妙心塔頭大嶺院（中和）」枯滝石組の鑑賞

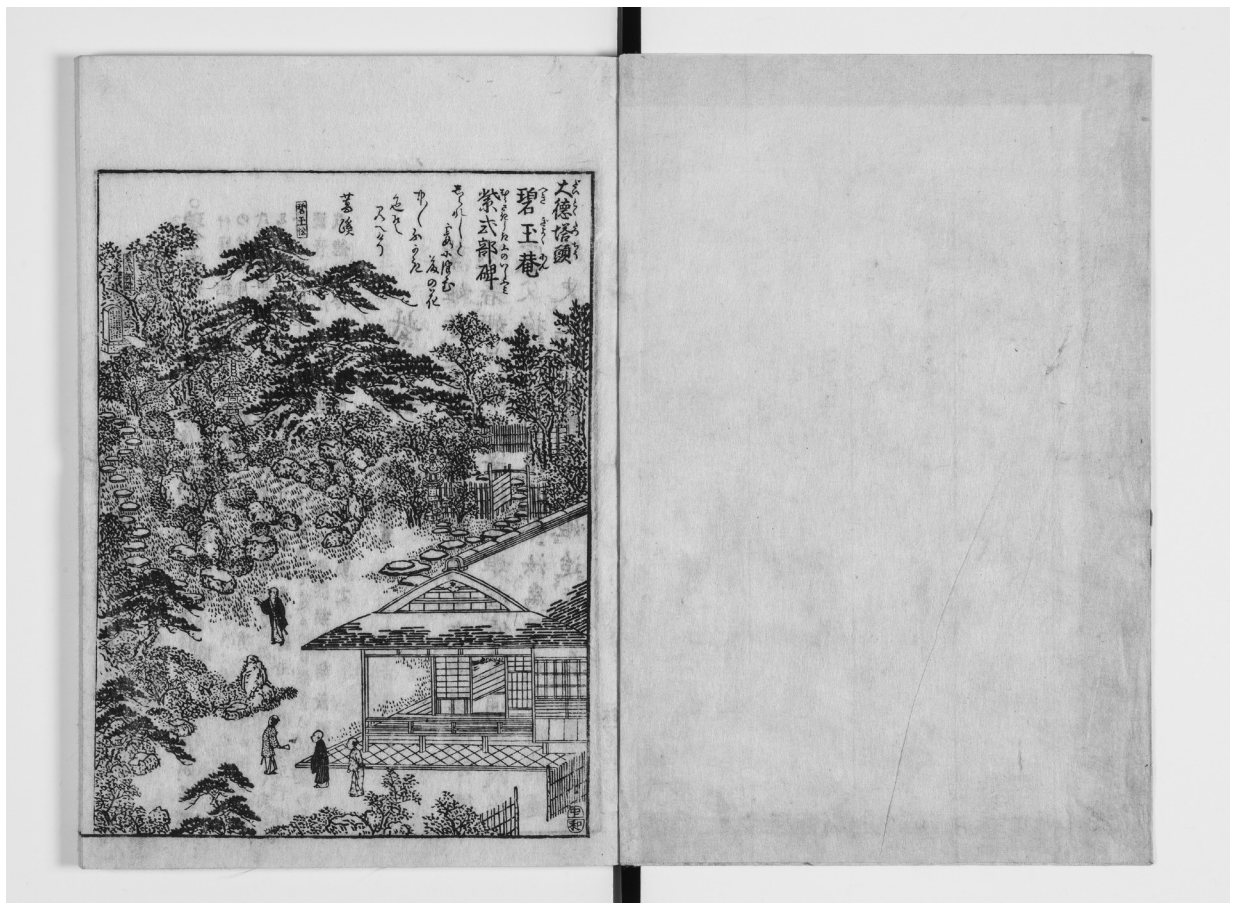


図 307 「大徳塔頭碧玉庵紫式部碑（中和）」



图 308 「建仁寺正傳院（草偃）」



图 309 「天竜塔頭真乘院林泉（中和）」



図 312 「南禅塔頭聴松院（中和）」



図 313 「靈山巖阿彌長嘯梅（草偃）」



图 314 「建仁塔頭正傳院織田有樂齊茶亭（中和）」

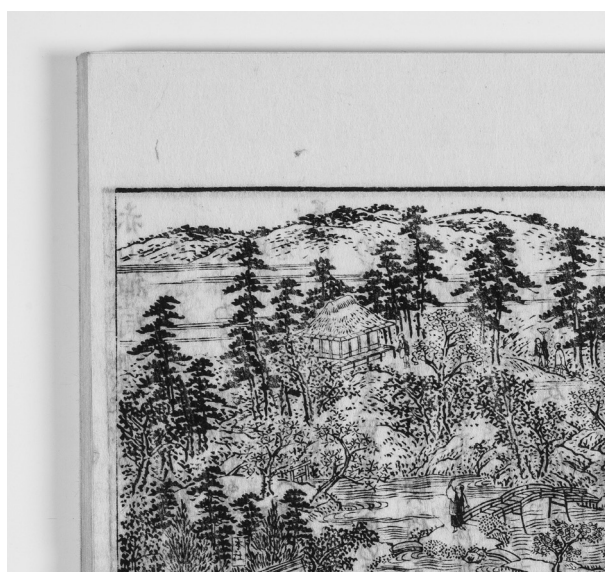


图 315 「赤山社（中和）」部分图



図 316 「高臺寺傘亭（草偃）」



図 317 「妙喜菴茶室袖摺松（草偃）」

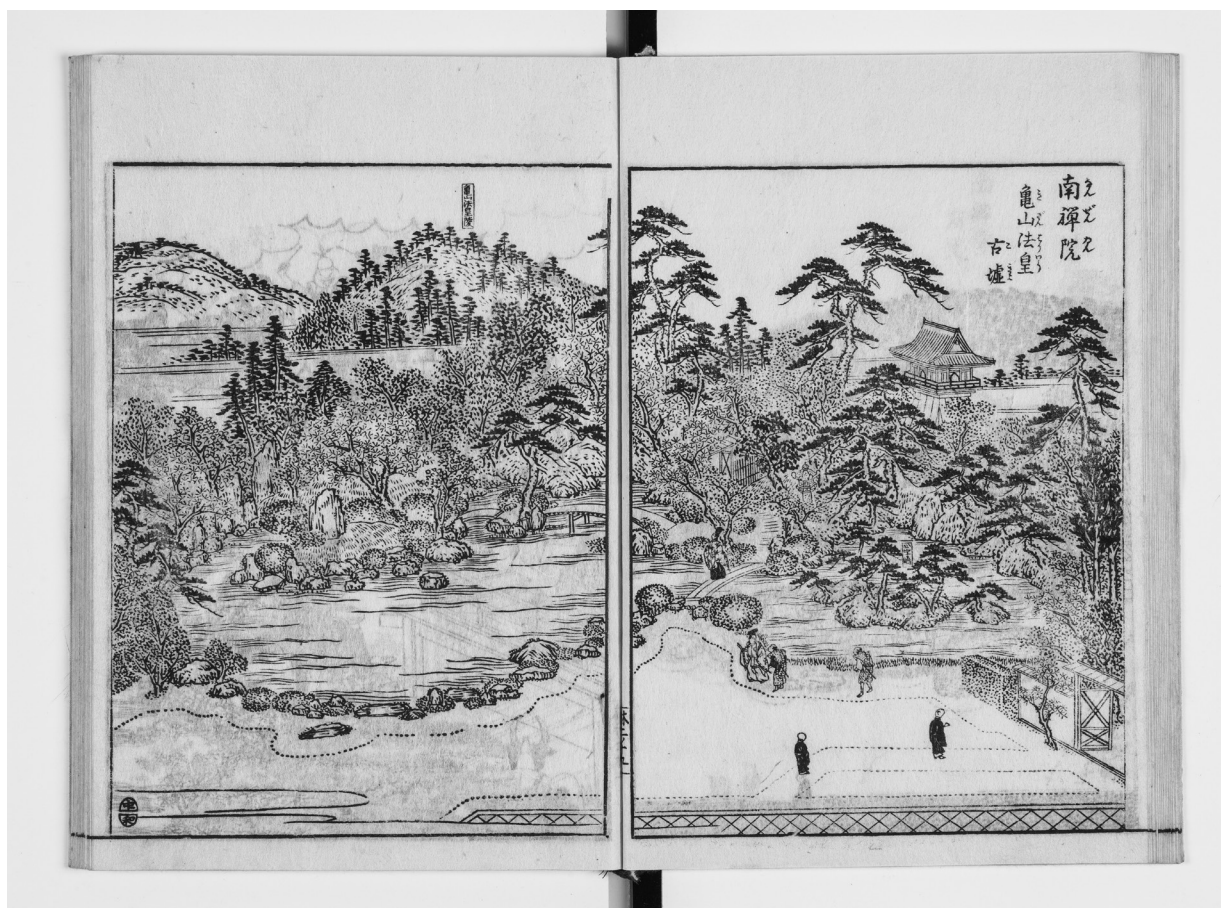


图 318 「南禅院亀山法皇古墟（中和）」



图 319 「清水延命院（中和）」

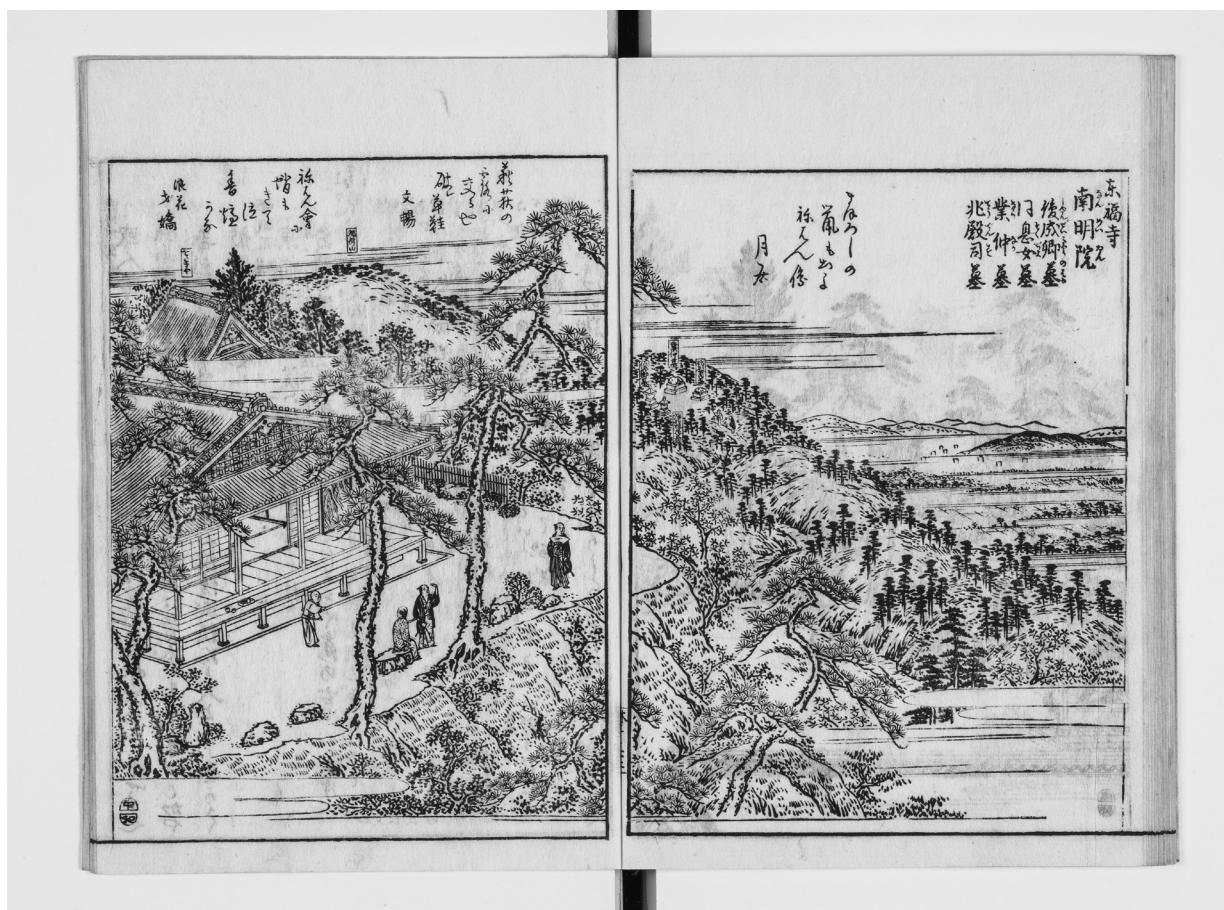


图 320 「東福寺南明院（中和）」



图 321 「高雄地藏院（中和）」



図 322 「東寺寶輪院（草偃）」

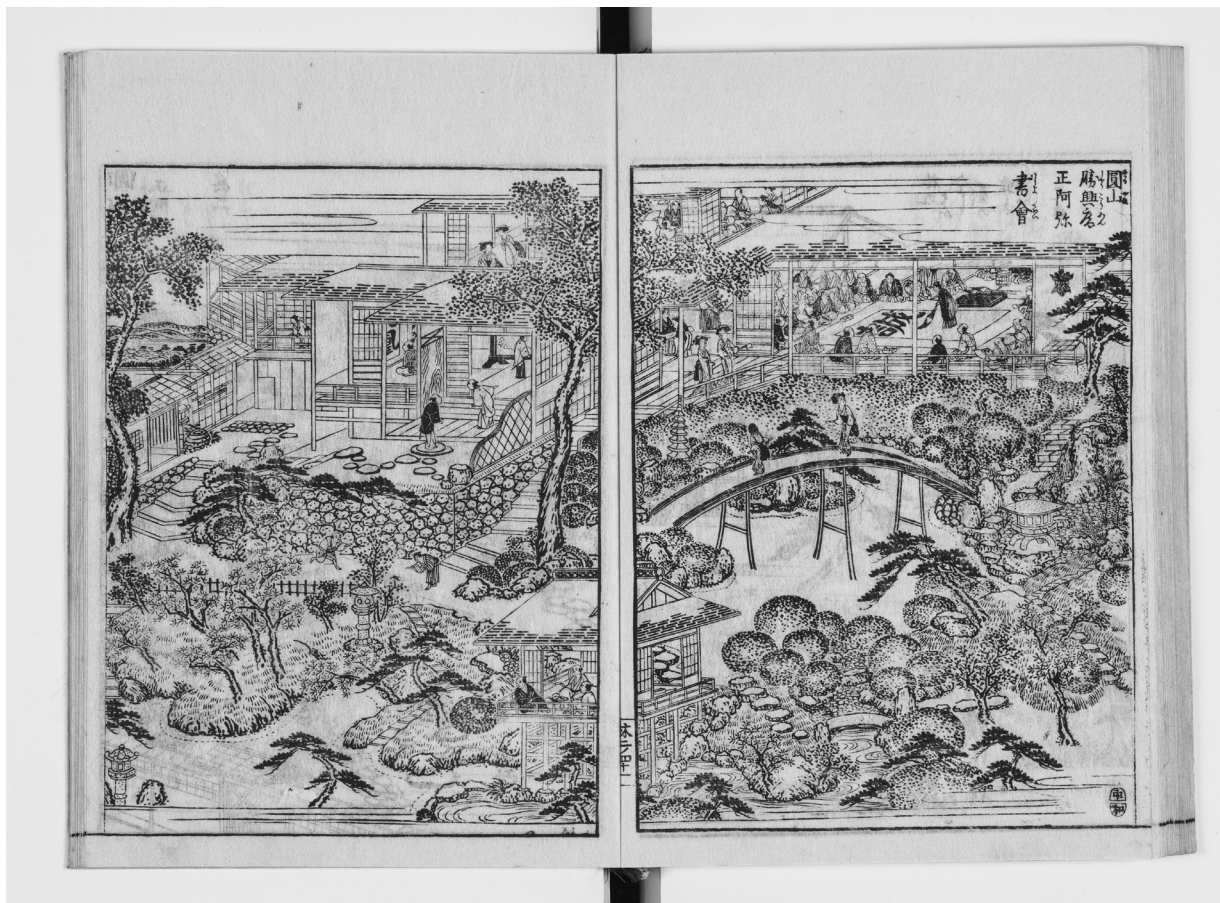


図 323 「圓山勝興庵正阿弥書會（中和）」



图 324 「惠日塔頭即宗院自然居士墳（草偃）」



图 325 「東寺山吹岡本林泉（中和）」



図 326 『築山庭造伝』「西芳寺」（上原敬二編『築山庭造伝』下 加島書店 1975 年より）

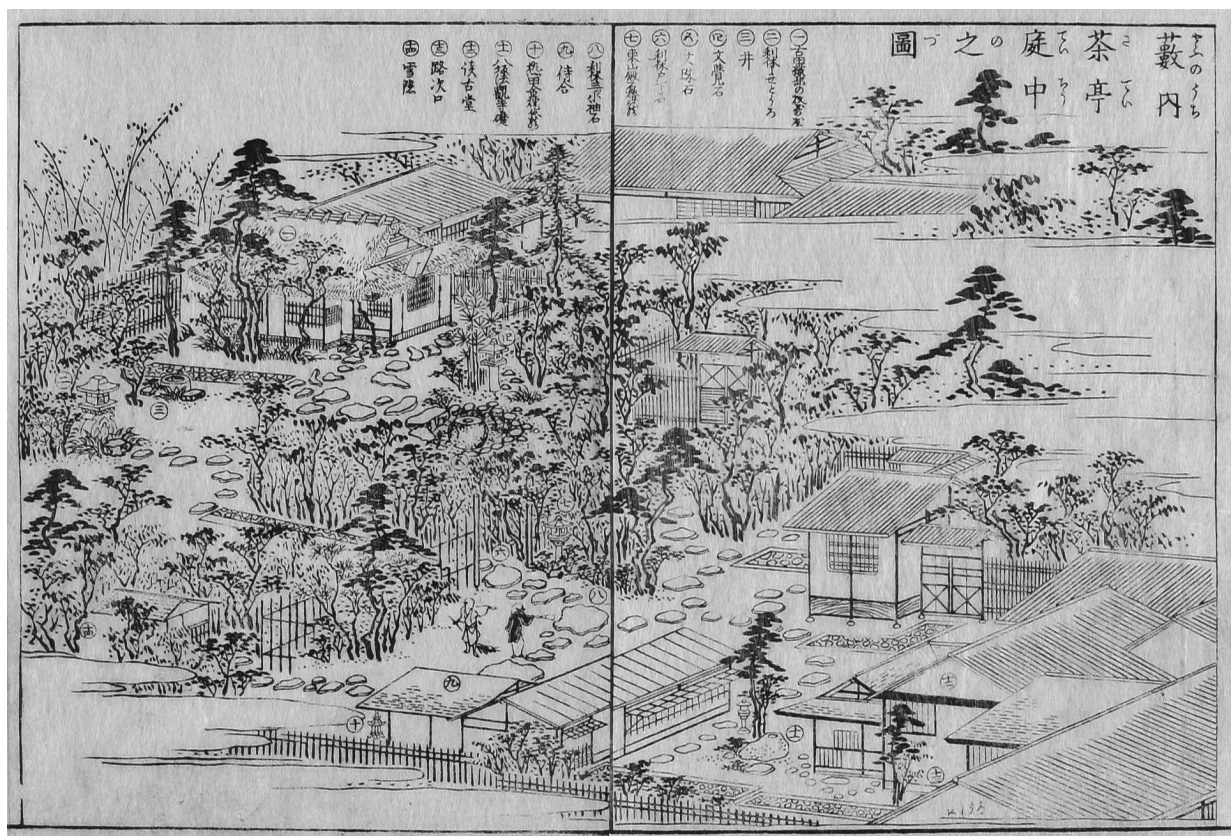


図 327 『拾遺都名所図会』巻之一「藪内茶亭庭中之圖」（国際日本文化研究センター所蔵）

表1 秋里籬島著作一覧（『国書総目録』より筆者作成）

刊行年	書名	種類	巻・冊数	作者名	画工
安永5年（1776）	『信長記拾遺』	雑史	10巻10冊	秋里舜福（湘夕）編	
同年	『俳諧早作伝』	俳諧	1巻1冊	湘夕	
安永6年（1777）	『宮駅珍話』	風俗・雑記	1冊	秋里山人	
安永9年（1780）	『都名所図会』	地誌	6巻6冊	秋里湘夕	竹原春朝斎
天明8年（1788）	『虚空解紐』	随筆	5巻5冊	秋里湘夕	
同年	『忠孝人竜伝』	読本	5巻5冊	秋里湘夕	
同年	『拾遺都名所図会』	地誌	4巻5冊	秋里籬島（湘夕）編	竹原春朝斎
寛政2年（1790）	『京の水』	地誌	2巻2冊	秋里籬島（湘夕）編	下河辺拾水
寛政3年（1791）	『大和名所図会』	地誌	6巻7冊	秋里籬島（舜福）	竹原春朝斎
寛政5年（1793）	『花月独案内』	地誌・風俗	1冊	秋里湘夕	
同年	『都花月名所』	地誌	1巻1冊	秋里籬島	
寛政6年（1794）	『源平盛衰記図会』	読本	6巻6冊	秋里籬島	西村中和、奥貞章
同年	『住吉名勝図会』	地誌	5巻5冊	秋里湘夕（籬島）	岡田玉山
同年	『摂津名所図会』	地誌	9巻12冊	秋里湘夕（籬島、舜福）	竹原春朝斎、外6名
寛政7年（1795）	『俳翼』	俳諧	1巻1冊	秋里籬島編	
寛政8年（1796）	『和泉名所図会』	地誌	4巻4冊	秋里籬島（舜福、湘夕）撰	竹原春朝斎
同年	『絵引節用集』	辞書	1巻1冊	秋里籬島編	
寛政9年（1797）	『伊勢参宮名所図会』	地誌	5巻6冊	秋里湘夕、蔀関月	蔀関月
同年	『近江名所図会』	地誌	4巻4冊	秦石田、秋里籬島（舜福）編	蔀関月、西村中和
同年	『東海道名所図会』	地誌	6巻6冊	秋里舜福（籬島）編	升原春泉斎、外27名
寛政10年（1798）	『五畿内名所図会』	地誌	30冊	秋里籬島	
寛政11年（1799）	『都林泉名勝図会』	地誌	5巻6冊	秋里籬島（舜福）	西村中和、佐久間草偃、奥文鳴
寛政12年（1800）	『絵本朝鮮軍記』	読本	10巻10冊	秋里籬島	
同年	『俳諧続翌檜』	俳諧	1冊	湘夕	
享和元年（1801）	『河内名所図会』	地誌	6巻6冊	秋里籬島（湘夕、舜福）	丹波桃蟻
同年	『保元平治闘図会』	読本	10巻10冊	秋里舜福（籬島）	西村中和
享和2年（1802）	『絵本年代記』	年代記	5巻5冊	秋里籬島	西村中和
享和3年（1803）	『教訓安楽問答』	教訓	4巻1冊	秋里籬島	
同年	『前太平記図会』	読本	6巻6冊	秋里籬島	西村中和
同年	『日本風土記』	地誌	8巻8冊	坂内直頼著、秋里籬島（舜福）補	
文化元年（1804）	『木曾路名所図会』	地誌	6巻7冊	秋里籬島（池田舜福）編	西村中和
文化2年（1825）	『唐土名所談』	外国地誌	1冊	秋里湘夕	
文化3年（1826）	『親鸞聖人洛陽御旧跡二十四輩順』	寺院	1巻1冊	秋里籬嶋	
文化7年（1810）	『赤星そうし』	読本	3冊	秋里籬島	
同年	『秋里名島随筆集書』	随筆	2冊	秋里籬島	
同年	『秋里随筆』	随筆	3巻3冊	秋里籬島（舜福）	
同年	『蓮如上人御旧跡絵抄』	伝記	1冊	秋里籬島	
文化11年（1814）	『本朝勝槩記』	地誌	2巻2冊	秋里籬島	
文政7年（1824）	『撰西奇遊談』	紀行	3巻3冊	秋里舜福（籬島）	
文政10年（1827）	『石組園生八重垣伝』	庭園	2巻2冊	秋里籬島舜福	
文政11年（1828）	『築山庭造伝後篇』	庭園	3巻3冊	籬島軒秋里	
文政13年（1830）	『早引道中記』	交通	1帖	籬島軒秋里	
不明	『天橋立紀行』	不明	1冊	秋里籬島	
不明	『寛政大裡御造宮記』	記録	2冊	秋里籬島	
不明	『新花月名所』	地誌	1冊	秋里舜福（湘夕）編	
不明	『中国名所図会』	地誌	3冊	籬島軒秋里	

※網かけ箇所は名所図会を示す

表2 『都林泉名勝図会』における本文項目とその内容一覧

巻数	項目	所在地	山号	開山	解説	沿革	塔頭	建築	林泉	境地	持仏	什宝	虫干し	名水	祭事	年中行事	植物	大火	天明の	引用文献	詩歌
巻之一	清少納言								○											○	○
	神泉苑	○			○			○	○											○	○
	蹴鞠の御遊				○			○	○						○						○
	相国寺			○	○	○		○	○	○		○		○				○			
	紫野				○																○
	雲林院	○			○					○										○	○
	大徳寺	○	○	○	○			○	○	○	○	○					○			○	○
	竜翔寺	○		○	○			○				○									
	引接寺	○	○													○	○				
	本法寺	○							○			○									
	六角堂池之坊				○											○				○	○
	建仁寺	○		○	○	○		○		○	○		○								
	四条祇園橋				○																○
	本圀寺				○	○			○		○	○		○							
	本願寺	○													○						
	東本願寺	○		○	○				○									○	○		
	東鴻臚館趾	○																		○	○
	六条内裏	○			○															○	○
	釣殿院	○																		○	
巻之二	遍照心院	○		○	○	○		○	○		○			○	○					○	○
	東寺	○			○	○			○			○								○	
	赤山神祠	○			○			○	○											○	
	慈照寺銀閣				○			○				○		○						○	○
	糺納涼				○				○						○					○	○
	惺窩先生幽居蹟	○			○																
	氷室古跡	○																		○	
	中山忠親公別荘蹟	○																		○	
	卜部家畜場所	○			○															○	
	南禅寺				○	○		○	○			○	○							○	
	藤在衡公別業蹟	○																		○	
	菩提樹院址	○																		○	
	宝荘厳院址	○			○															○	
	白河離宮	○			○															○	○
	陽成院陵				○															○	
	冷泉院陵	○			○															○	
	後一条院陵				○															○	
	栗田院	○			○															○	○
	青蓮院	○			○															○	
	知恩教院		○		○																○
	円山				○	○			○			○		○						○	○
	將軍塚	○																		○	○
	上東門院塔	○			○															○	○
	皇太后（女孿）子塚				○															○	
	長楽寺	○			○															○	
	蔡華園院	○			○															○	
	祇園社				○			○							○					○	○
	高台寺				○			○	○								○				○
	霊山																			○	○

卷数	項目	所在地	山号	開山	解説沿革	塔頭	建築	林泉	境地	持仏	什宝	虫干し	名水	祭事	年中行事	植物	大火	天明の	引用文献	詩歌
卷之三	音羽山清水寺				○	○	○	○					○						○	○
	歌中山清閑寺				○			○								○			○	○
	若松池	○			○														○	
	阿弥陀峰				○														○	○
	蓮華王院							○					○						○	
	法住寺古蹟	○			○														○	○
	養源院	○			○		○	○			○									
	智積院	○			○		○	○			○									
	月輪	○			○					○									○	
	恵日山東福禪寺			○	○	○	○	○			○					○			○	○
	清原深養父旧蹟	○			○														○	
	舎人親王塚				○														○	
	墨染里	○			○															
	伏見山	○			○											○				○
	梅溪	○			○											○				○
卷之四	高雄山神護寺				○	○		○			○					○			○	○
	槇尾平等心院			○	○															
	梅尾高山寺			○	○		○	○		○						○			○	○
	等持院	○		○	○			○		○									○	○
	衣笠山	○																		○
	衣笠殿				○														○	○
	衣笠岳御霊				○									○						○
	龍安寺			○	○	○	○	○	○	○	○								○	
	花園社	○			○														○	
	頼阿古蹟	○			○														○	○
	正法山妙心寺			○	○	○	○	○	○	○	○					○			○	○
	芋喰僧都旧跡	○			○														○	
	大応国師塔	○			○														○	○
	後宇多院塔	○			○															
	賀陽門院塔	○			○															
	鹿苑寺	○		○	○		○	○					○						○	
卷之五	天龍寺	○			○	○	○	○				○								○
	龜山殿旧跡	○			○														○	○
	大井川				○														○	
	嵐山	○			○															○
	宗祇法師旧庵	○			○											○				○
	道命法師蹟	○			○															○
	葉室西芳寺				○			○												○
	定嗣卿山荘古蹟	○			○														○	
	桂山荘園林堂	○			○			○											○	○
	元輔家	○			○															○
	男山				○	○	○	○	○		○		○	○					○	○
	山崎妙喜庵	○			○		○	○		○	○									
	山崎城				○															
	相応寺				○														○	○

表 3 『都林泉名勝図会』本文中における庭園に関する記述一覧

巻数	項目	庭園に関する記述内容
巻之一	清少納言	
	神泉苑	巨勢金岡石を疊むといふ。大内裏はじめて造営ありし時は、周文王の靈園に准じて方八町に作られし泉苑なり。この池より善女龍王あらはれしより神泉とも号け、またそのめぐりを洛中に課せて柳桜多く植られたり。(中略) 中頃明德応仁の兵燹に罹りて、今は僅の林泉となる。しかはあれど、大内裏の遺跡千載の賜とぞ思はれける
	蹴鞠の御遊	今は七夕の日、恒例として、飛鳥井・難波の両家において蹴鞠あり。この日は梶の御鞠とて、雲上家参入、また地下の門人も参る。書院の縁側には種々の色ある蹴鞠を飾らせ、鞠庭には四本の松蒼々として、許色の水干紫裾濃の袴を着し、両々三々の高低に身をそばめ、杵の音斜陽の影に響て都の壯観なり。『夫木』鞠の庭に桜柳を移し植て春は錦に立ちやまじらむ 為家
	相国寺	前の川を龍淵水と号し、蓮池を功德池といひ、天界橋を架す。(中略) 塔頭林光院には鶯宿梅あり、これはむかし西京紀貫之の家にありしを、清涼殿の前に植られんとて求めたまひしに、貫之の娘おしみて歌よみければそのままかへしたまふ。(中略) (近年天明の回禄に罹れば林泉大いに荒廃す、故に図する事能はず)
	紫野	
	雲林院	
	大徳寺	○官池(明月橋の東にあり。伝に云、後醍醐帝当山に逍遙したまふ時、眸をめぐらし指点して国師にのたまふ。この地まさは一池を開くに可なり。これによつて命じてこれを穿、故に官池となづく。また五老松といふあり、官池の北五松の大樹なり) ○古巖松(旧松すでに枯れてその所を失す、今方丈南庭の松もつとも秀華(靈山徳禪寺) 寺前に池築山あり、山中に玲瓏閑竹影閑あり、池中へ舟を泛て往来す(中略) 今の養徳の前庭、安居院門西北の隅、なほかの池の旧岸あり、みな田隴となる) ○(北) 大徳院(中略) 庭中名巖(有二十員)。林泉 相阿弥作。法螺石 布袋石 神鞍石 観音石 沈香石 宝山石 伏虎石 釣舟石 臥牛石 仙帽石 払子石 仏盥石 仏子石 独醒石 明鏡石 不動石 靈亀石 座禪石 真珠石 扶老石(中略) ○碧玉庵(中略) 林泉藤村慵軒作
	竜翔寺	
	引接寺	
	本法寺	林泉は光悦の作にして、世に三巴の庭と賞す。その形築山泉石ともに浪の紋を模す
	六角堂池之坊	
	建仁寺	○当山十景(清拙和尚の頌あり) 慈親閣(方丈) 望闌楼(山門) 大悟堂(僧堂) 群玉村(衆寮闕) 入定塔(開山塔) 楽神廟(鎮守) 無尽灯(禪居庵) 清水山 第五橋 鴨川水(中略) (その外塔頭林泉名画あり、これを略す)
	四条祇園橋	
	本圀寺	真如院の庭に瓜実灯炉あり(これは足利將軍義昭公の銘なり)、烏帽子石は義昭公烏帽子を掛置たまひしとなり。また円竜院の庭中奇景なり
	本願寺	
	東本願寺	(この館舎の中に、大寝殿小寝殿の名目あり。これを按ずるに、むかしこの地は祭主三位輔親卿の殿舎なり。その林泉に丹後の海橋立を移して、池を広く掘りて松を樹、風景うるはしく月を賞ぜられしなり。この事清輔の袋草子に見えて、寝殿の名目あり。後世当寺の社殿を建てられし時、この旧跡なる事を知つてかく名づけられし物ならん。輔親卿は歌人にて新古今集に撰ばれ和歌入りし人なり) 袋草子云く南院は海橋立なり、輔親卿の家なり。月を見ん為に寝殿の南底を差さずと云々。懷園が池水はあまの河にやかよふらんとよむ、この所にての詠なり。月明夜にて行向へるに、夜更けて人もねぬらんと思ふに、寝殿の南面に輔親一人月を見て居て、時に相互ひに興に乗じてこの歌を詠む、曉更くるに帰ると云々
	東鴻臚館趾	
	六条内裏	
	釣殿院	
	遍照心院	方丈の林泉は蘆山を移して諸樹を作り木とし連山の体をあらはし、枝を撓て飛泉とし、白砂を布いて流水とし、風景真妙なり。初めは夢想国師の作なり。後世におよんで伏見の朝霧島之助てふ者補作すとなん。京師庭造の一奇品なり。(中略) ○実法院(遍照心院塔頭)は林泉広くして、東北の風景を湛て雪の日の眺望あり。特に、蓮池ありてみな月の花盛には香芬々として紅白色をあらそひ、その外爪紅本紅唐蓮などの名草多し。これを見んとて朝日の出を待て群来る騷人歌をよみ詩作りて、水芙蓉を賞ずる事と漢異ならず。超女が歌、妃子が歩、芳気十里に聞え、花の君子とも賞す。蓮を愛する事事に同じき者は何人ぞやと茂叔もつづやきける。(中略) ○東林院(同塔頭)(門外の東にあり) 林泉広くして東南をうけて、月に雪に美観たらずといふことなし。この院は書聖南谷師の住居にして、庭中の西に書斎あり
	東寺	坊中宝輪院の林泉奇なり、泉水の中に沸水三所あり。すべて当山坊中に名画名筆多し。林泉もまた多くして、所々に沸水の清水ありて樹木を育する事他境に勝るとぞしられる
巻之二	赤山神祠	社頭の林泉玲瓏とし
	慈照寺銀閣	
	糺納涼	糺の杜あり、この社頭もつとも佳境なり。林泉もまたきよし
	惺窩先生幽居蹟	
	氷室古跡	
	中山忠親公別荘蹟	
	卜部家畜場所	
	南禅寺	方丈の林泉は、巨巖そばだちて、雲夢七沢を闢くの仙境なり(中略) ○南禅院(中略) 当院の林泉は東南鮮にして、まことに日月を扶助するの靈境なり。(中略) ○金地院(中略) この院の林泉佳境にして名巖多く、心といふ文字に双置けりとぞ。(中略) ○塔頭聴松院の林泉風色幽雅にして、庭に瑪瑙の水鉢あり。また菅神夢想の名松あり、老木の犬樹にてありしが、近年衰枯して朽たり、故に植継あり

巻数	項目	庭園に関する記述内容
卷之二	藤在衛公別業蹟	
	菩提樹院址	
	宝莊殿院址	
	白河離宮	
	陽成院陵	
	冷泉院陵	
	後一条院陵	
	栗田院	
	青蓮院	
	知恩教院	
	円山	坊舎六宇、山崖に建続て、亭閣林泉玲瓏として洛東の佳境なり。(中略) 多蔵庵の庭造は相阿弥の作
	將軍塚	
	上東門院塔	
	皇太后(女)子塚	
	長楽寺	
	蔡華園院	
卷之三	祇園社	
	高台寺	高台寺の林泉は豊太閤御霊舎の下段方丈の東にあり、風光奇雅にして洞庭を縮むの悌あり。(中略) されば当山は洛東の佳邑にして名区多し。春は桜花幽艶として匂ひ濃なり。夏は庭中の池の面に燕子花咲乱れ、また秋は萩の花錦を晒すがごとく、露深うして色をまし、鷺峯の月皎々として鮮なり。冬は連峰に雪積粉積と風に随ふて花を飛ばし、東坡が白鳳に騎かと疑ひ、宋玉が幽蘭白雪の曲を作れるの勝地なり
	靈山	
	音羽山清水寺	成就院の林泉は名庭にして、相阿弥の作、後に小堀遠州修補ある所なり。振袖の手水鉢、籬島石、烏帽子石は須磨浦よりこゝに移す、飛石五つの名石は加藤清正朝鮮より取歸りてこゝに寄附す。湯屋溪は秀吉公こゝに遊びたまふ時浴室を建られし跡なり、今に中門の形遺れり。護摩堂は東福門院の御寄附なり。この庭造は洛東の妙境にして遠近に美景を連ねたり。この庭造は洛東の妙境にして遠近に美景を連ねたり。(中略) 坊中延命院は前に豊国山、清閑寺、音羽嶺を庭中の壯觀とし、円養院は林泉より遠望すれば八幡、山崎、淀川の長流鮮にして奇観なり
	歌中山清閑寺	歌中山清閑寺の林泉は真妙にして、庭中に要石あり。(或云六条院御陵小堂の趾なりといふ) この地嵯峨渡月橋より見れば獅子口に似たるとしてこの名を呼ぶ
	若松池	むかし五条大納言邦綱卿山荘若松亭ありて林泉に大池あり、故にこの名あり
	阿弥陀峰	
	蓮華王院	堂前の林泉は、燕子花咲みだれて初夏の眺幽艶たり。むかしこの堂のほとりに醴泉あるよし、元亨釈書、百練抄にも見えたり。今の夜泣水ならんか
	法住寺古蹟	
	養源院	当院の林泉は風光閑雅にして奇岩多し
	智積院	林泉は東に翠巒層々として深林の中に宝閣寂々たり
	月輪	
	恵日山東福禪寺	境内の林泉洛南の妙境にして(中略) 思遠池は山門の前の蓮池をいふ。(中略) (東福寺塔頭林泉によつて纔をこゝに挙る)(中略) 鼻燈炉(近年三聖寺の林泉に移す)(中略) ○靈雲院(中略) 遺愛石(当院庭中にあり。相伝ふ、この名石初は肥後大守細川光尚侯の持物なり。かつて湘雪和尚細川家にちなみて後こゝに住す。その時大守より寺産五百石を与んと命じたまふ。湘雪拝謝して云、出家の後祿の貴は參禪の邪鬼なり、願くばこれに換て庭上の奇石を賜らば寺宝とすべしと乞ふ。因レ茲銘を遺愛石と号し、こゝに贈りたまふ。高さ三尺横四尺、岩頭に小松卷柏を樹る。石肌細やかにして色青し。台に石刻の須弥壇なる物あつて、その上に石槽をすへ、その中にあり。無双の名石なり。諸名家の記文あり。軸物兩卷に満る。初卷の二三をここに挙る)(中略) ○正覚院(庭中の池を松月池といふ) ○莊嚴院(林泉風景ありて奇岩あり、双鶴石、獅子石といふ。)
	清原深養父旧蹟	
	舍人親王塚	
	墨染里	
	伏見山	
	梅溪	
	清原深養父旧蹟	
	舍人親王塚	
	墨染里	
	伏見山	
	梅溪	
卷之四	高雄山神護寺	当山地蔵院の林泉は、客殿の庭中より溪間を臨ば、清滝川潺々ちながれて尾崎より谷崖まで紅葉ならぬ所なし。この折から都下の驛客こゝに来つて遊宴せずといふ事なし、洛北の佳境のその一たるべし
	槇尾平等心院	
	梶尾高山寺	梶尾高山寺の林泉は三維のその一なり
	等持院	林泉に芙蓉池ありて風色優雅なり

巻数	項目	庭園に関する記述内容
卷之四	衣笠山	
	衣笠殿	
	衣笠岳御霊	
	龍安寺	龍安寺の林泉は封境に名池あり、鏡容池と号す。冬日鶯鶯多く聚りて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、中の島を伏虎といふ。また水分石といふあり、霖雨の時この石上へ水越ぬれば西の方の樋を上て水を落すなり。三笑橋といふは東の方にあり。当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。(東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山虬松、隣院紅葉) 所謂方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北名庭の第一とす。庭中に樹木株もなく、海面の体相にして、中に奇巖十種ありて島嶼に准へ、真の風流にして他に比類なし、これを世に虎の子渡しといふ。そもそもこの地は文明年中細川右京大夫勝元の別荘なり。この人書院に坐にして遥に八幡神廟を毎事拝せんがために、庭中に樹木を植させずとなん。(中略) 塔頭西源院(中略) この院の林泉また風流にして、上段の地に茶室あり、額蔵六と書す、正法山桂南の筆なり。当山の後山絹笠山めぐりて雪の日の壯観なり。塔頭東阜院の林泉は遠景を興とす。坐にして八幡山淀川のながれ、小倉の江伏見鳥羽羽東師など鮮かに見えて、風光微妙なり。同じく大珠院の林泉は、鏡容池西の方に巡りて庭中の美となる。池中の島へ石橋をわたして、島の中に綾杉といふ名木あり。株の皮目に杳ありて綾絹に似たり。葉は常の杉に等し。高さ三丈許、京師の珍木なり。その木下に墳墓あり。中に真田左衛門尉幸村の墓あり。石塔婆を建て法号を鐫ず
	花園社	
	頓阿古蹟	
	正法山妙心寺	○当山に十境の風景あり、万歳山は乾の方の仁和寺山をいふ、高安灘は南の門前にあり、度香橋はこの流れにわたす、宇多川は当山より東の方の少流なり、鶏足嶺は北の山、南華塔は南方遥にして東寺の塔の遠景なり、齋宮社は東方の川端にあり、旧籍田は当寺の内花園の旧跡なり、百花洞は大雄院の南恵林院の北の方の深谷をいふ、麒麟閣は花園法皇の宸影を安ずる所にして、麟徳殿とも号して玉鳳院の中にあり(巳中十景)。(中略) ○退蔵院((中略) 庭中は画聖古法眼元信の作なり、他にこの類少し)(中略) ○衡梅院((中略) 当院の庭中奇なり。雪江松の事前に見えたり)(中略) ○靈雲院((中略) 庭は相国寺の是庵の作とぞ。(中略) 庭中の出水は子建これを作る)(中略) ○大通院(開基は湘南和尚なり、この人は初め土佐国守の息にして、山水の勝景を庭中に造る事を好みて、奇石奇木を諸邦より聚る事多し。一歳書を紀州禪林寺来山和尚に奉じ、奇樹靈石を求むる事正法誌に見えたり。庭中の風色当山第一にして二に双ぶものなし。(中略)) ○蟠桃院(当院の林泉は奇石名岩多し)(中略) ○稚華院(林泉は名庭にして、奇石を量て十六羅漢に准へ、釈尊大会の体相を表す、日蓮宗徒玉淵の作なり)(中略) ○桂春院(林泉妙境なり(中略)) ○太嶺院(林泉京師庸軒の作)(中略) ○春浦院((中略) また林泉は虎溪の三笑を象て妙景あり(中略)) ○大光院(林泉妙境なり)(そのほか妙心寺境内塔頭都而八十余寺あり、何れも高貴諸侯の菩提所にして、林泉の風流あるひは名画筆記するに際限なし、故に予大略見聞の纔をこゝに著すのみなり)
	芋喰僧都旧跡	
	大応国師塔	
	後宇多院塔	
	賀陽門院塔	
	鹿苑寺	林泉に三重金閣あり(中略) 池を鏡湖といふ、九山八海石あり、御茶水を銀河泉といふ、竜門瀑に鯉魚石あり、安民沢に臥龍石あり
卷之五	天龍寺	この方丈の林泉は開基夢窓国師の作りたまふ、亀尾山、あらし山、大堰川、戸難瀬滝を庭中の荘として、この辺の妙境なり。山門を普明閣と号し、集瑞軒の蓮池を曹源池といふ(中略) 妙智院の庭中は僧良策彦の造れるなり
	亀山殿旧跡	
	大井川	
	嵐山	
	宗祇法師旧庵	
	道命法師蹟	
	葉室西芳寺	葉室西芳寺の林泉は、夢想国師こゝに止錫の時、洛陽染殿地藏尊來現して土石を運び共に作りたまふ名園なり。その後徳仁の兵火に荒蕪せしを、伏見の島之介てふ者作り補ふといふ。(図は築山庭造伝に見えればこゝに略す)
	定嗣卿山荘古蹟	
	桂山莊園林堂	(伝云、初めは豊太閤の指麾して小堀遠州の造れるとぞ、洛西林泉の冠たるものなり) 黄葉集詞書寛永の頃にか、八条殿智忠親王都のにし桂としてしろしめす所あり、先の宮の御時よりかり庵たてをかれし、その所しつらひ物せよとて、御みづからもいくそたびわたりましく、たくみづかきめして様々の亭閣山を築き石をたゝみならべ、桂川を分て水せき入らる、花の色鳥の声、山の木だち中島わたりめづらしう見ゆ
	元輔家	
	男山	八幡八景 雄徳山松 極楽寺桜 猪鼻阪雨 放生川蛭 安居橋月 月弓岡雪 橋本行客 大乘院金(中略) (茶島の善法院の林泉は小堀遠州、滝本坊昭乗翁の両作なり。庭中に太子形といふ手水鉢あり、また遠州好の茶亭もあり) 松花堂(中略) (石灯炉庭中にあり、銘曰、慶安二年松花堂尊前永代夜灯 九月十八日 正良敬白 数寄屋待合等風流にして、庭中より宇治川、朝日山、小倉池、伏見沢田、黄檗、木幡里、城山、鮮かに見えて無双の妙景なり)
	山崎妙喜庵	袖摺松(茶室の側にあり、利休こゝに幽庵の時秀吉公來興したまひ、袖を摺て茶亭へ入せたまふとぞ。古松高さ三丈余) 芝山手水鉢(茶室の東の庭中にあり、芝山と銘す、蹲踞形なり)
	山崎城	
	相応寺	

表 4 『都林泉名勝図会』における挿図一覧

挿図No.	挿図の名称	巻数	頁数	画工	挿図種類
1	神泉苑 御遊	一 乾	林一ノ三裏、林一ノ四表	草偃	典故
2	七夕 蹴鞠	一 乾	林一ノ六裏、林一ノ七表	中和	風流
3	相国寺林光院 鶯宿梅	一 乾	林一ノ七裏、林一ノ八表	草偃	典故
4	紫野 若菜摘み	一 乾	林一ノ九裏、林一ノ十表	文鳴	風流
5	雲林院 花見	一 乾	林一ノ十裏、林一ノ十一表	中和	典故
6	大徳寺方丈	一 乾	林一ノ十四裏、林一ノ十五表	中和	林泉
7	[大徳寺 一休和尚]	一 乾	林一ノ二十二裏、林一ノ二十三表	中和	典故
8	大徳寺塔頭 寸松庵	一 乾	林一ノ二十六裏、林一ノ二十七表	草偃	林泉
9	其貳	一 乾	林一ノ二十七裏	草偃	林泉
10	大徳寺塔頭 芳春院	一 乾	林一ノ二十九表	中和	林泉
11	大徳寺塔頭 碧玉庵 紫式部碑	一 坤	林一ノ三十四表	中和	林泉
12	本法寺	一 坤	林一ノ三十七裏、林一ノ三十八表	草偃	林泉
13	千本焔魔堂 大念佛	一 坤	林一ノ三十八裏	中和	風流
14	七夕 池坊立花	一 坤	林一ノ三十九裏、林一ノ四十表	文鳴	風流
15	建仁寺門前 十日笑姿参	一 坤	林一ノ四十一裏、林一ノ四十二表	中和	風流
16	建仁寺 正伝院	一 坤	林一ノ四十二裏、林一ノ四十三表	草偃	林泉
17	建仁寺塔頭 正伝院 織田有楽斎茶亭	一 坤	林一ノ四十三裏、林一ノ四十四表	草偃	林泉
18	建仁寺塔頭 靈洞院	一 坤	林一ノ四十五裏、林一ノ四十六表	中和	林泉
19	[建仁寺 七条鴨川]	一 坤	林一ノ四十六裏、林一ノ四十七表	中和	典故
20	四條繩手辻 太神宮	一 坤	林一ノ四十七裏	中和	風流
21	四条河原夕涼 其一	一 坤	林一ノ四十八裏、林一ノ四十九表	文鳴	風流
22	夕涼 其貳	一 坤	林一ノ四十九裏、林一ノ五十表	文鳴	風流
23	顔相見	一 坤	林一ノ五十表、林一ノ五十一表	文鳴	風流
24	本園寺中 真如院	一 坤	林一ノ五十一裏、林一ノ五十二表	草偃	林泉
25	真如院 烏帽子掛石	一 坤	林一ノ五十二裏	草偃	林泉
26	西六條本願寺 對面所 七夕簞花	一 坤	林一ノ五十三裏、林一ノ五十四表	中和	風流
27	西六條本願寺 對面所 林泉	一 坤	林一ノ五十四裏、林一ノ五十五表	中和	林泉
28	同 本願寺御堂 盆燈爐	一 坤	林一ノ五十五裏、林一ノ五十六表	中和	風流
29	[東六条祭主三位輔親卿旧館を訪ねる図]	一 坤	林一ノ五十八表	中和	典故
30	[枳殻馬場]	一 坤	林一ノ五十八裏	中和	林泉
31	[東六条祭主三位輔親卿旧館]	一 坤	林一ノ五十八表	中和	典故
32	桂宮	一 坤	林一ノ五十八裏、林一ノ五十九表	文鳴	典故
33	八條 遍照心院方丈 其一	一 坤	林一ノ五十九裏、林一ノ六十表	中和	林泉
34	其貳	一 坤	林一ノ六十裏	中和	林泉
35	九月十一日 六孫宮例祭	一 坤	林一ノ六十一裏、林一ノ六十二表	中和	風流
36	大通寺中 實法院	一 坤	林一ノ六十三表	草偃	林泉
37	其貳	一 坤	林一ノ六十三裏、林一ノ六十四表	草偃	林泉
38	大通寺 東林院	一 坤	林一ノ六十五表	草偃	林泉
39	東林院 其貳 南谷師書齋 幻華庵	一 坤	林一ノ六十五裏、林一ノ六十六表	草偃	林泉
40	東寺 寶輪院	一 坤	林一ノ六十六裏、林一ノ六十七表	草偃	林泉
41	宝輪院 茶亭庭	一 坤	林一ノ六十七裏、林一ノ六十八表	中和	林泉
42	東寺 御影供	一 坤	林一ノ六十八裏、林一ノ六十九表	文鳴	風流
43	東寺山吹 岡本氏林泉	一 坤	林一ノ六十九裏、林一ノ七十終表	中和	林泉
44	[赤山社参道]	二	林二ノ貳表	文鳴	風流
45	赤山社	二	林二ノ貳表、林二ノ三上表	中和	林泉
46	銀閣寺 林泉	二	林二ノ三中裏、林二ノ三ノ下表	中和	林泉
47	[銀閣寺 林泉 其二]	二	林二ノ三ノ下裏	中和	林泉
48	東山殿御茶水	二	林二ノ四十一裏	中和	風流

挿図№	挿図の名称	巻数	頁数	画工	挿図種類
49	銀閣 慈照寺 集芳軒	二	林二ノ四下裏、林二ノ五表	草偃	林泉
50	河合納涼	二	林二ノ九裏、林二ノ十表	文鳴	風流
51	吉田山遊宴	二	林二ノ十二裏、林二ノ十三表	文鳴	風流
52	黒谷西翁院 反古菴	二	林二ノ十三裏、林二ノ十四表	草偃	林泉
53	光雲寺	二	林二ノ十四裏、林二ノ十五表	中和	林泉
54	南禅寺 方丈	二	林二ノ十八裏、林二ノ十九表	草偃	林泉
55	南禅寺 龜山法皇古墟	二	林二ノ十九裏、林二ノ二十表	中和	林泉
56	〔南禅院 大明国師坐禅〕	二	林二ノ二十裏、林二ノ二十一表	草偃	典故
57	南禅塔中 聴松院	二	林二ノ二十二裏、林二ノ二十三表	中和	林泉
58	南禅塔中 歸雲院	二	林二ノ二十三裏、林二ノ二十四表	草偃	林泉
59	南禅塔中 牧護菴	二	林二ノ二十四裏、林二ノ二十五表	草偃	林泉
60	南禅 金地院 其一	二	林二ノ二十五裏、林二ノ二十六表	中和	林泉
61	其貳	二	林二ノ二十六裏	中和	林泉
62	名物南禅寺前湯菰腐店	二	林二ノ二十七裏、林二ノ二十八表	中和	風流
63	知恩教院 方丈林泉 其一	二	林二ノ二十八裏、林二ノ二十九表	草偃	林泉
64	其貳	二	林二ノ二十九裏、林二ノ三十表	草偃	林泉
65	知恩院 御忌詣	二	林二ノ三十裏、林二ノ三十一表	文鳴	風流
66	圓山 多蔵庵 春阿弥	二	林二ノ三十二裏、林二ノ三十三表	中和	林泉
67	圓山 延寿庵 連阿弥 其一	二	林二ノ三十三裏、林二ノ三十四表	草偃	林泉
68	連阿弥 其貳	二	林二ノ三十四裏	草偃	林泉
69	圓山 端之寮 玄関	二	林二ノ三十六表	中和	林泉
70	端之寮 其貳	二	林二ノ三十六裏、林二ノ三十七表	中和	林泉
71	〔円山多福庵〕	二	林二ノ三十七裏、林二ノ三十八表	草偃	風流
72	圓山 多福庵 也阿弥 其一	二	林二ノ三十八裏、林二ノ三十九表	草偃	林泉
73	多福庵 其貳	二	林二ノ三十九裏、林二ノ四十表	草偃	林泉
74	圓山 長寿院 左阿弥	二	林二ノ四十裏、林二ノ四十一裏	中和	林泉
75	圓山 勝興庵 正阿弥 書会	二	林二ノ四十一裏、林二ノ四十二表	中和	林泉
76	圓山 正阿弥 其二	二	林二ノ四十二裏、林二ノ四十三表	中和	林泉
77	高臺寺 傘亭	二	林二ノ四十五表	草偃	林泉
78	高臺寺 方丈林泉 其一	二	林二ノ四十五裏、林二ノ四十六表	中和	林泉
79	高臺寺 小方丈	二	林二ノ四十六裏、林二ノ四十七表	草偃	林泉
80	雙林寺 長喜菴	二	林二ノ四十七裏、林二ノ四十八表	中和	林泉
81	〔双林寺 桜花〕	二	林二ノ四十八裏、林二ノ四十九表	草偃	典故
82	雙林寺 文阿弥	二	林二ノ四十九裏、林二ノ五十表	中和	林泉
83	祇園神輿濯 遼物 其一	二	林二ノ五十裏、林二ノ五十一表	文鳴	風流
84	其二	二	林二ノ五十一裏、林二ノ五十二表	文鳴	風流
85	靈山 叔阿弥	二	林二ノ五十二裏、林二ノ五十三表	中和	林泉
86	靈山 珠阿弥	二	林二ノ五十三裏、林二ノ五十四表	中和	風流
87	靈山巖阿弥 長嘯梅	二	林二ノ五十四裏、林二ノ五十五表	草偃	林泉
88	下河原 宴席 女伶會	二	林二ノ五十五裏、林二ノ五十六表	中和	風流
89	清水寺 西門	三	林三ノ貳裏	中和	風流
90	清水 成就院 其一	三	林三ノ貳裏、林三ノ三表	草偃	林泉
91	成就院 其二	三	林三ノ三裏、林三ノ四表	草偃	林泉
92	田村將軍遇僧延珍	三	林三ノ四裏、林三ノ五表	草偃	典故
93	清水 寶生院	三	林三ノ七裏、林三ノ八表	中和	林泉
94	清水 延命院	三	林三ノ八裏、林三ノ九表	中和	林泉
95	清水 圓養院	三	林三ノ九裏、林三ノ十表	草偃	林泉
96	清水瀧下 南蔵院	三	林三ノ十裏、林三ノ十一表	文鳴	風流
97	歌中山 清閑寺	三	林三ノ十一裏、林三ノ十二表	草偃	林泉

挿図No.	挿図の名称	巻数	頁数	画工	挿図種類
98	喙蘭人觀耳塚	三	林三ノ十三裏、林三ノ十四表	中和	風流
99	智積院	三	林三ノ十四裏、林三ノ十五表	草偃	林泉
100	蓮華王院 燕子花	三	林三ノ十五裏、林三ノ十六表	草偃	林泉
101	養源院 其一	三	林三ノ十六裏、林三ノ四十七表	草偃	林泉
102	養源院 其貳	三	林三ノ十七裏	草偃	林泉
103	東福寺中三聖寺 梟燈燼	三	林三ノ十八裏	中和	風流
104	東福寺 通天橋 觀紅楓	三	林三ノ二十一裏、林三ノ二十二表	文鳴	風流
105	恵日塔頭 靈源院	三	林三ノ二十二裏、林三ノ二十三表	草偃	林泉
106	不二菴 遺愛石	三	林三ノ二十三裏、林三ノ二十四表	中和	林泉
107	恵日塔頭 即宗院 自然居士墳	三	林三ノ二十四裏、林三ノ二十五表	草偃	林泉
108	東福塔頭 莊嚴院	三	林三ノ三十裏、林三ノ三十一表	中和	林泉
109	恵日塔頭 南昌院	三	林三ノ三十一裏、林三ノ三十二表	中和	林泉
110	東福寺 南明院	三	林三ノ三十二裏、林三ノ三十三表	中和	林泉
111	稻荷社 初午詣	三	林三ノ三十四裏、林三ノ三十五表	文鳴	風流
112	深艸里 墨染 花魁	三	林三ノ三十五裏、林三ノ三十六表	中和	風流
113	伏見梅溪	三	林三ノ三十七裏、林三ノ三十八表	中和	風流
114	伏水 龍徳菴	三	林三ノ三十八裏、林三ノ三十九表	中和	林泉
115	伏水 慶雲庵	三	林三ノ三十九裏、林三ノ四十表	中和	風流
116	梅ヶ畑平岡 八幡宮 導故院	四	林四ノ貳表	文鳴	風流
117	高雄 看丹楓	四	林四ノ貳裏、林四ノ三表	文鳴	風流
118	高雄 地藏院	四	林四ノ三裏、林四ノ四表	中和	林泉
119	梅尾高山寺 三尊院	四	林四ノ八表、林四ノ九表	中和	林泉
120	等持院	四	林四ノ十三裏、林四ノ十四表	中和	林泉
121	足利將軍義満公 衣笠山夏觀雪	四	林四ノ十四裏、林四ノ十五表	草偃	典故
122	龍安寺 方丈 林泉	四	林四ノ十六裏、林四ノ十七表	草偃	林泉
123	龍安塔頭 西源院	四	林四ノ十七裏、林四ノ十八表	中和	林泉
124	龍安塔頭 大珠院	四	林四ノ十八裏、林四ノ十九表	中和	林泉
125	妙心寺 玉鳳院	四	林四ノ二十一裏、林四ノ廿二表	中和	林泉
126	妙心塔頭 大通院	四	林四ノ廿二裏、林四ノ二十三表	草偃	林泉
127	大通院 其二	四	林四ノ二十三裏、林四ノ二十四表	草偃	林泉
128	花園輔仁親王山亭	四	林四ノ二十四裏、林四ノ二十五表	草偃	典故
129	妙心塔頭 靈雲院	四	林四ノ二十八裏、林四ノ二十九表	中和	林泉
130	妙心塔頭 海福院	四	林四ノ二十九裏、林四ノ三十表	文鳴	風流
131	妙心塔頭 雜華院	四	林四ノ三十裏、林四ノ卅一表	中和	林泉
132	妙心塔頭 蟠桃院	四	林四ノ三十四裏、林四ノ三十五表	草偃	林泉
133	妙心塔頭 大嶺院	四	林四ノ三十五裏、林四ノ三十六表	中和	林泉
134	龍馬献上	四	林四ノ四十二裏、林四ノ四十三表	中和	典故
135	妙心塔頭 退藏院	四	林四ノ四十五裏、林四ノ四十六表	中和	林泉
136	真乘院 芋喰僧都	四	林四ノ四十六裏、林四ノ四十七表	文鳴	典故
137	妙心塔頭 春浦院	四	林四ノ四十七裏、林四ノ四十八表	草偃	林泉
138	金閣寺	四	林四ノ五十二表	中和	林泉
139	其二	四	林四ノ五十二裏、林四ノ五十三表	中和	林泉
140	〔嵯峨小督隱家〕	五	林五ノ貳表	中和	典故
141	大井川 三船御遊	五	林五ノ貳裏、林五ノ三表	中和	典故
142	天龍寺 方丈 林泉 其一	五	林五ノ四裏、林五ノ五表	中和	林泉
143	其二	五	林五ノ五裏	中和	林泉
144	天龍寺 雲居菴	五	林五ノ八裏、林五ノ九表	草偃	林泉
145	天龍寺塔頭 妙智院 林泉	五	林五ノ九裏、林五ノ十表	中和	林泉
146	天竜塔頭 真乘院 林泉	五	林五ノ十裏、林五ノ十一表	中和	林泉

挿図No.	挿図の名称	巻数	頁数	画工	挿図種類
147	〔渡月橋〕	五	林五ノ十三裏、林五ノ十四表	中和	風流
148	あらし山花盛	五	林五ノ十五表	文鳴	風流
149	桂川 宴船	五	林五ノ十七裏、林五ノ十八表	草偃	風流
150	八幡泉坊	五	林五ノ二十裏、林五ノ二十一表	文鳴	林泉
151	〔安居神事〕	五	林五ノ二十一裏、林五ノ二十二表	文鳴	風流
152	松花堂全圖	五	林五ノ二十二裏	文鳴	林泉
153	妙喜菴 茶室 袖摺松	五	林五ノ二十四表	草偃	林泉
154	吉祥院村中 陽泉亭	五	林五ノ二十四裏、林五ノ二十五表	中和	林泉
155	嶋原花寄	五	林五ノ二十五裏、林五ノ二十六表	文鳴	風流
156	同所 京屋 弥生興	五	林五ノ二十六裏、林五ノ二十七表	中和	林泉
157	同所 藤屋 月興	五	林五ノ二十七裏、林五ノ二十八表	草偃	林泉
158	同所 角屋 雪興	五	林五ノ二十八裏、林五ノ二十九表	文鳴	林泉

表 5 『都林泉名勝図会』の挿図における詩歌一覧

凡例		①挿図の情景にあわせた詩歌			
		②挿図から連想した詩歌			
		③名勝に関連した詩歌			
		④名勝から連想した詩歌			
		⑤季節を強調する詩歌			
		未分類			
挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
1	神泉苑 御遊	懐古 鳴鑾聞昔下ニテ龍池ニ 千柳争迎フ五色ノ旗 今日偶々來ニテ池上ニニ看レバ 雪ハ寒シ丁座岸邊ノ祠 栲亭	波まよりかづきあげたる鶴丸の つるぎや代々のたから成らん 八幡美濟		
2	七夕 蹴鞠	久方の天津空まで揚まりも あひあふ星やけふはうくらん 閑田古蒿蹊			
3	相国寺林光院 鶯宿梅	鶯宿梅 処々春風花尽ノ開キ 何令ムニ幽賞ヲシテ此ニ相催ニサ 昔年ニ詠饒天使ニ 千載香高ノ鶯宿梅 相国寺維明	旧苑春回テ非ニス旧春ニ 鶯花陌上落ニ紅塵ニ 芳魂今日縦ニ招得トイヘドモ 誰ニ是風流作ニラン主人ト 栲亭		
4	紫野 若菜摘み	春草の中にもわきてむらさきの のへのすみれのむつまじきかな 伴蒿蹊	紫野 思樂ニ紫野 于テ采ニル其芹ニツ 是采リ是獲 薄ニ藤ニム吾親ニ 思樂ニ紫野 于テ采ニル其芹ニツ 日之永キ矣 以テ遊シ以テ遊フ 以テ遊シ以テ遊フ 于テ紫之野 變兮諸姫 既ニ都ニシテ且雅ナリ		
5	雲林院 花見	名寄 これやきく雲の林の寺なるらん 花を尋るころやすめん 西行	雲林院にて桜の花をよめる いさ桜我もちりなんひとさかり ありなは人にうきめ見へなん 増供法師		
6	大徳寺方丈				
7	〔大徳寺 一休和尚〕				
8	大徳寺塔頭 寸松庵				
9	其貳				
10	大徳寺塔頭 芳春院				
11	大徳塔頭 碧玉庵 紫式部碑	しられじと霞に煙らむ藤の花 中々ふかき色そ見へけり 蒿蹊			
12	本法寺	すずしさや水はなくとも浪の紋 雨籠			
13	千本焔魔堂 大念佛	焔魔堂上狂言奇ナリ 念仏桜花開落ノ時 塔婆千本本日蔵ノ夢 即今忽々笑ッ寧馨ノ兒 籠島			
14	七夕 池坊立花	瓶花を二星に奉ると聞て わづかなる瓶に百花を池の坊 星の嫁入りの島台にして 千代道			
15	建仁寺門前 十日 笑姿参	千金の価は安し春の宵 きおん 柳			
16	建仁寺 正伝院				
17	建仁塔頭 正伝院 織田有楽齋茶亭				
18	建仁塔頭 靈洞院				

挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
19	〔建仁寺 七条鴨川〕	狂歌 引上る榮西長首座の音頭はだらり 陀羅尼の鐘の音は三更 九鯉			
20	四條繩手辻 太神宮				
21	四条河原夕涼 其一	すずしさや袖の薄に月の露 ぎをん とみ	萍の花くらへなり水のうへ ぎをん 柳	曇々 ^{タル} 楊弓星一点 沈々 ^{タル} 金棒月三更 胴脈	
22	夕涼 其貳	笹過て笹をかたげん夕すゝみ ぎをん 以津	三千の美人ばびんの音涼し 六柳軒		
23	顔相見	顔見せや白粉の雪紅粉の梅 ぎをん みや	水仙の寒くも双ぶ真向かな ぎをん 柳		
24	本圀寺中 真如院				
25	真如院 烏帽子掛石				
26	西六條本願寺 對面所 七夕簞花	七夕の籠花見んと門徒達 星のごとくに金をちらして 亀天			
27	西六條本願寺 對面所林泉				
28	同 本願寺御堂 盆燈爐	御堂ノ盆会麗シ 仏智光明不遠ノ思ヒ 一タビ念スレバ則テ生ス極楽土 多ク投テニ金宝ヲ涙袂ニ滋シ 籬島			
29	〔東六条祭主三位 輔親卿旧館を訪ね る図〕				
30	〔枳殻馬場〕				
31	〔東六条祭主三位 輔親卿旧館〕	七夕をよめる 雲まよりほし合の空を見わたせ ばつところなく天の河波 祭主輔親	池水は天の川にやかよふらん 空なる月の底にみゆるは 懷円		
32	桂宮				
33	八條 遍照心院方丈 其一				
34	其貳				
35	九月十一日 六孫宮例祭				
36	大通寺中 實法院				
37	其貳	南谷師の旧棲と聞て 庭にまて筆威のこるやなめくじ り 籬島			
38	大通寺 東林院				
39	東林院 其貳 南谷師書齋 幻華庵				
40	東寺 寶輪院				
41	宝輪院 茶亭庭				
42	東寺 御影供	御影供の日朱雀野より鳥原を見 わたして 油とる物とは見えぬ花菜かな 山吹五橋			
43	東寺山吹 岡本氏林泉				
44	〔赤山社参道〕	春の日もこころ赤山道草の 五形すみれに日もさがり松			
45	赤山社	早乙女の見に行宮の鏡かな 言水			
46	銀閣寺 林泉				
47	〔銀閣寺 林泉 其二〕	雪の日よめる 花紅葉月待山のけしきより 哀れに深き雪の明けぼの 柳枝軒弁			
48	東山殿御茶水				

挿図No	挿図の名称	挿図中における詩歌			
49	銀閣 慈照寺 集芳軒	吉田敬といふ人銀閣のかたはら 集芳軒にて茶湯せし時 へだてなくかたらひをれはおの つから月待山のむかしおほゆる 橋本経亮	泉水兼花竹 名園奇状所 香堂好集芳 占断三春節 蘭沙		
50	河合納涼	新古今 鴨社の歌合とて人々よみ侍りけ る月を石川やせみのを川の清け れは月もなかれをたつねてそす む 鴨長明	ころろまで涼しくなりぬ御祓川 籬島		
51	吉田山遊宴	九月蕤香能引レ人 烟羅巖径起ル紅塵 松林自ッ絶ッ磨ニノ跡ニ 刺ッ見ル綺羅雲外新ナリ 皆川充			
52	黒谷西翁院 反古菴	誰世にかむひ置きけん草の戸の 筆のあとをはその名にはして 八幡美清			
53	光雲寺	光雲といふに いなつまやきのふは東けふは西 其角			
54	南禅寺 方丈				
55	南禅寺 亀山法皇 古墟				
56	〔南禅院 大明国 師坐禅〕	梁の塵もとるや秋の風 文暢			
57	南禅塔中 聴松院				
58	南禅塔中 歸雲院				
59	南禅塔中 牧護菴				
60	南禅 金地院 其一				
61	其貳	師木島の山跡ころろを人とはは 朝日に匂ふ山さくら花 本居宣長			
62	名物南禅寺前湯菰 腐店	湯豆腐に独秀峯の雪見かな 嘯山	取かへてちひさき猪口に何膳じ 喰てもおぼろの空ねない店 籬島		
63	知恩教院 方丈林 泉 其一				
64	其貳				
65	知恩院 御忌詣	たはやめかここに行かふ袖の色 や都の花のはしめなるらん 伴蒿蹊	大師のたたきにしめしたまひし をおもふ御忌にきよ目のさめさ らむほと衣 七十九才大江丸		
66	圓山 多蔵庵 春 阿弥				
67	圓山 延寿庵 連 阿弥 其一	伊勢講ははてて長夜の御法哉 月峰			
68	連阿弥 其貳				
69	圓山 端之寮 玄 関	遊端寮 三層棲外樹高低 醉客憑ッテレ欄ニ望無ッレ迷フコト 平鳳城中春色麗ッ 風光深ッ映ス夕陽西 八十一翁嘯山題			
70	端之寮 其貳	東山席上 題スニ門応挙ヲ画ニ 山秀ヲ川廻ヲ抱ケニ帝州ヲ 欄前万学在ニ毫頭ニ 丹青天下無双ノ手 佳麗東山第一楼	右 指言端寮也 永日見鶯曾ヲ 大書シテ此五字 扁スニ千其楼ニ 六如庵慈周		
71	〔円山多福庵〕	哉阿弥の第にて肥ふとりたる妓 伶の妙に舞しを見て狂歌をよめ る 春風におたふく庵の柳瘤 ヤア身の形は福人の相	うつつなく扇に狂ふ胡蝶かな 呂蛤		

挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
72	圓山 多福菴 也 阿弥 其一	春日同詠寄鶴祝言 かけたかきまつのよはいもすみ なるるつるのちとせをちきるな るらし 正二位資枝卿			
73	多福菴 其貳	題「芳水」多福菴 門前「芳水」瀟々巖崖 流レテ繞テ閑庭ヲ苔日埋ム 宣シ菴ニ題スルコトニ多福字ヲ 烟霞雪月四時佳ナリ 龍公美			
74	圓山 長寿院 左 阿弥	梅の花あたは苔の開きけり 定 雅			
75	圓山 勝興庵 正 阿弥 書会				
76	圓山 正阿弥 其 二	我家より千々の蛩や宵の鈴 正 阿弥 志諺			
77	高臺寺 傘亭	口切や相合傘の僧と俗 斑竹			
78	高臺寺 方丈林泉 其一				
79	高臺寺 小方丈	乙卯重九 還中上人邀テ登ニテ高台寺ノ山閣ニ 設レテ寔ヲ 蕉中禪師 白雲西望スレハタニ將レニ沈ント 綺席留連ノ興転々深シ 不レ擬ニ登高能ク作ニレ賦 解レヌ言フヲ山水有トニ清音ニ	同賦 還中禪師 登高非レ倣俗ニ 迎賞為ニナリ林泉ノ 攀レテ閑幽松ノ際 憑レル欄ニ飛鳥ノ前 暮寒千嶂ノ碧 雨氣万家ノ烟 遮莫テレ歸期ノ晩キヲ 好教トニ初月ニ懸ト		
80	雙林寺 長喜菴	宿ニ蔡華院主 月峰之住菴ニ 簷前雨細ニシテ山添レ緑ヲ 簾外花飛テ雪散レ香 況テ復主人談論ノ妙 忘レテ歸終日醉ニ金觴ニ 龍公美	むかしみし夜のおもむきや梅の 月 定雅	憩ニ長喜庵ニ 秋烟漠々水冷々 物色清奇溪上ノ亭 試ニ見ル天公存レヌル画ヲ癖 猫成一幅翠堆屏 三峯荷田信郷	
81	〔双林寺 桜花〕				
82	雙林寺 文阿弥	將軍塚を尋て 君が代や將軍塚のかんこ鳥 浪花 鳥掌			
83	祇園神輿濯 遼物 其一	あせしけき顔におほひし団かな ぎをん 以津			
84	其二	風薫るかたへまはるや浮人形 ぎをん栄次	ねり物や顔から落る紅の露 ぎをん袖		
85	靈山 叔阿弥	花に風かろく来てふけ酒の泡 嵐雪			
86	靈山 珠阿弥	春風に吹かれてあそぶるりよ鷗 よ 月居			
87	靈山巖阿弥 長嘯 梅	祇園清水春さまざまの腹べらし 呂蛤			
88	下河原 宴席 女 伶會	美しう咲ほど花の手柄かな 斑竹	題ニ妓舞ニ 東山ノ妖態舞ヒ娟々 翡翠參差シテ振レテ翼ヲ翻ル 鬢髮綰レネテ雲娟ニヒ衛氏ノヨリモ 細腰帯レ殺美レ飛燕ノヨリ 歌ハ纏ニ心地ニ情非レニ 調ハ徹ニ耳根ニ思幾々千 縦ヒ使下ニ謝公ニテ通中レ此域トニ 胡為ッ志レ禦ニクニ北方ノ辺ヲ 艸廬女孫 熊谷氏真蘭		
89	清水寺 西門	探遍ニ草花路幾々又 紅楓相映酔中斜ナリ 高台寺裡逢ニテ疎雨ニ 清水山前看ニ落霞ヲ 橘洲畑嶺			

挿図No	挿図の名称	挿図中における詩歌			
90	清水 成就院 其一	祇樹籬低界 ^{レシテ} 竹 ^ヲ 回 ^ル 院庭幽豁俯 ^ニ 溪限 ^ニ 誰 ^カ 知 ^ル 雲嶂藤蘿翠 ^{ナル} 還 ^テ 映 ^ス 皇城霞綺ノ開 ^ケ ヲ 百々肇			
91	成就院 其二	施園何 ^ッ 必 ^ス 布 ^ニ 黄金 ^ニ ヲ 泉石即 ^チ 同 ^シ 長者ノ心 ^ニ 披対 ^レ 今如 ^{レシ} 出 ^レ 世 ^ニ 一庭ノ樹竹是 ^レ 祇林 新羅弱			
92	田村將軍遇僧延珍	偶、尋 ^ニ 劉阮 ^ニ 入 ^ニ 天台 ^ニ 流水桃花隔 ^ニ 世埃 ^ニ ヲ 孤杖行 ^ッ 迷 ^ッ 采葉ノ路 犬鷄声近 ^シ 白雲堆 岫廬			
93	清水 寶生院	幽地客ノ尋 ^ル コト稀 ^{ナリ} 芳花空 ^ニ 掩 ^レ 扉 春風吹去 ^ル 処 暮 ^ニ 作 ^ニ リテ白雲 ^ニ ヲ飛 梅華仙			
94	清水 延命院	緩歩哦 ^{レテ} 詩訪 ^ニ 宝坊 ^ニ ヲ 百花歴乱 ^{トシ} 送 ^ニ 斜陽 ^ニ ヲ 羽峯吐 ^レ 月飛泉賤 ^キ 鳥野鏤 ^{レシテ} 霞 ^ヲ 遠樹蒼 ^{タリ} 信ハ求 ^ニ メテ門通 ^ニ ヲ感懷起 ^リ 迷窺 ^ニ ヒテ色界 ^ニ ヲ似 ^ニ 相蔵 ^ニ 乃公ノ能為 ^レ メ ^ニ 憐 ^ニ ムカ ^ニ 吾輩 ^ニ ヲ 還 ^テ 使 ^ニ 塵躬 ^ヲ ヲ想 ^ニ ハ ^ニ 淨疆 ^ニ ヲ 龍岫廬女孫 熊谷氏真蘭			
95	清水 圓養院	対月 こたへせぬ影をや果はかこたま しとは とはすかたりの月にせられて 岡崎慈延			
96	清水瀧下 南蔵院	名にしおふこぞ音羽の滝飲に 花もうかむ瀬月もうかむ瀬 籬島			
97	歌中山 清閑寺	秋興 とくおきていそく茸狩り紅葉か りあかてそ秋の日影くれゆく 慈延			
98	鳴蘭人観耳塚	豊氏ノ西征計策完 ^シ 凱旋嘗 ^テ 此 ^ニ 築 ^ニ 京観 ^ニ 鳴蘭人貢 ^ス 太平ノ日 猶使 ^下 ニ ^ニ 遠人 ^ニ ヲ肝胆モヲ寒 ^上 鶴橋柚木太淳			
99	智積院				
100	蓮華王院 燕子花	をらて見るこころやへたてかき つはた 里村昌逸	燕子花 薫風吹動 ^ス 綺羅ノ衣 巨仏堂南歩不 ^レ 違 榻上麗人何所 ^レ 語 ^ル 笑言紫燕池 ^ニ 飛 鶴山畑維龍		
101	養源院 其一				
102	養源院 其貳				
103	東福寺中三聖寺 泉燈爐				
104	東福寺 通天橋 観紅楓	天に通ふ名をさへかけて棚機 のもみちの橋はこれかとそおもふ 伴蒿蹊	通天橋観風 霜染 ^ニ 丹楓 ^ニ ヲ蕭寺ノ秋 蒼々 ^{タル} 林霏夕陽幽 ^{ナリ} 通天橋上凭 ^{レテ} 欄 ^ニ 望 ^メ ハ 一道ノ清溪帯 ^{レテ} 錦 ^ヲ 流 瀬尾教延		
105	恵日塔頭 靈源院				

挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
106	不二菴 遺愛石	猶ッ帯ニ竜宮ノ氣ニッ自ッ惺 佳人遺愛眞ニム中庭ニ 石其万古歸ニ無朽ニ 松ハ是千年一様青シ 東海澤菴			
107	恵日塔頭 即宗院 自然居士墳				
108	東福塔頭 莊嚴院	獅子巖 紺眼星懸テ威ニス百獸ニッ 赤毫焰起テ照ス群毛ヲ			
109	恵日塔頭 南昌院				
110	東福寺 南明院	まほろしの鼠も出よねはん像 月居	萩萩の露に交るや破れ草鞋 文暢	ねはん会に蛸もきて泣香炉かな 浪花才嬌	
111	稲荷社 初午詣	初午のけふにあひてはいなり山 はななき杉も人にをらるる 伴蒿蹊			
112	深艸里 墨染 花 魁	一味 月含ニテ微暈ニッ夜禽呼ッ 花影朦朧村妓ノ墟 伏水ノ客舳須ニ早ッ発 茜裙莫下ニ漫ニ酔ニシムル 商夫上ヲ 鶴橋柚木太淳			
113	伏見梅溪	見放事も今ゆくかたも伏み山 うめより外の色はましらす 蒿蹊			
114	伏水 龍徳菴				
115	伏水 慶雲庵	兎道舟中 緑水青山一色ノ秋 濯ニ縷詞客棹ニス孤舟ニ 興来欲ニレドモ咏ニト滄浪ノ曲ニッ 又恐ル蘆洲ニ驚ニコトヲ白鷗ニッ 草蘆			
116	梅ヶ畑平岡 八幡 宮 導故院				
117	高雄 看丹楓	満眼秋光画ケドモ不ニレ同 風霜昨夜染ムニ山楓ヲ 已ニ如ニ霞彩凝ニ林表ニ 又似ニ噉暉掛ニ樹中ニ 鳥ハ怯ニ投ニ棲疑ニ火燎ニ 蝶ハ飛ッテ去テ訝ニ花紅ニ 賞遊尽日耽ニ詩句ニ 揮ニ筆還差錦繡工 橘山柳柳殷	谷の流はいよいよ白き紅葉かな 浪花才嬌	高雄 王畿縹渺 景勝無窮 雲嶂北擁 満目ノ紅葉 相国寺 維明	
118	高雄 地藏院	この秋の暮文覚われを殺せしか 其角	霞抹ニテニ青溪ニ落照深シ 紅楓玉ニ間来ムニ千林ニ 尋テ秋何レ処ニ宜ニ回瞰ニ 寺ハ在ニ煙雲縹渺タル岑ニ 百々肇	高雄山そめしもみちにみおろし の清滝河の底さへそてる 橋本経亮	高雄山桜にうつれば日も青し 眺台
119	梶尾高山寺 三尊 院	満溪ノ霜葉景將ニレ暈 翠壁高ク含ム一帯ノ雲 日暮院僧歸ルニミ聞戸ニ 冷冷タル鐘磬渡リテ山間ニ 新羅弼	岩はしる紅葉の浪の幾瀬かな 籬島		
120	等持院	道契干余歳 欲君長北風 青松摩漢秀 白水繞巖通 嗣法為真子 罵天還老翁 即亦衣賓那 道歸西東遊 更衣山神足 孝公禪師示 以近体一篇 汚顔奉謝衣 笠峰倫桂洲 拝稿			

挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
121	足利將軍義満公 衣笠山夏観雪				
122	龍安寺 方丈 林泉	一庭ノ空曠白砂平ナリ 頑石誰カ鋪 _カ ノ形勢ノ成ルヲ 宛モ似 _{タリ} タリ昔時渡溪ノ虎 分衛 _ム 両子泛 _レ 波ニ行 _ク 皆川愿			
123	龍安塔頭 西源院	月寒し衣笠山の雪のうへ 籬島			
124	龍安塔頭 大珠院	真田墓 風雷半夜呉王ノ墓 天地清秋伍伍ノ祠 成敗古今共ニ陳跡 林泉深处弔スニ軍師ヲ 松窠杜鵑			
125	妙心寺 玉鳳院	名院曾聞 _ク 玉鳳ノ声 幽庭今見翠光清 _キ 林丘当ニ是 _レ 靈禽ノ化スルナル 時ニ払 _フ ニ輕風ヲニ仙韻生ス 皆川愿			
126	妙心塔頭 大通院	湘公豈忘 _{シヤ} 故丘ノ情 遊戯徑 _レ 年一 _ニ 小瀛 樹石千般從 _テ ニ甲浦ニ 山川万里輪ニ京城 白沙無ク _レ 水分 _チ ニ洲色ヲ 緒帷多 _レ 松弄スニ海声ヲ 解道飛峯不 _ニ 胡説ナラ 園中ノ幽趣檀スニ佳名ヲ 三浦世繼			
127	大通院 其二	苔深シテ石逕掩 _フ ニ喬柯ヲ 辺景照 _テ レ林嵐翠大シ 野鳥時ニ伝 _フ 虚谷ノ響 _キ 山庭疑 _{ラカハ} 是 _レ 坐スニ雲蘿ニ 百々肇			
128	花園輔仁親王山亭	有 _レ 花有 _レ 獸山中ノ友 無 _レ 愁無 _レ 歎世上ノ情 輔仁親王			
129	妙心塔頭 靈雲院	遠里時雨夕日さす雲間の峰は雪 見てしぐれにくる山本の里 慈延			
130	妙心塔頭 海福院				
131	妙心塔頭 雄華院				
132	妙心塔頭 蟠桃院				
133	妙心塔頭 大嶺院				
134	龍馬献上	藤房卿 聖主蒙塵元弘年 幾 _{シカ} 随 _テ ニ風箏ニ此ニ周旋ス 偽朝不 _レ 改淵明ノ節 適有 _ニ 児産ノ物色ヲ伝 _ル 畑維竜			
135	妙心塔頭 退蔵院				
136	真乗院 芋喰僧都	芋の名の月にゆつらぬ光かな 文暢	啗 _レ 芋ヲ説法 繙 _レ 経ヲ法筵不 _レ 説 _レ 財ヲ 盤中ノ類々積 _テ 為 _ス レ堆ヲ 厭離ニ名利ヲ棄如 _レ 土 沽 _ニ 動 _シ 山房ヲ換 _フ ニ芋魁ニ 畑維竜	いもかしらいてやこの世に生れ ては 七十九翁大江丸	狂詩 飛錫ノ高僧好ニ芋魁ヲ 沽 _リ レ鐘沽 _ツ レ坊ヲ宝銭堆 _シ 一瓶一鉢渾 _テ 維芋 水月入 _テ レ空ニ生 _{セン} ニ芋ノ台ニ 籬島
137	妙心塔頭 春浦院				
138	金閣寺				
139	其二				
140	〔嵯峨小督隠家〕				
141	大井川 三船御遊				
142	天龍寺 方丈 林泉 其一				
143	其二				
144	天龍寺 雲居菴				

挿図No.	挿図の名称	挿図中における詩歌			
145	天龍寺塔頭 妙智院 林泉				
146	天竜塔頭 真乗院 林泉				
147	(渡月橋)	子供見よ桜の月も十三夜 八十一隻簫山	清流奇石緑蜩彎 隊々香魚住 _テ 復 _ッ 還ル 忽 _テ 有 _ニ 樵舟ノ穿 _テ 峽 _ヲ 下ル 輕窩蹙破水中ノ山 六如庵		
148	あらし山花盛	花に対してさかのう山なつかしき 月居			
149	桂川 宴船	飛鮎のひかりや月のかつら川 浪花二柳			
150	八幡泉坊				
151	〔安居神事〕				
152	松花堂全圖	小堂猶祖師ノ家 讃仰臨 _レ 書兼 _テ 品ス _レ 茶 _ヲ 手自画題似 _{タリ} 二親 _ノ 謁ス _ル 一 千年不 _レ 朽一松花 半齋明拝題			
153	妙意菴 茶室 袖摺松	松老ぬ紙子の袖もすれざらめ 簫山	妙喜庵中憶 _フ 古禪 _ヲ 茶窗簷朽 _テ 絶 _ユ ニ茶烟 _ヲ 唯余 _テ ニ老衲 _ヲ 眉如 _レ 霜 先 _ス 説豊公臨至年 草廬		
154	吉祥院村中 陽泉亭	水鳥遊魚のけしきまたいひしらす をし鳥のつはさもうつるいろか つのかすもいく千世すみやかな らへる 八十三隻澄月	をしとりや火燵放れて陸にあり 籬鳥		
156	嶋原花寄	人さきにはなによりくるこてふ かな 大淀太夫 みつから書			
157	同所 京屋 弥生興	塵ならてはらふはをしやとこな つの 花にかずかずをけるしら露 若紫太夫 みつからかく			
158	同所 藤屋 月興	いさかへらんとて 離れき曇か月そ出口かな 金丸氏	行くす系をおもひて月をなかむ れは 袖のなみたにかけそこほるる 小太夫		
159	同所 角屋 雪興	つむ雪に尾上を思ふ庭の松 松仁太夫 みつから書			

表 6 詩歌作者一覧

	作者	詩歌所載数	人物詳細
1	秋里籬島（斑竹）	20	
2	閑田古蒿蹊	7	江戸中期の国学者・歌人。近江国（滋賀県）の人。本名資芳。商家の主人として努めた後、家業を養子に譲って剃髪し、蒿蹊と改めた。別号は閑田子、閑田廬。有賀長伯・武者小路実岳に歌を学び、歌人としては平安四天王の一人として古今調の歌をよくした。文章家としても知られ「閑田耕筆」「閑田次筆」等の随筆がある。他に、「近世畸人伝」「国歌或問」など。享保一八～文化三年（一七三三～一八〇六） ばん - こうけい【伴蒿蹊】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09） 秋里籬島の俳諧の師
3	嘯山	6	江戸中期の俳人、儒者。本名、三宅芳隆。別号、葎亭・滄浪居。京都の人。質商。また、青蓮院の侍講。漢詩を恵訓に学び、俳諧は宋屋の門。古俳人の佳句を類題別にし、漢文体の短評を施した「俳諧古選」は著名。他に「嘯山詩集」「葎亭句集」「たひ越」「俳諧独喰」。享保三～享和元年（一七一八～一八〇一） みやけ - しょうざん【三宅嘯山】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
4	蕪村	5	江戸中期の俳人、画家。摂津国東成郡毛馬村(大阪市都島区毛馬町)の農家に生まれた。本姓谷口、のち与謝。別号幸鳥、夜半亭二世。画号四明・春星・謝寅など。一七、八歳のころ江戸に出て、画や俳諧を学び、俳諧の師巴人が寛保二年（一七四二）に没してからは江戸を去り、一〇年あまり東国を放浪した。宝暦元年（一七五一）京都に移ってからは、しだいに画俳ともに声価を高め、明和七年（一七七〇）には夜半亭を継ぎ宗匠の列につらなった。さらに安永二年（一七七三）には「あけ鳥」を刊行し、俳諧新風を大いに鼓吹した。俳風は離俗、象徴的で美的典型を示しており、中興俳諧の指導的役割を果たした。一方、画にすぐれ、大雅と並び文人画の大成者といわれる。著「新花摘」「夜半楽」「玉藻集」など。句集に「蕪村句集」がある。享保元～天明三年（一七一六～八三） よさ - ぶそん【与謝蕪村】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）”
5	竜公美（草廬、草蘆）	5	1714 - 1792 江戸時代中期の儒者。 正徳（しょうとく）4年1月19日生まれ。竜玉淵（ぎょくえん）の父。宇野明霞にまなび、京都でおしえる。漢詩結社「幽蘭社」を主宰し、社中の作品集「金蘭詩集」を刊行。寛延3年近江（おうみ）（滋賀県）彦根藩の儒官となる。寛政4年2月2日死去。79歳。山城（京都府）出身。本姓は武田。名は公美、元亮。字（あざな）は君玉、子明。別号に鳳鳴、竹隠、松菊など。著作に「草廬集」「典詮」など。 りゅう - そうろ【竜草廬】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）” 『摂津名所図会』に漢詩を2篇所載
6	定雅	5	1744 - 1827 江戸時代中期 - 後期の俳人，狂歌師，洒落本（しゃれぼん）作者。 延享元年生まれ。与謝蕪村（よさ - ぶそん）一門や加藤晩台（きょうたい）らと親交をむすぶ。遊里，劇場を題材にした作品がおおい。文政9年12月12日死去。83歳。京都出身。通称は甚三郎。別号に俳仙堂，椿花亭，粹川子，艶好法師。句集に「外国通唱」，俳文に「椿花文集」，狂歌に「古今馬歌集」，洒落本に「徒然が川」。 にしむら - ていが【西村定雅】””，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
7	栲亭	4	江戸中・後期の儒学者。名は之熙（ゆきひろ）。字は君績。通称嘉右衛門。別号小華陽・神州。京都の人。武田梅龍に古注学を学び、秋田侯佐竹氏に召されて藩儒となり、国政に参与した。考証を重んじた随筆を多く著わし、詩文、書画をもよくした。著に「芸苑日涉」「栲亭稿」「学庸集義」など。延享三～文政元年（一七四六～一八一八） むらせ - こうてい【村瀬栲亭】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
8	六如庵慈周	4	1734 - 1801 江戸時代中期 - 後期の僧，漢詩人。 享保（きょうほう）19年生まれ。天台宗。江戸寛永寺明静院，京都善光院などの住持。野村東皐（とうこう），宮瀬竜門にまなび，宋（そう）風の詩を提唱して当時の詩風に影響をあたえた。享和元年3月10日死去。68歳。近江（おうみ）（滋賀県）出身。俗姓は苗村。法名は慈周。号は白楼，无着庵。著作に「六如庵詩鈔」「葛原詩話」など。 りくによ【六如】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10） 『摂津名所図会』に漢詩を1篇所載
9	相国寺維明	3	1731 - 1808 江戸時代中期 - 後期の画僧。 享保（きょうほう）16年生まれ。京都相国寺の光源院で修行。伊藤若冲（じゃくちゅう）にまなぶ。梅や鶏の図をよくした。文化5年8月11日死去。78歳。名は周奎，大奎。号は羽山。 いめい【維明】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
10	西行	3	1118 - 90（元永1 - 建久1） 平安時代末、鎌倉時代初頭の歌人。魚人流藤原氏、鎮守府將軍藤原秀郷（依藤太）の九代目の子孫で、曾祖父の代から佐藤氏と称した。父は左衛門尉康清、母は監物源清経の娘。俗名を義清（のりきよ）（憲清、則清、範清とも）といい、出家して円位、また西行、大本房、大宝房、大法房と称した。 さいぎょう【西行】，新版 日本架空伝承人名事典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
11	きおん 柳	3	
12	文暢	3	
13	大江丸	3	江戸後期の俳人。本名安井政胤。大坂で家業の飛脚問屋を営み、かたわら、俳諧に精進。天明（一七八一～八九）以後の俳壇に独特の地位を占めた。著に「俳懺悔」「俳諧袋」など。享保七～文化二年（一七二二～一八〇五） おおとも - おおえまる【大伴大江丸】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-
14	百々肇	3	

	作者	詩歌所載数	人物詳細
15	岡崎慈延	3	<p>七四八 - 一八〇五</p> <p>江戸時代後期の歌僧。俗姓塚田氏。字は大愚、号を慈延、吐屑庵ともいう。寛延元年（一七四八）信濃に生まれる。父義助は善光寺大勧進の医師、慈延は末子五男。長じて比叡山に登り天台を修め、円教院住職となるも、厭いて洛東岡崎の明真寺に隠遁し、もっぱら和学・詠歌に励む。歌を冷泉為村・為恭に学び、超凡に風致ありて、平安歌人の四天王となる。『隣女晤言』二巻、『堀川院類聚百首鈔』四冊、『二十一代集概覧』一冊、『慈延開書』一卷を著作。文化二年（一八〇五）七月八日、五十八歳で没する。[参考文献] 佐藤寅太郎『信濃人物志』一、土屋弼太郎「僧慈延」(『信濃』昭和二十一年十月)、土岐武治「堤中納言物語の研究史的考察―僧慈延の研究について―」(『立命館文学』一七三)(土岐 武治)</p> <p>じえん【慈延】，国史大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
16	鶴山畑維龍	3	<p>寛延元年（1748）生、文政10年没。号、鶴山。阿波国の人。京都で医学を修める。医学と蘭学を教授した。『東海道名所図会』に2篇の漢詩を所載</p> <p>藤森三玲『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』</p>
17	才嬌	3	
18	明恵（高弁上人）	3	<p>1173～1232</p> <p>鎌倉時代の僧。承安（じょうあん）3年1月8日生まれ。華嚴（けごん）宗。父は平重国。母は湯浅宗重の娘。叔父の上覚にしたがい、京都神護寺の文覚の弟子となる。建永元年（1206）後鳥羽（ごとば）上皇から梅尾（とがのお）の地をあたえられ、高山寺を創建した。法然を批判した「摧邪輪（さいじやりん）」、自身の夢の記録「明恵上人夢記」が有名。寛喜（かんぎ）4年1月19日死去。60歳。紀伊（きい）有田郡（和歌山県）出身。法名は高弁。</p> <p>【格言など】 慢と云う物は、鼠の如し（「梅尾明恵上人遺訓」）</p> <p>みょうえ【明恵】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
19	皆川愿	3	<p>1735*～1807</p> <p>江戸時代中期～後期の儒者。享保（きょうほう）19年12月8日生まれ。「易经」をもとに字義，音声，文脈の関連を研究する「開物（かいぶつ）学」を独創し，門人に教授。晩年に私学弘道館をひらく。詩文，書画にもすぐれた。弟に富士谷成章（なりあきら）。子に皆川篁斎（こうさい）。文化4年5月16日死去。74歳。京都出身。名は愿（げん）。字（あざな）は伯恭。通称は文蔵。別号に有斐斎など。著作に「名疇（めいちゅう）」「淇園詩話」など。</p> <p>【格言など】 心を用ゆるの難は，力を用ゆるに倍す（「問学挙要」）</p> <p>みながわ～きえん【皆川淇園】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p> <p>『東海道名所図会』に2篇の漢詩を所載</p>
20	八幡美清	2	
21	太上天皇	2	
22	宗祇	2	<p>1421～1502</p> <p>室町時代の連歌師。応永28年生まれ。高山宗嗣（そうぜい），のち心敬にまなぶ。文明4年東常縁（とう～つねより）から古今（こきん）伝授をうけ，古典にも通じた。京都の種玉庵に公家（くげ）や大名をむかえて連歌などの会をひらいたほか，越後（えちご）の上杉氏，周防（すおう）の大内氏らにまねかれ，謹じた。長享2年北野連歌会所の奉行，将軍家の宗匠。文亀（ぶんき）2年7月30日旅の途次，箱根で死去。82歳。姓は飯尾とされる。別号に自然斎（じねんさい），見外斎。編著に「新撰菟玖波（しんせんつくば）集」「竹林抄」，句集に「萱草（わすれぐさ）」など。</p> <p>【格言など】 初心の時はよき連歌をせんとすること，第一の不觉にて候（「宗祇初心抄」）</p> <p>そうぎ【宗祇】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
23	橋本経亮	2	<p>江戸後期の和学者。本姓は橘、経亮は名、号は橘窓、香果堂。京都の人。有職を高橋図南、和歌を小沢蘆庵に学んだ。古絵図を用いた考証などをおこなった。著に「橘窓自語」「梅窓筆記」「有職考」など。宝暦九～文化二年（一七五九～一八〇五）</p> <p>はしもと～つねあきら【橋本経亮】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）</p>
24	其角	2	<p>江戸前期の俳人。榎本氏。のち宝井氏。号、螺舎（らしや）、吾子、宝音斎など。江戸の人。蕉門十哲のひとり。延宝末期、芭蕉とともに俳諧の革新に努め、貞享・元禄（一六八四～一七〇四）年代にかけて蕉風の樹立、展開に寄与した。芭蕉没後、軽妙で洒落た俳諧の一派、江戸座を生んだ。主著「虚栗（みなしぐり）」「句兄弟」「枯尾花」。寛文元～宝永四年（一六六一～一七〇七）</p> <p>きかく【其角】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）</p>
25	月峰	2	
26	呂蛤	2	
27	ぎをん 以津	2	
28	月居	2	<p>江戸中期の俳人。江森氏。別号、些居・竹巢など。京都の人。俳句を蕉村に、国学を荒木田久老（あらかだひさおゆ）に学んだ。後人の撰に「月居七部集」がある。宝暦七～文政七年（一七五七～一八二四）</p> <p>げっきょ【月居】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）</p>
29	熊谷氏真蘭	2	
30	天隠	2	<p>1422～1500</p> <p>室町～戦国時代の僧。応永29年生まれ。臨済（りんざい）宗。京都建仁寺の宝洲宗衆らに師事。天柱竜済の法をつぐ。真如寺，建仁寺，南禅寺の住持。赤松政則の帰依（きえ）をうけ，三条西実隆ともしたしかった。詩集に「黙雲詩藁」，編著に「錦繡段（きんしゅうだん）」など。明応9年9月23日死去。79歳。播磨（はりま）（兵庫県）出身。別号に黙雲。てんいん～りゅうたく【天隠竜沢】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>

	作者	詩歌所載数	人物詳細
31	橘洲畑禎	2	
32	新羅弼	2	
33	頓阿	2	<p>1289－1372</p> <p>鎌倉－南北朝時代の僧、歌人。</p> <p>正応（しょうおう）2年生まれ。京都金蓮（こんれん）寺（時宗）の真観（初代浄阿）の門下となる。二条為世（ためよ）にまなび、為世門の和歌四天王のひとりといわれた。二条為明の没後「新拾遺和歌集」の撰集をひきつぎ完成させた。応安 5＝建徳 3 年 3 月 13 日死去。84 歳。俗名は二階堂貞宗。別号に泰尋、感空。著作に「愚問賢註」「井蛙（せいあ）抄」など。</p> <p>【格言など】春のよの明行くままに山のはのかすみのおくぞ花に成りゆく（「草庵集」）</p> <p>とんあ【頓阿】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
34	鶴橋柚木太淳	2	<p>一七六二－一八〇三</p> <p>江戸時代後期の眼科医。字は仲素・堯民、号は鶴橋。代々の眼科医で、宝暦十二年（一七六二）近江国に生まれた。江村北海に経書を承け、家学を嗣いで眼科を業とした。さらに荻野元凱に内科を、賀川玄悦の子満郷に産科を学んだ。山脇東洋の解体の挙に啓発され、寛政九年（一七九七）十月二日に官許を得て京都西郊で男子刑屍を解剖。この知見は同十一年に『解体瑣言』と題して刊行された。また眼の解剖所見は『眼科精義』に記録されたという。眼科領域に西洋医学を導入した先駆者の一人として評価される。享和三年（一八〇三）二月十八日没。享年四十二。墓は京都百万遍の智恩寺（京都市左京区）にある。（小曾戸 洋）</p> <p>ゆのきたいじゅん【柚木太淳】，国史大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
35	松窠杜	2	
36	かゝ千代	2	
37	二柳	2	<p>江戸中期の俳人。勝見氏。加賀山中の人。はじめ桃妖門、ついで乙由（おつゆう）門、のち希因（きいん）に就いた。諸国を遊歴して蕉風復古を説き、蕉門勢力の全国的拡大を促した。大坂に定住後は、京都の蕪村らとも交わって一派をなした。編著「俳諧松かざり」「氷餅集」「佐賀亭猿」「短録」など。享保八～享和三年（一七二三～一八〇三）じりゅう〔ジリウ〕【二柳】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
38	源順	1	
39	滋貞主	1	<p>平安初期の漢学者。尾張守家沢の子。文章生（もんじょうせい）、大内記（だいにき）を経て東宮学士を歴任。のち累進して宮内卿、正四位下に叙せられ、相模守を兼ねた。天長四年（八二七）「経国集」二〇巻、天長八年（八三一）「秘府略」一〇〇〇巻を撰上。延暦四～仁寿二年（七八五～八五二）</p> <p>しげのゝのゝさだぬし【滋野貞主】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
40	宗時	1	
41	為家	1	<p>1198－1275</p> <p>鎌倉時代の公卿（くぎょう）、歌人。建久 9 年生まれ。藤原定家の子。母は西園寺実宗の娘。正二位、権（ごん）の大納言。歌道家をついで後嵯峨（ごさが）院の歌壇に君臨。「続後撰和歌集」「続古今和歌集」を撰進した。阿仏尼を側室とし、子孫は二条・京極・冷泉（れいぜい）家に分立。建治（けんじ）元年 5 月 1 日死去。78 歳。法名は融覚。通称は中院禪門、民部卿入道。著作に「詠歌一体」、家集に「為家集」など。</p> <p>【格言など】はやせがはなみのかけこすいはきしにこぼれてさける山ぶきのはな（「続古今和歌集」）</p> <p>ふじわらのゝためいゑ【藤原為家】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
42	長能	1	<p>949?－?</p> <p>平安時代中期の官吏、歌人。天暦（てんりやく）3 年?生まれ。藤原倫寧（ともやす）の子。母は源認の娘。「蜻蛉（かげろう）日記」作者（藤原道綱の母）の弟。従五位上、伊賀守（いがのかみ）となる。中古三十六歌仙のひとりて、勅撰集には「拾遺和歌集」以下に五十数首。能因を門人とし、これが歌道の師資相承のはじめという。名は「ながとう」ともよむ。家集に「長能集」。</p> <p>ふじわらのゝながよし【藤原長能】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
43	佐野憲	1	
44	朝光	1	<p>951－995</p> <p>平安時代中期の公卿（くぎょう）、歌人。天暦（てんりやく）5 年生まれ。藤原兼通（かねみち）の 4 男。母は昭子女王。天延 2 年（974）参議。のち正二位，大納言。関院大将とよばれる。兄顕光（あきみつ）よりはやく昇進したが、父の没後はふるわなかった。「拾遺和歌集」以下の勅撰集に 29 首がはいる。長徳元年 3 月 20 日死去。45 歳。名は「あさてる」ともよむ。家集に「朝光集」。</p> <p>ふじわらのゝあさみつ【藤原朝光】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
45	貫之	1	<p>平安前期の歌人、歌学者。三十六歌仙の一人。加賀介、土佐守などを歴任、木工権頭（もくのごんのかみ）に至る。醍醐天皇の勅命で「古今和歌集」撰進の中心となり、仮名序を執筆。歌風は理知的で技巧にすぐれ、心と詞の調和、花実兼備を説いて古今調をつくりだした。漢詩文の素養が深く、「土左日記」は仮名文日記文学の先駆とされる。著はほかに撰集「新撰和歌集」、家集「貫之集」など。天慶八年（九四五）没か。</p> <p>きゝのゝつらゆき【紀貫之】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
46	家隆	1	<p>鎌倉初期の歌人。光隆の子。従二位宮内卿まで進み、壬生二品（みぶのにほん）とも呼ばれた。藤原俊成に師事し、「新古今和歌集」の撰者の一人となり、藤原定家と並び称される。作風は素直、清澄。多作家で、家集に「壬二集（みにしゅう）」がある。保元三～嘉禎三年（一一五八～一二三七）</p> <p>ふじわらのゝゝいえたか【藤原家隆】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>

	作者	詩歌所載数	人物詳細
47	菅贈大相国	1	<p>平安初期の公卿、学者。本名は三。幼名阿呼。菅公(かんこう)、菅丞相と称された。是善の子。字多・醍醐天皇に重用され、寛平六年（八九四）第十四次の遣唐大使に任命されたが赴任せず、建議して遣唐使の職を廃止。従二位右大臣に至り、延喜元年(九〇一)藤原時平の中傷によって大宰権帥に左遷。配所で没。「日本三代実録」「類聚国史」の編にあずかり、「菅家文草」「菅家後集」等の著がある。死後正一位太政大臣。学問の神天満天神としてあがめられる。承和一二～延喜三年（八四五～九〇三）</p> <p>すがわら - の - みちざね【菅原道真】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
48	江以言	1	<p>955 - 1010</p> <p>平安時代中期の官吏、漢詩人。天曆(てんりやく)9年生まれ。大江仲宣の子。一時弓削氏を称した。藤原篤茂(あつしげ)にまなび、文章(もんじょう)博士、式部権大輔(ごんのたいふ)をへて従四位下にすむ。詩文にすぐれ作品は「本朝文粹」「本朝麗藻」などにおさめられている。寛弘(かんこう)7年7月24日死去。56歳。名は「ゆきとき」「よしとき」ともよむ。</p> <p>おおえの - もちとき【大江以言】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
49	増供法師	1	
50	雨龍	1	
51	千代道	1	『木曾路名所図会』に狂歌を1首所載
52	九鯉	1	『摂津名所図会』に狂歌を2首所載
53	正徹	1	<p>室町前期の歌人。字(あざな)は清巖。庵号は招月。徹書記とも呼ばれる。備中国(岡山県)の人。幼い頃上洛し、今川了俊の門にはいる。「頓証寺法楽歌」などで歌壇に出たが、藤原定家に傾倒した妖艶夢幻な歌風は当時主流であった二条派から異端視され、將軍足利義教にも憎まれて、最後の勅撰集である「新続古今集」にも入集しなかった。一方、崇拜者も多く、心敬・宗朝(そうぜい)らに影響を与えた。家集「草根集」、歌論書「正徹物語」、紀行文「なぐさめ草」、「源氏物語」の注釈書「一滴集」などの著がある。永徳元～長祿三年(一三八一～一四五九)</p> <p>しょうてつ [シャウテツ]【正徹】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
54	ぎをん とみ	1	
55	胴脈	1	
56	龜天	1	
57	祭主輔親	1	<p>954 - 1038</p> <p>平安時代中期の公卿(くぎょう)、歌人。</p> <p>天曆(てんりやく)8年生まれ。大中臣能宣(よしのぶ)の子。伊勢大輔(いせのたいふ)の父。長保3年伊勢神宮祭主、のち神祇伯となる。正三位。中古三十六歌仙のひとりで「拾遺和歌集」などの勅撰(ちよくせん)集に31首がはいっている。長暦(ちょうりやく)2年6月22日死去。85歳。字(あざな)は中槐。家集に「祭主輔親卿集」。</p> <p>おおなかとみの - すけちか【大中臣輔親】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）</p>
58	懷円	1	
59	山吹五橋	1	
60	言水	1	<p>江戸初期の俳人。本名則好。奈良の人。松江重頼の門人で、談林風から蕉風に近づいた。「木枯の果はありけり海の音」の句により「木枯の言水」と呼ばれた。主著に「江戸新道」「東日記」。慶安三～享保七年(一六五〇～一七二二)</p> <p>いけにし - ごんすい【池西言水】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）</p>
61	量光	1	
62	公兼	1	西園寺公兼か？
63	大納言典侍	1	
64	義政	1	<p>1435 - 1490</p> <p>室町幕府8代將軍。在職1449-74*。永享7年1月2日生まれ。足利義教(よしのり)の子。母は日野重子(しげこ)。文安6年將軍職につくが、畠山(はたけやま)持国、細川勝元ら宿老中心の政治をきらい遊興にふける。寛正(かんしょう)5年弟義視(よしみ)を後嗣にさだめたが、妻日野富子が義尚(よしひさ)を生んだため、後継者争いがおこり、応仁(おうにん)の乱に発展。乱中の文明5年義尚に將軍職をゆずり、のち京都東山にうつって東山殿とよばれる。銀閣寺、水墨画、能楽、生け花などに代表される東山文化をうみだした。延徳2年1月7日死去。56歳。幼名は三春。初名は義成。法号は慈照院。</p> <p>【格言など】咲き満ちて花より外に色もなし(寛正6年の連歌会)</p> <p>あしかが - よしまさ【足利義政】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-11）</p>
65	道永	1	<p>? - 1535</p> <p>室町-戦国時代、貞常(さだつね)親王の王子。後崇光院(ごすこういん)の孫。後土御門(ごつちみかど)天皇の猶子(ゆうし)。文明4年親王となり高平を名のる。7年真言宗仁和(にんな)寺にはいり、太秦(うずまさ)の広隆(こうりゅう)寺にうつった。天文(てんぶん)4年1月21日死去。法名ははじめ道什。</p> <p>どうえいにゅうどうしんのう【道永入道親王】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-11）</p>
66	李経	1	
67	真乗寺宮	1	

	作者	詩歌所載数	人物詳細
68	堯胤	1	1458－1520 室町－戦国時代、貞常親王の第2王子。長祿（ちょうろく）2年生まれ。応仁（おうにん）2年三千院で出家。後花園上皇の猶子（ゆうし）となり、文明3年親王。明応2年天台座主（ざす）に就任。焼失した比叡山（ひえいざん）根本中堂の再建につくした。永正（えいしやう）17年8月26日死去。63歳。俗名は高平。著作に「魚山の御法（みのり）」。ぎょういんほうしんのう【堯胤法親王】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
69	柳枝軒弁	1	
70	蘭沙	1	
71	平祐拳	1	
72	後鳥羽院	1	
73	如水	1	
74	木導	1	1666－1723 江戸時代前期－中期の武士，俳人。寛文6年生まれ。近江（おうみ）（滋賀県）彦根藩士。松尾芭蕉（ばしやう）晩年の門人で、「風俗文選（もんぜん）」の作者列伝に「師翁奇異の逸物と称す」としるされている。享保（きやうほう）8年6月22日死去。58歳。本姓は上松。名は光任。別号に阿山人。姓は奈越江ともかく。句集に「水の音」。 【格言など】春風や麦の中ゆく水の音（「水の音」） なおえ－もくどう【直江木導】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-
75	文素	1	
76	鴨長明	1	鎌倉前期の歌人。通称菊大夫。法名蓮胤（れんいん）。名を「ながあきら」とも読む。京都下鴨神社の禰宜（ねぎ）長継の子。和歌を源俊恵に学びその派の頭領となり、管弦の道にも通じる。後鳥羽院に召されて和歌所寄人（よりゆうど）となったが、のち出家して洛北大原に隠遁、さらに日野山の方丈の庵（いおり）に移り、隠遁著述の生活を送った。主著に「方丈記」「発心集」「無名抄」、家集に「鴨長明集」がある。仁平三頃～建保四年（一一五三頃～一二一六）かも－の－ちょうめい【鴨長明】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
77	皆川充	1	
78	本居宣長	1	江戸中期の国学者、語学者。伊勢国（三重県）松坂の人。通称、彌四郎。号は鈴屋（すずのや）。京に出て、堀景山に漢学を学び、堀元厚について医学を修業したが、契沖の書に啓発されて古典の学に志し、「源氏物語」「万葉集」などを講じた。賀茂真淵に会ってから古道研究の素志を固め、「古事記」の研究に着手し、「古事記伝」を完成した。彼の家学は、子春庭、養子大平に継承され、後世に大きな影響を与えた。著作は他に「源氏物語玉の小櫛」「古今集遠鏡」「てにをは紐鏡」「詞の玉緒」「玉勝間」「うひ山ぶみ」など多数。享保一五～享和元年（一七三〇～一八〇一）もとおり－のりなが【本居宣長】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
79	狼狽窟	1	1759－1819 江戸時代中期－後期の俳人，戯作（げさく）者。宝暦9年5月26日生まれ。調子武音（ちょうし－ぶおん）の次男。京都の人。明和8年富家を再興し，左近将監（しょうげん）にすすむ。与謝蕪村（よさ－ぶそん），高桑蘭更（らんこう），西村定雅らと親交があり，俳諧（はいかい）をよくし，洒落（しゃれ）本を執筆した。文政2年9月17日死去。61歳。名は敦光。通称は数吉。別号に土籃，狼狽窟，狼狽山人。著作に「粹庖丁（すいぼうちやう）」など。 とみ－とらん【富士卯】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
80	其諺	1	1666－1736 江戸時代前期－中期の僧，俳人。 寛文6年生まれ。京都安養寺正阿弥の住職。俳諧（はいかい）は宮川松堅（しょうけん）の門人で，貞徳3世を称した。斎藤如泉（じやせん）には漢和俳諧をまなぶ。享保（きやうほう）ごろ京都俳壇で重きをなした。元文元年8月22日死去。71歳。別号に肖菊翁。著作に「御傘取柄抄」「滑稽雑談」など。 しじどう－きげん【四時堂其諺】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
81	蘭更	1	1726－1798 江戸時代中期－後期の俳人。享保（きやうほう）11年生まれ。生家は加賀金沢の商家。和田希因にまなぶ。蕉風復古をとえ，京都で芭蕉堂をいとなんだ。寛政5年二条家より花の本宗匠の号をゆるされた。寛政10年5月3日死去。73歳。名は正保，忠保。通称は長次郎。初号は蘭皐，別号に半化房（坊）など。編著に「落葉考」「俳諧世説」など。 【格言など】暁は土に燃え入る火串（ほぐし）かな（「半化坊発句集」） たかくわ－らんこう【高桑蘭更】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
82	羅人	1	1699－1752 江戸時代中期の俳人。元祿（げんろく）12年生まれ。京都で出版を業とする。松木淡々にまなび，一時不仲となったが和解した。宝暦2年7月29日死去。54歳。近江（おうみ）（滋賀県）出身。通称は柘屋甚四郎。別号に蛭牙斎（しつがさい），御射山翁（みさやまおう），老桂窩。編著に「嘉定蒲簀（かじやうがます）」「花紅葉」など。 やまぐち－らじん【山口羅人】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
83	資枝卿	1	1737－1801 江戸時代中期－後期の歌人，公卿（くぎやう）。元文2年11月1日生まれ。鳥丸光栄（からすまる－みつひで）の子。日野資時の養子。宮廷歌壇に重きをなし，茶道もたしなんだ。宝暦13年（1763）参議となり，のち権（ごん）大納言，従一位にすすむ。享和元年10月10日死去。65歳。著作に「歌合目録」「詠歌一体抄」など。 ひの－すけき【日野資枝】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
84	志諺	1	

	作者	詩歌所載数	人物詳細
85	蕉中禅師	1	
86	還中禅師	1	
87	三峯荷田信郷	1	1777－1839 江戸時代後期の歌人。荷田信愛かだの－のぶひで。安永6年生まれ。京都伏見稲荷（いなり）大社の神職。小沢蘆庵（ろあん）にまなぶ。天保（てんぼう）10年3月13日死去。63歳。山城（京都府）出身。本姓は荷田（かだ）。編著に「非蔵人座次総次第（ひくろうとぞじそうしだい）」。 はくら－のぶひで【羽倉信愛】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
88	周一居士	1	
89	烏掌	1	
90	六柳軒	1	
91	ぎをん みや	1	
92	ぎをん栄次	1	
93	ぎをん袖	1	
94	嵐雪	1	江戸前期の俳人。江戸の人。別号嵐亭治助、雪中庵など。芭蕉に師事。蕉門四哲の一人。初め武家奉公をしたが、剃髪して不白玄峰居士と称す。俳人としては「若水」を刊行して世に知られた。編著「其袋」「或時集」「つるいちご」。句集に「玄峰集」がある。承応三～宝永四年（一六五四～一七〇七） はっとり－らんせつ【服部嵐雪】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-09）
95	正通	1	平安時代中期の官吏，漢詩人。橘実利の子。源順（したごう）にまなぶ。天禄（てんろく）（970-973）のころ加賀掾（じょう），のち宮内少丞となる。また侍読として具平（ともひら）親王の教育にあたる。遁世の思いを託した漢詩をつくった。字（あざな）は能。 たちばなの－まさみち【橘正通】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
96	堤中納言	1	平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。歌人清正（きよただ）の父で、紫式部の曾祖父。従三位中納言まで進み、その邸宅が賀茂川堤にあったので、堤中納言といわれた。藤原定方などとともに紀貫之や凡河内躬恒などの専門歌人の後援者であった。家集に「兼輔集」があり、「聖徳太子伝暦」の著作もある。元慶元～承平三年（八七七～九三三） ふじわら－の－かねすけ【藤原兼輔】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
97	花山院	1	南北朝・室町時代の歌人、学者。師賢の孫。姓、藤原。号、耕雲。法名は明魏。南朝に仕えて右大臣となる。のち出家。「耕雲千首」の他、歌論書「耕雲口伝」がある。五十音、いろはの研究書「倭片仮字反切義解（やまとかたかなはんせつぎげ）」などを著わす。正長二年（一四二九）没。 かざんいん－ながちか【花山院長親】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
98	慈鎮	1	平安末、鎌倉初期の天台宗の僧。諡は慈鎮。慈鎮和尚、吉水の僧正と通称する。関白藤原忠通の子。九条兼実の弟。天台座主を四度つとめた。「愚管抄」を著わし、歌集に「拾玉集」がある。久寿二～嘉祿元年（一一五五～一二二五） じえん [ジエン]【慈円】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
99	俊恵	1	1113－？ 平安時代後期の僧，歌人。永久元年生まれ。源俊頼（としより）の子。待賢門院新少将の兄。東大寺の僧。京都白川の僧房を歌林苑と名づけ、身分にとらわれない自由な歌会を主宰。「詞花和歌集」以下の勅撰（ちよくせん）集に84首のる。家集に「林葉和歌集」。歌論は弟子の鴨長明（かもの－ちょうめい）「無名抄」にくわしい。通称は大夫公（たゆうぎみ）。法名は「すんえ」ともよむ。 【格言など】夜もすがら物思ふころは明けやらで聞（ねや）のひまさへつれなかりけり（「小倉百人一首」） しゅんえ【俊恵】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
100	梅華仙	1	1753－1805 江戸時代中期－後期の医師。宝暦3年4月21日生まれ。京都で香川修庵や吉益東洞などの古医学をおさめて開業。天明3年小石元俊らと人体解剖をおこなう。医学修業のため諸国を歴遊し、「東西遊記」をあらわす。のち朝廷の医官となった。文化2年4月10日死去。53歳。伊勢（いせ）（三重県）出身。本姓は宮川。名は春暉（はるあきら）。字（あざな）は恵風。別号に梅仙。著作に「傷寒外伝」など。 たちばな－なんけい【橘南谿】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
101	道家	1	1193－1252 鎌倉時代の公卿（くぎょう）。建久4年6月28日生まれ。九条良経（よしつね）の子。母は一条能保（よしやす）の娘（源頼朝の姪（めい））。元久2年従三位。左大臣にすすみ，承久（じょうきゅう）3年摂政，氏長者となるが，承久の乱で辞任。子の頼経（よりつね）が4代将軍となり，岳父西園寺公経（さいおんじーきんつね）の引き立てで復権。安貞2年関白，ついで摂政。出家後も実権をにぎるが，頼経，孫の頼嗣（よりつぐ）（5代将軍）が執権北条時頼により鎌倉からおわれ，失脚。従一位。建長4年2月21日死去。60歳。通称は光明峯寺殿。法名は行慧。日記に「玉葉（ぎょくずい）」。 くじょう－みちい【九条道家】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）
102	兼好	1	鎌倉後期から南北朝時代の歌人。俗名は卜部兼好（かねよし）。二条派。堀河具守の家司（けいし）となり、宮廷に出仕して蔵人・左兵衛佐に至ったが、のち出家。随筆「徒然草」に、その哲学的・宗教的人生観を展開する。二条家の藤原為世の弟子として、和歌四天王の一人と称せられ、「兼好自撰家集」がある。なお、卜部家が吉田を称するようになったのは後の時代であるから、「吉田兼好」は近世以降の俗称と考えられる。弘安六頃～観応三年以後（一一二八三頃～一三五二以後） よしだ－けんこう【吉田兼好】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）

	作者	詩歌所載数	人物詳細
103	里村昌逸	1	
104	普明国師	1	<p>1312*－1388</p> <p>鎌倉－南北朝時代の僧。応長元年12月22日生まれ。臨済(りんざい)宗。夢窓疎石(むそう－そせき)の甥(おい)。疎石の法をつぎ、天竜寺、臨川寺、南禅寺などの住持となる。將軍足利義満の信任をうけ、初代の天下僧録司として五山を統轄した。相国寺創建に際して、故疎石を開山(かいさん)として勧請(かんじょう)し、自らは2世となった。嘉慶(かきょう)2=元中5年8月12日死去。78歳。甲斐(かい)(山梨県)出身。別号に芥室、不輕子。諡号(しごう)は智覚普明国師。著作に「智覚普明国師語録」、詩集に「雲門一曲」など。</p> <p>しゅんおく－みょうは【春屋妙葩】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
105	瀬尾教延	1	
106	末孟秋下濤	1	
107	林道春	1	<p>江戸初期の儒者。名は忠または信勝。字は子信。通称又三郎。家康の命により慶長十二年(一六〇七)剃髪して道春と号した。京都の人。藤原惺窩に朱子学を学ぶ。のち、惺窩の推薦によって徳川家康の顧問となり、引き続き秀忠、家光、家綱に仕えて政治・文教に参画。また、忍岡に学問所および聖堂を建て、これが昌平黉(しょうへいこう)のもととなった。「武家諸法度」「旗本諸法度」を起草し、「寛永諸家系図伝」を完成した。著書も極めて多く「羅山文集」「大学抄」「大学解」「論語解」など。天正一一～明暦三年(一五八三～一六五七)</p> <p>はやし－らざん【林羅山】、日本国語大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
108	林春斎	1	<p>1618－1680</p> <p>江戸時代前期の儒者。元和(げんな)4年5月29日生まれ。林羅山(らざん)の3男。那波活所(なば－かつしょ)、松永貞徳に師事。寛永18年父とともに「寛永諸家系図伝」の編修にあたる。明暦3年林家をつぐ。寛文10年(1670)「本朝通鑑(つがん)」を完成。延宝8年5月5日死去。63歳。京都出身。名は春勝、恕(しのぶ)。字(あざな)は子和、之道。別号に向陽軒など。僧号は春斎。編著に「日本王代一覧」「本朝一人一首」など。</p> <p>はやし－がほう【林鶯峰】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
109	石川丈山	1	<p>1583－1672</p> <p>江戸時代前期の漢詩人。天正(てんしょう)11年10月生まれ。徳川家康の近習を辞し、藤原惺窩(せいこ)に師事する。寛永12年(1635)から京都にすみ、詩仙堂をたてて隠遁(いんとん)。書にすぐれ、茶人としても知られた。寛文12年5月23日死去。90歳。三河(愛知県)出身。名は重之、凹。通称は嘉右衛門。号は四明山人など。著作に「新編覆醤(ふしょう)集」「北山紀聞」など。</p> <p>【格言など】無益の事は負けて居申すべき事(武士の弟子にあたえた訓戒)</p> <p>いしかわ－じょうざん【石川丈山】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
110	冷泉為景	1	<p>1612－1652</p> <p>江戸時代前期の公家、歌人。慶長17年4月26日生まれ。藤原惺窩(せいこ)の長男。下冷泉家。正四位下。後水尾天皇の勅命で、叔父冷泉為將の跡をつぎ下冷泉家の歌学を継承した。「惺窩先生倭詞(わか)集」を編集。慶安5年3月15日死去。41歳。号は細野。著作に「白鷗文集」など。</p> <p>れいぜい－ためかげ【冷泉為景】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
111	権中納言基理	1	
112	前参議持豊	1	<p>1742－1815</p> <p>江戸時代中期－後期の公卿(くぎょう)、歌人。寛保(かんぼう)2年6月5日生まれ。芝山重豊(しげとよ)の子。正二位、権(ごん)の大納言。本居宣長(もとおり－のりなが)の学風をしたい、国学、歌道に通じる。堂上歌人にかぎらず幅ひろく交際し、門下から三河の漁夫槽谷磯丸(かすや－いそまる)、会津(あいづ)藩士の沢田名垂(なたり)など異色の歌人がでた。文化12年2月20日死去。74歳。著作に「二条家懷紙詠草書法」「美玉之記」など。</p> <p>しばやま－もちとよ【芝山持豊】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
113	紹膺	1	
114	東海澤庵	1	<p>1573－1646*</p> <p>織豊－江戸時代前期の僧。天正(てんしょう)元年12月1日生まれ。臨済(りんざい)宗。10歳で出家し、春屋宗園(しゅんおく－そうえん)らに師事。一凍紹滴(いっとう－しょうてき)の法をつぐ。慶長14年大徳寺住持となる。寛永6年紫衣(しえ)事件で出羽(でわ)上山(山形県)に流罪となった。3年後ゆるされ、江戸品川に東海寺を創建した。正保(しょうほ)2年12月11日死去。73歳。但馬(たじま)(兵庫県)出身。俗姓は秋庭。著作に「沢庵和尚法語」「不動智神妙録」など。</p> <p>たくあん－そうほう【沢庵宗彭】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p> <p>『和泉名所図会』に1篇、『東海道名所図会』に4篇、『木曾路名所図会』に1篇の漢詩を所載</p>
115	惟然	1	<p>?－1711</p> <p>江戸時代前期－中期の俳人。元禄(げんろく)元年松尾芭蕉(ばしょう)に入門し、晩年の芭蕉に随従した。各地を旅し、口語調、無季語の句作をこころみた。晩年は郷里の弁慶庵に隠棲(いんせい)。宝永8年2月9日死去。享年は六十余歳。美濃(みの)(岐阜県)出身。通称は源之丞。別号に素牛、鳥落人、湖南人など。句集に「藤の実」など。</p> <p>【格言など】水鳥やむかうの岸へつういつい(「惟然坊句集」)</p> <p>ひろせ－いぜん【広瀬惟然】、日本人名大辞典、JapanKnowledge、https://japanknowledge.com、(参照 2018-07-10)</p>
116	橋山畑柳股	1	
117	万里	1	

	作者	詩歌所載数	人物詳細
118	桂林	1	<p>1744～1808</p> <p>江戸時代中期～後期の漢詩人。延享元年生まれ。江戸の人。安達清河（せいか）の門人。文化5年1月28日死去。65歳。名は惟（維）直。字（あざな）は繩卿。通称は準蔵。詩集に「桂林詩集」など。</p> <p>みなわーけいりん【三繩桂林】””, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
119	空海	1	<p>774～835</p> <p>平安時代前期の僧。宝亀（ほうき）5年6月15日生まれ。真言宗の開祖。三筆のひとり。讃岐（さぬき）（香川県）の人。延暦（えんりゃく）23年唐（とう）（中国）にわたり、長安青竜寺の恵果から真言密教の秘法をうける。帰国後、高野山に金剛峰寺（こんごうぶじ）を、京都に教王護国寺（東寺）をひらき、綜芸（しゅげい）種智院をもうける。後世その生涯にまつわるおおくの説話、伝説がうみだされ、庶民信仰の対象となった。承和（じょうわ）2年3月21日死去。62歳。俗姓は佐伯。幼名は真魚。諡号（しごう）は弘法大師。著作に「三教指帰（さんごうしいき）」「性靈（しょうりょう）集」など。</p> <p>【格言など】生れ生れて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終りに冥（くら）し（「秘蔵宝鑰（ほうやく）」）くうかい【空海（1）】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
120	暁台	1	<p>1732～1792</p> <p>江戸時代中期の俳人。享保（きょうほう）17年9月1日生まれ。武藤巴雀（はじゃく）・白尼（はくに）父子に入門し、のち暮雨巷（ぼうこう）一門をおこす。蕉風復興をめざして中興（天明）俳諧（はいかい）の中心となり、「去来抄」などを翻刻した。寛政4年1月20日死去。61歳。尾張（おわり）（愛知県）出身。本姓は岸上。名は周拳。通称は平兵衛。別号に他朗、買夜、暮雨巷。編著に「秋の日」「風羅（ふうら）念仏」などがある。</p> <p>かとうーきょうたい【加藤暁台】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
121	蘭坡	1	<p>1419～1501</p> <p>室町～戦国時代の僧。応永26年生まれ。臨済（りんざい）宗。大模梵軌（だいもぼんき）の法をつぎ、希世靈彦（きせいれいげん）らに詩文をまなぶ。臨川寺、南禅寺の住持をつとめ、後土御門（ごつちみかど）天皇、三条西実隆らと文事の交わりがあった。明応10年2月28日死去。83歳。近江（おうみ）（滋賀県）出身。号は雪樵。諡号（しごう）は仏慧円応禅師。著作に「雪樵独唱集」など。</p> <p>【格言など】万物は吾が詩なり。詩を離れて禪無く、禪を離れて詩無し。之を万法帰一と謂う</p> <p>らんぱーけいし【蘭坡景葩】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-</p>
122	拝稿	1	
123	輔仁親王	1	<p>1073～1119</p> <p>平安時代中期～後期、後三条天皇の第3皇子。延久5年1月19日生まれ。母は源基子。承保（じょうほう）2年親王となる。異母兄の白河天皇がその子（堀河天皇）に譲位したため皇位への道をたたれ閑居。永久元年護持僧仁寛（にんかん）らが親王の天皇即位をはかった事件で閉門謹慎。詩歌に長じていた。元永2年11月28日死去。47歳。</p> <p>すけひとしんのう【輔仁親王】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-</p>
124	夢窓国師	1	<p>鎌倉末期・南北朝時代の臨済宗の僧。夢窓派（嵯峨門派）の祖。生前に与えられた夢窓・正覚・心宗のほか、普濟・玄猷・仏統・大円の各国師号がある。宇多天皇の子孫と伝え、伊勢国（三重県）に生まれた。九歳で出家し、顕密を学んだが、のち禅に帰し、無隠円範、次いで一山一寧・高峰顕目に師事し、高峰の法を継いだ。南禅寺に住し、さらに鎌倉の浄智寺・円覚寺に歴住し、甲斐国（山梨県）に恵林寺を、やがて京都に臨川寺を開いた。暦応二年（一三三九）足利尊氏が天龍寺を建てると、招かれて開山となった。五山文学の最盛期をその門流に生み出し、庭園芸術を発展させ、天龍寺船による貿易を促した。著書に「夢中間答集」「臨川寺家訓」。建治元～観応二年（一二七五～一三五一）むそうーそせき【ムサウ・】【夢窓疎石】, 日本国語大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
125	公任	1	<p>966～1041</p> <p>平安時代中期の公卿（くぎょう）、歌人。康保（こうほう）3年生まれ。藤原頼忠（よりただ）の長男。母は巖子女王。権（ごん）の中納言、正二位にいたる。一条朝の四納言のひとり。漢詩、管弦にもすぐれ、三船の才をうたわれた。「三十六人撰」「和漢朗詠集」を編集、歌論書「新撰髓脳」、有職（ゆうそく）書「北山（ほくざん）抄」などの著作がある。長久2年1月1日死去。76歳。通称は四条大納言。家集に「公任集」。</p> <p>【格言など】俺の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ（「小倉百人一首」）</p> <p>ふじわらのーきんとう【藤原公任】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
126	李綱	1	
127	定家	1	<p>1162～1241</p> <p>鎌倉時代の公卿（くぎょう）、歌人。応保2年生まれ。藤原俊成（としなり）の子。母は美福院加賀。正二位、権（ごん）の中納言。京極中納言とよばれる。父の指導を受け、後鳥羽（ごとば）院歌壇で活躍。「新古今和歌集」「新勅撰和歌集」の撰者となり、「小倉百人一首」も撰じた。「源氏物語」などの古典の書写、校訂にも大きな功績をのこす。仁治（にんじ）2年8月20日死去。80歳。法名は明静。日記に「明月記」、家集に「拾遺愚草」、歌論書に「詠歌大概」など。</p> <p>【格言など】来ぬ人をまつほの浦の夕風（ゆふなぎ）に焼くや藻塩（もしほ）の身も焦がれつつ（「小倉百人一首」）</p> <p>ふじわらのーさだいえ【藤原定家】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>
128	光明峰寺入道	1	<p>1193～1252</p> <p>鎌倉時代の公卿（くぎょう）。建久4年6月28日生まれ。九条良経（よしつね）の子。母は一条能保（よしやす）の娘（源頼朝の姪（めい））。元久2年従三位。左大臣にすすみ、承久（じょうきゅう）3年摂政、氏長者となるが、承久の乱で辞任。子の頼経（よりつね）が4代將軍となり、岳父西園寺公経（さいおんじーきんつね）の引き立てで復権。安貞2年閏白、ついで摂政。出家後も実権をにぎるが、頼経、孫の頼嗣（よりつぐ）（5代將軍）が執権北条時頼により鎌倉からおわれ、失脚。従一位。建長4年2月21日死去。60歳。通称は光明峯寺殿。法名は行慧。日記に「玉蘂（ぎょくずい）」。</p> <p>くじょうーみちいえ【九条道家】, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, (参照 2018-07-10)</p>

	作者	詩歌所載数	人物詳細
129	俊成女	1	鎌倉時代の歌人。藤原盛頼（もりより）の娘。母は藤原俊成の娘八条院三条。祖父俊成の養女。源通具（みちとも）の妻となり、具定を生んだ。後鳥羽（ごとば）院の歌壇で活躍し、勅撰集には「新古今和歌集」以下に116首がはいる。出家し、のち播磨（はりま）（兵庫県）越部（こしべの）荘にすみ、建長4年（1252）以降に八十歳で死去。家集に「俊成卿女集」、歌論書に「越部禅尼消息」。 【格言など】をりふしもうつればかへつ世の中の人々の心の花染のそで（「新古今和歌集」） ふじわらのーとしなりのーむすめ【藤原俊成女】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
130	寂蓮法師	1	1139?－1202 平安後期－鎌倉時代の僧，歌人。保延（ほうえん）5年?生まれ。俊海の子。伯父藤原俊成（としなり）の養子となり，承安（じょうあん）2年（1172）ごろ出家。西行，寂然（じゃくぜん）らとまじわり，後鳥羽院（ごとばいん）歌壇で活躍し，和歌所の寄人（よりゆうど）になる。「千載和歌集」以下の勅撰（ちよくせん）集に117首のる。家集に「寂蓮法師集」。「新古今和歌集」の撰者（せんじゃ）にえらばれたが，撰進に先だち建仁（けん にん）2年の7月20日ごろ死去。64歳? 俗名は藤原定長。 【格言など】村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮（「小倉百人一首」） じゃくれん【寂蓮】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
131	左大弁宰相公明	1	1281－1336 鎌倉－南北朝時代の公卿（くぎょう），歌人。弘安（こうあん）4年生まれ。正親町三条実仲（さねなか）の子。母は吉田経俊（つねとし）の娘。文保3年参議。元弘（げんこう）の乱で六波羅（ろくはら）探題に捕らえられるが，正慶（しょうきょう）元＝元弘2年もとの官職にもどり，のち権（ごん）の大納言にのぼった。正二位。「続千載和歌集」などに和歌をのこす。建武3＝延元元年9月11日死去。56歳。 おおぎまちさんじょう－きんあき【正親町三条公明】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
132	前関白	1	
133	為道	1	1271－1299 鎌倉時代の公家，歌人。文永8年生まれ。二条為世の子。正四位下，左近衛権（ごん）中将。正応－永仁（えい にん）年間（1288-99）に後宇多上皇，伏見上皇の官廷歌会にたびたび参加。歌は「新後撰和歌集」などの勅撰集に六十余首ある。宴曲「名取河恋」の作者といわれる。正安（しょうあん）元年5月5日死去。29歳。名は為通ともかくにじょう－ためみち【二条為道】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
134	瑞溪	1	1392*－1473 室町時代の僧。明徳2＝元中8年12月8日生まれ。臨済（りんざい）宗。無求周仲の法をつぐ。京都相国寺（しょうこくじ）住持となる。將軍足利義教（よし のり）・義政の信任をえて3度鹿苑院主，僧録をつとめる。明（みん）（中国）への国書の起草もおこなった。文明5年5月8日死去。83歳。和泉（いずみ）（大阪府）出身。俗姓は伴。諡号（しごう）は興宗明教禪師。別号に臥雲（がうん）山人。著作に外交文書集「善隣国宝記」など。 ずいけい－しゅうほう【瑞溪周鳳】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
135	仲実	1	1057－1118 平安時代後期の官吏，歌人。天喜（てんぎ）5年生まれ。越前守（えちぜんのかみ）藤原能成の子。正四位下，中宮亮（すけ）。堀河天皇の中宮篤子（とくし）につかえる。「永久四年百首」の企画者。歌学者として「綺語（きご）抄」「古今和歌集目録」をあらわした。勅撰集には「金葉和歌集」以下に23首。永久6年3月26日死去。62歳。 ふじわらの－なかざね【藤原仲実】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
136	後京極	1	1303－1333 鎌倉時代，後醍醐（ごだいご）天皇の中宮（ちゅうぐう）。嘉元（かげん）元年生まれ。西園寺実兼（さねかみ）の娘。尊治（たかはる）親王（のち後醍醐天皇）の後宮にはいり，権子（かんし）内親王（のち宣政門院）を生む。元徳4＝元弘（げんこう）2年天皇の隠岐（おき）配流（はいりゅう）（はいる）後，北朝から院号をうけ出家。翌年天皇の京都帰還により中宮に復し，ついで皇太后となった。正慶（しょうきょう）2＝元弘3年10月12日死去。31歳。後京極（ごきょうごく）院と追号された。名は禧子（きし）。 れいせいもんいん【礼成門院 (1)】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
137	鎌倉右大臣	1	1192－1219 鎌倉幕府3代將軍。在職1203-19。建久3年8月9日生まれ。源頼朝の子。母は北条政子。北条氏に擁立されて建仁（けん にん）3年將軍となるが，北条氏に実権をうばわれたため，官位に執着。建保（けんぼ）6年右大臣に昇進。7年1月27日鎌倉鶴岡八幡宮での拝賀式（はいがしき）のとき，甥（おい）の公暁（くきょう）に暗殺された。28歳。藤原定家に師事し，万葉調の歌人としても名だかい。幼名は千幡（せんまん）。家集に「金槐（きんかい）和歌集」。 【格言など】世の中は常にもがもな渚（なぎさ）漕ぐ海人（あま）の小舟の綱手（つなで）かなしも（「小倉百人一首」） みなもとの－さねとも【源実朝】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）
138	法印行清	1	1231－1277 鎌倉時代の武将。寛喜（かんぎ）3年生まれ。二階堂行久の子。幕府の引付衆。將軍家の近習のひとり。建治（けんじ）元年三善政康，伊賀光政らと京都にいき，3年4月2日同地で死去。47歳。初名は行雄。 にかいどう－ゆききよ【二階堂行清】，日本人名大辞典，JapanKnowledge， https://japanknowledge.com ，（参照 2018-07-10）

	作者	詩歌所載数	人物詳細
139	半斎明	1	
140	澄月	1	<p>1714－1798</p> <p>江戸時代中期－後期の僧，歌人。正徳（しょうとく）4年生まれ。比叡（ひえい）山で天台をまなび，のち浄土門にはいる。和歌を武者小路実岳（さねおか）にまなび，小沢蘆庵（ろあん），伴蒿蹊（こうけい），慈延とともに平安和歌四天王といわれた。寛政10年5月2日死去。85歳。備中（びっちゅう）（岡山県）出身。備中（びっちゅう）（岡山県）出身。俗姓は西山。別号に垂雲軒，酔夢庵。著作に「和歌為隣抄」，歌集に「垂雲和歌集」など。</p> <p>ちょうげつ【澄月】，日本人名大辞典，JapanKnowledge，https://japanknowledge.com，（参照 2018-07-10）</p>
141	大淀太夫	1	
142	若紫太夫	1	
143	金丸氏	1	
144	小太夫	1	
145	松仁太夫	1	

表 7 名所図会凡例比較表

刊行年	書名	書物の性格							挿図について							
		記す地域	記す対象	時間軸	底本・種本	姿勢	引用	続編	描き分け	スケール	風流の図(風俗画)	祭礼	詩歌	画工		
安永9年 (1780)	『都名所図会』	巻首に平安城 四方を四神 (の巻)	神社の芳境 仏閣の佳邑 山川の美観 等	今時の風景 をありのま まに模写	『花洛細見 図』 『宮古歳時 記』 『山城名所紀 行』	幼童の輩、 坐らにして 古蹟の勝地 を見ること を肝要とす			境地広大→ 細画 狭少の神祠・ 小堂→しか らず	形容いたつ て微少なる 人物はその 地の広大を しるべし。 形容微少な らざるは境 地狭小なり。	四時の佳観 を賞して遊 楽の地を知 らんせんた めなり					
天明8年 (1788)	『拾遺都名所図会』	前編に漏れ たるを広い あつめて	仏院の塔頭、 末派の子院 等は隙限あ らざれば、 咸は載せず。 年旧く名の 高きを撰ん で録す。	今の風景を たがはず図 に模写し			引書の長文 なるは、そ の要を摘ん で略書す		前編の図中 に遠景の画 あり。今こ れを微細に 図してその 封境を精し くあらはす		また四時遊 観の形象を 写す。 図中の間々 に大画あり。 あながち名 所古跡にか かはらず、 その辺の地 勢によつて 風流の景気 を画するも のなり	拾遺は街衢 小路につら なる小祠・ 子院なれば、 画するに風 景なし。こ こによつて 大社の祭礼 を多く図す。				
寛政3年 (1791)	『大和名所図会』	城内十五郡 に封境小大 あり。広大 なるは一郡 二巻に亘り、 狭小なるは 五郡一巻に 縮めたるあ り		図画は今時 の景勝をあ らはし		また事実を 画するは、 童蒙の見安 からん便と す							図中の間々 に人物の大 絵あり。古 歌のこころ を画するは、 その地の風 色をあらは さんが為なり			
寛政6年 (1794)	『住吉名勝図会』		住吉大小の 祭事・年中 の行事を委 しく記して、 他那遠境の 人に、当社 祭事の多き 神幸の美な るをしらし めんとす	巻中の絵に、 現在を画く あり、過去 を画くあり、 文によりて 画くあり、 古歌に画く あり、画に 寄りて画く あり				この巻にも れたるは、 次編をまち て合はせ見 るべし				右祭礼・神 幸の大なる ものは図を あらはし、 小なるもの は事を記し て図を除く				
寛政6年 (1794)	『摂津名所図会』	東生郡・西 成郡は大阪 市街の町続 きなれば、 郡名にかか はらずこれ を署す 住吉郡の界、 今時界津大 小路までを 摂津国とす。 しかれども 旧史に基い て、界一津 を『泉名所 図会』にこ れを著す。 かるがゆゑ に、この本 巻にはこれ を省く									朝市夕市の 繁花または 新艘の舶お ろし、出帆、 河口の風景 を図しあら はす	大阪市街に 神廟仏利多 からず、こ こによつて 諸社の祭式 あるいは(中 略)を図し あらはす				寺社の細画 は竹原春朝 斎の一筆なり。 かるがゆゑに 姓名印章なし。 景物は画に至 つてはしから ず。これによ つて、画面に 姓名印章をこ とごとくしる し侍る

刊行年	書名	書物の性格							挿図について					
		記す地域	記す対象	時間軸	底本・種本	姿勢	引用	続編	描き分け	スケール	風流の図(風俗画)	祭礼	詩歌	画工
寛政8年 (1796)	『和泉名所図会』	摂・河・泉三州の内なり。和泉国北極の封域、世俗、界津大小路を摂津の界とす。	神社は『延喜式』神名帳によつて載す。寺院は郷中村里に多し。由致あるを撰んで書し、新建の浄利・墳寺・道場の類は多くこれを省く							大廈は図し、小祠は図せず。ただ由縁を署すのみなり				
寛政9年 (1797)	『東海道名所図会』	京師よりはじめて江戸に到る。都て十州に亘り	神社は『延喜式』神名帳に載するを選んで記す。郷里にことごとく生土神あり。多くは勧請の神祠なればこれを除く。しかれども大廈に到つては撰んで載する。寺院もまたこれに准じ、古刹を撰んで記し、末派の墳寺・道場の類は、際限あらざればこれもまた省く	いにしへより古人の紀行、名地の図画、道中記の類、殆ど多し。しかれども海道条古今改まりて、旧書を見るに惑う事多し。予巡行して、今時の見聞を記す。			引書は古来流布の紀行、和歌は代々の撰集、詩賦は名家の文集を引拠とす。軍談はその要を撮んで記し、神廟・梵刹の由縁は社人・寺僧の記せるを勘へ、また村翁野夫の謬も是なるは載する事あり	なほ脱漏は後人の補遺を俟のみ	その駅路を標とし、名所・古跡・神社・仏院を図会とす					画図は京師・江戸及び諸那の寄合書なり。かるがゆゑに画毎に姓名印章あり。細図は浪速竹原春泉斎の一筆によりて姓名を記さず
寛政11年 (1799)	『都林泉名勝図会』	京師四方名庭の林泉を聚て、新に都林泉名勝図会と題書す 諸寺方丈書院の名画名筆、または什宝虫干の体相の大略を書するは、その寺院の莊嚴京師の美観なり。しかりといへども際限あらざれば具に記するは事あたはず、余は寺僧に尋て詳にすべし			この書は前板築山庭造伝を基とし			しかれども 宮殿・台榭・山閣・水亭・蟬舎・蓬戸の林泉なほすこぶる多し、余は他日縁を需て巡覧し、後編に備ふ	庭造の法則あるは側の亭宅を除て画く。これは林泉の軌範となるべきの料なり。法則僅なるは舎屋を図し、風景を専とす。また四季折々の花樹あるは、大略その樹々をしらせんために、時節に寄らずこれを画く、たとへば梅桜蓮楓あるの類なり	法則によつて遠景をとる庭中はすべてえその遠景を図し、遠景不用意の庭はこれを省く。また図ごとに人物の画の大小あり、その貌の小大によつて林泉の広狭をしるべきなり	勝地によつて風流の図あり、あながち林泉に寄ざれどもその地の風光を彰さんためなり。また典故の絵あり、これも右に准ず。いはゆる紫野若草、伏見梅溪、河合納涼、高雄紅葉、大堰川三船等のたぐひなり		林泉に古人の詩歌寡なし。かるがゆへに今時京師において名家の詩歌を乞需て多く図中に釘す。その中に作者自筆の詩歌もあり、俳諧狂歌もまたこれに准ず	画工は一筆にあらざれば、図ごとのおの姓名あり、これをもつて画師を鮮に知べし

刊行年	書名	書物の性格							挿図について					
		記す地域	記す対象	時間軸	底本・種本	姿勢	引用	続編	描き分け	スケール	風流の図(風俗画)	祭礼	詩歌	画工
不明	『中国名所図会』	浪華安治川口より全図を頼しこの地解すれど、前に摂津・播磨の両国既に成つて分明なれば、この集川口より讃州丸亀までの海上眺望の和歌を述べる海上方角・金毘羅参詣・厳島・錦帯橋まで海岸にいたる処を記す	挙ぐる所の神社仏閣は『延喜式』神名帳に載するを選んで挙ぐる。郷里に悉く生土神あり。多くは勧請の神社にして記録ならず。ゆゑにこれを除く。しかれどもまた大庭は胤撰を校考して挙ぐる。寺院もまたこれに準じて、古雑を糾して多くは記す。末派の墳寺・道場の類は、際限有らざればこれを省く。大略大旨は『東海道英書図会』の例に倣ひ、しかしその精荒は甚だ異なり			かつは名所図会と題すといへど、海上並びに陸地道中通行の案内のため、国中の名所委しく述ぶるにあらず。その委しきは追つて一国一国に述ぶる	引書は神書国史を元とし、古来流布の記行、和歌は代々の撰集・家々の家集、歴代譜籍の地考、詩賦は名家の文章を引拠とす。軍談はその要を按撮んでその大概を記す。また神度・社廟・梵院・雑寺の由縁は、社人・寺僧の説に寄れり。貞観・文徳、その外式録鑑抄と双考せしむ。またその所の村翁・野父の謠も、その是なるは挙げてこれを記す	再びこの集をつぎ、肥前長崎まで後編に挙げて後星に綴るのその初めなり						

表 8 『都林泉名勝図会』における挿図類別割合

	林泉図	風流の図	典故の絵	合計
巻之一	22	13	8	43
巻之二	32	11	2	45
巻之三	17	9	1	27
巻之四	17	3	4	24
巻之五	12	5	2	19
合計	100	41	17	158
割合	63%	26%	11%	100%

表 9 京都の名所図会における林泉図比較表

刊行年	書名	挿図数	庭園を 描いた挿図	林泉図	林泉図の 割合
安永 9 年 (1780)	『都名所図会』	244	12	3	1.2%
天明 8 年 (1788)	『拾遺都名所図会』	164	18	2	1.2%
寛政 2 年 (1790)	『京の水』	7	4	0	0.0%
寛政 5 年 (1793)	『都花月名所』	3	0	0	0.0%
寛政 11 年 (1799)	『都林泉名勝図会』	157	122	100	63.7%

表 10 『都林泉名勝図会』における画工別挿図割合

	合計	割合
中和	79	50%
草偃	53	34%
文鳴	26	16%
合計	158	100%

表 11 『都林泉名勝図会』における画工別挿図種類割合

	林泉	風流	典故	合計	庭園が描かれた挿図	割合
中和	53	18	8	79	63	40%
草偃	44	2	7	53	50	32%
文鳴	3	21	2	26	9	6%
合計	100	41	17	158	122	77%

表 12 版本種別一覧

凡例 大徳寺金龍院聯芳堂 ○：改変前 ×：改変後
 〔南禅院大明国師坐禅〕風表現の有無 ○：風表現あり ×：風表現なし
 「吉祥院村中陽泉亭」船の有無 ○：船あり ×：船なし後

版種	版本・書籍	表紙	本文の 差異	挿図の差異					奥付の差異						備考
			大徳寺	枳殻馬	御茶水	風	船	京都	江都	浪速		皇都書廊	その他発行書肆		
			龍光院	場・懐 円の図				吉野屋 為八	須原屋 善五郎	河内屋 喜兵衛	河内屋 太助	小川 多左衛門			
①	献呈本（個人蔵）	絹張り	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○	-		
	早稲田大学図書館②	青表紙	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○	-		
	国文学研究資料館一般②	不明	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○	-		
	野間光辰 編『新修京都叢書』第9巻	不明	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	-	底本：京都大学 付属図書館架蔵 の中から小川版 口本を採用	
	国文学研究資料館一般③	唐刷り	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-		
	国文学研究資料館長谷章久旧蔵書	青表紙	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-		
	白幡洋三郎 監修『都林泉名勝図会』	不明	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-		
	井口洋 校訂『都林泉名勝図会』柳原書房	不明	○	×	×	×	×	○	○	○	○	○	-	底本：大阪府立 図書館蔵	
	個人蔵（旧来田蔵）	唐刷り	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	-	奥付の間に「河 内屋太助梓行」 あり、分かる範 囲の最新刊行年 は1851年	
	国文学研究資料館一般④	青表紙	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-	『五畿内名所図 会林泉記』5冊 構成	
武庫川女子大学付属図書館	青表紙	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-	異なる扉絵の付 属品あり		
個人蔵（旧立命蔵、旧日本経済新聞蔵）	唐刷り	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	-			
②	国際日本文化研究センターデータベース	青表紙	×	×	○	×	×	○	○	-	-	-	-	蔵版書目半丁分 あり（最新版行 年は1865年）、 輔親の図はある が桂宮が半丁分 欠けている	
③-1	国文学研究資料館 三井文庫旧蔵資料	青表紙	×	×	×	×	×	○	○	その他の 中にあり	-	-		1巻扉絵が異な る	
	盛岡市中央公民館 マイクロ収集 2034	不明	×	×	×	×	×	○	○	その他の 中にあり	-	-		1巻扉絵が異な る	
	早稲田大学図書館①	青表紙	×	×	×	×	×	○	○	その他の 中にあり	-	-		序文の前に扉絵 あり、1巻坤が 芳春院から始ま る	
③-2	国文学研究資料館一般①	不明	×	○	×	×	×	○	○	-	-	-			
	竹村俊則著『日本名所風俗図会』	不明	×	×	×	○	○	-	-	-	-	-	-	底本不明	
	『日本図会全集』日本随筆大成刊行会	不明	×	×	×	○	○	-	-	-	-	-	-	底本不明	

表 13 『都林泉名勝図会』における本文項目の類別表

巻数	項目名	種別 1	種別 2	『都名所図会』	『拾遺都名所図会』
卷之一	清少納言	物語			
	神泉苑	皇室関係		○	
	蹴鞠の御遊	行事			
	相国寺	寺院		○	
	紫野	名勝		○	
	雲林院	寺院		○	
	大徳寺	寺院		○	
	竜翔寺	寺院			○ (跡の方を記載)
	引接寺	寺院		○	
	本法寺	寺院		○	
	六角堂池之坊	寺院		○	
	建仁寺	寺院		○	
	四条祇園橋	名勝		○ (四条河原夕涼)	
	本圀寺	寺院		○	
	本願寺	寺院		○	
	東本願寺	寺院	古跡	○	
	東鴻臚館趾	古跡		○ (島原傾城町)	
	六条内裏	古跡	皇室関係		
	釣殿院	古跡	皇室関係		
	遍照心院	寺院		○	
	東寺	寺院		○	
卷之二	赤山神祠	神社		○	
	慈照寺銀閣	寺院		○	
	糺納涼	名勝	神社	○ (鴨下上皇太神宮の御社)	
	惺窩先生幽居蹟	古跡			
	氷室古跡	古跡			
	中山忠親公別荘蹟	古跡			
	卜部家斎場所	名勝			
	南禅寺	寺院		○	
	藤在衡公別業蹟	古跡			
	菩提樹院址	古跡	皇室関係		
	宝荘殿院址	古跡	皇室関係		
	白河離宮	古跡	皇室関係		
	陽成院陵	皇室関係			
	冷泉院陵	皇室関係			
	後一条院陵	皇室関係			
	栗田院	皇室関係	寺院		
	青蓮院	皇室関係	寺院		○
	知恩教院	寺院		○	
	円山	寺院		○	
	將軍塚	古跡			○
	上東門院塔	皇室関係			
	皇太后 (女忰) 子塚	皇室関係			
	長楽寺	寺院		○	
	蔡華園院	寺院			
	祇園社	神社		○	
	高台寺	寺院		○	
	靈山	名勝	寺院	○ (靈鷲山正法寺)	

卷数	項目名	種別 1	種別 2	『都名所図会』	『拾遺都名所図会』
卷之三	音羽山清水寺	寺院		○	
	歌中山清閑寺	寺院		○	
	若松池	名勝			
	阿弥陀峰	名勝		○	
	蓮華王院	寺院		○	
	法住寺古蹟	古跡			
	養源院	寺院		○	
	智積院	寺院		○	
	月輪	名勝			○
	恵日山東福禪寺	寺院		○	
	清原深養父旧蹟	古跡			
	舍人親王塚	皇室関係	古跡		
	墨染里	名勝		○	
	伏見山	名勝			
卷之四	梅溪	名勝		○	
	高雄山神護寺	寺院		○	
	槇尾平等心院	寺院		○	
	梅尾高山寺	寺院		○	
	等持院	寺院		○	
	衣笠山	名勝		○	
	衣笠殿	古跡		○ (衣笠山)	
	衣笠岳御霊	神社			
	龍安寺	寺院		○	
	花園社	神社			○ (花園)
	頓阿古蹟	古跡			
	正法山妙心寺	寺院		○	
	芋喰僧都旧跡	古跡			
	大応国師塔	古跡			
	後宇多院塔	皇室関係			
	賀陽門院塔	皇室関係			
	鹿苑寺	寺院		○	
卷之五	天龍寺	寺院		○	
	龜山殿旧跡	古跡	皇室関係		
	大井川	名勝		○	
	嵐山	名勝		○	
	宗祇法師旧庵	古跡			
	道命法師蹟	古跡			
	藥室西芳寺	寺院		○	
	定嗣卿山莊古蹟	古跡			
	桂山莊園林堂	皇室関係			
	元輔家	古跡			
	男山	名勝		○	
	山崎妙喜庵	寺院		○	
	山崎城	名勝			
	相応寺	寺院			

表 14 名所図会における庭園に関する記述件数

書誌情報			記述		
刊行年	書名	巻・冊数	総項目数	庭園に関する記述	割合 (%)
安永 9 年 (1780)	『都名所図会』	6 巻 6 冊	593	17	2.9%
天明 8 年 (1788)	『拾遺都名所図会』	4 巻 5 冊	839	17	2.0%
寛政 2 年 (1790)	『京の水』	2 巻 2 冊	346	10	2.9%
寛政 3 年 (1791)	『大和名所図会』	6 巻 7 冊	1222	0	0.0%
寛政 5 年 (1793)	『都花月名所』	1 巻 1 冊	443	12	2.7%
寛政 6 年 (1794)	『住吉名勝図会』	5 巻 5 冊	109	0	0.0%
寛政 6 年 (1794)	『摂津名所図会』	9 巻 12 冊	1304	3	0.2%
寛政 8 年 (1796)	『和泉名所図会』	4 巻 4 冊	274	2	0.7%
寛政 9 年 (1797)	『伊勢参宮名所図会』	5 巻 6 冊	128	0	0.0%
寛政 9 年 (1797)	『近江名所図会』	4 巻 4 冊	244	0	0.0%
寛政 9 年 (1797)	『東海道名所図会』	6 巻 6 冊	665	6	0.9%
寛政 11 年 (1799)	『都林泉名勝図会』	5 巻 6 冊	93	33	35.5%
享和元年 (1801)	『河内名所図会』	6 巻 6 冊	552	11	2.0%
文化元年 (1804)	『木曾路名所図会』	6 巻 7 冊	565	1	0.2%
不明	『中国名所図会』	4 冊	343	0	0.0%

表 15 京都の名所図会における庭園に関する記述内容比較表

庭園	『都名所図会』(安永 9 年 1780)	『拾遺都名所図会』(天明 7 年 1787)	『都林泉名勝図会』(寛政 11 年 1799)	
			本文	挿図
神泉苑	庭中には巨勢金岡石を疊みて風光を貯ふ		巨勢金岡石を疊むといふ。大内裏はじめて造営ありし時は、周文王の靈園に准じて方八町に作られし泉苑なり。この池より善女龍王あらはれしより神泉とも号け、またそのめぐりを洛中に課せて柳桜多く植られたり。(中略) 中頃明德徳仁の兵燹に罹りて、今は僅の林泉となる。しかはあれど、大内裏の遺跡千載の賜とぞ思はれける	
東本願寺東殿	東殿（今いふ百間屋鋪なり）台命によつて増地を賜り、東本願寺の別館とす。旧此所は河原院の旧蹟にして、池辺の出島に九重塔あり、是則融の大臣の古墳なり。(いにしへ此所に融公の社あり、境内の隣地下寺町万年寺にうつすなりといふ) 池水は東の高瀬川より流れて常に溶々たり、水戸を獅子口といふ。臨池殿の庭は小堀遠州の好なり、風光奇々として真妙なり			
天橋立		旧跡は今の東本願寺御堂の地より北にして、六条魚棚までなり。此地むかし祭近三位資近卿の殿舎にて、庭中に大きな池を掘らせ、天橋立の風景をうつし給ふ後世までこの池遣りありしを、本願寺建立の時多く埋めらる。今、東本願寺の書院を寢殿といひ、小書院を小寢殿というは、彼の三位資近卿の時の殿舎の名なり。この事は清輔の『袋草子』に見えたり	(この館舎の中に、大寢殿小寢殿の名目あり。これを按ずるに、むかしこの地は祭主三位輔親卿の殿舎なり。その林泉に丹後の海橋立を移して、池を広く掘りて松を樹、風景うるはしく月を賞ぜられしなり。この事清輔の袋草子に見えて、寢殿の名目あり。後世当寺の社殿を建てられし時、この旧跡なる事を知つてかく名づけられし物ならん。輔親卿は歌人にて新古今集に撰ばれ和歌入りし人なり) 袋草子云く南院は海橋立なり、輔親卿の家なり。月を見ん為に寢殿の南庇を差さずと云々。懷園が池水はあまの河にやかよふらんとよむ、この所にての詠なり。月明夜にて行向へるに、夜更けて人もねぬらんと思ふに、寢殿の南面に輔親一人月を見て居て、時に相互ひに興に乗じてこの歌を詠む、曉更くるに帰ると云々	林泉に天橋立の風景を移さる
河原院の旧跡	(鴨川はこの殿舎の庭中を流るると見えたり) 台閣水石風流をつくし、遊蕩の美を擅にし、山を築きては草木繁茂し、四時に花絶えず。池を鑿りては水を湛へ、魚鳥は波に戯れ、陸奥の松島をうつし、難波津より日毎に潮を汲ませ、管弦は仙台上に調べ、文籍は月殿に翫びたまふ			河原左大臣の古蹟千鳥池、あるは祭主三位輔親卿の林泉、天橋立を移されし跡は、今の東六条本願寺御堂のほとりより東なる枳殻馬場の地ならんと思はれける
遍照心院	方丈の庭（蘆山の景を摸して庭中絶妙なり）		方丈の林泉は蘆山を移して諸樹を作り木とし連山の体をあらはし、枝を挽て飛泉とし、白砂を布いて流水とし、風景真妙なり。初めは夢想国師の作なり。後世におよんで伏見の朝霧島之助でふ者補作すとなん。京師庭造の一奇品なり	初は夢想国師作其後年可翁補作
慈照寺	そもそもここに庭は東山殿の好みにして、茶道相阿弥台命を蒙りて造りしなり。庭中の風光真妙にして山水の法式をもれず、四時の壯観足らずといふ事なし。末代庭造の規範とするなり。洞庭・西湖も掌に握り、松島・象潟も目前にたくみて、壺中に山川を縮め、一粒の粟中に日月を蔵したる、神仙の術ありとぞ見えにける			相阿弥作 銀閣の林泉は向に庭造伝或は都名所に出土れとも年歴累りて樹木古朽し又新に植るも多し。故に寺僧の好みに任せて今時の体を図す

庭園	『都名所図会』(安永 9 年 1780)	『拾遺都名所図会』(天明 7 年 1787)	『都林泉名勝図会』(寛政 11 年 1799)	
			本文	挿図
安養寺	当山坊中の書院は昇らずして高樓に至り、清奇典麗いはん方なし。庭中には石を疊んで飛泉を催し、池を鑿りては舟をうかべ、緑樹芳草、四季に花絶えず、蹴鞠の履の音涼しく、中には多蔵庵（眼阿弥）の庭は相阿弥なり		坊舎六宇、山崖に建絶て、亭閣林泉玲瓏として洛東の佳境なり	
龍安寺方丈	方丈は勝元の館書院を以ていとなみ、庭前の築山、池辺の風色は勝元の物数奇なり。		所謂方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北名庭の第一とす。庭中に樹木株もなく、海面の体相にして、中に奇巖十種ありて島嶼に准へ、真の風流にして他に比類なし、これを世に虎の子渡しといふ。	むかし細川勝元ここに別業をかまへ住せらるゝ時、書院より毎朝男山八幡宮を遥拝せんが為に庭中に樹を植す。奇巖ばかりにて風光を催す。これを相阿弥の作りしなり。名づけて虎の子わたしといふ。洛北名庭の第一なり。後年堀の外の古松高く老て昔の風景儼となる。その上近年方丈回祿しぬればむかしを情を慕れ侍る
金閣寺	閣の前には池広くして、(中略) 九山八海となづけ伝ふる奇石さまざまあり。金閣の廻りみな池にして、芳徳の間に反橋を架す。池の南に拱北樓あり		林泉に三重金閣あり、露盤に鳳凰を置、上を究竟頂、中を潮音洞、下を法水院といふ。(悉く金鉑を以て押す、故に金閣の名あり) 池を鏡湖といふ、九山八海石あり、御茶水を銀河泉といふ、竜門滝に鯉魚石あり、安民沢に臥竜石あり、明王院に石鐫の不動を安ず、前に独鈷水あり、春日明神を鎮守とす。実にこの閣は前漢宣帝の營たまひし麒麟閣にも比せんや	
天龍寺方丈林泉	方丈の庭は夢窓国師の作にして、池を曹源池といふ。		この方丈の林泉は開基夢想国師の作りたまふ、亀尾山、あらし山、大堰川、戸難瀬滝を庭中の荘として、この辺の妙境なり	開山夢想国師作りたまふ庭中なり
西芳寺	方丈の庭は夢窓の作なり。庭中の造化、四時の風光、玄妙にしてまた比類なし。潭北軒（仏殿の北西にあり。その庭に紫竹七莖を種ゑたり、北斗七僧を標すとなん）(中略) 影向石（夢窓国師親秀に命じて観池亭を開くるの日、異人七人來つて其力を扶け、石を動し地を穿つて自由を得る事数刻なり。其名を問ふにかつて答ず、即日庭の観泉池成就し、白首老人此石上に坐して、曰我毎日こゝに影向すといひをはつておのく樹下にすがたを隠す。後に松尾明神を觀請す。ある時所の幼童に神託して曰、天照太神毎日此石上に影向すとぞ、此故に石を鎮守とす。一説には、国師此庭の石を疊ける時、僧老人來り大石をこゝろのまゝに動し、庭造即時に成。夢窓これを怪て問るれば、洛四条あたりの者としてひたすら夢窓の袈裟を望けり、則あたへられしかば、其かはりとして錫杖一枝残し置けり。後に四条住心院染殿地蔵の戸帳をひらけば、件のけさをかけながら錫杖なかりけり。今その錫杖は天龍寺にありとなん）		葉室西芳寺の林泉は、夢想国師こゝに止錫の時、洛陽染殿地蔵尊來現して土石を運び共に作りたまふ名園なり。その後応仁の兵火に荒蕪せしを、伏見の島之介てふ者作り補ふといふ。(図は『築山庭造伝』に見えたればこゝに略す)	

表 16 京都の地誌一覧

刊行年	西暦	書名	作者
明暦 4 年	1658	『京童』	中川喜雲
万治元年	1658	『洛陽名所集』	山本泰順
寛文 5 年	1665	『京雀』	浅井了
寛文 5 年	1665	『扶桑京華誌』	松野元敬
寛文 7 年	1667	『京童跡追』	中川喜雲
延宝 5 年	1677	『出来斎京土産』	不明
延宝 6 年	1678	『京雀跡追』	作者不詳
延宝 7 年	1679	『京師巡覧集』	釈良定 選
貞享元年	1684	『菟芸泥赴』	北村季吟
貞享 2 年	1685	『京羽二重』	水雲堂孤松子
貞享 3 年	1686	『雍州府志』	黒川道祐
貞享 3 年	1686	『近畿歴覧記』	黒川道祐
元禄 2 年	1689	『京羽二重織留』	水雲堂孤松子
元禄 3 年	1690	『名所都鳥』	不明
元禄 4 年	1691	『堀河之水』	富尾似船
元禄 7 年	1694	『京独案内手引集』	不明
宝永元年	1704	『宝永花洛細見図』	金屋平右衛門 編
宝永 3 年	1706	『京城勝覧』	貝原益軒
宝永 5 年	1708	『京内まいり』	守拙斎
正徳元年	1711	『山州名跡志』	釈白慧（坂内直頼）選
正徳元年	1711	『山城名勝志』	大島武好 編
正徳 4 年	1714	『都名所車』	不明
正徳 5 年	1715	『都すゝめ案内者』	不明
享保年間	1716 ～ 36	『山城名所寺社物語』	不明
宝暦 4 年	1754	『山城名跡巡行志』	釈浄慧
宝暦 12 年	1762	『京町鑑』	白露
安永 9 年	1780	『都名所図会』	秋里籬島
天明 7 年	1787	『拾遺都名所図会』	秋里籬島
寛政 2 年	1790	『京之水』	秋里籬島
寛政 5 年	1793	『都花月名所』	秋里籬島
寛政 11 年	1799	『都林泉名勝図会』	秋里籬島
文政 11 年	1828	『洛陽十二社靈験記』	松浦星洲
天保 8 年	1837	『都繁昌記』	因果道士（本名 中島棕隠）
嘉永 5 年	1852	『洛西嵯峨名所案内記』	峨山青護翁
文久 3 年	1863	『花洛羽津根』	
元治元年	1864	『京都土産』	石川明徳（清賞斎主人）
元治元年	1865	『花洛名勝図会』	木村明啓・川喜多真彦
明治 18 年	1885	『開化絵入京都見物独案内』	文字富之助編
明治 28 年	1895	『京華要誌』	京都参事会
明治 28 年	1895	『京都土産』	山崎隆
明治 29 年	1896	『京都繁昌記』	窪田修佐
明治 36 年	1903	『京都新繁昌記』	中川四明、森島城、赤毛布生
大正 4 年	1915	『京都坊目誌』	碓井小三郎編
大正 7 年	1918	『旧都巡遊記稿』	秋元春朝
昭和 7 年	1932	『京極沿革史』	田中弁之助
昭和 13 年	1938	『伏見叢書』	西野伊之助編

表 17 京都の地誌における庭園に関する記述一覧

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	〔ウ取〕 福寺	葛野郡四		太平記云彼ノ谷堂ト申ハ八幡殿ノ嫡男対馬守義親カ嫡孫延朗上人造立ノ霊地也云云奇樹怪石ノ池上ニハ都率ノ内院ヲ移シテ四十九院ノ樓閣ヲ並フ 〔かの谷堂と申すは八幡殿の嫡男、対馬守義親が嫡孫、延朗上人造立の霊地なり、奇樹怪石の池上には都率の内院を移して四十九院の樓閣を並ぶ〕
『伏見叢書』	昭和13年	1938	7編 人物誌	十一 小堀遠州	第四章 織田豊臣 徳川時代		中ニモ遠州ノ名ヲ不巧ニ伝フルニ至リシハ造庭ニシテ、大徳寺ノ孤蓬庵、江戸浅草ノ蓬萊園、桂御所等ハ其國治中ノ白眉ナリ
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	赤松岩	岩之部	葛野郡	天龍寺。妙智院の方丈の前に有。これ赤松氏の寄附せられし岩なりし。故に名づく
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	赤松岩	古跡門下	葛野郡	同寺、妙智院方丈の前庭にあり。伝へいふ、赤松氏の寄附するところなり
『出来齋京土産』	延宝5年	1677	7巻	秋野			下鳥羽の東にある岡山也鳥羽の離宮に帝おはしましける頃は絶景の築山にて春の花よりも秋の紅葉をことさらに池にさし入月までもながめしほに興ありければ秋の山と名づけられしとにや。後に寺となし秋山寺とてわづかなる岡山の残りしといふ
『京城勝覽』	宝永3年	1706		秋の山	第十二日南		鳥羽法皇の鳥羽の西南の離宮におはしませし時。御庭の築山なり。紅葉を植られしゆへ秋の山と名づく
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	秋山	離宮地		上鳥羽の南にありいにしへ 鳥羽の法皇離宮を此所にまうけ給ひ東庭に花木をうへ春光を愛し西軒に楓樹を植秋色を賞し南方暑氣をさけ北方雪のあしたをもてあそび給ふところ也今田畑となりて秋の山わずかに残りし其麓に寺有浄土専念の僧住居す
『都名所鳥』	元禄3年	1690	一巻	秋山	紀伊郡		鳥羽の法皇離宮此所にもうけ給ふ。東の庭に山をつき。梅さくらをうへて春を愛し西に楓一むらをかまへて。秋の夕をおしみ給ふ。南北の景色またいみじき離宮たりしも。年ふり時うつり。みなすかれて田となり。水あふれて沼となる。今わづか秋の山残り。彼田中の御所といへる所こそ。まさしく法皇の離宮のあとなれ。今わづか水石の跡あるも。氣うとし歌には 鳥羽 里 池水 庵 鹿 衣うつ 松 よめり 新拾遺 中國入道太政大臣 白鳥の鳥羽田のほなみ吹たてゝ守庵さむき秋の山風 同 祝部尚長 深き夜のとは田の面の鹿の声を遙に送る秋の山風
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	秋山	古跡門下	紀伊郡	上鳥羽の南にあり。かつて、鳥羽法皇、離宮をこの処に設けたまふ。東庭に山を築き、花木を植えて、春光を愛す。西庭に楓樹を植えて、秋色を賞す。各々その趣あり。今、ことごとく田疇となる。秋山、わづかに残り。その麓に寺あり。浄土専念宗の僧、これを守る
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	朝餉	殿舎		永昌記ニ嘉承元年十二月三日庚申月夜雪降深及六寸ニ主上於紫宸殿ニ覽雪ヲ朝餉壺并藤壺前庭ニ被雪山ヲ作雪山ヲ業資王ノ記ニ曰 承元五年閏正月三十日癸未今日於朝餉御壺ニ有 蹴鞠 〔永昌記に嘉承元年十二月三日庚申月夜雪降る、深さ六寸に及ぶ。紫宸殿に於いて深雪を覧たまふに、朝餉の壺ならびに藤壺の前庭に雪山をつくれる 業資王の記にいわく、承元五年閏正月三十日癸未今日朝餉の御壺において蹴鞠あり〕
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	愛宕十境			愛頂層樓 洛城春霞 龜山夏雲 高雄丹楓 叡峯晴雪 桂川長流 清滝寒月 広沢暮雨 水尾朝烟 月輪松涛
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	愛宕十景	十景		
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	安陪晴明宅	古蹟門上	愛宕郡	寛和二年六月二十三日の夜、花山院、ひそかに土御門の皇居を出でて、路、土御門町口晴明が宅の前を過ぎたまふ。時に、晴明、暑を避けて庭中にあり。にはかに掌を撃ちていはく、帝、位を退き、すでに皇居を出でたまふ。大変、これに過ぎず。すべからく車を韃ふべし
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	安倍晴明宅地	古宅地		いにしへ町口土御門にあり町口は今の新町通なり寛和二年六月二十三日の夜 花山院ひそかに土御門の皇居をしのび出させ給ひ晴明が宅のまへを通給ふ其時晴明暑氣をしのぎて庭中にありしが俄に天象星斗の座のかはりしを見て是ただ事にあらず
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	卷之一 平安城	天橋立			此地むかし祭近三位資近卿の殿舎にて、庭中に大きな池を掘らせ、天橋立の風景をうつし給ふ
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	卷之一	天橋立	東本願寺		（この館舎の中に、大寝殿小寝殿の名目あり。これを按ずるに、むかしこの地は祭主三位輔親卿の殿舎なり。その林泉に丹後の海橋立を移して、池を広く掘りて松を樹、風景うるはしく月を賞せられしなり。この事清輔の袋草子に見えて、寝殿の名目あり。後世当寺の社殿を建てられし時、この旧跡なる事を知つてかく名づけられし物ならん。輔親卿は歌人にて新古今集に撰ばれ和歌入りし人なり）袋草子云く南院は海橋立なり、輔親卿の家なり。月を見ん為に寝殿の南庭を差さずと云々。懐園が池水はあまの河にやかふらんとよむ、この所にての詠なり。月明夜にて行向へるに、夜更けて人もねぬらんと思ふに、寝殿の南面に輔親一人月を見て居て、時に相互ひに興に乗じてこの歌を詠む、曉更くるに帰ると云々
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	天橋立	海橋立		六条南室町東（一町）号六条院祭主輔親の家也連理樹ありなど拾芥抄に見へたり又南院ともいへり袋草紙云南院は海ノ橋立なり輔親卿の家也月をみむために寐殿の南の庭をば不レ差云々懐園があまの川にかよふらんとよむは猶此所なり月明夜かちにて行むかへるに夜ふけて人もねたらんと思ふにしんでんの南西に輔親卿一人月を見て居て相たがひに興に乗じて此歌をよみて曉更に帰ると云々此歌とは後拾遺集に 池水はあまの川にやよふらん空なる月のそこに見ゆるは 懐円法師 此歌の事なり 一十調抄云中大臣能宣の子祭主三位輔親の家也丹後の天橋立をまねひて池の中島をはるかにさし出して小松をながくうへなどしたりけり
『京雀』	寛文5年	1665	巻3	天橋立	下さかひ町	室町通	いにしへの町ひがし行一町を天橋立と名づく此所は祭主輔親の家也しその庭に連理の樹ありけりとにや
『京雀跡追』	延宝6年	1678	地	天橋立	下さかい町	室町通	いにしへ此町ひがしかわ一町をあまのはしたてと名づく此所二は祭主輔親の家なりし其にはに連理の木ありと云

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第25学区之部	天橋立	六条南院ノ跡	東魚屋町	東魚屋町より。上柳町。八百屋町に跨り。方一町の地なり。此院は神祇祭主輔親の居なり。略して南院と云ふ。林泉巨大にして丹後橋立の風景を摸せしと。輔親は大中巨能宣の子なり。和歌を能くす。輔親の女を伊勢の大輔と云ふ。一条帝に仕へし名婦なり。此院廃亡の年月を詳にせず。（参考伊勢大輔の墓は摂州古會部伊勢寺にあり。寺は大輔隠栖地にして。後に寺となりしもの。慶安の頃領主永井日向守直清碑石を建立し。林道春の撰文を刻す。寺に大輔の古画像及び鏡硯等を蔵す。古會部は能因法師も隠栖し。白川の歌を詠せしは此所なり。当時法師か茶湯に使用せし花井今猶存す。伊勢寺とは八九丁を隔るのみ）拾芥抄中巻云。六条ノ南室町ノ東ノ橋立有連理樹祭主輔親ノ家云云袋ノ草紙云。南院は海ノ橋立也。輔親ノ家為見月寝殿の南庇をは差云云懷門ガ『池水はあまの川にやかふらん空なる月のそこにみゆるは。とよむは於二此所一詠ル也。月明夜歩行にて行向へるに夜更て人もねぬらんと思ふに寝殿の南面に輔親一人月を見居て。于レ時相互に乗レ興詠二此歌一曉更に婦ルと云云（池水云々の歌。後拾遺集ニ載る）十訓抄巻九云。六条の南。室町の東一町は祭主輔親が家也。丹後の天ノ橋立をまねびて。池の中島を遙にさし出して。小松を長くうへなどしたり。寝殿の南の庇をは月の光いれんとて。さゝざりけり。春の始軒近く梅か枝に鶯の定りて。巳時斗来て鳴けるを有がたかく思ひて。それを愛する外の事なかりけり。時の歌よむともにかゝる事こそ侍れと告あぐらして（下略）山城名勝志巻五云。東本願寺ノ境内ニ旧跡アリ。東本願寺ノ被建テ後モ猶池ハ残リシ也云云。古老云其池ノ端ニ女数多并居テ針ヲ売シ程ニ池ノ側ノ針ト云シ今ハ池ヲ埋テ町屋立チ続キシママ大津路ニ出テ商ナフ也。サレド昔ノ名ニ付テ今モ池ノカハ針トハ云トゾ。又比迄六条ノ南室町與ノ烏丸ノ間ニ古柳アリ是則彼池ノ辺ノ樹也云云
『京之水』	寛政2年	1790	風之巻	天橋立	六条院	京城坊保	六条の北、室町の東、祭主三位輔親の家、池中に天橋立の風景を移す故に海士橋立と地名を称す。旧記に連理樹ありと云云。今東本願寺の池なり
『京羽二重』	貞享2年	1685	2巻	天橋立	祭主輔親御	旧地	室町通五条橋下ル二町目東がわいにしへ輔親御住給ひし跡也天の橋立と云し其庭に連理の木有しとぞ
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	3巻	天橋立	六条院	古跡	在六条南室町東一名海橋立有連理樹祭主大中臣輔親家摸丹後成相之景因名〔六条南室町の東にあり、海橋立と一名す、連理樹あり、祭主大中臣輔親家をもって丹後成相之景を摸す、よって名づく〕
『山州名勝志』	正徳元年	1711	18巻	天橋立	六条院		六条南。室町東号海橋立有連理樹祭主輔親家 愚按。南院六条北トアル疑ラクハ南ナル歟。然ラハ南院ト六条院ト東西ニ双ンデ為レ隣也。其故ハ清輔袋草子ニ南院ハ海工橋立也。輔親卿家也。為レ見レ月寝殿ノ南ノ庇ヲバ不レ差云云懷門ガ池水ハ天川ニヤ通フ覽ト読ハ於レ此詠ズルナリ云云南院後ニ輔親領ジテ一境ニシツル歟実記未レ考。〔六条南。室町の東、海橋立と号す、連理樹あり祭主輔親の家 愚按。南院六条北とある、疑わらくは南なるか、然らば南院と六条院と東西に並んで隣をなすとなり。その故は清輔袋草子に南院は海工橋立なり。輔親卿家なり。月を見るために寝殿の南ノ庇をば差さず云云、懷門が池水は天川にや通うらんと読むはここにおいて詠ずるなり云云南院後に輔親領じて一境にしづるか、実記未だ考えず〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	天橋立	六条院	洛陽部四	十訓抄云六条ノ南室町ノ東一町は祭主三位輔親が家なりけり丹後の天の橋立をまねびて池の中島を遙にさし出して小松をながくうへなどしたりけり（東斎隨筆同、之）袋草子云南院は海橋立也輔親卿ノ家為見月寝殿の南庇をば不差と云々懷門ガ後拾遺池水はあまの川にやかふらん空なる月のそこにみゆつはとよむは出テ此所ニ詠也
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	天橋立	六条院		六条南室町東祭主輔親第也号海橋立摸與謝浦見十訓抄〔六条南室町の東、採取輔親第なり、海橋立と号す、與謝浦を摸す、十訓抄に見ゆ〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	天橋立	六条院	古蹟門上愛宕郡	六条の南、室町の東。天橋立と号す。連理の樹あり。祭主輔親が家なり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	二巻	有栖川	葛野郡		歌には斎宮 草花 衣うつ 行幸 千鳥 岩松 舟岡 松虫 庭 よめり千載賀 京極太政大臣千はやふる斎の宮の有栖川松とゝもにぞ影はすむべき
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻上	有栖川	愛宕郡一		五社百首 俊成有栖川いつきの庭の秋の花ちよをかねたる松虫の声
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	安祥寺	寺院門下	宇治郡	庭に、青龍水あり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	安古是池	池之部	愛宕郡	御水尾院の御園に有。むかし阿古是といへる女の庭の池なり。よつて名づく。御水尾院の御宇。池に柳の大なるありしを。景つくらんために切時。ふしぎや柳が恨より血ながれ出。一尺あまりの蛇みへて行がたしらずなりにき。柳をきりし人夫三人其夜の夢に。我は是阿古是が池にすむあるじなり。其柳をもつて観音の像をつくれといひおはつて。形なし三人の夢一々かたり合せ。申次つたへて終に奏聞におよぶ。後に洛中名誉の仏工等におぼせて。数の観音の像を彫ましむ。今其重像諸国に有。此池よりあがりたまひ五条寺町。等善寺にありと云
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	安養寺八景			天王祠 將軍塚 北斗堂 西行庵 芳水井 菊浜流 華頂山 長楽寺
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	池亭	洛陽部四		本朝文粹（池亭記天元五十月家主保胤自作自書）予六条ノ以北ニ初ヲ荒地ヲ築キ四垣ヲ開ケ一門ヲ云云地方都盧十有余畝就ハ隆為一小山ヲ遇ハハ窪ヲ穿ニ小池ヲ池ノ西ニ置キ小堂ヲ弥陀ヲ池東ニ開ケ小閣ヲ納メ書籍ヲ池ノ起テ低屋ヲ著妻子女ノ凡ノ屋舎十ノ之四ニ池水九ノ之三ヲ菜園八ノ之ニ田七ノ之一ヲ其外緑松ノ嶋白砂ノ汀紅鯉白鷺小橋小船平生ノ所好盡在ニ其中ニ（われ六条の以北に荒地をとし、四垣を築き一門を開く云云、地方都盧十有余畝たかく就ては小山をつくり、窪がなるに遇いては小池を掘る、池の西に小堂を置きて弥陀を安し、池の東に小閣を開きて書籍を納む、池の低屋を起きて、妻子女をつけり、おおよそ屋舎十かの四つ、池水九の三つ、菜園八かの二つ、芹田七かの一つなり、そのほか緑松の島、白砂の汀、紅鯉白鷺小橋小船、平生の好むところをつくし、その中にあり〕

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『雍州府志』	貞享3年	1686	6巻	石	土産門上	土石部	およそ、山城国処々に出づるもの、雑品あり。上栗田・北白川の山、土中ことごとくに白石なり。村民、農業の暇、石工を事とす。故に、その用に随ひてこれを所り取る。大に鑿り採るものは、長さ二三丈に至る。およそ、朝廷宮殿の柱礎、隨廊溝渠の堺石、ならびに石壁・石橋・井欄・礎石・碑碣・石塔等の物、これを用ひざる無し。その鑿り穿つ時、砕け散るところの砂石、至りて白し。これを白砂といふ。禁延および行路にこれを敷きて、道を清む。これを砂を撒くといふ。高貴米臨の処、門前左右、門前左右、各々一堆、高く砂を盛る。これを立砂と号す。また、北白川山の北、浄土寺山ならびに鹿谷に、一種の石あり。その状、多くは平夷にして、浅紫色なり。庭園に置くに宜し。洛北、高野川の石、その色青く、その状堅硬にして沈重なり。しかして、砂礫の累ひ無し。故に、酒店、酒糟を搾る時、この石をもつて酒囊の上に貼し、桶をその下に置きて、その汁を承く。また、山科郷小山辺、大石多し。その色、紫黒なり。方広寺大仏殿の樓門左右の石壁、多くはこの処に採れりといふ。西山嵯峨、大井川の石、その状、大なるものあり。その色、純青にして、まま白衆あり。仮山に置くに宜し。また、その小なるもの、礎に宜しきものあり、あるいは盆に安ずるものあり。洛東、清閑寺山の石、高低磊落、おのづから峯巒の体勢あり。かつ湿润にして水氣を含む。自然の凹処、樹木を種ゆるに堪へたり。水を平盆に貯へ、その内に安ず。これを盆山と称す。座上の観とす。また、小なるもの、おのづから峯巒の体勢を存するものあり。白砂を盆裏に敷き、その上に安ず。これを盆石といふ。多くはその名あり。故に、あるいは名石といふ。白砂を盆の中に撒く、俗に、打つとおいふ。言ふことは、打ち成すの謂か。これを打つに式あり。およそ、石の大小、峯巒の体あるもの、仮山に置く。その、これを経営する人を、庭作りと称す。また、大小石面平らかなるもの、露地に比置す。賁主、次を取り、これを踏みて超え行く。これを飛石と称す。倭俗、家園を露地といふ。およそ、飛石の安排・布置、多くは好事の茶人を倩ひてこれを置かしむ。これを、露地を作るといふ。また、石を直すといふ。倭俗、万事の布置宜しきに違ふを、直すといふ。正直たらしむるのか謂か。また、露地に敷くところの青小石、これを青石と称す。荒神河原ならびに二条河原の人、これを扨り拾ひて、その求めに応ず。近世、河辺の砂石を取り、竹簍をもつて篩ひ過し、大小斉しきものを取りて庭園に撒く。これを豆砂といふ。その形状相似るをもつて、これを称す。また、洛西、紙屋川の赤小石、園に敷きし可なり。これを紙屋川石と称す。この外、近江国木戸石、紀伊国の海青石、摂津州の御影山の石、備前国の小豆嶋石の類、ことごとく二条河原においてこれを売る
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	2巻	石神			上立売大宮通の西に石神あり。往古二条御城の南にありて。本体は石也。其石の景よりければ。内裏に引よせ。築山にをかれんとするに。此石大に吼ければ。八条宮の築地のもとに捨られしを。奇特の事有とて。石神と名づけ此所にあがめけり。女の乳の出ざるに。いのりぬれば。乳よく出るとて。乳母保母等ふかく信仰すといふ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	石神			聖天の西釈迦堂の東三町に有禿童石と号す本は後水尾院の御庭に有しを妖怪をなすきこへ有て今出川の南今の八条殿の築地の辺に引出さるゝに獮妖怪やまで禿童と化して夜行すなど人おそれければ寛永のはじめ此地にうつさる
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	和泉式部井	井之部	愛宕郡	むらさき野大徳寺の中。真珠庵に有。此地いづみ式部がすみし所の井なりとて名づけたり。今に有。一休宗純又此井を聖泉ともいふ。此井の名宇治の郡にも有
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	出雲寺			一字治拾遺物語略曰かみついても寺は伝教大師天台宗を立給はん寺地を撰給へるに高雄比叡上出雲いづれかいづれとありし所也其寺いたく古傾ふきて修理する人もなかりしに別当上覚夢に父大なる鯰となりて此寺の瓦の下の水たまりたる所にありとみしに雨風しきりにして寺たふれにければ彼水にすみし魚いくらもなく庭にはひまよふ大なるなまず上覚の前に来るをやがてとらへて彼夢に見し事をうち忘れてきて煮てくぬぐうちに思ひ出てこと鯰より味よきは故御所のしゝむらなれば也
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	15巻	一乗寺			予昔詩二志アリテ年ヲ経ケルニ。東楽御門主嚴命アリテ覚成院ニ介セラシ。梅閑ノ深香ヲ搜リ。嘯月ノ高き檐ニ調シテヨリ。ヨリクノ詩話ニ入ケル。去トシト計音ヲ聞キ幸ニ上リテ石川氏ナル人ニ牌前ヲ尋ケルニ予ガヲ引テ。庭ヨリ岸下青苔ノ平地ニ行ニ。微君ノ神主アリ。折フシ五セノ忌日ナレハ。猶モヒタスヲ禮ヲナシ。生前ノコトハモ思出シ。スヘロニ泪ヲナガシ侍ル
『京町鑑』	宝暦12年	1762	横	一条通			鏡石町　此町に昔鏡のごとく光る奇異なる石有しゆへ号とす此石太閤秀吉公禁庭へ献し給ひけると申伝ふ今は此所になし
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	井手里	別荘地		山城玉水の南也いにしへ橘の諸兄公の別荘此所にして水石の跡今にあり山吹の花わづかに残れり又井手の蛙此里の南御園浦にあり鳴声他所の蛙とは異なりとぞ
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	井出里	古跡門下	同郡東より南に至	玉水の南にあり。敏達天皇の胤、美奴王の子、橘諸兄公の別業、ここにあり。水石の跡、今に存す。
『都名所車』	正徳4年	1714		稲荷社			十一月八日ふいご祭は神前に火をたき神事とす庭火といふは是なり此月は諸神に御火たきあれ共わきて当社はつきぐし
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	稲荷山八景			三峯春眺　浮橋夜月　恵日曉鐘　草塾晚霞 雪〔山巖〕暮雨　瀑布余音　前溪紅楓　西山霽雪
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	稲荷山八景	八景		
『洛陽名所集』	万治元年	1658	8巻	岩陰			式部大輔資業歌に。岩かげの煙を霧に分兼てその夕暮の心地せしかな。余が世外の友ゝに小舎をかまへ山などもてり。さ有ゆへ。折く遊歩しける次で見侍るに。二つの大石立並たり。岩門と云。むかしの愛宕足なりけるとぞ。大なる礎石ほりいだせる有
『雍州府志』	貞享3年	1686	補遺	引接寺	愛宕郡	寺院門	方丈の前庭に、普賢象の椀あり。毎春、花開く時、住僧、枝を折り、所司に献ず。すなはち、米三斛余を賜ふ。これをもつて、十日念仏会の資料とす。この念仏会、壬生地蔵寺の会式と、ほぼ相同じ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	院應定直宅		洛陽部四	二水記云大永六年九月二十九日詣壬生/地蔵堂。此/次六条本國寺院/應定庭等見物了。此/庭當時無双/之古木石也。世人人含ルノ見物之庭也 〔二水記いう、大永六年九月二十九日、壬生の地蔵堂に詣す、この次六条本國寺院の應か庭など見物しおわんぬ、この庭当時、無双の古木石なり、世人こぞって人見物令るの庭なり〕
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一平安城	上善寺			方丈客殿等の庭中真妙にして奇石麗樹多し、中にも藤の棚連ね組て弥生の美観とす
『京之水』	寛政2年	1790	麟之巻	右近橘	殿舎并二皇居内門		同じき階下にあり。御階橘ともいふ。遍年集成曰此樹は原橘大夫と称するものゝ後園の木也。枝葉あらためずして天徳の末に及ぶなりとぞ。又小一条左大臣記曰橘本主は泰保国なりといふ。 延文百首 つかへきてみはしの右も近つきぬ花橘よくゝろしてまて　藤原実俊
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	右近馬場	葛野郡部一		京花集〔天神賛　横川〕手ニ捧グニ金襴ヲ一曉日紅ヲ鳥頭簷面接ス吾公ニ梅花写ス影ヲ龍淵ノ水石近ノ馬場春夢ノ中〔手に金襴を捧ぐ、曉日紅なり、鳥頭簷面わが公に接す、梅花影を写す、龍淵の水石近くの馬場春夢の中〕

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述	
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	宇治		源氏物語の末に宇治十帖として侍るは光源氏の御弟の八宮世をいとふやうにて宇治にすみて俗ながらひじりのをこなひておはしければうばそくの宮と申せし御むすめ大君中君とて二所おはせしいづれもとりにみめかたちすぐれ給へるに薫中将うばそくの宮に俗ひじりの法の教をしたひてとふらひおはせし晩大君中君琵琶ことしらべてあそび明し給へるに有明の月の雲間よりさし出しを大君ひはのばちをあげて扇ならでも月は是にてまねくべかりけりとの給ふに中君争にをかしかりながら入口をへす撥こそあれさまことにもおぼしよりける御心かなとの給へば大君されども月にはなるゝ物かはなどはむれかはしておはするを露の離より薫中将さしのぞきて浅からず御心しみていひかよ給ひしに中君は匂兵部卿の宮北方になり給ひ大君ははかなくうせ給ひつるのち八宮のわとりばらの御むすめ手習ひの君と申せしを薫中将宇治にかくしすへて大君のかたみにおもひなして時々かよ給ひしを匂兵部卿聞出玉ひて薫のまねしておはしめて御心さしふかゝりに其事あらはれて手習の君いけるかひなく嘆き給ひてうち河に身をなげんとし給ふを物のけとりまいらせて宇治院の庭の木陰に捨置しを横河の僧部のいもうとの尼君初瀬にまうでの帰さに此所にやどりあはせて手習ひの君を見付て	
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	宇治十二景	十二景	春岸餘〔西廊〕 清湍螢火 三室紅楓 長橋曉雪 朝日露輝 薄暮柴船 橋姬水社 釣殿夜月 扇芝孤松 横島曝布 浮舟古祠 興聖晚鐘	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	8巻上	太秦	葛野郡部一	古語拾遺ニ云秦ノ公祖弓月率ヲ二百二十縣ノ民ヲ而歸化セリ矣漢ノ直ノ祖阿知ノ使ニ主シ率ニ十七縣ノ民ヲ而來朝セリ焉秦漢百濟内附ス之民各々以テ万ヲ計ツ足リ可ニ褒賞ス皆有其祠宋ノ預幣ノ例ニ也云云至テ長谷朝倉ノ朝秦氏分散寄隸他族ニ秦ノ公進仕蒙ル龍詔ノ歿テ秦氏ノ賜ヲ酒ノ公ニ仍テ秦ノ領ノ百八十種勝部ノ蠶織貢ヲ調テ充テ積庭中ニ因テ賜テ姓ヲ宇豆麻佐ト	
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	6巻	梅宮		わが屍をば此野にすてよあなかしこ葬すなどおほせられしかば。そのごとく草原に打すてまいらせたり。これは御かたちのうつくしかりけるもつみにかゝる事ぞときたなくうつりゆくありさまを見せて世の人の色におちいることをとゞめんためとかや野中にすてをき奉りしかば雨にうたれ月にさらされやさしかりける御かほばせの色かはり肪服〔广貴〕うげて柳の髪は茅が根にまとはれ蛆わき。腸やぶれ風にをくるにはほはくくさき事かぎりなし。日ごろに心をかけまいらせし人も。袂をかほにあてゝ見たてまつることもなし。かくて犬狼のあつまつ。鹿からすのむれみてくらひあらそふて引ちらしける。御拳のひとつのこりしをもとめておさめ奉りしその所を今も一拳と名づく又拳宮とも申すとかや。世にいひつたふ此宮の庭なる砂をとりて産屋の下にしけばかならず平参しでやすし	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻下	梅屋軒	愛宕郡一	宗長記云道通院殿訶ニ云宗長我心を見侍る物ならし真珠庵梅屋作事奇麗折ふし旅宿又竹の縁東西ぬれ縁にして手洗所の水門石四五たてゝ梅に椿世つゝし椿そへてすな入させて涼しけにぞありし	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	雲居菴	葛野郡三	園太暦云（中略）（○今雲居菴庭中古松下有・形山石・）	
『洛陽名所集』	万治元年	1658	8巻	雲林院		本より花にめでやるしなつきず娟々蘭々とのべしは。げに思ひあたり。楊國忠が移春檻はいかほどの興をかつくしけん蘇軾が旧春を偷出などいへるは。おもしろ聞えぬ。虞公が酒にふし。冠華が庭上に日を暮しけるも。さることなれ。邵堯夫は松栢もおよぼじ賞し。侍り	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻下	園池	洛陽郡一	〔拾芥抄云本司今為ニ内膳別所ニ大宮西一条北一条面半計西或云荒廃堂計一云枸杞園〕 〔〔拾芥抄い本司今内膳別所のために大宮西一条北一条面半ばかり西にあるという、荒廃堂ばかり一いう枸杞園〕〕	
『都花月名所』	寛政6年	1793		円通寺	藤	庭中の景勝妙にして紫藤の棚あり。大悲門通の額は御水尾院の宸筆也	
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	13巻	圓通寺	北内魚山行記	大慈山圓通寺ニ入ル、寺主性通出迎フ、日ハイマタ未ノ刻也、直ニ歸京ノ志アリケレトモ、性通頻ニ仰留セラレケルニヨリ一宿ヲ約ス、折節観音ノ会日故二本尊開帳アリ、即チ拝シ圓光院文英尼ノ雕像ヲ一覽ス、其ヨリ客殿ノ一間ナル所ニテ閑談ス、既ニシテ庭前ノ笋吹冬ヤウノ物調味シー飯ヲ設ラル	
『拾遺地名所図会』	天明8年	1788	巻之三 後玄武・右白虎	圓通寺	大悲山円通寺	都て此地の庭造小堀遠州の好にして、東の方より、比叡山を庭中へ採、奇景神妙にして、盤陀石といふ名石あり	
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	円徳院		高台寺の塔頭にありて木下氏の寺なり此院の前庭の桜東山第一の木たち也三侯にわかれたるほど八九間ばかりや有けん白妙の花盛は雪の山のごき出たらんやうなり	
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	御池	名池	三条坊門に御池の町ありいにしへ此所に鴨居殿とて御所あり其庭の水きはめて清ければ近隣の人没しとなり	
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	御池跡	仮山地	室町二条の南にありいにしへ二条殿此辺に有て庭に飯山をまふけ池水又清冷也夏に至りてかならず其瓜を池にひたし禁裏に献ぜらるゝとの居此所にあらずといへ共御旧例によりて夏日瓜を献上有りとかなぞ古への御池の跡而替町久米氏の後園にわづかに残れり	
『京町鑑』	宝暦12年	1762	横	御池通		中保利町 古老曰此西島丸の辻に石橋有此辺古二条殿御別荘にて御泉水の上に鶯の橋といへる橋有し今猶続是をよび伝ふ 神泉苑門前町 此町北側に西宝寺といふ真言宗の寺あり其西神泉苑也此所往古は天子御遊覧の処にして古耽臨園といふ所有て巨勢金岡水石をたゝむ此池は元南北四町（二条より三条迄）東西二町（大宮より厘まで）通りに洛中に課せて柳を植させられし事などありし時に建武の頃より此所荒廢し承久の乱後廢亡して跡だになかりけるを元和年中筑紫の僧覚雅といふ人申請て再興し仏地となせり	
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	御池町	古蹟門上	愛宕郡	古へ、二条殿この辺にあり。庭に飯山を設け、池水、築廻す。この水、至りて清冷なり二条殿、盛夏に至るときは、甜瓜を漬けて禁裏に献ぜらる。今、第宅この処にあらずといへども、旧例によりて、夏日、甜瓜を献ぜらる。古への御池、今わづかに残りて、両替町久米某の後園にあり。古へ、池殿に十景あり。いはゆる水明楼・梅香軒・御欄園・蔵香閣・政平水・古霊景・緑楊橋・観旧台・洗濯台・龍躍池、これなり。一説に、この地、もと尊氏卿の庭池にして、今、御池氏と称する者、その裔なりと。しかれども、この説、信ずるに足らざるものか
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	8巻	往生院*	嵯峨行程	三宝院瀧口カ跡ヲ尋ヌ、此ノ北ノ杜ニ、新田義貞ノ愛妾匂当内侍、忍ヒ居ケル跡ノ傍ニ、義貞ノ社アリ、往生院ニ入ル、善峯寺第二世、觀性法橋草創ノ後、中絶発塚久シ、縁起ハ今京師曇華院ニアル由ニテ、当寺ニナシ、老尼一人閑居ノ体、殊勝二兄ニ、庭隅ニ塔アリ、妓王妓女并ニ母刀自力名ヲ鐫リ付ク、傍ラニ大ナル塔アリ、是レ清盛入道淨海ナリ	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻下	大内義隆亭		五鳳集（於大内義隆公私第一見高麗芍薬 策産）駐ル、春ハ紅葉似テハ紅顔ニ年少叢辺転往還ス今古難花以人ヲ類ハ三韓移りて一庭ノ間ニ 〔春を駐める紅葉紅顔に似たり、年少叢辺転往還す、今古花といえども人をもつてあらわれる、三韓移りて一庭の間にあり〕	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	8巻下	大江佐國宅	葛野郡部二	長明発心集云或人円宗寺ノ八講ニ参ツタリケルニ時マツ程其アタリ近キ人ノ家ニ立入タリケルガ其家イト広モ非ズ庭ニ前栽ヲエモイハズ木共ウヘテ色々ノ花カズツクシテ錦ヲ打ヲホヘル如ク見エタリ 〔ある人、円宗寺の八講に参りたりけるに時待つ程その辺り近き人の家に立ち入りたちけるがその家いと広くもあらず、庭に前栽を得ても言わず木とも植えて色々の花数を尽くして錦を打ち覚える如く見えたり〕	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	大江ノ公資ノ家	洛陽郡四	袋草子云能因ノ古曾部より毎年花盛に上洛して宿ニ大江公資ニ五条東洞院家ニ件ノ南ノ庭ニ桜樹あり為メ能因ノ其花ヲ 〔能因はこそより毎年花盛りに上洛して、大江公資が五条東洞院家に宿は、くだんの南の庭に桜樹あり、その花をもてあそばんがためなり〕	

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	15巻	大原		獨りスモオボロノ清水友トテハ。月ヲゾヤドス大原ノ里。コノウタ寂然大原ニ住侍ケルニ。高野ヨリ西行山フカミト云コトヲ上ニ置テ。十首ウタヨミテ遣シケル返事ニ。大原ノ里ト云コトヲ下ノ句ニ置テ。又十首ヲヨミテ遣トナン。今ハ真隠アタリニミヘズ。道ワケテ尋ル人ノナケレバイク重モツモレ庭ノ白雪ト。寂然ガノベシモ心ボソク。雅方ガ為ニ閉庵テ。時雨モル薙リノアハレサヲ。人ニ見セタキト云シ。コノ辺リ遠カラジト詠ムルニ。シツノメノ多ツレダチ。衣ノ雪ヲ打払ヒ。黒木○ヲイタキテ京ヘ出ルモ猶哀レシ
『洛陽名所集』	万治元年	1658	7巻	大原		和泉式部歌に。世をそむくかたは何こも有ぬべし大はら山は住よりきや。寂然法師。此里にすみける時よめる。尋きて道分わぶる人もあらじいくへもつもれ庭の雪
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	5巻	大原山		山家集 山かせに峰のさし栗はらくと庭におちしくおほはらの里 寂念
『都名所鳥』	元禄3年	1690	一卷	小倉山	葛野郡	往生院といふ寺あり。はじめ観性法橋の草創にして。そのゝち尼寺となる。本尊は弥陀なり。平の清盛公の寵愛ありし妓王妓女。もとは凡夫とうたひし。仏御前のすまれし所也。庭に清盛公の塔。此三人の尼達の塔もつくくならびおはします
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	押小路殿	洛陽部三	日工集=云康永二年八月八日赴 _二 二条殿 _一 =入 _テ 自 _リ 西門 _一 =巡 _リ 視泉園池亭水石 _ヲ =其 _ノ 美 _ヲ ル _ヲ 不 _レ 可 _レ 勝 _ニ 言 _フ 〔康永二年八月八日二条殿に赴く、西門より入りて泉園池亭水石を巡り見る、その美なるをあげて言うべからず〕 思ひのまゝ日記=云 六月二十日比いとあつきころなれば泉もてあそび給ふとて二条の家に御幸ありあるじの殿たちけいめいせらる云云山のすがた水の心ばへいとおもしろしひんかしにたかき松山あり麓よりわきうづる水のながれ松のひゞきをそへていとすし水のうへに二かいをつくりかけたれば座の中をながれゆく石間の水さながら袖ひつばかりなりながれのすゑの池のすがた入江く島ぐのたゝずまひいとおもしろし西のすへに山をへだてゝ五尺ばかりの瀧おちたりたきのうへにつくりかけたる二かいのさまなど山里めきていとおかしうみゆ (中略) 御返事 中御門宣胤 この庭に君を見るよりその君の面影もたつ池の藤浪
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之五	男山		茶臼の善法院の林泉は小堀遠州、滝本坊昭乗翁の兩作なり。庭中に太子形といふ手水鉢あり、また遠州好の茶亭もあり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	12巻	小野山庄	愛宕郡部二	本朝統文(中略)城東有一名區 蓋 _シ 尚書左中丞 _ノ 之別業 _{ナリ} 也勝形奇秀甲 _{ナルノ} 於天下 _ニ 之地翠嶺紅林更留 _ム 綾錦山 _ノ 之秋 _ヲ 石台水閣如 _シ 移 _{スル} 蓬萊洞 _ノ 之月 _ヲ 云云 無題詩(中略)忽 _ニ 出 _テ 洛陽 _ヲ 感更 _ニ 催 _ニ 山家 _ノ ノ俗訪 _ヲ 相来 _ル 塙 _ニ 樊 _ニ 後苑 _ヲ 唯 _ニ 紅樹 _ノ 席展 _{ハレ} 前庭 _ニ 是 _ニ 緑苔 _ニ 〔本朝統文(中略)城東に一名區あり、蓋し尚書左中丞の別業なり、勝形奇秀において天下に甲たるの地、翠嶺紅林更に綾錦山の秋を留む、石台水閣蓬萊洞の月を移すがごとし云云 無題詩(中略)たちまち洛陽を出て、感さらに催す、山家の土俗訪ねて相来る塙は後苑をかこう、ただ紅樹席前庭に展るは、これ緑苔〕
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	御池	池之部	愛宕郡 室町二条の南に有。むかし二条殿此ほとりにあり。庭に山を築き。池をほるに水きはめてきよくひやゝかなり。二条殿夏は瓜を此水に浸してかならず禁裏に献る。今宅其所になしといへども。古き例にしたがひて夏瓜をたてまつる。むかしの其古池今わづかに残て。兩替町久米の某が後園に有。此池はもと尊氏公の庭の池なりと云
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	鏡石	名石	一条通ほり川にしへ入二町めいにしへ此所にかがみ石とて名石ありしを太閤秀吉公禁裏へ奉らせ給ふ也此町いまにかがみ石のと云
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	6巻	鏡岩		昔大宮准后貞子(鸞尾大納言隆衡卿女)のすみ給へる跡水石をたゝめる所の名残とぞ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	3巻	賀儀	旧例	珍皇寺は建仁寺の南にあり弘法大師の開基にして元葬場なり小堂に小野の皇の像を安置せり庭に石地像あり世に六道と云今建仁寺の内大昌院此寺の事をしる大昌院は天隠の住せし所なり此院の住僧毎年東寺に使僧をつかはし年頭賀儀をつとむ是珍皇寺を兼る微意也
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	3巻	神楽岡		紅花ノ時節似 _キ 庭燎 _ニ 。 〔紅花の時節、庭かがり火に似たり。〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻上	花山院	洛陽部二	著聞集=云 貞信公なづめをあいしまりけり式部卿親王の家によきなづめの木有けり其木をおろし枝にせられて手づから花山院の北ノ対の妻戸の庭前に植給けり是によりてその木左右なき名木にていまだあり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	攝社		一御池社 大田の東に在(本二条殿の御池の鎮守にて其屋敷におはせしを今の家主久米氏兩替町の後庭よりこゝに移し奉る在家に神威を恐れて也)
『都花月名所』	寛政6年	1793		桂里	賀月	大堰川の下流をこゝにては桂川といふ。此地京極殿の御領にして別荘あり。庭中微妙也。世に名高し。都て此川のほとり風色いみじくして月を賞するの名勝也
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之五	桂山莊園林堂		伝云、初めは豊太閤の指麾して小堀遠州の造れるとぞ、洛西林泉の冠たるものなり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	桂山庄	葛野郡四	園林堂(額後水尾帝宸翰) 黄葉集詞書云寛永の比にや八条智忠親王都のにし桂としてしろしめす所あり先の宮の御時よりかりの庵をたてをかれし其所しつらひ物せよとて御みづからもいくそたひわたりましくたくみづかさめて様くの亭園山を築石をたゝみならへ桂川を分て水せき入らる花の辺島のご系山の木たち中島わたりめつらしうみゆ

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		桂離宮			天正年中豊臣秀吉 正親町天皇の皇孫陽光院の第六子智仁親王を請ふて猶子と為し、八条宮と称し奉り、為めに別墅を葛野郡桂の里に築き、小堀遠守に命じ殿舎林泉を經營せしむ。遠州の命を受くるや豊公に約するに三事を以てす。一に労費を吝む勿れ。二に成功を急ぐ勿れ。三に成功に至るまで来る観る勿れ。此三事を守るに非ざれば名苑成り難し。公之を諾し約を守り違はす。遠州乃ち其徒弟、出納大藏少輔山科出雲守、倉光日向守、玉淵坊等と考案を擬し、秘鑑を尽くし、数年にして經營せしものなれば、其台殿・亭舎・林泉の布置皆な完全適宜にして且つ一も支那流を交へず順善たる日本思想より成りたるものなれば自ら優越にして品位高尚、実に日本全国中第一の名園と称するも亦た宜なり。後年智忠親王復た遠州に命じ林泉の増築あり。寛永年間御幸殿新御殿等の新設あり。爾來相伝てて桂宮の別墅なりしが故、一品淑子内親王薨去の後明治十六年九月改めて離宮と為せり。而して其地域の総面積は一万三千百七坪なり。今茲に宮殿亭榭及林泉の概略を記せむ。 (中略) 御車寄 東向面なり。前に遠州好みの飛石あり、真の飛石と云。内に大石の沓脱きあり。六人の沓を駢ふるを以て六の沓脱きと称す。其意匠風流を極む。(中略) 古書院 (中略) 又た東に向ひ庭上に突出したる方二間許の竹椽あり、月見台と称す。即ち観月のために設けたるものなり。 (中略) 亭榭及び林泉 此林泉は人工の巧妙を窮極し宛然として天為の如く四方正面に作りをしたあるものなれば、何所より記し始むべきを知らずと雖も、今仮に月波楼を以て之が中央となし同樓より順次記載すべし月波楼は御殿の東北数歩の小高き所にありて東南に向ひ、池面に映する月を眺望するに宜しきを以て楽天の詩句に取り名けしと云ふ、即ち此に其の詩を掲ぐ。 湖上春來似画因乱峰圍繞水平鋪松排山面千重翠月点波心一顆珠碧簷綫頭抽早稲青羅〔君巾〕展展新蒲未能施得杭州去一半句留足此湖 (中略) 西南の所に鎌形手水鉢あり。同所を出て小橋を渡る所南の方池中に突出し角地あり亀甲と名く。其対岸にある阜を江葉山と云。昔は此前より松琴亭に至る朱欄の大橋ありたりと、而して今は只礎石のみ存せり。更に幾十の飛石を伝へば淡雅なる待合あり、外腰掛と云。傍に二重樹形の水鉢及び砂雪隠あり。前面を蘇鉄山と称す。此樹は島津氏の獻じたるものなり。同所を過ぐれば一の石橋あり。其東にある樹林中に簾の滝と云あり、桂川ヲ御池へ堰き入るゝ所なり。夫より池に沿ひ歩を進むれば一阜あり、外山と為す。其頂に四腰掛あり、九尺四方の萱葺屋土間にして四方に各一の床を架し卍字形を為す。其素樸なる中に妙味あり。此休憩所を下れば新川と名くる細流あり。其所の橋を渡り再び池辺に到れば石橋の横はるを見る。長さ三間八寸、幅二尺余、厚さ一尺許、白川石にして加藤嘉明の進献せしものなりと云。橋を渡りたる所池中に飛石三四を泛ふ、之を流れの手水と云満つるが如く損くが如く有無の間に勞弊として余詼嘲々作意可掬なり。更に北方を望めば池中に島嶼三箇竝立し二の石橋を架す、天の橋立と名く。島中に馬関石屹立す、加藤清正の進献なりと云。直に歩を転じ阜上に登れば則ち松琴亭なり、当亭は國の南方高所にありて斎宮女御の御歌に「琴の音にみわの松風かよふらしいつれの緒よりしらへそめけん」其御歌の意より如此名けしと云、東傳風に、後陽成亭の宸翰松琴亭の額を掲ぐ。(中略) 松琴亭の西の中島に土橋を架す。其下を蛭谷と云、夏夕螢火の多きに由り名けしと云。又た此近傍の水中に河得多く其花紅にして世に珍奇なるものなり。土橋を過ぎ右折すれば大樹の亭たる中に螢の燈籠と云あり、其火の山下の池中に映するを以て名とす。家仁親王の御詠に「池ひろみうつれば水の螢かともわかふもあかぬ夜半の燈」。西南の阜上に亭榭あり、賞花亭又は竜田屋と称す。亭後は桜樹多きに因り賞花の名を付し、又た紅葉の節も風景佳きを以て竜田屋と称すと云。(中略) 亭前に玉子形の手水鉢あり。同中島の西方に方三間許の八稜形の堂あり、園林堂と云、桂宮御歴代の影像及び靈牌を安置せし所にして智仁親王の御世に建營したるものなり。(中略) 堂前に石燈籠二基あり、又は池辺に桜樹一株あり、其花重弁にして奈良の都の桜の種より生ぜしものなりと云。けふ九重に匂ふのみか御園に生ふる其花は幾千世かけて盛らむ。此所より朝鮮石の橋を渡り路傍の西の高所に五徳燈籠を見笑意軒に至る。(中略) 軒前に舟着所あり、其傍に淡雅なる石燈籠あり、三光と名け日月星に形どりて舟の出入りの標となす。又た軒後は漠々たる田野の西山の麓に連るありて其眺め悠々たり或は老杉の森々たるあり或は古松の偃蹇たるあり又たは脩竹たるあり、忽ちにして狹隘幽暗忽ちにして平遠縹緲造庭築樹の意匠終変幻廻り無く繋からず粗ならず真に端倪すべからざるものありて造化の助を凌がんとす。且つ經營せしより殆ど三百余年の星霜を歴たれば古色蒼然として更に風致を添ゆ。右に記載する所は当林泉及び亭榭の大略なり。茲に池の面積及び庭中に散在する最もなるものゝ数を示し、且つ二三の燈籠手水鉢の略図を掲ぐ。即ち池の面積二千零三十四坪、島嶼十余、亭榭七棟、橋梁十六、燈籠二十三、手水鉢八箇なり。
『京都坊目誌』	明治29年	1896	首巻之三	桂離宮			葛野郡桂村に在り。東は桂川の清流を帯び、西南に一带の丘陵を望み。北に岩峰幽峽の勝景あり。始め豊臣秀吉朝権を掌握し。人心を收攬せんと欲し。正親町天皇の皇孫智仁親王を請ひ。以て己が猶子と為し。為めに別墅を築く。即ち今の離宮是なり。二世智忠親王（桂宮と称す）の時。小堀政一に命し。園池を増築す。即ち桂水を引き湛へて池と為し。或は深山幽谷の趣きを示し。或は径路屈曲して山村の状を為す。或は池畔に倚りて亭榭を作る等。結構布置 妙を得たり。中央東面池に臨みて御幸殿。新御殿あり。露台を月見台と称す。各建築の方法。構造の必匠惨憺たるものあり。南に松琴亭あり。四辺松樹を栽う。斎宮ノ女御の歌意に依り名くと。八窓茶室賞花亭あり。側に桜花あるを以てなり。又茶室に龍田屋あり。側に月楓多きを以てなり。笑意軒は西南にあり郊外の耕作を觀望すべし。月波楼は萱葺にして清閑たり。樓はあらざるも。漁舟滄海月波の句より名くと。其他園林堂あり。元仏殿なり。園中に紅葉山蛭谷等あり。地域は一万三千七百歩。池の面積二千三十四坪。亭榭七。橋梁十六。燈籠二十三。手水鉢八あり。明治十六年九月離宮に編入せらる。(桂離宮記。平安通誌。京都名勝記)
『京華要誌』	明治28年	1895		桂離宮			書院、林泉共に小堀遠州の作にして、台殿亭榭、みな曲折刻画を極め、樹竹水石、妙趣をつくさるはなし。相伝ふ、豊公の遠州に命して之を造らしめらるゝや、遠州、豊公に約するに、三事を以てす。一に、労費を吝むなかれ。二に、成功を急くなかれ。三に、成功に至るまで、来る観る勿れ。此の三事を守るに非ずんは、名苑成すべからず。と。公、之を諾し、約を守り違はす。遠州、即ち其徒弟弟出納大藏少輔・山科出雲守・倉光日向守・玉淵坊等と經營慘憺、技術の秘鑑を尽くし、数年の工役を勞して、之を落成す。地域総面積一万三千百七坪。桂川を引き湛へて池となす。水面の積二千三十四坪。島嶼十余数あり。その後、親王の第二世智忠親王、また遠州に命し、増築あり。今に至り数百年、樹は益す蒼古に、石は益す幽奇。台殿亭榭林影水光と益相得て、深沅掩映、忽にして屈曲幽暗、忽にして平遠縹緲、造化の妙工、人作の精美、究竟に至らざるはなし。(中略) 実に京都第一の名苑にして、恐らくは天下に其の比を見るを得ざるべし。(中略) 今其の宮殿・林泉を區別して、見聞の大略を記せん。(中略) 御車寄 東向前の飛石は、遠州好み真の飛石といふ。また大石を置き、沓脱とす。六人の沓を駢ふべきを以て、六つの沓脱きといふ。(中略) 林泉 此の林泉は、前にも記述せし如く、許多の年月と不貲の勞費を積み、許多の更革を歴たるものなれば、人工の極巧、宛然天然の如く、縦瞻横眄皆な姿趣を成し、始め無く、終わり無く、環の端無きか如し。之を記するに、宜しく何れよりすべきを知らず。今仮りに、月波楼よりはしむべし。 月波楼 樓にあらず、亭なり。位置高処にあり。東に向ひ、池面に映する月を望むに宜しきを以て、白居屋の月点・波心・一顆珠の句に取り名けしといふ。(中略) 西面に鎌形手水鉢あり。小橋を渡り、南の方、池中に斗出する角地を、亀甲と名く。亀甲の対岸池辺に紅葉山あり。許多の老楓叢生す。皆な名種にして、秋晚霜後、月波楼辺より之を望めば、丹青煌耀、名状すべからず。紅葉山より水を隔てゝ松琴亭を望む。昔は朱欄干の大橋を架せり。當時泉石映帶の妙想すべし。今は只、南端礎石のみ存せり。石徑羊腸一昇一降、林を穿ち水を渡り松琴亭に至る。(中略) 松琴亭 南方高処に在り。四辺松樹多し。(中略) 一の間 (中略) 次の間 (中略) 御間 (中略) 室の四外排石最も妙なりといふ。八窓の東池に臨み、石を疊み手水所と為す。昔は流派混々として、淨く以て幽澈に充て、流れの手水と名く。傍に石橋あり。長三間余、巾二尺余、厚一尺、白川石にして東西に架す。加藤左馬助の進献といふ。橋を渡り四腰掛を歴て蘇鉄山に至り待合あり。 四腰掛 (中略) 東を流るゝ川を新川といふ。 待合 外腰掛けともいふ。傍に方二尺許樹形の水鉢あり。前の蘇鉄は島津氏の獻上といふ。松琴亭の正北池中石橋二、半島あり天橋立と名く。半島中紫色石は馬関産にして、加藤清正の獻上といふ。松琴亭より西、中島に土橋を架す。下を蛭谷といふ。夏夕螢火多き由り名けしものなり。傍近水中に河得多し。中に紅河得は珍卉にして、世に稀なるものといふ。

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
							<p>賞花亭 中島の山上に在り。亭後桜花多し。因て名けしものなり。又た竜田屋と称するは丹楓の風光亦た凡ならざるに由れり。参議雅経の詠に、「花のみやあるしなるへき山里はもみちの折もとひけるものを」とあり。全部構造、茶店に模し、軒に暖簾を掛け、紺地白上りに竜田屋或はたつたやの文字を現はす。皆な青蓮院尊朝親王筆なり。折廻り四畳敷腰掛あり。亭名額は竹内良尚親王の筆。亭前池に臨み石燈籠一基あり。銘水蛭といふ。家仁親王の詠に、「池ひそみうつれば水の蛭かとむかふもあかぬ夜半の燈」。</p> <p>園林堂 方凡三間。また中島にあり。(中略)堂前石燈籠二基あり。桜花一株、重弁にして南部の名種なりといふ。堂前土橋を西に渡り、左の方笑意軒に至る。</p> <p>笑意軒 (中略) 延享中親王手記に、茶屋中宜敷風景にて、前は泉水、後は野辺を見渡せり。稲葉の体面白し。後の簾三間程透させて風景殊によるしく、往古後水尾上皇御幸の節、後のやふを切られ候由、如何さまさ様なれば、西山・丹波山大方見へて景色猶可レ宜云々、とあり。(中略)</p> <p>以上は、林泉中建造物の大略にして、此外尚ほ一二の古記に見へ、今無きものあり。恐くは廢棄して撤却したるものならん。凡て林泉中、亭榭の数七、橋を架すること十六、燈籠の数二十五、手水鉢の数八、多々益々変化を生し一箇の重複を見す。掩映点綴以て林泉の奇観を大成す。その他、花・異卉・奇石・佳木の形状・出処等、精細に叙し来れば、僕を更ふるも暇あらざるを以て之を略す。之を要するに此の林泉は所謂四方正面に築造したるものにして、宮殿亭榭、曲徑細溪に至り、何れの辺より眺望するも側面の所なく、面を易へ頭を換へ変化突りなく、殆んど端倪すべからざるの妙あり。人工の極致、独り造物の削成を劈雕するのみならず、遂に能く化工の未だ至らざる所を補ふに至る。賑草に、此の御庭の風景又となし、宮島の景色を感じぬるか、この御庭の風景と只二つはいける内の見物なりし云々、とあるもあなち過賛といふべからず</p>
『京都新繁昌記』	明治36年	1903		桂離宮	西南の諸名所		桂の離宮は桂村に在り。修学院の離宮と同じく、嘗て御茶屋と称したるもの、御建物と云ひ、御庭と云ひ、皆是れ苑芸の模範、茶席の典型、美を尽くし善を尽くしたるもの、有難しなるとも愚かなり
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	4巻	上賀茂神社	下上賀茂正遷宮私記		正遷宮次第 先神主以下、社司氏人、七日神斎、参籠于社頭、前日木工寮、参神庭、構假屋、同日陰陽太夫修清祓、当日午之下刻、社司氏人勝新殿、内陣、社司衣冠氏人淨衣
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	4巻	上賀茂神社	下上賀茂正遷宮私記		次諸司昇並幣物幸饗於、神庭、立沙之東方、以西為上
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	守禅庵	寺院門上	愛宕郡	修学寺の北山にあり。徹翁義亨の開基なり。今、大徳寺金龍院の末寺とす。庭前に古溪和尚みづから植ゆるところの松樹あり
『洛西嵯峨名所案内』	嘉永5年	1852		亀山			(中書水といふハ今方丈の庭の曹源池なり。親王の社あり、此水炎旱にも涸す。亀山の神に祈り清泉湧出る。その祭文ハ本朝文粹にあり。)
『京華要誌』	明治28年	1895		亀山殿旧址			亀山殿の時は嵐山、大井川ともに御庭前の物となりしものなるへし
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	高陽院			<p>栄花物語云 (中略) 又云西の対をれいの清涼殿にて寝殿を南殿などにてこ寝殿とて又いとおかしくてさしならび山はまことの奥山と見え誰こくらき中よりお池のおもてはゐるかにすみ渡り左右の釣殿なへてならずおかし</p> <p>(中略)</p> <p>続文粹云 (陪二博陸書閣一賦三松風報二万季一詩序 有信) 夫レ高陽院ハ者累葉執政ノノ甲第ナリ林池蘊レ奇テ台殿呈スレ巧ヲ先公相国ノ之開ナリ二洪基ヲ一也云々</p> <p>〔それ高陽院は累葉執政の甲第なり、林池奇をつつみ、台殿巧を呈す、先公相国の洪基をひらくなり〕</p>
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	釈殿御殿			<p>印月池 双梅齋 嗽枕居 縮造亭 五松塙 侵雪橋</p> <p>廻棹廊 紫藤岸 丹楓溪 臥龍堂 傍花閣 偶仙樓</p> <p>園林堂 滴翠軒</p>
『山州名勝志』	正徳元年	1711	18巻	河原院	六条坊門通		伊勢物語思見抄二日ク 河原ノ院は左大臣。六条河原に家を造り池をほり。毎日潮を三十石ばかり入りて。海底の魚貝等を住しめ。陸奥国塩釜の浦をうつして。海土のしほ屋にけぶりをたてゝ。玩れけるとなん云々
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	河原院	洛陽部四		<p>続故事談云河原院は融左大臣の家也台閣水石風流をつくして作りみがきて住給ひけり</p> <p>(中略)</p> <p>本朝文集 夫、河原ノ院、者弘仁先朝第十二ノ皇子左丞相融卿之申第、也相府在世ノ之間窮ノ風流之体ヲ擅ニ遊蕩ノ之美ヲ豊ニ山ノ累、岩ノ草木比ニ其ノ枝ヲ擊ニ池ヲ湛ニ水ヲ魚鳥戯ニ其波ニ調ニ管絃ヲ於仙台ニ振ニ文籍ヲ於月殿ニ寛平法帝脱履ノ後ヲ遊ニ覽ニ焉勝地ニ再ニ逢ニ主幽ニ境重ヲ得ニ時ノ厥ヲ後早ニ改ニ進府ノ之号ヲ為ニ花界ノ之廟ニ</p> <p>本朝文粹 河原院ノ者故ノ左大臣源ノ(朝臣)旧宅、也林泉ト云、隣ノ喧譁隔。境ヲ挾。地ヲ而擁護。在ニ東都ノ之東ニ入テ。門ニ以テ居レ如シ。通ニ北山ノ北ニ是ヲ以テ年来尋ノ風煙ノ之幽趣ヲ為ニ禪定ノ之閑棲ニ云云</p> <p>〔本朝文集 それ河原院は弘仁先朝第十二の皇子、左丞相融卿の申第なり、相府在世の間、風流の体をきわめ、遊蕩の美をほしいまま、山を豈み岩をかさぬ、草木その枝をならえ、池をほりて水を湛え、魚鳥その波に戯る、管弦をおいて仙台を調べ、文籍をおいて月殿にもてあそぶ、寛平法帝脱履の後、この勝地に遊覧す、再び主幽に逢う、境重て時を得てその後早に進府の号を改め、花界のみぎりをなす</p> <p>本朝文粹 河原院は故の左大臣源の朝臣旧宅なり、林泉隣を卜し、喧譁境を隔や、地をえらんで擁ふ、東都の東に在るといへども、門に入りて以て居れば、北山の北に通がごとし、これをもって年来、風煙の幽趣を尋ね、禪定の閑棲となす〕</p>
『山城名勝巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	河原院			庭移-奥州塩釜景 〔庭に奥州塩釜の景を移す〕
『山城名勝巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	河原院	古蹟		<p>〔六条坊門南万里小路東八町又号ニ東六条院ノ左大臣嗣公第也庭移-奥州塩釜景今云ニ塩釜町ノ長保二年造融子大納言湛卿献ニ第寛平法皇ニ法皇崩後仁康得レ之建ニ祇陀林寺ニ修ニ五時講ニ仁則融公第三子也屢遇ニ洪水ニ東岸崩故移ニ寺広幡ニ後拾遺集有ニ和歌ニ</p> <p>〔六条坊門南、万里小路東八町、また東六条院と号す、左大臣嗣公第なり、庭に奥州塩釜の景を移すと、今塩釜町という、長保二年造融子大納言湛卿寛平法皇に第を献ず、法皇崩後仁康これを得る、祇陀林寺を建て五時講を修す、仁すなわち融公第三子なり、たびたび洪水に遇い、東岸を崩すゆゑ、寺を広幡に移す、後拾遺集に和歌あり〕</p>
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	河原院			【挿図】河原左大臣の古蹟千鳥池、あるは祭主三位輔親卿の林泉、天橋立を移されし跡は、今の東六条本願寺御堂のほとりより東なる釈設馬場の地ならんと思はれる
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	河原院	東本願寺		<p>一高倉六条に宣如上人隠居をいとなみ給へるに庭作りいけを掘るにむかしの融公の塩釜をっぱり出たりこやそのかみ河原院の跡なりけらし 業平朝臣のしほがまにいつかきにけん朝なきに釣する船もこゝによらなん</p> <p>とよみ紀のつらゆき彼のおとゝのふるあとにて</p> <p>君まさで煙たえにし塩がまのうらさびしくも見へ渡る哉</p> <p>とよみけいにしへの面かげたちてあはれなり順朝臣の強呉滅呉有荊棘姑蘇台之路湛々と賦したりし其世の名残は今ほなきに猶しかまのゝこりあやしくあだなる形見なるべし拾芥抄に河原院は六条坊門の南万里小路の東八町云々融大臣家後に寛平法皇の御所もと四条京極の西を号東六条院 (是迄拾芥抄) しければ此わたり彼院のあとなる事うたひなし東六条院の名をのづからいまもかよひたる事不思議なるべし</p> <p>一続古事談云河原院は融大臣の家なり台閣水石風流を盡して作りみがきて住給ひけりうせ給ひて後其御宇多法皇に奉りて時々わたり給ひけり</p>

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	1巻	河原院	塩釜旧跡		五条橋通寺町の西に塩竈の町あり。むかし左大臣源融公は六条川原院とて八町四方に家づくりしてすみ給へり源氏物語にながしの院と書たるはこの川原院の事也築山泉水そのころ世にたぐひなく源順この院に賦をつくれり。また陸奥の千賀のしほがまをうつし。難波のみのつゝ濱より。塩をくませここにてやかせて御覧せしと也融公なく成給ひて塩焼人もなく川原院もあれば。紀貫之が歌に 君まさで煙絶にし塩竈のうらさびしくも見え渡る哉 とよめり。時うつり世あらたまりて川原院も塩竈も名のみ残り民家立つべき。朝なゆふな家々に立る民のかまどの煙ばかりに侍へれば 塩竈の跡は昔の跡ながらけぶりをはかる民のめしがま
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	3巻	河原院	東六条院	古跡	在六条坊門南万里小路東 封疆八町一号 河原院 左大臣源融公寛平上皇之宮旧方四町今五条橋西二町有 塩釜町 乃苑池之旧址院後為い寺上徳寺是也則有 塩釜明神社 長保年中祀し之 〔六条坊門南万里小路の東にあり、封疆八町、河原院と号す、左大臣源融公寛平上皇の宮旧、方四町今五条橋西二町に塩釜町あり、よつて苑池の旧址院のち寺となす、上徳寺これなり、すなわち塩釜明神社あり、長保年中これを祀る〕
『都名所鳥』	元禄3年	1690	六巻	河原院	塩竈	宮社院 園之部 愛宕郡	五条の南。浄徳寺の中に有。相つたふ左大臣源の融公。此ほとりに河原院をかまへ。河のほとりに陸奥の千賀の塩竈の景をうつさる。日々人夫を津の國難波の浦より。汐をはこばせ。これを焼て塩となさしめ。遊興をもよほさる。其後こゝに社を建てまつる。又の説に。河原院のあととは。今の東本願寺新やしきの地にあり。今其地を掘りてみるに。塩がまに用ゆる道具出るとなん。 歌には 松陰 岩井水 浅茅 八重葎 よめり 古今哀傷 貫之 君まさで煙たにえにし塩がまの浦閑しくも見えわたる哉 統新拾遺 業平 塩がまにいつかきにけん朝なきに釣する舟も爰によらなん
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	河原院*	塩竈跡	古蹟門上 愛宕郡	六条川原にあり。古へ、左大臣源融公、戯れに人夫をして摂州難波の浦より海潮を汲ましめて、ここにおいて塩を焼かしむ。これ、千賀塩竈の景を模して、遊興を寓するものなり
『雍州府志』	貞享3年	1686	2巻	河原院*	塩竈明神	神社門上 愛宕郡	五条の南、上徳寺の中にあり。相伝ふ、左大臣源融公、この辺に河原院を構ふ。しかうして、河辺において、陸奥千賀塩竈の境地を模さる。日々、人夫をして摂津難波浦より潮汐を運漕せしむ。これを焼きて塩となし、遊興を催さる。その後、社を建て、これを祭る。一説に、河原院は、今の東本願寺新屋敷の地にありと。今、地を掘るときは、塩竈に用ゆるところの具、偶々出づ
『洛陽名所集』	万治元年	1658	1巻	河原院*	塩釜		此所は。六条河原より源融大臣陸奥の千賀の塩釜をかたどりうつされしと也 業平歌に。塩竈にいつかきにけん朝なきにつりする人も夏によらなん。又貫之歌に。君まさで煙たえにし塩がまの浦さびしくも見へわたる哉。とよみし是みな千賀のもとをよめてなり
『都花月名所』	寛政6年	1793		河原院旧跡	貫月		
『京都坊目誌』	大正4年	1915		河原院ノ址	本塩釜町	古跡	水石極めて美にして。鴨水を延き瀬水に注ぐ。殿舎樓閣を[耳]林ねたり。 (中略) 宇治拾遺巻十二云。今は昔河原院は。融の左大臣の家なり。みちのくの塩かまのかたをつくりて。潮を汲よせて。塩をやかせさまぐのおかしきことを盡して。住給ひける。おとゝうせて後。宇多院にたてまつる。たびく行幸有けり。 (中略) 扶桑略記巻二十四云。(中略)臨川トレ隣
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之二 平安城	河原院の旧跡			(鴨川はこの殿舎の庭中を流ると見えたり)。台閣水石風流をつくし、遊蔭の美を擅にし、山を築きては草木繁茂し、四時に花絶えず。池を鑿りては水を湛へ、魚鳥は波に戯れ、陸奥の松島をうつし、難波津より日毎に潮を汲ませ、管弦は仙台に調べ、文籍は月殿に航びたまふ
『京之水』	寛政2年	1790	風之巻	閑院	京城坊保之図解		二条の南、西洞院の西、冬嗣公の家、金岡水石を興むと云云。公李公伝領
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	1巻	閑院			二条の南。西洞院の西一町を閑院殿と号す。藤冬嗣公の家也金岡が作りし築山泉水奇麗絶景の所なりけるとかや。むかし近衛院の御時東三条の林頭よりぬえといふ怪鳥黒雲にのりて。禁中に来りわざわむをなし閑院殿のつき山の大理石の上にやすみけり。其通ふ道なればとて押小路はからす丸をかぎりに西のかたはふさがれたりといふ此俗説信じがたし空とぶ怪鳥の押小路をふさがれたればとてとまらんや。かの鶴は頼政が射おとしけりと平家物語にあり。鶴のこしかけ石とて。今も民家の壺にあり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	閑院	古蹟門上	愛宕郡	金岡、水石を置む
『京雀』	寛文5年	1665		閑院	もとめうれんじ町	西洞院通	二条のみなみ二町西のとう院の西一町はむかし閑院の大臣冬嗣公の家也しその家の築山泉水は金岡がつくりし所なりとにや閑院殿となづつて奇麗絶景の地也
『京雀跡追』	延宝6年	1678	地	閑院	本妙けんし丁	西洞院通	此すぢ二町南西のとうぬんの西一町はむかし閑院の大臣ふゆつぐその家也し其家のつき山せんすいは金岡がつくりし所也とかや又此町今は押小路と云むかし近衛院の御宇に東三条の林頭よりぬえといふけてうろくもにのり禁中に来りてわさをなし此町閑院殿つき山の大理石のうへにやすみたり其ぬえのかよふ道なればとておし小路通りはからす丸をかぎりに西の方はふさがれしとかた
『京羽二重』	貞享2年	1685	2巻	閑院古跡	旧地		二条の南西洞院西一町閑院殿と号す藤冬嗣公の家也むかしは金岡が作りし築山泉水絶景の地也とかや近衛院御宇東三条林頭より鶴禁裏に災をなし此閑院殿築山の大理石に休しとなん
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	閑院内裏	洛陽部三		続文粹〔暮春於 秘書閣 賦 禁裏松表 貞詩序 隆兼〕夫 閑院 者 昔 是 東園 之 申 第 今 則 上 台 之 離宮 也 瓊林碧沼 之 象 神仙 也 福 周瑠 於 万里 之 浪 華閣 柳樹 之 極 壯麗 也 云々 於 閑院 南殿 詠 月 前 松 御集 順徳院 いまはまた世々をかさぬる庭の松ふりてぞみゆる秋の夜の霜 〔それ閑院は昔はこれ東園の申第、今は即ち上台の離宮なり、瓊林碧沼の神仙に象るなり、周瑠をにおいて万里の波に福し、華閣柳樹の壯麗を極めるなり〕
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	元日節会			諸司奏は内侍所につくべきよしを奏す古は庭にすゝみて笑しけるとかや
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	元日白馬踏歌			十七日に鶴庵丁高橋何がし御前の庭上にてこれをつとむ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	元日白馬踏歌			三月三日には京わらは鴉をもてまいり御庭にて闘鶯あり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	元日白馬踏歌			十五夜十三夜の月見 重陽菊の御祝義有て御庭に菊うへわたり着せ錦色くによそほいて霜をいとへるわざといへとまたき盛の花をみせたと見え侍り

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之五 前朱雀	勸修寺			水室池（当寺の庭中にあり）
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	勸修寺	仮山地		勸修寺は真言宗にして則親王御門跡爰に住居し給ふ也堂前の築山は弘法大師のつくる所にして水石の形模又凡俗の及ぶ所にあらず
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	願成寺	寺院門下	紀伊郡	庭に、深草の少将ならびに小町の塔あり。これまた、謬伝か
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	岸神寺	寺院門上	愛宕郡	大なる岩石をもつて本尊とす。この岩、もと、聚楽城山里の仮山にあり。その後、禁庭に遷る。時々、妖怪あり。これによりて、岩をこの寺に送らる。これより、岩神と称して、世人、これを尊崇す。伝へいふ、乳汁を通ずるの誓ひありと。故に、婦人、特にこれに詣す。思ふに、石上神を誤りて、これを附託するものか
『堀河之水』	元禄4年	1691	1巻 春部	元旦			ますらをに猶いきほひぞ立まさるかた庭をふむ神のかしこさ 是は天上にて 素戔嗚尊天上へせめのぼり給ふ時、千箭の靫を御手に巻、靫といふ物を御身にそへ、あまのはづ矢、あまの香兒弓をとりそへて、へんはいをふみ給ふ事を、堅庭をふむといふ、これにおそれて そさのを、下界へくだりたまふ、太神女神にてましませば、ますら男に、御いきほひのまさらせ給ふとなり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻	観念三昧院	乙訓郡		三鈴寺記略云（禪惠上人）宝治元年十一月二十六終于白河ノ遣迎院ニ焉（遣迎今在東福寺中門南ノ）蔵ニ当山ニ登リ石ヲ築キ壇ヲ建テ墳塔ヲ其上ニ乃号ス華台廟ト云 〔宝治元年十一月二十六、白河の遣迎院に終える、当山をおさめて石を畳み、壇を築き、墳塔をその上に建てる、すなわち華台廟と号す〕
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	13巻	観音寺			神風吹テ仏地ヲ奇。僧話聴テ奇。飢テ食ニ雨余ノ菜。寒ニ燃テ霜後ノ箕。一遊幡ニ硯史ニ。万感撃ニ鉗椎ヲ。主僧有ヲハレ西ニ去。庭松可シレ長キ枝ヲ 〔神風、仏地で吹くに、僧の話聴きて祈りて奇なり。飢えては食す、雨余の菜。凍えては燃く霜後の箕。一遊、硯史にひもとくに、万感鉗椎を撃つに、主もし西に去る有らば、庭の松、枝を長すべし〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	祇園女御屋敷	古蹟門上	愛宕郡	双林寺の前にあり。今は田疇となる。地を掘るときは、石出づ。これ、古へ、石壁の用ゆるところのものなり。間、また、仮山の石あり
『堀河之水』	元禄4年	1691	3巻 秋部	菊			昔陸奥に兄弟あり、世にありわびて、弟は筑紫へゆきけり、互に名残おしめ、別ける時に、兄庭前の菊を、一もとをふたつにわけて、恋しからん折は、互にこの菊を見てなぐさむべしといひけり、弟筑紫へもちてくだりこのきくをうへけり、此草ふたつにわけしまゝに、いつもかた枝ばかりに花咲けるとなん 百夜草 大和国三輪里に翁あり、かの庭に一本のきくをうへて、このおきなもてあそぶ、この菊秋冬過て、夏までも花も葉もかれず、所の人不審してくはしく尋ねまくに、翁のいはく、七月一日より毎夜菊の露を器に得る事百夜なり、かるかゆへに此菊四季にかれず、すなはち名つけて百夜草といふ云云 天智天皇花盡 名にしおふおきが庭の百夜草花さきてこそ白妙になれ 以上蔵玉 夫木抄に 定家 此里に老せぬ千世はみなせ河せき入る庭の菊の下水 続千載集 題しらず 伏見院御製 むらさめの桐の葉落る庭面の夕の秋をとふ人もかな
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	9巻	帰源庵*	東北歴覧之記		川ヲ隔テ帰源庵ミユ、此ノ庵ハ性通禪人ノ再興ナリ、山水目前ニ連レリ、折節庭ニ桜花躑躅爛熳タリ
『都花月名所』	寛政6年	1793		栢穀館	蓮		東六条東殿と云
『洛陽名所集』	万治元年	1658	9巻	北野			又曰く紅梅殿は。五条坊門の北町北野の御子家。直は天神御所と云。その左迂の時梅を詠したまふ歌に。ことふかば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとてはるなわすれぞと有ければ梅飛て謫所の庭に生じけると也
『京童』	明暦4年	1658	巻3	北野の天神			又配所にてふる里の梅をなつかしくおほしめしたまひ御歌に こちふかばにほひおこせよむめの花あるじなしとて春なわすれぞ これによりて梅とび。配所の庭に生ずる也
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	北野八景			聖廟 経蔵 緑松 紅梅 仏院 馬埒 華表 浮図
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	13巻	北山			増鏡ニ元徳二年ノ春北山行幸ノトキ春宮大夫宗俊ノ序ニ内海富安ノ之春。城北開化ノ之春。我々君保之宸陰。詞楽懸之於厥ノ中ニ重テ課之六義ノ言葉。屢々賞ニ數何ノ之濃花。略 ソノ歌ニ日時ヲ得テミユキカヒアル庭ノ面ニ。花モサカリノ色ヤ久シキ。 〔増鏡に元徳二年の春、北山行幸の時、春宮大夫宗俊の序に内海富安の世、城北開化の春、我が君、宸陰保し、詞楽おいてその中に懸けり。重て六義の言葉を課し、しばしば數何の濃花を賞す。略 その歌にいわく、時を得て見行きかいある庭の面に、花も盛りの色や久しき。〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	祇陀林寺			続古事談ニ云 河原院は融左大臣の家也うせ給ひて後其子（大納言湛卿）宇多法皇に奉りて時々渡り給ひけり其後仏閣になりにつけり仁康上人といふもの知識をすゝめて丈六観迦仏を作りてこの所にすへ奉りたる也其後此所鴨川水みなきり入て花池こぐく水底になりぬへかりければ上人（仁康）広幡ノ院（祇陀林也）移作けり
『堀河之水』	元禄4年	1691	下巻	祇陀林藤			文徳天皇の御宇に。和州元興寺にまします將軍地藏の像を請じ奉りて。又一字の堂に安置す。これによつて。世に朱雀権現堂と申侍る。庭に紫藤あり。花ざかりには都の老若男女群集して。酒遊のなかだちとす。花もこゝろあるにや。色ふかき君が袖にはひまづはりて引とむるこやさしけれ
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	京極八幡宮			伝へ云ふ、武蔵坊弁慶壮年の時、此寺に棲て石を力にて様見る、其石今誓願寺の庭にあり
『京之水』	寛政2年	1790	麟之巻	宜陽殿	殿舎并二 皇居内門		江次第曰元日節会ニ左近陣ノ座南庭ノ中央東西ノ行ニ曳ニ班幔二条ヲ一云云
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之五 前朱雀	玉井寺			庭中に玉井・蛙塚あり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	5巻	曲水の旧跡			新蛇池の北の山下なり神坂山中山の間のうしろにあたる俗に姥が懐と云所也昔細川武蔵守高国入道常恒曲水宴を催せし所也其時の漢和聯句鰐流テ春入レ午（一華） 千代のかざしや桃の一枝（高国朝臣） 山麓残霞外（禪昌）路遙斜日時 まち渡る雲の月出て（尹賢） 人來鷹獵レ竹（泰母） 野べは静に夕風ぞ吹
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	清水十境			古崖懸泉 春〔山蔵〕開花 音羽受翠 靈鷲疎鐘 洛陽万戸 鴨川一帯 東郊烟雨 西門遠眺 岩嶺晴雪 亀阜暮靄

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京都府目誌』	大正4年	1915		清水寺	清水一丁目	寺院	△成就院（中略）本院の庭園は北方に在り。相阿彌の作と云ふ。又松永貞徳の指図に成れるものとも云ひ。小堀政一の補作せしものとも云ふ。東は音羽山の翠を背ひ北は霊山の峰を望み。湯屋溪其間を繞る。西は京洛の万戸を下瞰し頗る勝景なり。園は小地なるも自然の境域に拠り。意匠を加へ佳趣深遠なり。池水に島嶼を設け。奇岩怪石の配置案排常人の及ぶ所にあらず。鸚鵡石。籬烏石。烏帽子石最も著名なり。烏帽子石は加藤清正朝鮮より齎す所と云ふ。振袖手水鉢玉手形石燈籠。蛸蛸石燈籠尤も有名なり（花洛林泉帖に載す）
『洛陽名所集』	万治元年	1658	4巻	清水寺			清水寺は宝龜九年四月。沙弥延鎮（或曰・報恩一説・之作 _ス ・賢心 _ニ ・賢心 _ノ 者大和国ノ小島寺ノ僧 _{ナリ} ）夢の事有て。淀河をのぼり行しに。金色の。流みえけるを。あやしと思ひ。其みなもと。たづねて。誰有もとにいたれるに。いとちみさき草庵に白衣老翁すみ侍りぬ。鎮立寄いかに。としごろ姓名とひきけるに。行客と云者にて。ひそかに。この地二かくれることすに。二百歳。たゞ千手千眼の神呪を持し。鎮を待かるなどくはしくかたり。その身東州の行有。しばし此処におらしめよ。猶も練笈をたつるによし。とおしへ。又庭前なる株〔木芹〕をさして。是にて大悲の像拜なせよといひ。東にむかひざりけり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	清水寺	音羽山清水寺		成就院の林泉は名庭にして、相阿弥の作、後に小堀遠州修補ある所なり。振袖の手水鉢、籬烏石、烏帽子石は須磨浦よりこゝに移す、飛石五つの名石は加藤清正朝鮮より取歸てこゝに寄附す。（中略）護摩堂は東福門院の御寄附なり。この庭造は洛東の妙境にして遠近に美景を連ねたり。この庭造は洛東の妙境にして遠近に美景を連ねたり。（中略）坊中延命院は前に豊国山、清閑寺、音羽嶺を庭中の壮観とし、円養院は林泉より遠望すれば八幡、山崎、淀川の長流群にして奇観なり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	清水寺	清水十景	十景	
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	金閣寺	金閣	古閣	大北山にあり鹿苑相国義満公応永四年修造し退隱の地となしたまふ庭に三重の閣あり第一を法水院と号す本尊釈迦左右に観勢の二菩薩あり西のかたに夢窓国師の像并鹿苑道義の像あり第二重を潮音洞と云自然木の観音并四天王の像あり第三重を究竟頂と称す此床三間四面也板一枚を以て床とせり凡閣の内外ともに金箔を以てかざりとす此故に世人金閣と号す
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	金閣寺	夜泊石	奇石	北山金かくじの池辺にあり又いにしへ鹿苑相国義満公へ赤松家より獻ずる所の石あり世に赤松石と号す
『京童跡迫』	寛文7年	1667	巻2	金閣寺	鹿苑寺		しばし庭にたたずみて 草木も成仏すつとくりのまことなるかな庭の羅漢樹
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	11巻	金閣寺	東西歴覽記		大北山鹿苑寺寺産三百石、開山夢窓国師、大権越鹿苑院義満八境 金閣第一重号ス二法水院ト一、第二重号ス二潮音洞ト一、第三重号ス二究竟頂ト一、此ノ額 後小松院ノ宸翰也、第一重ノ本尊釈尊左右観音勢至、東ノ増ニ 後水尾院後光明院御牌 西ノ増ニ 初祖ノ像、開山夢窓国師ノ像、土地神ノ像アリ、鹿苑院道義像アリ、衣ニ笏ヲモテリ衣ノ地紋サヘナリ、第二重自然木ノ洞ニ観音アリ、四隅ニ四天王ノ像アリ、究竟頂ハ三間四面ナリ、敷板一枚ナリ、十境ノ内閣ニ三ツアリ、鏡湖池、岩下水、龍門瀑、銀河泉、安民沢是ナリ、鎮守ハ春日明神也、鏡湖池ノ内ニ、閣ノ前ニ四ツ段々ニ双石アリ、コレヲ夜泊石ト云フ、中嶋ニ赤松ト云フ石アリ、赤松家ヨリ献上ノヨシ、又立石アリ九山八海ト云フ、池中ニ蓴菜アリ
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	5巻	金閣寺	鹿苑寺		然るに義満公の地に閣を立金箔を一面に塗給ひその閣の前に大なる池をほらせ九山八海をたゝみ絶景いふばかりなし。又庭の西より池の中まで名のなき石はなし。金箔塗の閣に依て金閣寺とは名づけたり
『宝永花洛細見図』	宝永元年	1704	15巻	金閣寺	鹿苑寺		後小松院応永四年源義満將軍の○○○○○薨じ○ひてのち○○○に御○○い所と○○り○○よしころなり此池に閣をきて金ばく○ぬり前に大きな池をほらせ○○いふ○○○○○金ばくぬりぬりの閣はよろし金閣寺と○名付るなり
『都花月名所』	寛政6年	1793		金閣寺	龍門瀧	飛泉	金閣寺
『都花月名所』	寛政6年	1793		金閣寺	九山八海石	石	金閣寺 赤松石晶山石
『山州名跡志』	正徳元年	1711	7巻	金閣寺	北山鹿園寺	愛宕郡	○鹿園寺或金閣寺 在 _ニ 北山ノ麓平林ノ中 _ニ 宗旨禪 寺南向 此ノ所ハ故將軍義満公山莊 応永四年ノ四月造ル 莊観奇美ヲツクセリ 後二為 _メ レ寺ノ号 _ス ニ鹿園院、即チ公ノ院号トス有 _リ ニ三重ノ閣、以 _テ 金箔ヲ鍍 _ム 。故二号 _ス ニ金閣寺ト一 ○閣 在 _ニ 二方丈ノ西大庭ニ屋櫺宝形造。 （中略） ○九山八海石 在 _ニ 閣前池ノ中ニ 秀吉公ノ代。諸所ノ取 _メ 名石ヲ。聚楽亭ニ移玉ヘリ。世人是 _ヲ 云 _フ 石狩ト一此ノ石獨 _リ 其狩ニ漏 _ラ リ 〔○鹿園寺或金閣寺 北山ノ麓平林の中にあり。宗旨禪 寺南向 このところは將軍義満公の山莊。応永四年の四月に造る。莊観奇美をつくせり。後に寺となす。鹿園院と号す。即ち公の院号とす。三重の閣あり、金箔をもってちりばむ。故に金閣寺と号す。○閣 方丈の西に大庭にあり、屋櫺宝形造。 （中略） ○九山八海石 閣前池の中にあり。秀吉公の代、諸所の名石を取り。聚楽亭に移し給へり。世人これを石狩という。この石ひとりその狩に漏れたり。〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	金閣寺	八境	葛野郡部一	鏡湖池（金閣廻池）岩下水（在 _ニ 龍門下 _ニ ）龍門瀑（在 _ニ 金閣北 _ニ ）銀河泉 安民沢（在 _ニ 龍門瀑上 _ニ ） 二水記云大永二年六月二十八日親王ノ御方北山鹿苑寺有 _リ 御見物 池之蓮盛 _リ 也於 _テ 金閣ニ有 _リ 御酒宴 默雲臺（奉 _ニ 和 _ニ 相公北山看 _ニ 楓和歌 _ニ 天隱）楓林裏 _ニ 寺 _ニ 白雲層 _ニ 山色霜降 _ニ 氣象増 _ニ 紅葉忽 _ニ 経 _ニ 台覽 _ニ 後満座不 _レ 仏夕陽ノ僧 五鳳集（重寄 _ニ 鹿苑寺 _ニ 琴叔）老松楓残ノ古寺ノ中相 _ニ 君 _ニ 遺愛感 _ニ 秋風 _ニ 遊人歸盡 _ニ 金堂閉 _ニ 霜葉飄零 _ニ 池底紅 _リ 〔親王の御方北山鹿苑寺、御見物あり、池の蓮盛りなり、金閣において御酒宴あり〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	金閣寺	鹿苑寺	葛野郡部一	御殿ノ西北ノ方ニハ早咲ノ桜ヲ並木ニ植エサセその間の庭には五色の沙を鱗形に敷き云云 〔御殿の西北の方には早咲きの桜を並木に植えさせその間の庭には五色の沙を鱗形に敷き云云〕
『山城名勝巡行志』	宝暦4年	1754	4巻	金閣寺	鹿苑寺		○鏡湖 在 _ニ 閣ノ前 _ニ （池名）九山八海石 在 _ニ 池中ニ又奇石四ツ山海石 晶山石 赤松石 夜泊石 〔○鏡湖 閣の前にあり。九山八海石 池名にあり、又奇石四石あり。山海石 晶山石 赤松石 夜泊石〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	金閣寺	鹿苑寺	寺院門上 愛宕郡	庭に、三重閣を設く。第一を法水院と号す。本尊釈迦、左右に観音・勢至あり、西の壇に夢窓国師の像ならびに鹿苑道義の像あり。第二、潮音洞と号す。自然牧の観音ならびに四天王の像あり。第三、究竟頂と号す。額は後小松院の宸〔王力〕なり。この床は三間四面なり。板一枚をもつて床となす。未だかくの如きの樹有ることを見ず。およそ、閣の内外、ことごとく金箔を貼す。故に、世に金閣と称す。この内に八景あり。いはゆる法水院・潮音洞・究竟頂・鏡湖池・岩下水・龍門瀑・銀河泉・安民沢、これなり。池辺に、九川八海石あり。ならびに、夜泊石・赤松石あり。赤松石は、すなはち、赤松家の獻ずるところなり
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	金閣寺	鹿苑寺八景	古跡門下 葛野郡	八景は、すなはち、法水院・潮音閣・究竟頂・鏡湖池・龍門瀑・安民沢・岩下水・銀河泉、これなり
『洛陽名所集』	万治元年	1658	8巻	金閣寺	鹿苑寺		世のならはしに。金閣寺。と云侍りぬ。もと義満將軍高閣をたて。金箔にて一面におしたまひぬ。閣の前の。広池にして。其内。九千八海となつてたふる路有。この外なめあかざる石ともおほかめり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	6巻	金閣寺			衣笠山の貝也鹿苑寺と云えり山水の佳景九山八海を表す云々後小松院応永四年源義満公北山亭鹿苑寺を始めて作りて一閣を金箔にだみて美麗をなせる世に金閣寺といふ
『開化絵入京都見物独案内』	明治18年	1885		金閣寺			愛宕郡大北山村にあり。鹿苑寺といふ。禪宗僧疎石開基。応永年中足利吉満公、山莊を捨て是寺を創建せられ、三重の金閣及び南天床柱、假山池、泉石等悉く有名にして、後に山をおひ西に衣笠山の名山を望み、洛第一の勝地と云ふ

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京城勝覧』	宝永3年	1706		金閣寺	第九日 乾の方		寺内に八景ありて景すぐれてよし。そのむかしは西園寺爰にあり。義満建立ありし三階の金閣有池あり
『京華要誌』	明治28年	1895		金閣寺			鹿苑寺といふ。往時西園寺公経卿の山荘なりしを。応永四年足利義満（三代將軍）此地の勝景を愛し、西園寺家に請ふて新に殿堂を構へ、林泉を営み、世事を謝して燕居の所と為し、常光国師に参禪し、剃髪して法名を道義と称す。薨るに臨み、嗣子義持（四代將軍）に遺命し、禪林に草めしめ鹿苑寺と称し、夢窓国師を招して開祖と為す。即ち済家禅宗にして、名を鹿苑寺といひ、洛の北山にあるを以て其山号とす。室町最盛時代の遺物にして、庭中に著名なる三層の金閣あるを以て、世に金閣寺と呼ぶ。創立以来星霜を経ること殆んど五百年、其間幾回兵亂の劫火に罹り、堂塔伽藍の如きは暗苔に比すへきにも非されども、幸に有名な金閣の其飛鶴を免かれしと。林泉の依然として旧時の觀を改めざるのみならず、保護其宜しきを得て、爾來再興する所の亦た甚だ清麗にして、独り京都のみならず、天下の名苑といふも、決して過称に非ざるなり
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	13巻	金閣寺			道義閣中ヲ金箔ニテ荘リ。ソノ庭宏麗云バカリナシコノ夕月ノ東山ヨリ始テ出ルヲ見テ 初更・如シテ初学ノ。次第ニ磨ス光骨ヲ。飛習於テハ是乎。志スレ閣十五ノ月 （道義閣中を金箔にて荘り。その庭宏麗云いばかりなし。この夕月の東山より始めて出でる月を見て初更は初学のごとし。次第に光骨を磨す。飛習、ここにおいて閣を志す、十五の月）
『都花月名所』	寛政6年	1793		金閣寺	看花		鹿苑寺と号す。足利義満公の金龍也。北方の奇觀にして閣前池辺に極多し
『都花月名所』	寛政6年	1793		金閣寺	藤		閣前池辺に臨に紫藤あり水面に映じて奇觀とす
『都名所車』	正徳4年	1714		金閣寺			庭に三重の閣あり第一を法水院と云本尊は釈迦觀音勢至西の間に夢窓国師の像義満公の像第二重の閣潮音閣自然木の觀音四天王像第三重の閣究竟頂此床三間四面の一枚板をもつて床とせり其外閣の内外金箔をもつてかざりとす此寺つてなくては見物なりがたし
『山城名所寺社物語』	享保年間	1716～36	5巻	金閣寺			後小松の院の御宇応永四年源義満公建立鹿苑院号す庭に三重の閣あり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之四	金閣寺	鹿苑寺		林泉に三重金閣あり
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻六	金閣寺	鹿苑寺		宗旨禪、仏間壇上、本尊阿彌陀仏座像、安阿弥作。 此地は將軍義満公の山荘也。応永四年に高閣をたて、花美をつくし、金箔をもつて一面によそひ、閣の廻りに池を突り、九山八海となづけ伝ふる。寄石さまくあり、金閣三重にして棟に黄金の鳳凰を置、第一を法水院といふ。第二を潮音閣といふ。第三を九竜頂といふ
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		金閣寺	近郊之部一		本堂（中略）庭前に女竜石・布袋石・走馬石・盤竜石・叢盤石等あり、傍に一株の椿樹ありて「わひすけ」と名く（中略） 大書院（中略）北庭に雲根石あり名石なり（中略） 八勝 法水院 潮音洞 究竟閣 鏡湖池 巖下水 竜門瀑 銀河泉 安眠沢 八景 鷹峰晴嵐 六所夜雨 金閣秋月 鹿園晚鐘 即休夕照 衣笠暮雪 鏡湖鶯鶯 竜門瀑布 十境 天鏡閣 拱北樓 鏡湖池 釣雪橋 巖目峰 菩提溪 宣明室 明王殿 櫛雲廟 安民沢
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		金閣寺	鹿苑寺	近郊之部	衣笠村にあり、此の地は往昔西園寺公経の山荘なりしを、応永四年足利義満之を請ひ得て新に殿舎を営み、林泉を築き閑棲の所と為せり。義満薨じ、其子義持遺命を奉じて之を禪林に草め、夢窓国師を追尊して開祖と為し、鹿苑寺と号す。実に二万七千余坪の封疆を有し、庭園の中央、池に臨み南に面する三層閣あり所謂金閣にして当林泉の主位たり。 （中略） 金閣及庭園（中略）此に登臨の勝概を記すれば園の西南三四町を隔てゝ翠巒の聳ゆるあり、之を衣笠山と称す。借り来て林泉の好背景となし、中央に大池あり、鏡湖と呼び遠近の景象水底に落つ。池中に二鳥あり一を草原、他を淡路と称し、日本国の全形に象る。即ち草原は本島にして淡路は四国なり。其西に出島あり以て九州に擬す。岸辺池上に散点群布する岩石は皆命するに雅名を以てす。閣の前面池中にあるもの之を九山八海石と称し、其東側に浮ぶもの五あり、之を夜泊石と号す。漱清廊西方の小嶼中に二石あり、之を出亀石入亀石と呼ぶ。其他赤松島山探頼猿等奇崑崙怪石枚挙に遑あらず。眼を転じて南岸を望めば一帯楓林あり、紅葉岡と云、晩秋の風光は二月の花に勝るべし。此ごろの時雨にもりて紅葉もいかゞと云へる御題にて、 後水尾帝の御製あり とはゝやな衣笠をかかの秋の色を来て見よとこそ鹿も鳴らめ 右に叙する所は閣南の景勝にして、其閣北に在るものを挙ぐれば其西北に大黒天祠あり、当寺の鎮守にして之を櫛雲廟と云。廟の東方に於ける崖下に清泉あり、流れて鏡湖に注ぐ、之を銀河泉と呼び義満煎茶の水と云。銀河泉の隣りに竊ほ一泉あり、之を巖下水と称し義満洗手の水と云。其傍に一条の瀑布あり、竜門瀑と名く。其下に石あり、一躍飛泉に登らんとするの勢あり鯉魚石と称す。抑も瀑に因て石に名けしか、將たる石に因て瀑に名けしか、未だ其先後を知らざるなり。瀑側に石橋あり。虎溪橋と称す。橋を過ぎ石塔を踏み丘上に上れば、中央に碧潭あり、安民沢と呼ぶ。水心に小嶼あり、嶼上に古塔あり、白蛇塚と号す。傍に臥竜石あり、此の池園中に於ける最も閑寂幽邃の境にして、池畔に老松数十幹亭々として雲霄に聳え、風景殊に自然に近し、更に歩を左に転ずれば又た石塔あり、塔を上げば夕佳亭あり。亭は金森宗和の好に成り、床柱は南天、棚の腰板は萩、其柱は鶯宮梅にて其夕夙に世に高し。其庭前に在る石燈籠・洗水盤及び石櫛は嘗て室町邸の旧址より移せしものと云。蓋し亭榭は清楚にして韵致に富み、庭園は來歴ありて古雅なれば、共に好古者の渴羨する所たり
『京華要誌』	明治28年	1895		金閣寺			金閣（中略）又閣上より望む園中の勝概を記さむに、四囲林樹鬱茂し、大池中に開く、鏡湖と名く。欄に倚て下瞰すれば、池上に散点する巖石は島嶼の如くにして、夜白石あり、夜泣石あり、九山八海石あり、以て須弥に擬し、雌雄の二鳥に草原淡路あり。日本の全形に象れり。赤松・崑山・細川等の諸石は当時群雄の獻する所、又出入亀の両石は宛も玄武子の水面に浮に似たり。其他探頼・猿猴等の奇巖安排皆宜しきを得て、一々造園家の模範に供すべし。而して池の南岸は紅葉山といひ、無數の楓樹を植たり。晩秋錦綉の光景頗る絶佳なりとす。当寺に宝蔵する後水尾帝の宸筆御製に、「とはゝやな衣笠をかかの秋の色を来て見よとこそ鹿の鳴らむ」とあり。 櫛雲廟 閣の西北にあり。大黒天を祀る。当寺の鎮守なり。 巖下水 櫛雲廟の右に在り。義満の煎茗に用ゐしものとそ。 銀河泉 竜門瀑源溪流れて鏡湖に落つる細流なり。 虎溪橋 北は安眠沢にて園中最も幽邃の所なり。 安眠沢 又は雨閣沢望雲沢といふ。碧潭深くして久旱にも涸れず、十民折雨の古例ありといふ。水心に小嶼あり、其上の古塔を白蛇塚と称し、其傍に臥竜石と号するあり。右辺に又石階あり、高低屈曲して登れば夕佳亭に至る。 夕佳亭 嵐林和尚の後水尾法皇御臨幸の爲め設けしものにして、近年の再興にかかる。即休と額し（大雲禪師の筆）、昔金森宗和の好事に成りて、南天竹の床柱、萩の違棚など世に名高し。庭前石燈籠石櫛（一名木人櫛）、及び洗手盤等みな室町邸（世俗の花の御所）の旧趾より移す所といふ。傍に拱北樓あり。 （中略） 本堂 鹿苑寺の區は心越禪師の筆、中央正観音、脇侍梵天帝釈（東福門院の御持仏にして、後水尾帝の御寄附なり）を安し、左右に開山夢窓・中興文雅・足利義満等の像及徳川家の木牌を安す。此堂は貞享年中、後水尾法皇の再建し給ふ所にして、前庭一株の大椿（ワビスケといふ）あり。同皇の手栽なりとか伝ふ
『京華要誌』	明治28年	1895		金閣寺			当寺林泉都下有数の名苑にして、歴聖の行幸ありし所なり。風光明媚にして、眺臨平曠、樹木鬱蒼、殿閣参差たり、遠く望めは仙觀樓台の想ひあり、近く視れば黄金閣を築き紫鳳空に翔り、奇石怪松鏡湖を装し、名花異卉紺林に薫し、殆んど西方淨界に到るかと思はしむ。其他園中八景八勝十境等の如きは煩を避けて此に省きぬ
『京都土産』	明治28年	1895		金閣寺 銀閣寺	都百景見立		金閣林泉の春雨 銀閣亭樹の秋雨

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻下	銀閣寺			庭をつくり石をたゝみ銀たみの一閣を立て金閣寺になぞらへて銀閣寺といへり
『開化絵入京都見物独案内』	明治18年	1885		銀閣寺			愛宕郡浄土寺村にあり。東山慈照寺と云ふ。禪宗。夢窓国師を開祖とす。庭に銀閣あり、石泉の風色佳美なり
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		銀閣寺	上京区之部		当寺は済家禪宗相国寺末十刹の一にして夢窓国師を開基とす。始め足利義政此地に閑棲し義満の金閣に准じ二層の高閣を建営し之を銀閣と名け相阿弥に命じて林泉を築造せしむ。其後捨て寺となし慈照寺と号せり。 (中略) 林泉 相阿弥の考按により築造せしものなれば其規模大ならざるも一草一木名品を択み一石一竹尽く来歴を有し、池あり島あり橋あり飛泉ありて能く造庭の方式に適合し以て後世園芸の規範となれりと云。園門は西に向ひ空処閣三字の額を掲ぐ。園の東南の山端に瀑布あり、洗月泉と名く。其傍に落照園と称する所あり。同所に横の古木あり千代の横と名く、必ず義政時代のものならむ。方丈の簷下に白砂を積み壇を為す、向月台及び銀沙灘と名く、此れは月光を白沙に受けて返照せしむる為めなり。今此に園内に散在せる最もなるものゝ名を左に掲ぐれば、橋に分界・迎仙・濯錦・臥雲・竜春・仙袖・仙桂等あり、石に竜蟠・蹲虎・點頭・落星・濯纓・爛柯・天柱峰・回雁峰・香炉峰等あり、其他謝公塢・落照園・釣月台・仙人洲・白鶴島・臨湖台・仙草壇等の雅名を附したる勝あり。又た東求堂の北に清泉あり、御茶水と云。傍に相国寺蕉中禪師撰文の碑石を建て題して東山相君茶泉碑と云
『京城勝覧』	宝永3年	1706		銀閣寺	第二日 東方		輝麗なる庭有。泉水あり
『京華要誌』	明治28年	1895		銀閣寺			本名を慈照寺といふ。済家禪宗相国寺末寺十刹の一にして、開基は夢窓国師なり。はしめ將軍義政こゝに閑棲し、林泉を築営し、二層の高閣を建て、義満の金閣にならひ、銀閣となさんとせしか、未だ銀を貼するに及ばずして薨す。(中略)当山地域は月待山の麓に抱り、林泉は相阿弥の作にて、当時室町幕府の勢を以て諸侯伯を驅役して築営したるものなれば、一草一本みな名品を択ひ、一石一竹も来歴あり。結構瑰麗を極め趣致尽さざるはなし。今撰名の雅尚なるものを挙ぐれば、橋に分界・迎仙・濯錦・臥雲・竜春・仙袖・仙桂等あり。石に竜蟠・蹲虎・點頭・落星・濯纓・爛柯・天柱峰・回雁峰・香炉峰等あり。山に瀑布あり。洗月と名く。又白沙を積み、壇を作り、向月台、銀沙灘と名づく。其他謝公塢・落照園・釣月台・仙人洲・白鶴島・臨湖台・仙草壇等あり。一々かぞへかたし。樹石みな古鋪し、白沙蒼苔反映の妙を極む。後世園芸の模範となり、茶道家の粉本となる。前人評して壺中に山川を縮め、粟粒に日月を蔵したる、神仙の術ありとぞ見たるも過賛にあらし
『都花月名所』	寛政6年	1793		銀閣寺	看花		原は東山殿(足利八代義政公)の山荘也。庭中に高閣あり。相阿弥庭を造る。桜種類多し
『都名所車』	正徳4年	1714		銀閣寺			方丈の南の庭池水の面に二重の閣あり銀ばくをもつてかざりとす第一の閣を心空殿第二の閣を潮音閣といへり書院に順月の額其外所々に名石ありその結構美をつくせり
『山城名所社物語』	享保年間	1716～36	1巻	銀閣寺			又方丈の南庭池水の西に閣をつくり銀ばくをもつてさいし西山金閣寺をうつつ其けつかういふばかりなし
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	2巻	銀閣寺			○臥牛石龍背橋 在一方丈・前仮山へ 〔○臥牛石龍背橋 方丈の前の仮山にあり〕
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之三 左清龍	銀閣寺	慈照寺		そもそもこの庭は東山殿の好みにして、茶道相阿弥台命を蒙りて造りしなり。庭中の風光貞妙にして山水の法式をもれず、四時の壯観足らずといふ事なし。末代庭造の規範とするなり。洞庭・西湖も掌に握り、松島・象潟も目前にたくみて、壺中に山川を縮め、一粒の粟中に日月を蔵したる、神仙の術ありとぞ見えにける
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第27学区(浄土寺町)之部	銀閣寺	慈照寺	字宮の前寺院	△林泉は都下の名苑にして。水石極めて佳なり。初め足利氏の童明相阿弥の作る所と云ふ。(図は京華林泉帖其他に見ゆ)東月待山に倚頼し。瀑泉を落下して西に注く。之を洗月と云ひ。池水を金鏡写す。一樹一石皆名あり。今存する撰名の雅なるものを挙ぐれば橋に分界(園前に有)迎仙(島嶼中にあり)濯錦。臥雲。龍春。仙桂あり。石には龍蟠。蹲虎。點頭。落星。濯纓。爛柯。天柱峰。回雁峰。北斗。香爐峰等在り・又白沙を積み壇を造る。之を向月台。銀沙灘と名く。其他謝公塢。落照園。釣月台。仙人洲。白鶴島。臨湖台。仙草壇等あり。爰に大概を注す
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	銀閣寺	銀閣	古閣	東山浄土村の内慈照寺にあり此寺相国寺の末寺にして慈照院義政公閑居の地也依 ^レ 之東山殿と号す方丈の南庭池水の西に閣あり銀箔をもつて飾とす此ゆへに世に銀閣と云其結構美をつくすものなり閣の第一重を心空殿と号し第二重を潮音閣と稱す書院に吟月の額有此外所々に其名あり
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	9巻	銀閣寺	東北歴覽之記		慈照寺于今存シ、義政公造立ノ銀閣残レリ、世ニ謂フ二銀閣寺ト一、庭ニ水ノ石アリ、其ノ体由アル気色ナリ
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	11巻	銀閣寺	東西歴覽記		慈照寺ニ入り、先銀閣ニ登ル、潮音閣二本尊観音岩窟ニアリ、閣ノ額今ハナシ、下ヲ吟月ト云フ、コレモ今額ナシ、暫池上ヲ詠メ、ソレヨリ池ヲメクリ、東求堂ニ到ル
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	補足・近畿歴覽記脱文	銀閣寺	北内魚行記		慈照寺于今存シ、義政公造立ノ銀閣残レリ、世ニ謂銀閣寺、庭ニ水石アリ、其体由アル気色ナリ
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	4巻	銀閣寺	慈照寺		はじめ庭の面に閣を立られ銀箔にて彩色しける故に銀閣寺とも名づく
『宝永花洛細見図』	宝永元年	1704	4巻	銀閣寺	慈照寺		庭の面に閣をたてられ銀はくにて
『都花月名所』	寛政6年	1793		銀閣寺	洗月泉	清水	銀閣寺
『都花月名所』	寛政6年	1793		銀閣寺	諸侯石	石	銀閣寺
『都花月名所』	寛政6年	1793		銀閣寺	月待山	賞月	銀閣寺 当境の東求堂閣中より如意嶽の月を賞す 足利義政公 我庵は月まつ山のふもとにてかたふく庭のかけをしぞ思ふ
『都名所島』	元禄3年	1690	一卷	銀閣寺	瓜生山	愛宕郡	むかし相国義政公此所に閑居し給ふ。世に東山殿といふなり。常に茶をたしなみて。此亭に興行有。世に四帖半を用ゆるは東山殿よりはじまれり。南の庭に池有其西に閣を立銀箔をもつてかざる。依て銀閣と云なり。北山殿に金閣あり。くはしくは諸書のごとし
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	銀閣寺	慈照院	古蹟門上 愛宕郡	信長公、あらかじめ、氏真よく蹴鞠すと聞きたまひ、その芸を見んがために、乃しい、遊庭の会あり。三条大納言実条、烏丸・高倉・飛鳥井・広橋・五辻・庭田及び氏真、その人数たり。その時の方丈、今なほ存す。玄閣の模様・恰好、凡工の及ぶところに非ず。その後、玄閣を構ふる者、来り見てこの様に依るよいふ。倭俗、蹴鞠の場、遊庭と称す。また、懸といふ。倭俗、諸物の体相を懸といふ。舞台の橋懸、家屋の庭の懸の類、これなり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	銀閣寺	慈照寺	寺院門上 愛宕郡	方丈の東に東宮堂を建て、中間に持仏堂を安じ、八幡をもつて鎮守とす。東北に書院あり、同仁齋と号す。これを濫觴とす。方丈の南庭、池水の西に閣あり、銀箔をもつてこれを飾る。世に銀閣と称す。これまた、相公の設くるところにして、その結構、大北山鹿苑寺の金閣を摸すものなり。閣の第一重心空殿と号す。第二重を潮音閣とす
『雍州府志』	貞享3年	1686	1巻	銀閣寺	慈照寺山	山川門 愛宕郡	慈照院義政公、中年、政務を義尚公に譲り、この山下に慈照院を建てて閑居す。その中、東求堂は、常に居たまふ所なり。銀閣、中庭にあり
『洛陽名所集』	万治元年	1658	2巻	銀閣寺	浄土寺村		慈照寺 此寺は、浄土寺村の東のかた也 義政將軍（東山殿号々慈照院）延徳二年正月七日（薨々）菩提所也院の飯庭に閣有。銀箔にて彩しければ、銀閣寺とも云なり。北山は金閣に。ことならふとぞ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	吟花廊			八月二十日は定家卿と玄旨法印の忌月とて和歌の会を興行せり此日は前庭に燕雀等数百羽はなちて放生園といひき園には門人柿の木をうへたよりて柿園ともいへり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	8巻上	金目地藏堂	葛野郡部二		続古事談云待賢門院法金剛院作り初て御幸有けるに人々爰かしこ興じけり立石は徳大寺法印せられけり
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	禁裏御所 花園園十境			菩提樹（下ノ御茶屋ニアリ） 寿月観（同上） 蔵六庵（同上） 彎曲欄（田ウヘ御ランノトコロ） 洗詩堂（上ノ御茶屋） 窮達軒同上 止止齋（同上石ノハシリ御建物ナシ） 浴龍池（土居ノ東ノ池ナリ） 万松塙（中島ナリ中に四方四面ノ松アリ）
『京城勝覧』	宝永3年	1706		金龍寺*	松が崎		○金龍寺（中略）庭に真桜といふ桜多し
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	金龍水			庭中には百花千種を聚む
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	金蓮寺	寺院門上	愛宕郡	寺中、慶松菴の庭に、大なる松あり。毎年、夏のはじめ、杜鵑来り鳴く。普広院義教公、駕を枉げ、これを聞きたまふ。よりて杜鵑松と号す。先年、霹靂のために枯れ失す
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	金蓮寺	杜鵑松	名樹	四条の道場金蓮寺の中慶松庵の庭にあり先年いかづち此松に落て枯失ぬ毎年春の末夏はじめほととぎす此松に来りてはやく初音を鳴出し侍るとぞいにしへ普廣院義教公春の末ごとに此所に入らせたまひほととぎすをききたまひしとなり是より杜鵑松と云
『都名所鳥』	元禄3年	1690	五巻	金蓮寺	杜鵑松	名木之部 愛宕郡	四条の道場金蓮寺の中。慶松庵の庭にあり。毎年春の末夏のはじめは。ほととぎすはやく此松にきたりて初音を出す。むかし普広院義教公。春の暮ごとに。爰きたり給て。ほととぎすを開給ふより此名あり
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	敬礼寺	寺院門上	愛宕郡	伝へいふ、夢窓国師、西芳寺の飯山を造るの時、この地藏現出して、その巧を助く
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	建仁寺			○当山十景（清拙和尚の頌あり）慈観閣（方丈）望闌楼（山門）大悟堂（僧堂）群玉村（衆寮園）入定塔（開山塔）楽神廟（鎮守）無尽灯（禪居庵）清水山 第五橋 鴨川水（中略）（その外塔頭林泉名画あり、これを略す）
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	建仁寺			建仁寺の十境 慈観閣 望闌楼 大悟堂 群玉林 入定塔 楽神廟 無盡燈 清水山 第五橋 鴨川水 此寺の昏鐘鳴よそにことなり
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		建仁寺	下京区之部		法水池 南門の内にあり、中央に石橋を架す。 （中略） 靈洞院 高山和尚の開基なり。其庭は宇治上林の設計に成りて都林泉に記載しあり。（中略） 両足院（中略）其庭は当院の祖干葉前叟九十三歳の時作りたる所にして中央に池あり、対岸に築山あり、猶數の内竹心の置き石、五葉松の大樹、朝鮮松等あり、幽静にして韵致に富む
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第20学区之部	建仁寺	小松町	寺院	△山門ノ址 中門の北に其址を存す。前に池水あり。石橋を架す。之を法水池と号す。池に蔡花を植う。（中略） △経蔵 建仁寺方丈の庭に在り。 （中略） ○靈洞院（中略）林泉は頗る雅致に富み。本寺第一と称す花洛林泉帖に見へたり。 （中略） ○正伝永源院（中略）泉石台閣を営み。最も雅趣を極む
『京華要誌』	明治28年	1895		建仁寺			法水池 は南門の内にあり、中央に石橋を架す
『山州名跡志』	正徳元年	1711	4巻	建仁寺	東山建仁寺 安国寺塔	愛宕郡	在々方丈ノ北庭ニ 彼僧ノ首ヲ所ノ葬也
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	建仁寺十境	十境		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	建仁寺十境	十境		慈観〔木閣〕 望闌楼 大悟堂 群玉林 入定塔 神楽廟 無尽灯 清水山 第五橋 鴨川水
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	顯房公亭	洛陽部四		六条右大臣六条の家つくりて泉などほりてとくわたりて見よなど申たりければよめる 金葉 顯雅御母 千とせまですまん泉のそこ清み影ならべんと思ひしもせじ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	8巻	恋塚			一むかし烏羽殿に勝光明院をたてさせ給ひて保延二年三月二十三日に供養の日行幸などありき久寿元年二月十五日法皇美福門院御同車にて烏羽の東殿より勝光明院へ行幸有し庭の桜を御覧ぜられける先あみだ講を脩せられけり法皇少納言入道信西を御使にて御歌を内大臣新大納言等にたまはせける檀紙に書て桜の枝に付られけり 心あらば匂ひをそへよ桜花後のはるをばいつかみるべき おのく御返事をよみてもとの枝につけて奉る 心ありて咲てふ宿の花なれば未はるぐと君のみぞみん 内府 君が代の未はるぐの桜花匂はんことも限りあらじな 大納言
『都花月名所』	寛政6年	1793		興雲寺	瑪瑙石	石	洛東興雲寺 手水鉢也。東福門院御寄附有し也。又、大佛妙法寺庭中にも有
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之四	高山寺	桐尾高山寺		桐尾高山寺の林泉は三雄のその一なり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	7巻	興正寺			寺ニトママリ詠レバ自然ノ山ヲ庭トシテ。枯タル梢ニマドフ藤。ミドリノ枝ニヤドル鳥。八重ヤ一重ノ岩躑躅。山ノミナ。モヘタツヤウニ見ヘケレハ。宇治ノ流ノカマリトモセン。岩間ヲ伝フ白糸ノ。瀧ノシラベヲ聞カラニ。音シルモノハ誰ナラン。アヤシキ石ニタヘナル木。水ニウツリテカゲ清シ。猶モ芍薬花開テ苔蔭ノ面ス。葉ハ乱テ夜羽ノ頭。ソノ外何ヲカ。カゾヘン。スグレタル所ハ常ニシモアラズ。サカンナル庭ハフタ・ヒシカタケレハ暫クコ・ニ遊ヌ
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之二	高台寺			高台寺の林泉は豊太閤御霊舎の下段方丈の東にあり、風光奇雅にして洞庭を縮むの悌あり。（中略）夏は庭中の池の面に燕子花咲乱れ、また秋は秋の花錦を晒すがごとく、露深うして色をまし、鷺峯の月皎々として鮮なり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	高台寺			十境あり白山嶺 菊潭水 岩栖洞 長楽鐘 双林溪 蟠蛇池栢吟墳 安閑窟 湖月堂 祇園林是也菊潭水は方丈のうしろ四五町山中に有秋菊をのづからうばしく調水いさぎよし菊谷とてもとより名をえたりし境地なるべし岩栖洞其道に湖月堂は 〔亅口〕 高台院殿の御影堂にて秀吉公の御影もありいと高き所にいらかそびへて庭のつゞけるさま見所あり
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		高台寺	下京区之部		仏殿及び方丈（中略）同所より開山堂に通ふ廊を樓船廊と称し、中央に月見台あり、桃山城より移せしものなりと云。此の間右に鶴池、左に亀池あり共に遠州好みと称す。開山堂（中略）此の堂を出る所又た回廊あり、臥竜の額を掲ぐ。其構造は贅石を畳み廊となし石材を用ひて塔となす。廊南に池あり、蟠竜と名け岸上に数多の松樹を植え以て播州舞子浜の風景に擬す
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第22学区之部	高台寺	下河原町	寺院	境内には松檜陰森として風致樹に富み、姥桜の如き、胡枝花の如き。尤も著名なり。春秋の候工女争て之を賞す。庭園は開山堂の前に在り。池水を穿ち平地には矮松盤屈して龍の蟠るが如く。青苔平輔甍を敷くに似たり。往年舞子ノ浜の景を模せしものと云ふ。 （中略） 十境 白山嶺（高台寺の良峰） 菊潭水（菊水を云） 岩栖洞（東北の山腹にあり。大岩時つ岩栖院の旧趾なり。） 蟠蛇池（清水山の東にあり蛇池と云） 湖月堂（昭堂なり） 安閑窟（茶亭を云） 猊吟墳（貝多墳則ち経力塚なり） 双林溪（菊溪を云） 祇園林（今の清井町なり元南林と云） 長楽鐘（長楽寺梵鐘の音也） （中略） △円徳院（中略）庭園は今に存す。所謂石庭式なり。空池に石橋を架し奇石を安排す。伝て小堀政一之作と云ふ。洗手鉢あり増垣と名く世に著名なり。図は花洛林泉帖（編者の著書也）に載す。（敷地一半は明治二年上地せられ今民有に歸す）
『京華要誌』	明治28年	1895		高台寺			仏殿・大方丈・小方丈（中略）兩方丈より開山堂に通ふ廊下を樓船廊といふ。また災後の新築なり。此間の林泉爽幽雅、愛すべし
『山城名勝志』	正徳元年	1711	15巻	高台寺	愛宕郡部三		十境 白山嶺（高台寺良峰） 菊潭水 岩栖洞（在東北山腹大岩時栖院旧趾也） 蟠蛇池（在清水山東云蛇池） 湖月堂（昭堂） 安閑窟 相吟墳 双林溪 祇園林 長楽鐘
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	高台寺十境	古蹟門上	愛宕郡	山を鷺峯といふ。十境は、いはゆる白山嶺・菊潭水・岩栖洞・蟠蛇池・湖月堂・安閑窟・栢吟吟墳・双林溪・祇園林・長楽鐘、これなり
『都花月名所』	寛政6年	1793		広隆寺	蓮		太秦 薬師堂の東の方池中に紅蓮多し
『出来齋京土産』	延宝5年	1677	1巻	極楽院			かのつえにつき給ひし鹿の角は今に極楽院の什物として去ぬる頃後光明院崩御の御中陰に鉢扣数人打つて。般舟院にまいる。念仏法語をととなへて調経しける時にかの角をさゝげて庭上に立たりけるを見侍べり。世に類なき大なる五支の鹿角なり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	12巻	極楽院	愛宕郡部二		（昔為一院・今小堂一字在・梶井宮庭中）（後略） 〔昔一院なり、今小堂一字梶井宮庭中にあり〕
『洛陽名所集』	万治元年	1658	1巻	極楽院			さきの年、後光明帝崩御の御とふらひ般舟院にて有し時。此所より数十人來り。かの五支の鹿角を持庭上にて念仏となへおどりけるを見侍りぬ
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	御所屋敷	古蹟門下	紀伊郡	西八条にあり。平相国清盛公の別荘なり。今、田間に、泉石の跡あり。年々梅雨の節、水草生育し、白蓮華、また、隅々開くといふ
『都花月名所』	寛政6年	1793		御製紅葉	丹楓		当寺は五水尾院の姫宮瑤祢尼公の御草創也。庭中奇景典麗にして八勝あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	12巻	後鳥羽院法花堂	愛宕郡部二		平戸記云仁治三年四月十六日大原法花堂（順徳院御簀所）前山近于庭 件件北山より更ニ被引却へ（仁治三年四月十六日大原法花堂前山近く庭 件件北山をさらに引却せらる）
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	凝花舎	殿舎		凝花舎の梅さかりなるを見てよみ侍ける 続後撰 前太政大臣 いろくにこりつゝ庭の梅の花いく世の春を匂ひきぬらん 正治院百首 李保 たか袖にかけてしむらん梅つぼの枝に風わたるなり
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	1巻	駒瀧	川澤		在城南寺ノ獨秀峯ニ相伝僧正道智物故棲ニ神ノ瀑後建。祠ヲ祀。焉瑞龍僧目ヲ曰ニ神仙ノ佳境ニ至。今ニ寺僧領席ノ時供ニ齋粮ヲ以テ恒規トス 〔南禪寺の獨秀峯にあり、相伝僧正道智物故神をにおいてここに棲みし、瀑の後ろに祠を建てて祀る、焉瑞龍僧をみて、神仙の佳境という、今に至りて寺僧領席のとき齋粮を供す、以て恒規とす〕
『京雀』	寛文5年	1665	巻2	こまやくし町	万里小路通		往当高麗薬師此町におはしけりとにや昔は中御門の北萬里小路の東に紀の貫之の家あり南庭に桜木おほくうへ渡しければその家を桜町とがうせしよにや
『京雀跡追』	延宝6年	1678	地	こまやくし町	柳馬場通		さはら木丁下ル丁也そのかみ高麗薬師此町ニ有しとかやさはら木丁通柳馬場の東ニ紀の貫之の家有しとかや南庭に桜多くうへ渡しければ其家を桜町とがうせしとかや
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	補足・近畿歴覽記脱文	御水尾院離宮*	北内魚行記		後水尾院ノ離宮、今は禁裏ノ御地トナリ石川信濃守預り也、去年マテ春秋ノ御幸其外臨時ノ御遊度々ナリシニ、今ハ早昔語ニナリ山色水声マテ自寂寥タル有様、時を感メ花ニモ涙ヲ灑クト古人ノ云ヘル事今更思出、最哀ヲ催シケリ
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		金戒光明寺	上京区之部		方丈 本堂の東にあり廊を以て接す。其客殿の北に庭園あり、泉水・築山等ありて趣味に乏からず。 （中略） 熊谷堂 蓮池の南にあり蓮池院と号す。 （中略） 西翁院（中略）茶室の前三間許隔て手水鉢（つくばいと称するもの）あり、其所まで茶室の屋根を架せり。同所より猶飛石を伝ひ行けば奥方丈に至る

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第27学区(岡崎町)之部	金戒光明寺	字福の川	寺院	○反古庵 西翁院の内にあり。天和年中藤村康軒の作る所の茶亭なり。翁は茶事に精通し。一派を創す。室を藏看と云ふ。通に城南を望めば。淀川の白帆点々たるを認む。故に此号あり。軒前に蹲踞式の手水鉢及石燈籠あり。皆名品なり。花洛林泉帖に載す
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	金戒光明寺	紫雲山十境		紫雲万松 台獄彩霞 神岡鄧獨 鴨森夏雨 獅谷夜月 石川寒流 松崎翠嵐 岡崎深烟 禪林幽鐘 白川樵歌
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	金戒光明寺	紫雲山十景	十景	
『山州名勝志』	正徳元年	1711	4巻	金戒光明寺	紫雲山金戒光明寺	愛宕郡	○鑑池 在 _二 方丈ノ北ノ庭 _一 伝 _二 云 _一 熊谷入道。昔著セシ以 _二 鑑 _一 所 _一 洗ナリト 池ハ上古ヨリ所 _一 有 _二 トイフ _一 〔鑑池 方丈の北の庭にあり 伝えいう熊谷入道、昔著せし鑑をもつて洗うところなりと 池は上古よりある所という〕
『京都土産』	明治28年	1895		金戒光明寺 光明寺 知恩院	著名事物 三幅対		黒谷の紫雲石 光明寺の紫雲松 知恩院の紫雲池
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻上	斎院	愛宕郡一		本朝文粹(中略) 鳳城ノ北鴨水ノ西泉石占勝 _ヲ 聴 _ヲ 撰俗ノ蓋 _ヲ 是 _レ 今上第二ノ之皇女斎内親王ノ之神院 _{ナリ} 矣云云 〔鳳城の北、鴨水の西、泉石勝視を占う、撰俗を聴き蓋し、これ今上第二の皇女、斎内親王の神院なり〕
『洛陽名所集』	万治元年	1658	7巻	斎院			詞花集に。皇太后宮。賀茂の斎と聞えたまひける時。人々参て。鞠などつかうまつりけるに。硯はこのうたに雪を入れて。出され侍りける。色紙に書付ける。摂津 さくら花散し庭をはらはねばきえせぬ雪となりにける哉
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	西院	葛野郡部一		本朝文粹(源順) 淳和院ハ _二 者 _一 橘ノ太后ノ之別宮 _{ナリ} 也太后落シ _テ 飾 _ヲ 入 _ル 道 _ニ 之日一掃 _ヲ 椒庭 _ノ 之塵 _ニ 長ク住 _ス 進台ノ月 _ニ 〔淳和院は橘の太后の別宮なり、太后飾りを落とす、道に入るの日、椒庭の塵を掃いて長く進台の月に住す〕
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	西行梅	名樹		上賀茂南の堤の下西念寺の庭にあり伝云西行法師しばらく此所に住てとめよかし梅さかりなる我やどの歌を詠ず其後此梅をとめよかしの梅と云へり今に此梅の残種あり其花薄色にして其香はなはだ高し尤愛するにたへたり
『京羽二重』	貞享2年	1685	4巻	西行寺	諸宗仏閣		本尊地藏行基ノ作庭ニ在 _二 月見ノ池 _一 西行法師暫ク棲 _ニ 此所 _ニ
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	西行寺	寺院門下	紀伊郡	庭に、月見池あり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	西行寺	月見の池	名池	山城の國伏見のさと西行寺と云寺の庭にあり往昔西行法師此池にて月にて月を愛せしとなり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	西行法師所在	所在地		嵯峨あらし山と松尾との間に西行が愛する所の概あり此所に庵をかまへて住し侍ると其後寺となる今真言宗證菩提院の地是なり又小倉山二尊院東南の隅竹林の内に西行住庵の跡あり又竹田安楽寿院の西南に西行法師しばらく住侍る今其所に西行寺あり庭に西行月見の池あり
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	3巻	西念院	上賀茂行程		是ヨリ社司ニ暇乞シテ森ノ西ノ方ノ川ヲ渡リ大宮通ニ出ツ岸ノ下村ニテ窪ノ御堂ヲ尋ヌ折節住僧移水出合寺ノ来由ヲ語レリ此ノ寺ハ行基ノ開基ナリ弥陀ノ両尊則チ行基自作ナリ寺号ハ西念寺古ハ天台宗ト見ユ今ハ浄土宗ニテ賀茂ノ別業トナリ社司ノ葬送ヲ執行ス墓所ハ鷹カ峯ノ麓ニアリトナリ中古西行法師初発心ノ地ナリ庭前ニ梅アリ是レ則チ西行カトメコカシノ歌ヲセル木トテトメコカシノ梅ト云ヘリ然レトモ其ノ時ノ木ハ枯失其ノ枝ヲ岡本宮内ニ設置シテコノ寺ニ又接リ大正二月二十日前後ニ開ク紅ノ二重ニテ其ノ香至テ深シ誠ニ故アル花ナリ
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之四 右白虎	西芳寺			方丈の庭は夢窓の作なり。庭中の造化、四時の風光、玄妙にしてまた比類なし。 澤北軒(仏殿の北西にあり。その庭に紫竹七莖を種ゑたり、北斗七僧を標すとなん) (中略) 影向石(夢窓国師親秀に命じて観池亭を開くるの日、異人七人來つて其力を扶け、石を動し地を穿つて自由を得る事数刻なり。其名を問ふにかつて答す、即日庭の観泉池成就し、白首老人此石上に坐して、曰我毎日こゝに影向すといひをばつておおく樹下にすがたを隠す。後に松尾明神を觀請す。ある時所の幼童に神託して曰、天照太神毎日此石上に影向すとぞ、此故に石を鎮守とす。一説には、国師此庭の石を疊ける時、僧害人來り大石をこゝろのまゝに動し、庭造即時に成。夢窓これを怪て問るれば、洛四条あたりの者とてひたすら夢窓の袈裟を望けり、則あたへられしかば、其かはりとて錫杖一枝残し置けり。後に四条住心院染殿地藏の戸帳をひらけば、件のけさをかけながら錫杖なかりけり。今その錫杖は天龍寺にありとなん)
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	7巻	西芳寺			松尾の南夢窓国師隠居せし寺とぞ此寺の庭池のこゝろばへ島のさま不可説の境地とぞ此庭つくらるゝ頃大石をたゞ一人して引たる僧あり夢窓あやしみて問給ふに四条のものとばかりいひて名をいはず国師の袈裟をこひければあたへられしに返報とて錫杖をおこせたり其後四条道場の地藏菩薩を開帳せしに其袈裟をかけて錫杖をもたず其錫杖天龍寺に有といひ伝ふるはまことにや庭のかたはらに七本竹とて七もとならで生ぜざる竹有
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻六	西芳寺			方丈の庭は国師の作にして、四時の造化風光微妙なること、凡人の論する処みあらず
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		西芳寺	近郊之部一		林泉 本堂の前にあり、園門に大包二字の額を掲ぐ、門内に入る所直に大池あり、黄金池と名く。旧と心字の形に作りたるも、今は其形を止めずと云。池中に島あり、報春と云。橋を架し、邀月橋と称す。池辺に乗船場あり、合同船と名く。猶松尾明神、影向石、行基菩薩手植柳等を見て、更に一池辺に達す。之を放生池と云。聖徳太子初て放生せし所にして、本邦に於ける放生の濫觴なりと云。猶歩を進むれば一門あり、向上閣の額を掲ぐ。門内の石塔を上げば山腹に開山堂あり、指東庵の額を掲ぐ。堂畔に座禪石、竜淵水、竜岩窟等の名蹟あり、伝へ云、此の辺は染殿地藏尊及び七朝帝師(夢窓国師の事なり)の共に築造せし所なりと。大樹森々修竹青青岩石蒼苔を帯ぶ、其幽邃閑雅なる恰も深山にあるが如し。京師近郊に於ける真に屈指の名園なり。只惜む、地位西に僻し曳筵の客少きを
『京華要誌』	明治28年	1895		西芳寺			当寺林泉は夢窓国師の築造せし所にして、山容水態自つから趣をなし、園中に湘南亭・澤北軒等の名あり。境地清閑樹石蒼古また洛西の一名園たり
『京師巡覽集』	延宝7年	1679	10巻	西芳寺			夢窓開テレ之ヲ為ス二我カ隠所ト一庭ニハ奇石怪岩盡ス一獣態ヲ一対スルキハ則知二頭フリシ亦連類ツクカ一禮星師子石爭イカ及シレ之ニ雁翅檜、珠子栢、尖杉、蟠松、江南信、武陵花若シ夫レ外ニハ則幡家梨、晏子橘、七絶熟甘、棧栗、婢發、況 _二 前流溪々後林鬱々假令 _一 雖 _レ 以 _二 ス _一 丹青ノ手 _一 何 _レ 寫 _レ 之洛外ノ風物極 _二 ス _一 レ之 _一 〔夢窓これを開きて、我が隠所となす。庭には奇石怪岩獣態をつく。人対する際、すなわち頭ふりしまたうなづく如き。禮星師子石争いがこれに及ばん。雁翅檜、珠子栢、尖杉、蟠松、江南信、武陵花もしそれ外にはすなわち、幡家梨、晏子橘、七絶熟し甘えん。棧栗(はしばみ)の婢發(えめり)といわんや前流れ溪々、後林鬱々假令ひ、丹青の手をもつてと。なんぞこれうつつさん。洛外の風物をこれに極めり。〕
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	2巻	西芳寺	宮室		下有 _二 瑠璃殿 _一 開 _二 繡宇 _一 間 _二 蟠松怪石 _一 雄然 _ニ 有 _ニ 而 _一 有 _二 開 _一 清池 _ヲ 名 _ニ 黃風池 _一 山後設 _レ 亭曰 _ニ 輪遠 _一 其 _レ 所 _レ 入門曰 _ニ 向上閣 _一 未 _レ 到 _二 半山 _一 別 _ニ 別室 _一 一庵 _ヲ 指 _ニ 東 _一 今余 _ス 万乙猶是洛西ノ奇觀也 〔下に瑠璃殿あり。開繡宇の間、蟠松怪石雄然めあり。清池を開きて黃風池と名づく。山の後ろ、亭を設け、輪遠という。その入る所の門を向上閣という。半山未だに到らず。わけて一庵を草す。扇を指東という。今万乙を余す。なおこれ洛西の奇観なり〕

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『都花月名所』	寛政6年	1793		西芳寺	看花		当寺の庭中は夢窓国師の作なり。総じて此辺の寺院に極多し
『都花月名所』	寛政6年	1793		西芳寺	石		夢窓国師染殿地蔵共に庭中の石を畳むといふ
『山州名跡志』	正徳元年	1711	9巻	西芳寺	夢窓飯山		在 ^リ 方丈 ^ノ 東面 ^ノ 庭 ^ニ 所 ^レ 造 ^ル 国師 ^ノ 所 ^ニ 〔方丈の東面の庭にあり 国師の造る所〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	西芳寺	葛野郡四		十境 ○瑠璃殿（緑起云無縫閣閣下名二瑠璃殿一）○西来堂（中略）○蔵密釣寂（中略）○藏精借烟（中略）○壳風店（中略）○縮遠亭（中略）○無縫塔（中略）○合同船（緑起云池曰 ^ニ 黄金 ^一 於 ^ニ 船所 ^一 レ泊構 ^ニ 小間 ^一 曰 ^ニ 合同 ^一 ）○向上閣（同云庭之乾立 ^ニ 小門 ^一 名 ^ニ 向 上閣 ^一 云云今在 ^リ 方丈 ^ノ 興 ^ニ 指東庵 ^一 之間 ^ニ ）○指東庵（中略） ○潭北軒（同云仏殿之北西立 ^ニ 軒号 ^ニ 潭北 ^一 其庭種 ^ニ 紫竹 ^一 七莖 ^ニ 標 ^ニ 北斗 ^一 七僧 ^一 ） ○影向石（同云国師命 ^ニ 親秀 ^一 開 ^ニ 庭観池亭 ^一 …） 〔○合同船（緑起いわく池、黄金をいう。船の泊まる所において、一小間を構え、合同という）○向上閣（同いわく、庭の乾に小門立つ。向上閣と名づくと云々。今方丈の指東庵興すの間にあり○潭北軒（同いわく、仏殿の北西に軒立つ。潭北と号す。その庭に紫竹を七莖をうえる。北斗七僧の標とす○影向石（同いわく、国師親秀に命じ、庭観池亭を開く）（中略） 園太暦云貞和三年二月三十日上皇臨幸 ^ニ 天龍寺 ^一 也云云自 ^ニ 是 ^一 可 ^ニ 幸 ^一 西芳寺云云行程不 ^ニ 幾 ^一 里許 ^ニ 敷 ^一 末 ^ニ 暮 ^一 之間着 ^ニ 御庭 ^一 花盛開 ^ニ 有 ^一 感 ^ニ 有 ^一 興云云其後御乗船云云（中略） 二水記云大永二年三月十六日詣 ^テ 西芳寺 ^一 一見 ^ニ ル ^一 庭 ^ニ 池水清潔忽 ^ニ 二洗 ^一 シ俗塵 ^一 ヲ一ヌ 〔園太暦いう、貞和三年二月三十日、上皇天龍寺に臨幸なり云々、これより西芳寺に幸べし云云、行程幾ず一里ばかりか、未だ暮れずの間に着く、御庭の花盛開く、感あり興あり云々、その後御乗船云云 二水記いう大永二年三月十六日、西芳寺に詣でて庭を見る、池水清潔忽俗物を洗いしめ〕
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	4巻	西芳寺			○飯山（向 ^ニ 方丈東面 ^一 庭 ^ニ ）夢窓国師 ^ノ 作也○七本竹（在 ^ニ 同向 ^一 ） 〔○飯山（方丈東面の庭に向かう）夢窓国師の作なり○七本竹（同じく向かいにあり）
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	西芳寺	寺院門下	葛野郡	方丈前庭の飯山は、すなはち、国師の経営するところなり。水石の状、凡作の及ぶところに非ず。その内、処々にその名を命ず
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之五	西芳寺	葉室西芳寺		葉室西芳寺の林泉は、夢想国師こゝに止鍋の時、洛陽染殿地蔵尊來現して土石を運び共に作りたまふ名園なり。その後伝仁の兵火に荒蕪せしを、伏見の島之介てふ者作り補ふといふ
『京都土産』	明治28年	1895		西芳寺	物事著名		西芳寺の庭
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	8巻	西芳寺	嵯峨行程		西芳寺二到り、住僧院主座二逢フ、首座ノ云ク、此所ハ、聖徳太子ノ開基ニシテ、自作ノ弥陀ヲ安置シ玉ヒ、始メ西方寺ト号セラ ル、其ノ後行基中興シ、弘法モ暫ク住セラル、平城天皇ノ御御子、高岳ノ親王、御出家ノ後、真如ト号シ、此ノ寺今ノ指東庵ノ地 ニ、御座マセシ時、坂上ノ田村丸、親王ヲ來訪シ、献セラルハ歌アリ、伝聞ク平ノ重盛公、嚴父入道相国ノ過奢ヲ争諫セシ時、暫 ク入道ノ怒氣ヲ避ケ、此ノ寺ニ盤居セリ、又時頼入道最明寺モ、暫ク此寺ニアリシト也、中世夢窓国師住ミテヨリ、禪宗トナレ リ、於 ^テ レモ ^ニ 方 ^一 ノ字ヲ改メ、西芳寺ト号ス、等持院殿屢々來臨セリ、今ニ天龍寺ノ末寺ニシテ、寺産三百石アリ、夢窓ノ手ツカラ 置メル、水石ノ跡アリ、其体天龍寺等ノ庭トハ替レリ、依 ^テ レ之飯山ヲ設クル者、天龍寺ノ庭ヲ嵯峨流ト云ヒ、是ヲ四条流ト称ス トナン
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	6巻	西芳寺	西芳精舎		此寺の庭は絶景の工あり。庭を作るとして石を曳ける時あやしき僧一人来りさしめ大石をたゞ一人して引けり。夢窓あやしみて問れしに四条辺のものとして名をいはず。夢窓の袈裟を乞ければあたへられしに。其替りに錫杖ををこせたり。後に四条の道場の地蔵を開帳せしに。件の袈裟かけて錫杖はなし今その錫杖は天龍寺にありとかや。此庭に七本竹とて名竹あり出来斎房庭の面を見て西芳寺碧岩石の作り庭時々ちりを払拭する
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	1巻	西芳寺	黄金池	川澤	在 ^ニ 西芳寺 ^一 〔西芳寺にあり〕
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	西芳寺	降臨石	石之部 葛野郡	西芳寺の池の東にも又影向石あり。明神出現して夢想国師の法を聴給ふ所也
『都名所鳥』	元禄3年	1690	五巻	西芳寺	七本竹	名木之 部 紀伊郡	嵯峨西芳寺の庭の紫竹にして。根一本にて末は七本有
『洛陽名所集』	万治元年	1658	11巻	西芳寺	西芳精舎		此寺は。松尾の南。夢窓の開基なり。作り庭有 此庭の石をひける時 僧一人来り。大石を一人にて引けり。夢窓怪て問るれば。四条辺の者と云て。只。夢窓のけさをのぞみけり。則あたへられしかば。其かはりとて。錫杖一本おこせたり。後に。四条の道場の地蔵を開帳しければ。件のけさをかけながら。錫杖なかりけり。今その錫杖は天龍寺に有となん
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻下	桜御所	洛陽部一		翰林五鳳集（近衛殿賞絲桜）春入 ^ニ 庭桜 ^一 見 ^ニ ル ^一 始 ^ニ 奇 ^一 ル ^一 詠 ^シ 和歌 ^ヲ 又賦 ^ス 唐詩 ^ヲ 絲々搭在 ^ニ 玉欄 ^一 上花若 ^ニ 無 ^一 ハ香誤 ^ラ ン柳枝 ^ヲ 〔翰林五鳳集（近衛殿糸桜を賞す）春庭の桜に入りて始めて奇なるを見る、和歌を詠まじき唐詩を賦す、絲々搭在す、玉欄の上花若し香無んば柳枝を誤らん〕
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	桜町			中御門の北万里小路の東南の庭に桜の木おほし故に桜町といふ
『京之水』	寛政2年	1790	鱗之巻	左近桜	殿舎并二 皇居内門		此殿の御階のもとにあり、南殿桜とぞ、御階桜ともいふ。歴代編年集成曰、南殿桜は旧梅なり。桓武天皇遷都の御時より植給ふなり。禁秘抄曰貞観の頃に此樹枯て根もとより纔に萌出るを坂上滝守勅をうけてこれを守れば枝葉再び榮けるとなり。 南殿の桜を本府より植侍る時 大内の花のたねにて侍りければ 続千載 いにしへの雲みの桜種しあれば又春に逢ふ御代そしらるゝ 左近大將為教
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻上	佐々木	愛宕郡一		（今賀茂上社の西南賀茂川堤より西に窪堂といふ寺あり寺号西念寺と号す伝へ云西行法師の菴基なりと庭中に梅の木あり西行法師の詠る所の梅なりとてためこかしと名づく按るに此所西行の住はる佐々木といへる所にや）
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻 冬部	雄冬			世をのがれて水石を楽しむ人の庵にまかりて 冬の日は蟹の爪きく庵かな 似船

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『近歳歴覧記』	貞享3年	1686	9巻	三猿堂	東北歴覧之記	及テ二日暮ニ一幅枝ニ歸リ圓通寺ニ一宿ス、折節晴天月叡山ノ南ヨリ出テ特ニ晴明ナリ、性通禪人ト深夜ルマテ閑談、夜半過各就レ眠ニ、夜已ニ明性通禪人ヲ伴ヒ、圓光院ノ塔ヲ拝シ、三猿堂ニ赴キ暫ク憩フ、山水之間紫藤花躑躅花相映ス、其ノ景象非ス筆舌之所ニ及也、溪水ノ音松風ノ響キ、都ニテ聞馴サル事ノミニテ、心耳ヲスマセリ、其間寂滅ニ別世界ヘ行ケル心地シケリ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻上	讃州陣	洛陽部一	五鳳集云（会・讃州源公私宅ニ）府主ノ風流冠々我々州ニ。築々山ヲ貯ヘテ、水ヲ架ス。画樓ヲ兵前ノ草木識レ威勢ヲ。 〔五鳳集いう（讃州源公私宅に会う）府主の風流我が州に冠たり、山を築き水を貯えて画樓を架す、兵前の草木威勢を知る〕
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	2巻	三重塔		○鑑ノ池 在ニ方丈ノ北ノ庭ニ 〔鑑の池 方丈の北の庭にあり〕
『開化絵入京都見物独案内』	明治18年	1885		三十三間堂		又池に燕子花多し
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	三寶院	寺院門下	宇治郡 庭前の仮山に、藤戸石あり。相伝ふ、もと、備前の小嶋にあり。佐々木三郎守綱、郷導の人をこの石の上に殺す。秀吉公、この石を取り、聚楽城に置きたまふ。その後、この寺に寄す
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之五前朱雀	三寶院	深雪山醍醐寺	藤戸石（三寶院の庭中にあり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	三寶院	醍醐寺	一下の醍醐三寶院の庭に藤戸の石あり佐々木三郎盛綱備前の國藤戸の先陣せし時朝夕に浦の男に浅瀬の案内を問てしるしを置いて馬をのりいれし所の岩といひ伝たり東大寺の東坊にも庭に大石あり聖宝の金峰山より負来れりしといへり其大さ人力のをよぶ所にあらず（元凶享釈書にあり）
『京城勝覧』	宝永3年	1706		三寶院	下醍醐	第四日 里中に三寶院殿の宅あり。是真言山伏の長なり。庭よし。藤戸のうきすの岩あり。秀吉公取よせ給ひしが爰に來れりといふ。高さ三尺ばかりあり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	三寶院	藤戸石	名石 醍醐三寶院の庭に有之
『京童』	明暦4年	1658	巻5	三寶院	醍醐	下の醍醐は。三ぼうみんと申し山ぶしのつかさなり。此庭にささきの三郎もりつな。ふぢ戸のわたしのあさ瀬をたづねかの下らうを一かたなさしとき。しりかけしいしあり。なづけてふぢ戸いしといふ
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	7巻	三寶院	下醍醐	三寶院曰ニ之ヲ当山ト々伏ノ司職也藤戸石物ノ旧ヲ守綱ノ之功今ノ新ニ知ル矣 〔三寶院、これを当山といわく、伏の司職なり。藤戸石、物の古きて守綱の功、今新たに知りぬ。〕
『都花月名所』	寛政6年	1793		三寶院	藤戸岩	石 醍醐三寶院
『都名所車』	正徳4年	1714		三寶院	醍醐寺	下の醍醐賢俊僧正の開基也寺院仏殿有又三寶院御門跡の御宅あり真言山伏の上首なり御知行六百五十石此庭を藤戸石とて有板の花多しさかりの頃は都よりの見物あり是より十町ばかり南の方に一言字の観音とていけんあらたなる観音なり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	三寶院	藤戸石	石之部宇治郡 醍醐三寶院の庭にあり。はじめ備前の小島にあり。佐々木三郎盛綱導たる者を。此石の上にて殺したり。秀吉公此石を備前より取よせ。聚楽の城に置給ふ。其後此寺によせられたり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	鹿間塚		西門の戌亥鐘樓の西に高き所松生て有彼命婦高子草堂をおもひたゝるゝに田村丸延鎖もともに其心さしあれど山けはしく岩高くて人力及びがたしかるに一夜物の声有て岸をくづし谷を埋けるを明朝みればかの輪船たいらに成て作庭を堺へるがとし
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻冬部	時雨		風雅集冬 太上天皇 夕日さす落葉のうへに時雨過て庭にみだるゝ浮雲の影
『山城名勝志』	正徳元年	1711	12巻	獅子巖	愛宕郡部二	（在本堂庭ニ） 元亨釈書ニ云 忍修ス八字文殊ノ法ヲ庭上ノ大石変メ為テ師子ト廻旋唵吼ス 〔（本堂庭にあり） 元亨釈書にいう 忍八字文殊の法を修す、庭上の大石変め師子となりて廻旋唵吼す〕
『近歳歴覧記』	貞享3年	1686	11巻	詩仙堂	東西歴覧記	一乗寺村ノ南石丈山碑ノ山ヘ上リ、其ヨリ天皇ノ森ヲ過、丈山ノ旧宅ヘ到ル、今ノ菴主三好安宅他ニ出、獨リ庭上ヲ眺麻懷旧ノ情不能止
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	地藏院	葛野郡四	秋風を庭のをしへの一葉かな 藤孝
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	地藏院	寺院門下	相楽郡 東南田間に、諸兄公第宅の遺址あり。水石、残れり。また、その西に、橘諸兄公夫婦の塔あり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	自然居士屋敷	古宅地	東福寺竜吟庵の東溪にあり泉石のあと今に残れり
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	自然居士屋敷	古跡門下	同郡東より南に至 東福寺龍吟庵の東溪にあり。泉石の跡、残れり
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻冬部	霜		続拾遺集 平政長 見し秋の露をば霜に置かへて花の跡なき庭の冬草
『京城勝覧』	宝永3年	1706		下鴨神社	本社	第十六日 本社は北にありてその間へだゝれり。道東西に二筋あり。本社南ひがしに御手洗川有。清泉わき出る。此水夏もはなはだひやゝかなり。糺の森あり。此社もつとも佳境なり。林泉もまたきよし。遊人たえず
『洛陽名所集』	万治元年	1658	7巻	寂光院		誠に所から哀とみゆるもいとゞ袖ものゝみに。露しげく。かはらぬ物とては。うしろなる山の翠嶽と見えて。すなほなる路づたひ。羊躑躅色よく爪木おる手のおのづから猿のこゑにつれならひ。かの四皓がにのしひし。終南はとをくて。李渤が跡かくしぬる。少室はけはしとぞ思ひながら。庭おほへる垣の緑蘿しげり合て。しのぶもぢずり誰とふ覆の音なきにも岩ねふみかよふ小鹿の声のみにて。薛荔なゝめに密雨におかされぬと
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	5巻	修学院		修学院の御庭おがみ奉りしに周令も伴ひて今日発句仕らんにみせたてまつれとの御事のよしにて周令まで奉りし句 これはされこれは小蓮花見事哉 修学院御苑十景 菩提樹 寿月観 蔵六菴 曲曲閑 洗詩台 隣雲亭 窮遂軒 止之斎 浴龍池 万松塢 八景は 村路晴嵐 修学晚鐘 遠岫帰樵 松崎夕照 茅櫓秋月 平田落雁 隣雲夜雨 叡峰暮雪

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	修学院	仮山地		方丈の庭は夢窓の作なり。庭中の造化、四時の風光、玄妙にしてまた比類なし。 澗北軒（仏殿の北西にあり。その庭に紫竹七莖を種承たり、北斗七僧を標すとнан）（中略）影向石（夢窓国師親秀に命じて観池亭を開くるの日、異人七人來つて其力を扶け、石を動し地を穿つて自由を得る事数刻なり。其名を問ふにかつて答ず、即日庭の観泉池成就し、白首老人此石上に坐して、曰我毎日こゝに影向すといひをはつておく樹下にすがたを隠す。後に松尾明神を觀請す。ある時所の幼童に神託して曰、天照太神毎日此石上に影向すとぞ、此故に石を鎮守とす。一説には、国師此庭の石を豎げる時、僧志人來り大石をこゝろのまゝに動し、庭造即時に成。夢窓これを怪て問るれば、洛四条あたりの者としてひたすら夢窓の袈裟を望けり、則たへられしかば、其かはりとして錫杖一枝残し置けり。後に四条住心院染殿地蔵の戸帳をひらけば、件のけさをかけながら錫杖なかりけり。今その錫杖は天龍寺にありとナン）洛の良隅一乗寺村の北にして 御水尾院の別宮此所に有庭に方二町の池水をただへ小船をうかべ誠に遠望清絶の景地也又此南に曼殊院御門主の境地有此の樂山世にしれる所にして絶品の假山なり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	修学院御苑十景	十景		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	修学院八景			村路晴嵐 修学晚鐘 遠岫帰樵 松崎夕照 茅檐秋月 平田落鷹 隣雲夜雨 叡峰暮雪
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	修学院八景	八景		
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	往生寺	寺院門下	葛野郡	庭に、清盛の塔および三尼ならびに刀自女塔あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	修理太夫顯李桂山庄	葛野郡四		修理太夫のかつらの里にまかりたりけるに庭の花おもしろく咲たるもとに人々みなみてあそびかるにあるしかはらけとりて散木 顯李 ことしより千年の春を頼むかな花の盛にとはと思へは
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	守禅庵*	古溪松	名樹	修学院の北山守禅庵にあり此庵は徹翁義孝の開基にして今大徳寺金龍院の末寺なり庭前に古溪和尚自ら植る所の松あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	十境	洛陽部三		○龍躍池（中略）○御楊橋（中略）○洗碧亭（中略）○蔵春閣○緑楊橋○政平水（中略）○観魚台（中略）○古壺泉○水明楼（中略）○梅香軒（巳上）○西行水
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	聚楽庵鰯			太閤記曰天正三年京内野に城郭の營を思召立給ふと有此所往古大内裏の旧地なり秀吉公昔を慕ひ給ひて城を築給ふ其構四方三千歩の石の築垣山のごとく樓門を堅め鐵の柱脚の扉金銀を鍍瑤閣星を飾り御庭には水石を置花木を植さしめ造立し給ふ
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之四前朱雀	勝光明院			古今著聞集曰 久寿元年二月十五日、法皇美福門院御同車にて鳥羽の車殿より勝光明院へ御幸ありて、庭の桜を御覧ぜられけり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	相国寺			前の川を龍淵水と号し、蓮池を功德池といひ、天界橋を架す。（中略）塔頭林光院には鶯宿梅あり、これはむかし西京紀貫之の家にありしを、清涼殿の前に植られんとて求めたまひしに、貫之の娘おしみて歌よみければそのままかへしたまふ。（中略）（近年天明の回祿に罹れば林泉大いに荒廢す、故に図する事能はず）
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	相国寺			十境あり其題 般若林 妙莊嚴城 円通閣 覺星宝殿 洪音樓 龍淵水 功德池 天界橋 護国廟 祝盤堂
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		相国寺	上京区之部		総門は南面して今出川にあり。同門の中に蓮池あり功德池と名く。中央に天界橋と名くる石橋を架す。其北方に青松群立す、此れ仏殿の故墟なり。（中略） 祖堂（中略）庭は地積広からざるも細流あり名松ありて頗る風致あり。（中略） 方丈（中略）南庭は松樹のみにして北庭には樂山空地あり（中略） 塔中慈照院（中略）庭園も又瀟洒にして風致あり。（中略） 同林光院 庭前に鶯宿梅あり、此樹は紀貫之の女の詠歌により有名なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第2学区之部	相国寺	相国寺門前町	寺院	○法堂（中略）其南に山門（円通閣と云ふ）址池水（功德池）橋梁（天界橋）を存す
『京華要誌』	明治28年	1895		相国寺			功德池 御幸門の北に在る蓮池なり。石梁、中央に架す。之を天界橋と名つく。（中略） 林光院 往時は二条辺にあり。庭中、鶯宿梅（今は植接の樹なるへし）といふあり。もと紀貫之の家に在りしを、清涼殿前に移されんとて求めたまひしを、その女のをしみて歌（勸なればいともかしこし鶯のやとはととはゝいかにこたへむ）よみければ、其終止めたまひしよし古書に見えたり。
『京師遊覧集』	延宝7年	1679	2巻	相国寺			招提塵事ノ外。縹緲ハ異香充ッ。春雨ハ出ス。花燧朝。朝霞ハ入ル。鳥籠。池漣洩ハ印月ヲ。庭竹起ス。宗風ヲ。不二法門ノ会。彩星正ハ貫ヲ。中ヲ 〔招提塵事の外。縹緲とめ異香充つ。春雨は花燧を出す。朝霞は鳥籠に入る。池漣印月をゆり。庭の竹宗風を起こす。不二法門の会。彩星まさに中を貫く〕
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	相国寺			○功德池（在ニ山門前ニ）
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻上	相国寺境致	洛陽部一		○般若林（中略）○妙莊嚴城（中略）○円通閣（中略）○覚雄宝殿（中略）○龍淵水（中略）○功德池（蓮池）○天界橋（蓮池橋）○祝盤堂（輪藏）○洪音樓（中略）○護国廟
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	1巻	相国寺	天界橋	閭梁	在ニ相国寺ノ蓮池ニ
『都花月名所』	寛政6年	1793		相国寺	功德池	蓮	相国寺
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	相国寺十境	十境		般若林 妙蔵嚴城 円通〔木閣〕 洪音樓 覺星宝殿 竜淵水 功德池 天界橋 護国廟 祝盤堂
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻	勝持寺	乙訓郡		太平記（中略）又云大原野ノ花ノ本ニ宴ヲ設ク云云禪房花木深シ寺門ニ当テ湾溪ノセヘラギヲ囲ノ花木四本アリ 〔またいう、大原野の花の本に宴を設く云云、禪房花木深し、寺門に当たりて湾溪のせせらぎを渉り、本堂の前に十圍の花木四本あり〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	常寂光寺	寺院門下	葛野郡	庭に老松あり。土人、これを、定家題詠するところの軒端松と称す。予思ふに、軒端松は、必ずしもこの松に限るべからざるものか
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻下	常寿院	愛宕郡一		〔拾芥抄云小野皇太后御願奉。寄ニ白河院。金岡立。石云云〕 〔小野皇太后御願を白河院に寄せ奉り、金岡石を立て云云〕
『都花月名所』	寛政6年	1793		上善寺	藤		城南 庭中に紫藤玲瓏たり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		神泉苑	上京区之部		桓武帝大内裡御造営の時共に築きし園苑なり。当寺は南北四町、東西二町の境域を有し世々 天皇の御遊覧所にして乾臨園を以て是が正殿と為せり。源順が神泉苑の賦に紅林地広吞楚夢於胸中緑池水高縮呉江於眼下、滋貞主の時に三明湿照竜池園二道重迎秋薫様、又た宗時の歌に「ちはやふる神の泉のそのかみや花をみゆきのはしめなりけり」、此詩歌は以て昔時の壮観を想像せしむるに足る。（中略）池を法成就と名け島嶼中に祀りあり。善女竜王を祭る。（中略）又た鷺の宣旨に随ひ來爵を賜り鶴の水底に宝剑を得たるも此池なり
『京城勝覧』	宝永3年	1706		神泉苑			池あり魚多し。中島に龍王の社あり。むかしより名ある所なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	首巻之二	神泉苑	園圃		桓武天皇延暦遷都の時。建置せらるゝ園池なり。当時宮中は殿舎のみにして園圃の設けなし。因て御遊は必ず之に於て行はる。故に禁苑第一位として神泉の名を附せられしなり。（中略）東西に釣殿ありて園池に臨み。東西瀧殿ありて飛泉に臨む。池中の島嶼に至るに架橋を以てす。四辺に佳樹名花を植へ美観添ふ
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第21学区之部	神泉苑	門前町	寺院	建武以来再び荒廃に属し。園圃変して田疇となり。一時菅原氏の管理と為る。池水僅に東北の一部に存せしが。慶長十二年八月。築紫の僧快雅官に請て再興し寺とす
『京之水』	寛政2年	1790	麟之巻	神泉苑	中和院		天子遊覧し給ふ御殿なりとぞ。乾臨園といふは当院の正殿也（池辺にあり。巨勢金岡、庭中の石を畳といふ。）
『京華要誌』	明治28年	1895		神泉苑			平安等一の林泉なり。其中に大なる泉池ありて、假山を築き、岩石をたゝみ、池辺に乾臨園及び亭舎を築き、竜舟を浮へ、両橋を架し、以て遊覧のどころとなし給ひ、桓武帝以来世々の天皇御遊の事旧史に詳かなり。源順か紅林池広くして、楚夢を胸中に吞み、緑池水高くして呉江を眼下に縮むといはれしも、真に然りしなるべし。貞観年中、疫神を此池に送りしことあり。是れ祇園御霊会のはしめなり。物換り、建保のころ大庵に及び、承久乱後に修造ありしも、其後又荒蕪に歸し、元和中僧覚雅（筑紫の人）幕府に請ふて池中に小祠を建て、其旧跡を存し、旧来東寺に因縁あるを以て真言の精舎となし、以て今に至れり。 竜王祠 池中の小島に在り。南面。善女竜王を祭り、傍に弁財天を祀る
『京童』	明暦4年	1658	巻2	神泉苑			天子御遊覧の所也。むかし神竜あり。この池にげんず。されば雨乞にはこの所にいのりかくるにたちまち雨くだり。有りがたき事いふにたらず。又正月に真言院にてう球打を此所に出してやきあぐる也。法成就のいけといふは此池なり。いはゆる今のさぎちやうの事也
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	2巻	神泉苑			拾芥抄云天子遊覧の所以近衛次将ヲ為別当ト乾臨園謂之正殿金岡置レ石二条南大宮西八町三条北壬生東善女龍王常見此所 〔拾芥にいわく、天子遊覧の所近衛の次将を以て、別当となす。乾臨園これを正殿という。金岡、石を畳み、二条の南、大宮の西八町、三条の北、壬生の東善女龍王常にこの所を見る
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	2巻	神泉苑			二条の南大宮の西にあり。天子御遊覧の所也。正殿を乾臨園と号す。金岡すなはち園の前の池に。泉石を畳めり
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	2巻	神泉苑	宮室		在二条南大宮西一旧方八町皇帝遊覧所泳魚翔鳥雖一城市一畧々而有三湘七沢楽正殿曰乾臨園金岡置レ石 〔二条の南、大宮の西にあり。旧と方八町皇帝遊覧のどころ。泳魚翔鳥、城市の畧々といえども、三湘七沢の楽あり。正殿を乾臨園という。金岡石を畳む〕
『山州名跡志』	正徳元年	1711	19巻	神泉苑			○善女龍王社 在リレ池ノ中嶋南向ニ一 弁財天ノ社 在リ二龍王ノ社ノ北ノ嶋南向ニ一 龍王ノ社草創久シ。弁財天ノ社ハ近年所ナリレ建立スル也 ●乾臨園 古ヘニ所レ在レ園ナリ。其ノ外殿舎アリ 拾芥抄云天子遊覧の所以近衛次将ヲ為別当ト乾臨園謂之正殿金岡置レ石ヲ。〔いしへにあるところの園なり。その外殿舎あり。拾芥抄いわく、天子遊覧のどころ、近衛次将をもって、別当となす。乾臨園これを正殿という。金岡石を畳む。〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	神泉苑	洛陽部三		〔拾芥抄云天子遊覧所乾臨園謂之正殿金岡置レ石二条南大宮西八町三条北壬生東善女龍王常見此所〕 〔拾芥抄いう、天子遊覧の所、乾臨園を正殿という、金岡石を畳み、二条南大宮西八町三条北壬生東善女龍王つねにこの所に見る〕
『山城名所寺社物語』	享保年間	1716～36	6巻	神泉苑			桓武天皇の御宇初て内裏造営の時節俄に泉わき出て池と成る
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	神泉苑			在二条坊門大宮西一門（南向）池少存池中一在レ島善女龍王島居拝殿社（南向）○弁財天社（在二本社北東島南向）○二重塔（在二本社東南西向）安大日如来○仏殿（在二池西南向）今為レ寺宗旨真言（東寺兼帯）拾芥抄云天子遊覧の所以近衛次将ヲ為別当ト乾臨園謂之正殿金岡置レ石ヲ。 〔三条坊門大宮の西にあり。門（南向き）池少し存す。池の中に島あり。善女龍王を祭る。島居拝殿社（南向き）○弁財天社（本社北東の島にあり、南向き）○二重塔（本社東南にあり、西向き）大日如来を安ず。○仏殿（池のしにあり、南向き）今寺の宗旨、真言（東寺兼帯）拾芥抄いう。天子遊覧のどころ。近衛次将をもって別当となす。乾臨園これを正殿という。金岡石を畳む。〕
『京都土産』	明治28年	1895		神泉苑	名所見立		同（前項） 神泉苑の蓮
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	神泉苑	法成就の池	名池	二条の南大宮の西神泉苑の池はないにしへは天子御遊覧の地にして空海雨乞いのいのりに天竺無熱地の善女龍王を此地に勧請せり
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	2巻	神泉苑	神泉苑略記		古へ此社方六町ノ境内ノトキ社ノ前ニ池水アリ其中ニ一箇ノ岩石巖々トシテ立テリ然モ其ノ石ノ景致自然ニ見所アリ今ノ所へ此社ヲ移サル、時後陽成院ノ上林苑ニ移シ置ル于レ時毎夜此ノ石放レ光且有妖怪之事故ニ神ノ愛惜シ玉フ者ナリトテ御園ノ外へ出サレ此寺僧ニ此石ノ所へ牽取ラハ行程ノ人家甚タ苦悩スヘシトテ御コトハリヲ申上ク于レ時前ノ所謂西陣ノ蓮乗院ヲ主ル僧禁裏院中ニ内縁アリテはヲ拝願ス剩へ自ニ所司代ノ下知ニテ此ノ寺へ牽取レリ遂ニ此石ヲ庭ニ建テ垣ヲ結フ依レ之此ノ院ヲ又称ニ石上ト依レ之後光明院崩御時今ノ石上ヨリ贈經ヲ捧ク然ルニ蓮乗院申サク此石此方ニ安置ス然ル時ハ則本寺ナリト留メ之遂ニ及ツ公事ニ然レ共蓮乗院ハ石ヲ牽取分ノ事ナリトテ蓮乗院ハ贈經ノ事止ミ石上明神ノ社僧ノミ奉レ之ツナリ
『都花月名所』	寛政6年	1793		神泉苑	法成就池	水鳥	神泉苑 堀川百首 肥後 池水にむれてをりある水鳥の羽風に波や立さはぐらん
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	神泉苑池	池之部	愛宕郡	二条の南大宮の西なり。此池勅撰に。金岡が画水なりと見えたり。又は法成就の池とも名づく。元亨釈書に。天長元年夏。天下大きに旱し空海守敏雨の祈を修す。其時空海善女龍王を。無熱池より勧請す。此池のはじまりは。桓武天皇はじめて都を遷し給ふとき俄に泉湧出て。池となる。方八町あり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第21学区之部	神泉苑ノ址	門前町	古蹟	東は大宮。西は壬生。南は三条。北は二条に至る。古地東西二町南北四町とす。桓武天皇延暦遷都の時建置せらるゝ園池なり。當時宮中は観舎のみにして園圍の設けなし。因て御遊は必ず之に於て行はる。故に禁苑第一として神泉の名を附せられしなり。延暦十九年行幸以来歴朝の天子臨幸。楊梅の御遊あり。池には龍頭獅子の船を泛べ。侍臣をして管絃を奏し。詩歌献せしむ。苑中に左の营造物あり。其四辺佳樹を植ゆ。 △乾臨閣 苑の正殿也。（三代実録。乾臨殿に作る）左右に閣あり。（日本紀略云延暦二十三年三月閣云云） △東西釣殿 東西にあり。（弘仁内裡式）園池に臨めり。 △東西瀧殿 東西にあり。（弘仁内裡式）滝水に臨めり。 △東瀧西瀧 東西に飛泉あり。 △橋 池水に架す。（弘仁内裡式） △門 東の南門を正門とす。外に南門。西北門。（三代実録）東北門（日本略記）北門（小古記）の諸門あり。（元享釈書藤常行伝に神泉苑の北門こそ。常に開けたりとあり。） 拾芥抄曰。天子遊覧ノ所。以ニ近衛次将。為ニ別当。乾臨閣謂ニ之正殿。金岡置レ石。〔天子遊覧の所。近衛次将をもって別当となす。乾臨閣これを正殿となす。金岡石を置く〕
『洛陽十二社靈驗記』	文政11年	1828		神泉苑竜王宮			凡この神火伏を守り諸人の熱病をまめかれし一切池泉井水河流溝水路庭作園林の動作成就して安全ならんことを祈り其方に障りなからん事を祈願してかならず応驗をかうむるといへり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第17学区之部	真如院	柿本町	寺院	庭園に足利義昭命して造らしむる所にして。烏帽子。瓜実燈籠。呼子ノ手洗鉢等の名品あり。鉢は天明火災に破損すと雖も都下に有名なもの也。共に花洛林泉帖に載す
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	水石跡	飯山地		大徳寺の南の方田の中に飯山の跡有伝云へ梶井門主竹影の別院此所に有て庭に近江湖水の景を移し侍ると其後応仁の兵火に此所焦土となる然共今に水石の跡残れり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	水石跡	古蹟門上	愛宕郡	大徳寺の南、田間にあり。伝へいふ、梶井門主、竹影の別院、この処にあり。かつて飯山を設け、近江湖水の景象を模すといふ。応仁の兵乱、寺院、烏有となる。しかれども、今に到りて、水石の跡、ほぼ残れり
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	水石跡	古蹟門下	葛野郡	同寺方丈の後にあり。夢窓国師、性、水石を好む。故に、住する所ごとに。水石の跡多し。およし、本朝、飯山を作るに両流あり。嵯峨流・四条流、これなり。その内、いはゆる嵯峨流は、すなはち、夢窓国師の模範なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	首巻之一	水路			京極川（中略） 東洞院川（中略） 西洞院川（中略） 大宮川（中略） 耳敏川（中略） 其他神泉苑ヲ始メトシ。離宮。別館。名門大家ノ邸内ニハ。林泉ヲ造リ。以上ノ川水ヲ引用シテ園池ニ注グ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	栖霞寺	葛野郡三		本朝文粹（源順）栖霞寺ハ者本ハ栖霞觀ナリ也昔ハ丞相遊息ノ所ハ遺ハ者ハ泉石之声今大王紹隆ノ所ハ供スル者ハ香花之色ナリ〔栖霞寺はもと栖霞觀なり、むかし丞相遊息め遺る所は泉石の声、いま大王紹隆め供する所の者は香花の色なり〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	菅原院			大江左国元永元年八月七日記云菅原院（助解由小路南烏丸）者は善卿之家也当初其ノ見ハ二南庭ヲ有ニ童兒五六歳計是善問云汝ハ是何ノ家ノ子ノ答云我ニ無ク居所又無ク父母欲スト以ニ相公ヲ為スト親ト也是善知ハ其ノ直人ニ而許スト之此即ハ菅丞相也（歴代遍年取成同、之） 〔大江左国元永元年八月七日記にいう、菅原院は善卿の家なり、当初その南庭を見るに童兒あり、五六歳ばかり、是善問いていう、汝はこれ何れの家の子ぞと。答えていう、我は居所なく、また父母なし、相公をもって親とならんと欲すとなり、是善その直人に非ざるを知りて許したまう、これ即ち菅丞相也〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	12巻	鐺上水	愛宕郡部二		大雲寺縁起ニ云福泉寺の鐺上水は源泉大僧正末小童たる時庭の池をさらゆるに鐺の先水底に落入る仍舟を乗からふけ下りて取らんとす小童見給て佛法成就せば其鐺のさき竈水を水底に指入ければ則くひ付て上りしより鐺上水と号す
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻下	涼風坊			続文粹（陪）涼風坊閣賦陸花調雅琴（明衡）涼風坊裏有二ノ名區泉石ノ幽奇申タリ天下ノ勝境矣蓋乃源亞相賞風月ヲ瓶ヲ一花鳥ノ之地ナリ也 〔涼風坊の裏に二の名區あり、泉石の幽奇天下の勝境と申したり、矣蓋乃源亞相、風月を賞し、花鳥のもてあそぶの地なり〕
『都花月名所』	寛政6年	1793		勸修寺	藤		御殿の庭中水室の池辺に紫藤の棚あり。 堀川百首 公実 なつかしきいもか衣の色に咲若紫の池のふじなみ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	州浜殿	別荘地		城南神のほとりにあり新大納言成親卿の別荘のありし所也今に水石のあとのこれり
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	洲浜殿	古蹟門下	紀伊郡	同処にあり。新大納言成親卿の別荘なり。今、水石の跡、残れり。およそ、水浜を洲浜といふ。倭俗、飯山を作りて水石を多く。その体、水浜を模す。故に、今、専ら池水を洲浜といふ
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	州浜町	古蹟門上	愛宕郡	岩神通三条の南にあり。倭俗、飯山の池水を洲浜といふ。泉石の模様、水隈・洲浜を象るの謂なり。今、専ら洲浜と称し、あるいは泉水といふ。この処、今、いつれの人の泉水たることを知らず
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	墨染			深草の内也伏見に近き里也昭宣公かくれさせ給ひし春 深草の野べの桜し心あらはことしばかりはすみぞめにさけ 上野峰雄 古今集に有此歌に付て所の名をも墨染といひ井あるほも墨染の井といひ寺をも墨染寺となづけ庭花を墨ぞめ桜といふ
『拾遺郡名所図会』	天明8年	1788	巻之四前朱雀	墨染桜			今墨染寺庭前にあり
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	6巻	墨染寺			昔江州栗太郡ト名ケシハ。ソノ木大ニシテ作毛ノ吉アルニヨリ。仙人是ヲ切ニ諸木ヨナク槿ヲ取テ合セケルトソ伝ヘキ。菅原ノ御神サスラヘ玉ヒシニ。梅モ竹紫ニ飛ケルコト我朝ニモ又其ノ数多シサテゾ茂叔ガ仁愛深シテ庭ノ草ヲモフマズ。麟猶シカリ。律ニハ草木ヲキル皆ヲ輕罪ト云。大莊嚴論ニハ鬼神ノ樹ナリト示ス。寺ノ桜ヨソニ墨染ナレバ。声聞ニ恥ル心モアルヤウニテ見ヤリヌ。是ヲ以テ思フ今。投晉巻帯ノ人ノナキコソ。花ニダモシカサルベキヤ。寺ノ名モコレニヨリテナリ
『京都坊目誌』	大正4年	1915		清閑寺	鷲尾町	寺院	翰林五鳳集（中略）九重城北麓。晝展ナリ。第五橋ノ東移。歩時。一楊山中槐夏半。満庭ノ菟目認ニ迷離。 〔九重城の北に晝を凝らすことしばしばなり。第五の橋、東へ歩を移す時、一楊山中槐夏半、満庭の菟目、迷離を認める〕
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	5巻	清閑寺			カノ世ニモテ興スル盆山石のアヤシキ。中ニモワガ。ホリシ多シ凡ソ盆山石ハ上野ノ戸沢伊予。オナジク數石ハ。志摩答志ノ涌砂。相模ノ大磯。備ノ中。飛石ハ。ナル瀧。津ノ国ノミカゲ。庭石ハ嵯峨紀ノ路ノ大崎。切石ハ山城ノ白河

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	7巻	清閑寺			そのかみ盆石の石にもてはやせし清閑寺石は此山より出しと也
『洛陽名所集』	万治元年	1658	5巻	清閑寺			世に清閑寺石とて。盆石にもてはやしけるは。此寺のみの山石也
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之一 平安城	誓願寺			弁慶石は方丈の庭、飯山の上にある（いにしへは三条京極の西、弁慶町にありしとなり。）…塔頭竹林院には小廂遠州の数寄屋あり（これを遠州の八窓といふ）。庭中の風景絶倫なり。同じく長仙院の庭佳境なり。世に名高し
『京童』	明暦4年	1658	巻1	誓願寺			此御やしろのまへなる紅梅は未開紅と申なり。このはなのいろは。まだひらげざるとき。くれなゐふかくうるはしきゆへの名なり。としどしの春ごとに都鄙の人のまうでて詩歌など侍るなり。折からちりすぎたるけしきいかのみそらしたまはんやといへば紅梅を紫雲やうはふ寺の庭
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	清閑寺	歌中山清閑寺		歌中山清閑寺の林泉は真妙にして、庭中に要石あり。（或云六条院御陵小堂の趾なりといふ）
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	清閑寺	要石	名石之部	東山清閑寺の庭にあり。此庭より西を望めは扇のことし
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之二 左青龍首	清閑寺	九重丹楓		要石 当寺客殿の庭にあり、此石上より洛陽の万戸を見れば扇を敷きたる如くなりとぞ
『都花月名所』	寛政6年	1793		清閑寺	要石	石	歌中山清閑寺
『京町鑑』	宝暦12年	1762	横	誓願寺	弁慶石町	三条通	此町に元弁慶石ありしゆへに小名とす此石の由来さまざまの説あれども怪しければこゝに記さず此石今は誓願寺の方丈の庭に有
『都花月名所』	寛政6年	1793		誓願寺	辨慶石	石	誓願寺方丈庭中 昔は三条京極の西にあり今町の名に呼ぶ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	青龍水	霊水		山科安祥寺の庭にあり此寺の開基真雅僧正行法の時あかの水に汲たまふとなり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	清凉寺	八宗論池	葛野郡池之部	清凉寺の中にあり。弘法大師此池のほとりにて。諸宗の僧と。法論ありしなり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	清凉殿			清凉殿を詠る歌 新千載 九重の庭の呉竹吹風も清く涼しきこゑかよふなり 行家卿 是御殿の東庭の竹台をよめるにや 朗詠集に中殿燈残竹裏声此竹なるべし
『京之水』	寛政2年	1790	鱗之巻	清凉殿	殿舎并二 皇居内門		呉竹台には呉竹、漢竹台には漢竹を植られたり。東の庭には御清水の出る所あり。これを滝口といふ。清凉殿の名これより出る。御清水は大内の名水にして流れには盃をうかへ曲水の御盃もありし所也。 新統古今 めくりあふけふはやよひのみかは水名に流れたる花の盃 定家 （中略） 同鈔曰校書殿のうしろにつなをはりてすへをはくすか綱といひて蔵人小舎人をめす時ならず、小かへの外に南へむきたる腋戸女官の戸といふ。女官は小庭をとる道也。其前にうつほはしらあり。そのそばにあつりしとみあり。夏はこれをあく、冬はおろす、日をふせく也。えんはなくてくつぬきあり、こゝにて沓をぬきてのほる。小いたしき沓ぬきのあはひの門を神仙門といふ。此門の外に出納小舎人候也。小いたしきの前を小庭といふ。こゝには蔵人つききはきはとすることなし。（中略） 大権秘抄曰殿上の小庭に夏はしの木といふ木をなんぬへえてさふらひける。ちいさくてたけたかくならぬ木のえたをしいみしくおかしけるにてなん候ける。夏は燈ろうを其木にかけける
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之二	赤山社	赤山神祠		社頭の林泉玲瓏とし
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		赤山社	赤山神社	近郊之部	東部は山に擁り造れる庭にて崖下に池を穿ち其東の高所に金神社あり。（中略）7境内は清浄にして松栢楓樹の繁茂せるあり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻	関戸ノ院	乙訓郡		扶桑略記云治安二季十月（十七日入道前大相國詣・紀伊国金剛峯寺・）三十日申ノ刻於・山崎ノ岸部ニ下ル・於御船ヨリ・関外ノ院ノ之預リ前ノ肥後ノ守公則莊ニ嚴メ・寝内ヲ掃・除・庭中ヲ・飯ツ之備フ云云 〔三十日申の刻、山崎の岸辺において、御船より下る、関外の院の預かり肥後の守公すなわち寝内を荘厳し、庭中を掃除め、飯を備う〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻下	世尊寺	洛陽部一		無題詩（秋日遊・世尊寺・藤原周光） 何ノ所ノ雲泉ノ尤得タル・名ヲ世尊ノ古寺薛羅ノ庭竹梢園底ニ緑猶在（此地昔梁園也故云） 柿葉窓寒・紅ノ半ハ零 〔無題詩（秋日、世尊寺に遊ぶ藤原周光）何の所の雲泉かもっとも名を得たる世尊の古寺、薛羅の庭、竹梢園底で緑なおあり（この地昔梁園なり故いう）柿葉寒めくれない半ばをつ〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻上	禪昌院	洛陽部一		五鳳集（禪昌院殿大幢老禪翁天下摸楷細川低柱也毎・春庭桜盛則軼・筵求・詩余亦屢陪・席末・也云々） 〔禪昌院殿大幢老禪翁天下摸楷細川低柱なり、春ごとに庭の桜盛りすなわち筵を軼、詩を求む、余またしばしば席末でしたがわずや〕
『京童跡追』	寛文7年	1667	巻1	仙洞之御池			みなもととおきよくして。下にもごらぬおはん時のためにや。姑射山のかたはらに。安古世賀池とかいへるは。三伏の夏いかなる旱魃にも清水かはかずとなり。名は聞きつたふれども。その故をいかにとるべきにあらず。それ碌碌にならつて。玉淵をうかがはざれば。驪竜の蟠るところをしらざる也されば深からぬ心の水茎にはしげき藻塩草もなく。かばかりだに。つたなきさぎにうつし。罪のおもかるべきをはらしてよといひる北野の神木によせて。霞の洞をうかがひ奉る
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	5巻	泉涌寺			金殿登臨ハ化ノ境界。山泉涌・遡ハテ・蟠・千峰・。庭前ノ枸杞旧ヲ為リレテ。飯裏ノ比丘新ヲ出サシレ蜂。體々土深ノ宜シレ種ハニ玉ヲ。転々市近ノ又持セシレ斐。風琴絃・密・寺門ノ外。靈体化メレ仙ノ可シレ伴ヲレ松ニ。 〔金殿登に臨むれば佗の境界、山泉涌き遡ぼして千峰にこう。庭前の枸杞古き犬となり。飯裏の比丘、新たに蜂を出さん。體々と土深め、宜しく玉を植えるに、転々、市近し。また、斐を持たせん。風が琴を絃き密し寺門の外。靈体は仙と化し、松に伴うべし。〕
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	泉涌寺	東山十境		天台積雪 如意秋月 紫雲高塔 瑞龍晚鐘 岩倉帰樵 醍醐孤雲 花頂積翠 祇園晚鶯 清水白桜 熊林松涛
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	泉涌寺	東山泉涌寺八景		愛宕堆雪 鴨川長流 円通孤月 熊村淡烟 亀山落日 恵日幽鐘 音羽間雲 羅刹残雨
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	泉涌寺	東山十景	十景	
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	泉涌寺	東山泉涌寺八景	八景	

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	柳林十二境	十二景		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	柳林十二景	十二景		聖衆松 悲田梅 黄鶯瀑 通天橋 臥竜楼 礙雲〔木閣〕 烟漏槽 凝睇楼 白蓮池 幽樵蹊 濯錦泉 紫雲扉
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	双蛾石	石之部	紀伊郡	いにしへ東福寺の中。荘厳院の庭に池あり。池の中の龍出て。聖一國師の法をきけり。終に池を埋む。其跡に石二つあり。これを双蛾石と名づく
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	双蛾石	奇石		いにしへ東福寺の内荘厳院の庭に池あり其池の龍化して聖一國師の法を聞ぬと後に池をうづめ其所に岩を二つ立てしるしとす双蛾石是なり
『雍州府志』	貞享3年	1686	補遺	双蛾石	古蹟門	紀伊郡	古へ、二条殿この辺にあり。庭に假山を設け、池水、築廻す。この水、至りて清冷なり二条殿、盛夏に至るときは、甜瓜を漬けて禁裏に献ぜらる。今、第宅この処にあらずといへども、旧例によりて、夏日、甜瓜を献ぜらる。古への御池、今わづかに残りて、両替町久米某の後園にあり。古へ、東福寺の中、荘厳院、庭に池あり。池中の龍、出でて聖一國師の法を聴く。つひに、龍をして池を埋めしむ。すなはち、岩二を建て、徴とす。今の双蛾石、これなり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	相国寺十境	十境		
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻上	僧正遍照房	葛野郡三		顕昭拾遺抄詞云嵯峨にすみ侍りける頃房の前裁を見に女どものまうてきたりければ云云
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	双林寺	寺院門上	愛宕郡	寺中、文阿弥が庭に、相阿弥設くところの假山あり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	双林寺	假山地		東山にあり文阿弥庭は是又同朋相阿弥畚む所にして岩水の景象又絶品なり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	14巻	双林寺	愛宕郡部三		翰林五鳳集（中略）九重城北凝、昨屢第五橋、東移 ^ス 、歩 ^ッ 時一欄山中槐夏半 ^{ナリ} 満庭、兎目認 ^ニ 迷離 ^ニ 〔九重城北昨凝る、第五橋の東に歩を移す、時一欄山中槐夏半なり、満庭の兎目迷離し認める〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	双林寺の假山	古蹟門上	愛宕郡	双林寺、文阿弥が庭に假山あり。相伝ふ、東山殿の同朋、相阿弥が畚むところなりと。倭俗、假山を作るを、水石を畚むといふ。また、庭を作るといふ
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	即成院	寺院門下	紀伊郡	件々、載せて録起にあり。予、思ふに、これ、附会の説か。はじめ、修理太夫橋俊綱の山荘、伏見城山の南、豊後橋の辺にあり。その地、南に向ひ、山水、目前にあり。かつ、その地形、おのづから高低あり、雪朝、特に奇観を添ふ。俊綱、常に、これをもつて人に誇る
『都名所鳥』	元禄3年	1690	六巻	國韓神	宮社院園之部	愛宕郡	はじめ宮内省に有。後に禁庭にうつる。いにしへ毎年春二月冬十一月丑の日。これを祭る
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	染殿地藏			夢窓国師西芳寺の庭作るゝ時あやしき法師力を合せて石をはこび土を取国師其出所をとひ給へば四条此わたりの法師とのみいへり国師衣をあたへられしに法師歸杖を残して去りぬ後に此地蔵其衣を着し居たまへるを見て此菩薩なりし事を思ひ合たりと云々
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	12巻	大覚寺			猶庭ノカサリ言フ絶ツ中ニモ。金岡ガ立タル石ウルハシケレバ。庭ノ岩ニメダツル人モナカラマシ。カダルサマニ立シオカ子バトハ西行ヨメル
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	大覚寺	葛野郡三		管家文草 嵯峨院 ^ハ 者太上天皇閑放 ^ノ 之地 ^{ナリ} 也昇霞 ^{モヒシ} 之後涉 ^リ 日 ^ヲ 既 ^ニ 深 ^ニ 階庭不 ^レ 披カ台樹樹亦壞 ^レ ヌ 〔嵯峨院は太上天皇の閑放の地なり、昇霞給いしの後、日を渉る、既に深し階庭開かず、台樹また壊れぬ〕 大覚寺の金岡かたてたる石を見て 山家 西行 庭の岩にめたつる人もなからましとあるさまに立しをかねは 〔今大澤池中有大石一号庭湖石金岡所立石乎〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	8巻下	大教院	葛野郡部二		本朝文粹（一品宮人仁和寺御堂供養額文永保三年二月二十七日大府卿）方 ^ニ 今仁和寺 ^ノ 傍 ^ニ 有 ^ニ 一 ^ノ 形勝 ^ニ 天興 ^ノ 烟霞 ^ノ 地富 ^ニ 水石 ^ニ 〔方に今仁和寺の傍に1つの形勝あり、天興霞を与え、地は水石に富む〕
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	平清盛屋敷	武館地		西八条に有伝云古へ平相国清盛公の別荘此所にありと今に田畑の中に泉石の跡あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	大雲菴	愛宕郡部三		空花集（雪中過大雲菴静明軒 ^ニ ）踏 ^キ 雪 ^ヲ 登臨 ^シ 眇 ^ス 二 ^ニ 方 ^ヲ ヲ ^ニ 園林霽計許多長 〔雪を踏みて登臨め方方をすがめず、園林霽計ばかり多長〕
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	大源菴	産湯水	水之部 愛宕郡	京の北紫竹村。大徳寺の末寺。大源庵の方丈の庭に有 むかし源の義朝この所に住給ひすなはち常盤御前。爰にて牛若を産み。此水を汲でうぶ湯とするゆへの名也
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	大源菴	産湯水	古蹟門	紫竹村、大徳寺の末寺、大源菴方丈の南庭にあり。相伝ふ、この地、源義朝の陀第宅にして、義朝の愛妾常盤、この所にありて源牛弱を産めり。その時、この井を汲み、産湯を煮る
『洛陽名所集』	万治元年	1658	5巻	醍醐			又庭上に一の岩石有。宝。金峯山より負来とぞ。なかくに人力のたやすく及べきにあらずと也
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	醍醐十境			
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	醍醐十景	十景		
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	大師堂			早咲椿 当寺の庭中にあり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	大仙院*	大川院	假山地	大徳寺の塔頭なり此院の庭は東山殿同朋相阿弥水石を畚所にして観音石虎の頭石など種々の奇石あり此庭の景象始は室町家の臣水淵家の園にありしを此院にうつし侍るなり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	大内裏			●玉敷庭●位山●紫庭（八雲） （中略） 夫木 俊成 こゝのへや玉しく庭のむらさきの袖をつらぬる千代の初春 （中略） 月清 後京極 むらさきの庭のはる風のどかにて花に霞めるくものうへかな

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		大通寺	下京区之部	明治維新前は六孫王社の隣にありて其社を守りし巨刹にして、其庭園の如きも支那嵐山の風景に擬し世に名高かりしと雖も神仏分離の際当所に移転して此の小堂を営み、僅かに其名を存するのみ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	大通寺	仮山地	遍照心院の方式にあり世に尼寺と云此築山世人小善が経営する所のものなりと南都春日山中院庭の仮山を善が作る所と云しかる時は此善に対して小善と号する善何人かしらず
『都名所車』	正徳4年	1714		大通寺		庭のけいき見事也
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	1巻	大通寺		○神龍池（在・神前・）
『山州名跡志』	正徳元年	1711	21巻	大通寺	万祥山大通寺	○方丈池　云々二鳥居ノ内ノ池ヲ　例祭　九月十日
『山城名所寺社物語』	享保年間	1716～36	3巻	大通寺	尼寺（大通寺）	方丈の庭景気みごととなりむかし庭作るに法式あり夢窓国師自然とすき給ひ西山西法寺の庭つくり給ひしよりは是を諸寺にまなべり四天王座禪石見付ねがらみ石とてすへやうに口伝あり寺と屋敷と町の替りありいれも石を戌亥へむけ水はきも同前つき山芝山はひらづくり成りといへり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	大徳寺		○官池（明月橋の東にあり。伝に云、後醍醐帝当山に逍遙したまふ時、眸をめぐらし指点して国師にのたまふ。この地まさに一池を開くに可なり。これによつて命じてこれを穿、故に官池となづく。また五老松といふあり、官池の北五松の大樹なり）○古巖松（旧松すでに枯れてその所を失す、今方丈南庭の松もつとも秀華（靈山徳禪寺）寺前に池築山あり、山中に玲瓏園竹影園あり、池中へ舟を泛て往来す（中略）今の養徳の前庭、安居院門西北の隅、なほかの池の旧岸あり、みな田圃となる）○（北）大徳院（中略）庭中名巖（有二十員）。林泉　相阿弥作。法螺石　布袋石　神鞍石　観音石　沈香石　宝山石　伏虎石　釣舟石　臥牛石　仙輶石　弘子石　仏置石　仏子石　独醒石　明鏡石　不動石　靈亀石　座禪石　真珠石　扶老石
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	6巻	大徳寺		一大徳寺十境　達磨峰　瑞雲軒　看雲亭　金剛亭　古岩松　起龍軒　官池　梅橋　雲門菴　明月橋
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		大徳寺	近郊之部一	方丈（中略）庭園は天祐和尚（或は小堀遠州とも云ふ）の考案に成りて遠き良嶽を以て庭中の主たる形象となし之を達磨峰と名け庭上は唯樹木岩石を安置して山麓に擬し天然の風景を借りて人工を省き却て韵致あり、真に禅味を得たりと謂ふべし。（中略） 塔頭大慈院（中略）庭前に小池あり、并財天を祀る。 塔頭聚光院（中略）庭は千利休作とも云ひ或は小堀宗甫作とも云。要するに地積宏からず随て意匠も平凡じて面白からず。方丈の北に利休好みの茶室あり。又た庭の南に利休居士茶の塔と云あり。（中略） 塔頭真珠庵（中略）茶室の庭は千玄叟作なり。（中略） 塔頭大仙院　真珠庵の西にあり。其庭は桃山殿の前庭に用ひし残石を以て作りしものなれば珍石奇巖極て多し。（中略） 塔頭芳春院（中略）庭は小堀遠州好みにして園畔に池を鑿ち橋を架す、打月橋と称す。（中略） 塔頭高桐院（中略）書院の庭前を過ぎ西南にある細川家墓地に至れば中央に石の燈籠あり、欠燈籠と称す。（中略）同墓所の門側に袈裟形の手水鉢あり。其形も風雅にして銀閣寺のものに勝れり。（中略） 塔頭竜光院（中略）墓地は庭の南にあり。（中略） 塔中瓜蓬庵（中略）小堀遠州好みの茶室及び八景庭、不味好みの茶室及同廟所等なり。（中略） 塔頭黄梅院（中略）方丈前の庭に不動の石像あり。其傍に天瑞殿ありて天人鳳凰の彫刻あり。当殿の前に元就隆景の墓あり
『京華要誌』	明治28年	1895		大徳寺		方丈（中略）庭前の結構小堀遠州の工夫に成り（或は天祐和尚といふ）、東山の遠景を取り来りて之を一望の中に収め、天然の景色を利用し、庭上は単に巨大の巖石と老古の喬木を安排し、配合其宜きにかなひ、観る人をして飽くことを知らざらしむ。（中略）真珠庵（中略）庭苑の眺望亦本坊・方丈に譲らさる佳趣あり。大仙院（中略）林泉は相阿弥の作にして、数十の奇石を集めて、開谷の形状を造る極めて奇なり
『雍州府志』	貞享3年	1686	補遺	大徳寺	寺院門上	愛宕郡　大仙院の仮山は、東山殿の同朋相阿弥が作る所にして、はじめ、室町家の臣、水瀬氏の家園にあり。その後、この庭に移る
『山州名跡志』	正徳元年	1711	7巻	大徳寺*	龍宝山大徳寺	愛宕郡　○官池　云々経蔵ノ前池ヲ○梅橋　池橋はい也（中略） ○聖水　云二井水ヲ一休和尚銘スレ之ヲ此ノ所昔少シ將保昌ノ別荘也ナリ。是レ和泉式部ノ夫也。故ニ又和泉式部ノ井ト云フ。庭ニ圍大ノ老松二本アリ体様如レ画ガ〔井水をいう、一休和尚これを銘す、この所むかし少將保昌の別荘なり、これと和泉式部の夫なり、庭に圍大の老松二本あり、体様描くがごとし〕
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	大徳寺十境	十境	
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻下	大徳寺十境	愛宕郡一	官池（法堂東池） 身心養生記云紫野大徳寺草創のりし時庭の池を堀しに官人たち開山と値遇の縁を結び給ふとてをのく錦のもつこにて土をはこはれし故に是を官池といふ今に方丈の前にある池也
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	大徳寺十境	十境	達磨峰　金剛軒　瑞雲軒　看雲軒　官池　古岩松 起龍軒　明月橋　梅橋　雲門庵
『都花月名所』	寛政6年	1793		大佛	燕子花	蓮華王院の堂前池中に多し毎歳大矢数の時節殊に花盛なるべし
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	大仏御殿		陀峰彩霞　平林春花　青田乱蛙　喬上啼鶯 西山夏雲　曲塙秋草　芽櫛明月　虹橋丹楓 曉園積雪　翠池浮鴨　蕭寺清鐘　竹窓夜雨
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	7巻	高雄山		一高雄山は清瀧川の橋辺の楓古木にて紅葉の秋興酒をあたゝめ詩を題する人おほかりこのごろはおくの地蔵院の前庭の峰より直下の美景清瀧のながれめぐるる面白さに色々の紅葉の染わたさる立田山をも余所に求むべくもあらず新歌は近代烏丸光広卿などよみ給へるあれど古歌に所見なし此谷へかはらけなげとてなげつゝ遊ぶ事有
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	高陽院旧跡		榮花物語卅三にかうやうあんとゝありさま此世の事と見へず海龍王の家などこそ四季は四方にみゆれ此殿それにおとらぬさまり　同物語卅六に云高陽院の有様いとおもしろくおかし西の対を例の清涼殿にて神殿を南殿などにて小寝殿とてまたおかしくてさしならび山はまことの奥山とみへ瀧木くらき中よりおち池のおもてはるかにすみわたり左右の釣殿などなべてならずおかし　今鏡に云第一に面白き所石田第二高陽院と云々 後拾遺集　高陽院におはしましける時石たて瀧おとしなどして御らんじける頃九月十三夜に成にければ岩間よりながるゝ水ははやけれどうつれる月のかげそのどけき　後冷泉院

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	瀧	葛野郡三	大覚寺に人々まいたりけるに古き瀧を見てよみ侍ける 拾遺 公任 瀧の音は絶て久しくなりぬれと名こそなかれて猶きこえけれ 千載 大覚寺にありといふ瀧公任卿のたえて久しくといひけんあと尋ねはやの心さしは有なからたひく 嵯峨へはゆきかよひけれととかくをこたりにしを寛永十一年水無月十日（中略）ふと思ひいてゝゆきぬ此瀧の在所は五社の東大澤の北なり瀧殿なといひしはみな田中にさなへむらくうへたりひんかしにむかひて北南とに石たてり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	瀧殿	葛野郡三	今昔物語云百済ノ川成ト云給師有ケリ世ニ並ナキ者ニテ有ケリ瀧殿ノ石モ川成力立タル也同御堂ノ壁ノ絵モ此川成力書タル也 河海抄云瀧殿ハ古人尺ニ云旧キ名所ナリ也在二大覚寺ノ南ニ一云云素舜（寂麿）ノ云（瀧殿）只和泉殿ト云心ナリ也大覚寺ノ瀧與泉名所ナリ也云云近代昔大府為長詩ニ云 小倉山ノ香ハ当ルレ瀧ニ色大覚寺ノ泉落ルレ枕ニ声 大覚寺の瀧殿を見て読侍ける 御拾遺 赤染衛門 あせにけり今たにかゝる瀧つせをはやくそ人はいるへかりける 大覚寺の瀧殿の石とも閑院へはたされて跡なくなりたるときゝて見にまかりて赤染衛門か今にかゝりとよみけんおり思ひ出られて 新拾遺 西行 今たにもかゝりといひし瀧つせのその折までは昔成けり 大覚寺の瀧殿といふあたりに住む人のもとへ十月時計雨ふる日たつね行たるに庭は山の麓にて薄のおほくまねきたるを 家集 兼好 枯残るすそのゝ尾花秋よりもまなく時雨に袖やかすらん
『雍州府志』	貞享3年	1686	6巻	竹	土産門上	竹木部 炭ならびに硫黄、下 これを刈篠という。この篠、茎短くして、土に著く。茶人これを愛し、茶亭の前庭に種ゆ。
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	竹ノ壺	殿舎	（禁秘抄曰中殿東庭竹台二） （中略） 延文百首 従三位実名 九重や竹のうてなに降あられ玉敷庭に玉をしきつゝ 正治院百首 信実 行す系の流れ久しく見ゆるかな千世をこめたる川たけの庭
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之二	乱納涼		乱の杜あり、この杜頭もつとも佳境なり。林泉もまたきよし
『山城名勝志』	正徳元年	1711	2巻下	橘ノ通子	洛陽部一	狂歌百首 建仁如是院 永雄 禁庭の花さへ木さへ見えねども風かほりくる橘の通子
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	5巻	橘諸兄公塔	公御塔	山城井出のさと観音寺の内に有此所いにしへ諸兄公宅地にして今に泉石の跡あり塔二つあり伝云諸兄公夫婦の塔也と
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	田中御所	離宮地	城南神のほとりにあり愛も又いにしへ鳥羽の法皇の離宮のありし所なり今に水石の跡わづかにのこれり
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	田中御所	古跡門下	紀伊郡 城南神の辺にあり。これもまた、鳥羽法皇離宮のありし所なり。今に、水石の跡、残れり
『堀河之水』	元禄4年	1691	3巻 秋部	七夕		崔氏四民月令云七月初七其ノ夜酒ノ掃メ於庭ヲ露ニ露ニ施シ几筵ヲ設メ酒哺時果ヲ乞巧といふ事もよろこしより事おこれり、七夕祭ともいふ也、香花をそなへ、供具をとゝのへて、庭上にふみを置、竿のはしに五色の糸をかけて、一事を祈るに、三年のうちにかならずかなふといへり、此故に乞巧と申なり
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	8巻	檀林寺	嵯峨行程	是ヲ過テ、大覚寺ニ到リ、斯寺ハ旧ト檀林皇后ノ宮殿也、捨テレ之ヲ精舎トシ、号シ大覚寺ト玉ツ、庭ニ近頃マテ、金岡力置メル、水石ノ跡アリツルトナン
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	智恵光院通		山里町 此町も聚楽城の御庭に山家の跡を造らせ給ひし旧地ゆへ小名とす
『都花月名所』	寛政6年	1793		智恩院	和尚石	同所〔智恩院〕客殿庭中 諺曰慈鎮和尚此石上にて真葛原の歌を読給ふ也と是謬也。実は日枝山下東坂本にての歌也
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	知恩院	座禪石	奇石 同寺（知恩院）方丈池水の西にあり伝云慈鎮和尚の座禪石也と当寺の東南にまづが原ありこれ又松をしぐれの歌詠ぜし所なり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	知恩院	座禪石	石之部 愛宕郡 同寺（知恩院）方丈の池の西にあり。これ慈鎮和尚の座禪石なり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	知恩院	座禪石	古蹟門上 愛宕郡 同（知恩院）方丈、池水の西にあり。相伝ふ、慈鎮和尚の座禪石なりと
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	智積院		林泉は東に翠巒層々として深林の中に宝閣寂々たり
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		智積院	下京区之部	庭園は千利休の好みにして支那廬山の風景に擬し池水の運用殊に巧妙なり
『京華要誌』	明治28年	1895		智積院		方丈（中略）林泉又美観なり
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	超勝寺		方丈の庭中絶妙にして奇作なり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	聴松院	愛宕郡部三	禿尾長柄帚云（中略）文明十五年師還・能阜・聴松＝聴松亦向＝羅＝煨爐＝兵不 _レ 止 _レ 十余年待 _レ 得 _レ 太平ヲ拾 _レ 砂礫ヲ披 _レ 蒙幕ヲ _レ 再造如 _レ 故・簷簷輩飛 _レ 之美池亭ノ泉石倍 _レ 于前ニ矣 〔文明十五年師・能阜の聴松に還り、聴松また向かうに、煨爐に覆る、兵止まらず十余年を得て太平を待つ、砂礫を拾い、蒙幕を披きて、再び造る、故のごとし簷簷輩飛の美、池亭の泉石前に倍せり〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	頂法寺	寺院門上	愛宕郡 庭に、大なる柳樹、数株あり。本根、一圃に至るもの、多し。枝の低く垂るもの地を払ひ、春末新緑、奇観とす
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之三 後玄武・右白虎	長名椿		当庭の庭中にいみじき椿かずゝありて
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之三 左清龍	長楽寺	東山長楽寺	傍らの庭造は相阿弥の作にして、世に名高き勝地なり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	直指菴	葛野郡四	指東菴十四境 祥鳳山 蟠龍巖（中略） 菖蒲潭 梅花塙 蒼松嶺 明月池 翠嵐嶺 屏障峰 正覺堂 廓然亭（中略） 漱玉澗 喝雲居（中略） 含玉軒 一擊軒
『堀河之水』	元禄4年	1691	3巻 秋部	月		新後撰集 西園寺入道前太政大臣家にて関月といへるこゝろをよみ侍ける 信実朝臣 秋風に不破の関屋のあれまくもおしからぬまで月ぞもりくる 斧提て月をながめん庭の松 芸州二十日市益友 草庵集伝 和歌所月次三首 庭新樹 庭の面は花のかげこそかはるとも月もらぬまで茂らずも哉 宵は寝てよそしづまりて月見哉 四日市森本釣測
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	11巻	月輪		コレハ兼実公ノ山莊ナルユヘニ月輪殿ト称シヌ此寺ハ則公ノ建立ニシテ公ノ御影ソノ外什物多シ。大中臣能宣コヘヘマカリテ元輔 恵慶ナド共ニ庭ノ藤ノ花ヲ弄ビテヨメル。藤ノ花盛トナレバ庭ノ面ニ。オモヒモカケヌ波ゾ立ケル。小野宮オホキマウチギミ。月 輪寺ノ花見侍リケル日ヨメル清原元輔。誰ガタメニアスハ残サン山桜。コボレテ匂ケケフノ形念ニ。清慎公同寺ノ花見ノ時。平兼 盛誂侍ル山桜アクマデイロヲミツル哉チルベクモ風吹ヌ世ニ
『都花月名所』	寛政6年	1793		月輪	藤	洛東東福寺 山林及門前などに多し 月輪といふ所にまかりて元輔恵慶などゝ共に庭の藤の花もて遊びてよみ侍る 後拾 能宣 藤の花さかりとなれば庭の面におもひもかけぬ波ぞ立ぬる
『都名所烏』	元禄3年	1690	五巻	月輪里	里之部 葛野郡	あたご山東の方の山を月輪山といふ。いにしへ九条相国兼実公。しばらく爰にすみ給ふ。此ゆへに月輪の相国と申す。其別庄今寺 となれり。 歌には 藤 桂の宿 桜 花 よめり 月の輪といふ所にまかりて元輔恵慶などともに庭の藤の花をもてあそびてよみ侍る 後拾遺 大中臣能宣 藤の花盛となれば庭の面に思ひもかけぬ浪ぞ立ぬる 小野宮おほきおほいまうちきみ月輪寺の花見侍りける日よめる 新古今 清原元輔 たかゝにあすは残さん山桜こぼれて匂ふ今日の記念に
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	7巻	月輪寺		をのゝみやの太政大臣は清慎公也兼実は法性寺関白忠道三男也後拾遺に月の輪と云所にまかりて元輔恵慶など庭の藤の花を翫びて よめる ふぢの花盛りとなれば庭の面におもひものかけぬ浪ぞ立ける 大中臣能宣 さきの日にかつらのさとを見し故はけふ月のわにくべきなりけり 輔親
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	亭子院	洛陽部四	本朝文粹（菅淳茂）洛陽城内、有一離宮、竹樹泉石如 _テ 仙洞、爾蓋 _テ 世ノ之所謂 _ル 亭子ノ院 _ヲ 、焉太上法皇雖 _テ 入 _テ 三密ノ道 _ニ 、出 _テ 五ノ 万乗ノ家 _ヲ 、猶 _モ 未 _ダ 捨 _テ 其 _ノ 地 _ヲ 、流 _ラ 以 _テ 助 _メ 彼岸寂靜 _ヲ 。 〔洛陽城の内に一つの離宮あり、竹樹泉石、先頭のごとくしかり、蓋し世の所謂、亭子の院なり、焉太上法皇三密の道に入りて万 乗の家を出たまんといへども、なおこの地の風流を捨てたまは、彼岸寂靜を助く〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	殿上	殿舎	九槐記-曰 殿上の小庭には夏はしの木といふ木をはうえて候計るちいさくてたけたかならぬ木の枝さしいみしくかしげなる にてなん候ける夏は燈燵をば人候ける時はその木にかけゝる
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		天竜寺	近郊之部 一	総門 東面なり。門内に蓮池ありて石橋を架す。 （中略） 林泉 方丈の前にあり。開山夢窓国師の意匠を襲して経営せし所にして、中央の清池鑄ち、之を曹源池と名け、池心に小嶼を築 き、之を弁天島と号す。池畔に臥月石・球虎岩あり、池中に被雲石あり。其れより亀頂塔を見て、右転すれば竜燈松と称する名木 あり。対岩に聳ゆるは亀山にして、山麓に瀑布あり、亀尾瀑と呼ぶ。瀝辺に補陀石・聴泉岩あり。三笑橋を渡れば座禪石・釣寂岩 あり、如此数多の奇巖怪石参差として庭中に在り、加るに嵐山の眺望を以てす。実に天然と人工とを配合して、其宜しきに適ひ風 景殊に秀逸なり。 （中略） 塔頭慈濟院（中略）庭は仏殿の前後及び書院前の三者にして、共に風致あり。（中略）同塔頭妙智院の林泉は、策彦和尚の作りし ものにて有名なりしが、今は之を毀ち畑となし、獅子岩と云巨石のみ残れり
『京華要誌』	明治28年	1895		天竜寺		境内广大にして喬松古柏に錯り、青苔径を埋め、其間に故殿堂の礎石の散点せるを認め、人をして懐旧の念を発せしむ。また旧方 丈の林泉は開山国師の意匠を襲し、経営せしものにして、中心に清池あり、曹源池と称す。池畔奇巖怪石参差として、岸下に飛泉 あり。亀尾瀑といふ。池中に小嶼を築く。弁天島と名づく（中に亀頂塔の遺材といへる古木あり）。其他補陀・釣寂・座禪・班 虎・臥月・被雲等の奇石あり。又花時庭中より嵐山を望めば、洞中より武陵を望むが如く、秋晚紅葉池辺に満ち、霜後の風情いは ん方なし
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之五	天龍寺		この方丈の林泉は開基夢想国師の作りたまふ、亀尾山、あらし山、大堰川、戸難瀬滝を庭中の荘として、この辺の妙境なり。…妙 智院の庭中は僧良策彦の造れるなり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	7巻	天龍寺		一天龍寺十境 普明閣 絶唱巖 靈庇廟 曹源池 枯花嶺 渡月橋 三級巖 万松洞 龍門亭 亀頂塔是に夢窓国師絶句あり 風雅集 小ぐら山ふもの寺の入相にあらぬねながらまがふ厩金 俊成 夢想国師の歌も風雅集にあり 一天龍寺の東大井の川ほとりに臨泉寺有後醍醐帝建立庭なり
『京城勝覧』	宝永3年	1706		天龍寺	嵯峨	庭の築山見るべし
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	天龍寺	飯山地	天龍寺方丈の後に夢窓国師みづから豊給ふ所の水石の跡あり国師は天性水石をこのみたまひ所住の地毎に飯山の跡をのこせり凡本 朝飯山をつくるに両流あり嵯峨流と四条流なり其内嵯峨流は夢窓国師の模範也
『京童』	明暦4年	1658	巻6	天龍寺		常寺は夢想国師を開山となし。尊氏將軍の御こりう也。前なる池を八宗論の池といふ。昔しいけのほとりにて八宗の法論ありし ゆへの名なり。夢想国師のいんきよは。ざいほうじといふなり。今ゆくべき道なり。此寺の庭は一夜のうちにつくられしと也。七 本竹とて名ある竹 庭にあり 花の雨もふらしこそすれ天龍寺
『都名所車』	正徳4年	1714		天龍寺		光明院御宇曆応三年尊氏將軍建立龜山院の旧跡也夢想国師の開基此通のつき山見事也
『山城名勝志』	正徳元年	1711	9巻下	天龍寺	葛野郡三	境地 普門閣（山門）曹源池（方丈集瑞軒蓮池水亀山下より湧出、炎天絶えず源頭曹源一滴彫付石、開山国師の彫出所なり、その石今西 州に在也）万松洞（中略）龍門亭（中略）亀頂塔（中略）枯花嶺（中略）渡月橋（中略）霊庇廡（中略）絶唱溪（中略）三級岩

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	天龍寺	寺院門下	葛野郡	夢窓、慧福合比の僧にして、七朝の国師たり。天性、仮山を好む。その作るところ、嵯峨流と称す
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之四 右白虎	天龍寺	霊亀山天龍寺資聖禪寺		方丈の庭は夢想国師の作にして、池を曹源池といふ。
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	天龍寺	八宗論池	名池	嵯峨天龍寺の池とも清凉寺の池共云り
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	8巻	天龍寺	嵯峨行程		天龍寺ハ、亀山殿ノアリシ所ナリ、檀林寺モ此ノ内ニアリシ、然ル足利尊氏卿後醍醐天皇崩後、為 _メ 御菩提 _ニ 、此寺ヲ建立アリ、天皇ノ塔所ヲ、奉 _レ 号 _ス 多宝院ト _シ 、門前金剛院ハ、光厳院ノ塔所ナリ、此寺亀ノ尾山ノ麓ナルニヨリ、霊亀山ト号ス、此ノ山ヨリ善木出ツ、当寺草創ノ時、天龍珠ヲ献スルニヨリ、則チ天龍寺ト名ケ、貞和年中ニ、供養アリ、其ノ翌月花園光厳兩上皇臨幸アリ、開山ハ日高峯ノ法嗣、夢窓疎石也、此ノ僧恵福兼備ノ人ニヨリ、武家ノ尊崇ニ逢ノミニアラス、七朝ノ国師トナレリ、天性愛 _ス 水石ヲ _ニ 、方丈ノ後ニ設ケ _ル 仮山ヲ _ニ 、是 _ヲ 世ニ称 _ス 嵯峨流ト _ス
『扶桑京草誌』	寛文5年	1665	1巻	天龍寺	曹源池	川澤	在 _ニ 天龍寺ニ _テ
『都花月名所』	寛政6年	1793		天龍寺	八宗論池	蓮	嵯峨清凉寺 釈迦堂の東にあり
『山州名跡志』	正徳元年	1711	9巻	天龍寺	霊亀山天龍資聖禪寺	曹源池	云 _フ 方丈西面ノ池ヲ _ニ 此ノ所ノ仮山開山ノ所作ナリ
『山州名跡志』	正徳元年	1711	9巻	天龍寺	霊亀山天龍資聖禪寺	天龍寺十境	○万松洞 (不 _レ 考) 龍門亭 亀頂塔 (古 _ハ 云 _フ 九重ノ塔ヲ _ニ 今亡 _シ 其ノ地方丈ノ上一町許也) ○枯華嶺 (云 _ニ 嵐山ヲ _ニ) 霊庇廟 (云 _ニ 野ノ宮ヲ _ニ) 洞鑑 (不 _レ 考) ○渡月橋 (云 _ニ 法輪橋ヲ _ニ) 絶唱溪 (云 _フ 大井川ヲ _ニ)
『洛西嵯峨名所案内』	嘉永5年	1852		天龍寺	霊亀山天龍寺祖資聖禪寺	帷子が辻	(方丈の庭国師の作として池を曹源池、書院を集瑞軒といふ。古代渡月橋の石杭の通水鉢あり。) (中略) 光厳院御塔ハ惣門外ノ金剛院にあり。真乗院に細川常光の茶室あり。其前の水盆ハ亀頂塔の礎石也。古天竜寺に九重の塔あり、是を亀頂塔と名付。妙智院の庭ハ策彦和尚の作なり、此人大明にわたる。(中略) 天龍寺十境 夢窓国師詩あり。 普明園 絶唱谿 霊庇廟 曹源池 枯華嶺 渡月閣 三級巖 万松洞 龍門亭 亀頂塔
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	天龍寺十境	十境		
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	天龍寺十境	古跡門下	葛野郡	寺に十境あり。いはゆる普明園・絶唱溪・霊庇廟・曹源池・枯花嶺・三級岩・万松洞・龍門亭・亀頂塔、渡月橋を加へて十数たり
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	天龍寺十境	十境		普明〔木閣〕 絶昌谿 霊庇廊 曹源池 拓花嶺 渡月橋 三級巖 万松洞 竜門亭 亀頂塔
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	同嵯峨八景			嵯峨春草 亀峰緑樹 広沢秋月 小倉紅楓 野宮松風 宕嶺積雪 洪川水鳥 清涼曉鐘
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之二 左青龍首	東新寺	泰山府君		双林寺のうへなる山東漸寺の庭にあり
『都花月名所』	寛政6年	1793		東新寺	泰山府君	看花	双林寺の上東漸寺の庭中にあり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	東寺			坊中宝輪院の林泉奇なり、泉水の中に沸水三所あり。すべて当山坊中に名画名筆多し。林泉もまた多くして、所々に沸水の清水ありて樹木を育する事他境に勝るとぞしられける
『京童』	明暦4年	1658	巻2	東寺			当寺の弘法大師尊像は。みづからきざませ給ひし也。御まへなる松を三鈴の松といふは。いかゞぞや。三鈴の松といふは。高野山にあり。此寺の松は独鈴の松といふべき事なり。高雄は五鈴なり
『都花月名所』	寛政6年	1793		東寺	燕子花		洛南 伽藍の東の池中宝蔵のめぐり北中門の外池中にあり
『都花月名所』	寛政6年	1793		東寺	蓮		洛南
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻下	東寺			東宝記云成尊僧都・纂要云弘法大師給 _テ 東寺ヲ _ニ 即 _チ 真言密教ノ庭既畢云云 (弘法大師東寺を給りてすなわち真言密教の庭既におわりぬ)
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		東寺	教王護国寺	下京区之部	蓮池 金堂の東にあり、世に瓢箪濠と称す、其形の相似たるを以て名く。水中に紅白の蓮を植え、池辺に燕子花を栽ゆ。校倉 池の中島にある宝庫なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第32学区之部	東寺	教王護国寺	九条町寺院	△小子房ノ址 (中略) 庭前に二股の松樹あり。之を小子房 (又松子に作る) の松と云ふ。其東に三鈴ノ松と称するあり。何れの時にカ枯死せしと
『京華要誌』	明治28年	1895		東寺	教王護国寺		蓮池 東境一帯に在り。俗に瓢箪濠といふ。其形の似たるを以て名く。水中一面に紅白蓮を種糸、水際に燕子花を栽えたり。花時遊人多し。 (中略) 校倉 池の中島に在り。 (中略) 本寺地域は市の西南端に在り。境内喬松老杉森々蒼翠目に満つ。近年溝渠に多くの〔艸園〕 菖蓮花等を培養し、薫風端午の後遊賞するもの多し
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	東寺	獨鈴松	名木	東寺御影堂の前いしへ弘法大師天竺青龍寺より我すむべき所におちとまるべしと独鈴を虚空に投給ふに此松にかゝりとりける とぞ
『都花月名所』	寛政6年	1793		等持院	燕子花		洛西 門前及仏殿の前池中に多し
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	等持院十(二)境	古蹟門上	愛宕郡	いはゆる妥帖菴・清晏斎・宝雲閣・観音殿・香雲亭・聴雨軒・聚星樓・宗鏡堂・八講堂・芙蓉池・万年松、これなり。今、寺ともに絶ゆ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	東福寺			東福寺十境 妙雲閣 選仏場 潮音堂 梅檀林 思遠池 成就宮 通天橋 千松林 甘露井 洗玉澗

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		東福寺	下京区之部		蓮池 勅使門内山門の全面にあり、思遠池と号し中央に石橋を架す。 (中略) 塔頭莊嚴院 南門内の北側にあり、乾峰和尚の開基なり。維新前は林泉美なりしと聞くも今は尽く撤去せり。 同即宗院 (中略) 庭は方丈の東南にあり、池を穿ち木橋を架す、池の前面は旧客殿の趾なり、其辺樹木岩石共に多し。 (中略) 同靈雲院 仏殿に本尊文殊菩薩を安置し傍に開山の像を安置す。庭前に湘江和尚の遺愛石あり、郡林泉に掲げあるもなり。 (中略) 同海藏院 (中略) 庭園は其前面にありて風景佳なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第31学区之部	東福寺	本町十五町目	寺院	△靈雲院 (中略) 庭中の奇石を賜へと候諾して庭石一個を贈り。銘を遺愛石と号す。(今に存す) 韓人竹堂。林道春。同春斎。石川丈山。冷泉為景。芝山持豊等和尚を詠じ。或は詩を賦し。或は文を寄す。(編者作る所の花洛林泉帖に図を載す。) (中略) △即宗院 (中略) 林泉は本寺中第一と称せられ。名苑たりしが。明治初年樹石を沽却し。寺も亦荒廢し。客殿庫裡の制普通民家と異ならず
『京華要誌』	明治28年	1895		東福寺			門内に方形の蓮池あり。中央に石橋を架す。思遠池といふ。 (中略) 靈雲院 又不二庵といふ。五大堂の西南に在り。湘雪和尚の住坊にして、庭中其の遺愛石あり。峰巒奇峭、高さ三尺許にて、須弥壇形の石台に置く。此石元は肥後侯(細川光尚)より贈る所にして、申竹堂(朝鮮人)・林羅山父子・石川丈山及び当時諸名儒の寄題一卷を蔵す
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	2巻	東福寺	宮室		又住野ノ之長条寺ニ從テ永朝ニ問テ別伝ノ之道從テ見西ニ窮ニ宗ノ之蘊ヲ嘉植元年ヲ宋ニ登テ天皇ニ禮ス癡絶沖ヲ跨テ天笠寺ノ月栢庭ニ門ニ貫ス性具ノ之旨ヲ時笑翁ノ堪領ニ淨慧ヲ 〔また野の長条寺に住み、榮朝に従いて、別伝の道を問う、見西に従いて、密宗の蘊を窮む、嘉植元年宋に入りて、天皇に登る、癡絶沖を禮め、天笠寺の月栢庭が門に跨る、性具の旨を質す時、笑翁の基、淨慧を願す〕
『都名所車』	正徳4年	1714		東福寺			唐松国師から松の実をとって当寺の庭に植給ふ実も葉も格別なり外へうつしてならず
『洛陽名所集』	万治元年	1658	5巻	東福寺			開山国師十境とて 妙雲閣 選仏場 潮音堂 梅植林 思遠池 成就宮 通天橋 千松林 甘露井 洗玉欄 是なり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	16巻	東福寺境地	愛宕郡部三		選仏場 (中略) 梅植林 (中略) 能吟水□甘露水 (中略) 通天閣 (中略) 臥雲橋 (中略) 思遠池 (蓮池在・山門前-) 洗玉 [?]間] (中略) 偃月橋 (中略) 二橋 (中略) 妙雲閣 (中略) 無價軒 (中略) 千松林 (中略) 潮音洞
『郡林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	東福寺	恵日山東福禪寺		境内の林泉洛南の妙境にして (中略) 思遠池は山門の前の蓮池をいふ。(中略) (東福寺塔頭林泉によつて纔をこゝに挙る) (中略) 梟燈炬 (近年三聖寺の林泉に移す) (中略) ○靈雲院 (中略) 遺愛石 (当院庭中にあり。相伝ふ、この名石初は肥後大守細川光尚侯の持物なり。かつて湘雪和尚細川家にちなみて後こゝに住す。その時大守より寺産五百石を与んと命じたまふ。湘雪拝謝して云、出家の後縁の貴は参禪の邪鬼なり、願くばこれに換て庭上の奇石を賜らば寺宝とすべしと乞ふ。因レ玆銘を遺愛石と号し、こゝに贈りたまふ。高さ三尺横四尺、岩頭に小松巻柏を樹る。石肌細やかにして色青し。台に石刻の須弥壇なる物あつて、その上に石槽をすへ、その中にあり。無双の名石なり。諸名家の記文あり。軸物兩卷に満る。初卷の二三をここに挙る) (中略) ○正覺院 (庭中の池を松月池といふ) ○莊嚴院 (林泉風景ありて奇岩あり、双鵲石、獅子石といふ。)
『都花月名所』	寛政6年	1793		東福寺	思園池	蓮	東福寺 山門の前にあり紅白の蓮多し
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	東福寺十境	十境		
『雍州府志』	貞享3年	1686	9巻	東福寺十境	古跡門下	紀伊郡	
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	東福寺十境	十境		妙雲〔木閣〕 選仏場 潮音堂 梅植林 思遠池 成就宮 通天橋 千松林 甘露井 洗玉〔石間〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻上	東北院	洛陽部二		統世繼云(上東門院)かの東北院はこの院の御願にて父おとゝの御堂法成寺のかたはらにつくらせ給へり山のかたち池のすがたもなへてならず松のかげ花のこす糸もほかにはずぐれてなん見え侍ると云々此堂つちみかどの末にあたりて上東門院と申也
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	東北院	寺院門上	愛宕郡	庭隅に、和泉式部塔ならびに軒端梅あり。天台宗の僧、これを守る
『洛陽名所集』	万治元年	1658	9巻	桐尾			四歳のとき。重國たはむれに。烏帽をきせ。かくのごとき美兒いつかひととなり。冠巾をくはへ。仕途にのぼらんや。といふ。兒ひそかにおもひて。僧儀のみしたはしく。官屬をねがはず。もし。この心とけ糸ざらば。たゞはだへやふりなんとて庭下に投しければ。人々すくひだき侍れど。猶いきてほりやまず
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	常盤井殿			増鏡ニ云元亨二年正月三日朝謁の行幸なり鳳凰は御おとうとの式部卿のみこの御家大炊御門京極(常盤井殿)といふにぞおはします云々此院は池山の木だちもとよりよしあるに時ならぬ花の木末をさへつくりそへられたれば春のさかりにかはらず洲崎にたてる鶴のけしきも千世をこめたる霜の洞はまことに仙の宮もかくやと見えたり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻下	徳禪寺	愛宕郡一		薩戒記云応永三十二年七月禁裏御庭ノ立石ノ内紫野徳禪寺ノ石六十余有之便ノ石ヲ迎テ取之之所ニ主人必ス有之権之由人人申ス仍テ唯今被ニ返テ遺ニテ了 〔応永三十二年七月、禁裏御庭の立石の内紫野徳禪寺の石六十余りこれあり、便ち石を迎え取るのところに、主人必ず佐の由、人々申すよって唯今返し遣わされたぬ〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	8巻下	徳大寺	葛野郡部二		著聞集云文治の頃後徳大寺右大臣におはしける時徳大寺の亭に候泉をかまへられて中御門左府へ案内申されければわたり給にけり云々
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	渡月橋	橋之部	葛野郡	天龍寺十景の随一なり。十景は。普明園絶唱溪等也開山夢窓国師。天性水石を好み給ひて。住せる所々に。異なる風景あり。およそ本朝築山をつくるに両流あり。嵯峨流四条流といふ。其内嵯峨流といふは。夢窓国師の流なり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	虎石	名石		狼谷日蓮宗の寺にありいにしへ此い柳馬場通押小路下ル町に有しを太閤秀吉公伏見の城へ引とり給ひしとぞ
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	虎石	石之部	愛宕郡	はじめ柳馬場二条の南に有。此石かたち虎に似たるゆへ也。日蓮上人此石にこしかけて。法を説給ふ其所を虎石の町といふ也。此石は今深草宝塔寺方丈の庭に有
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	虎石	古跡門上	愛宕郡	はじめ、柳馬場二条の南にあり。この石、状、虎に似たり。伝へいふ、日蓮上人、この石に踞して法を唱ふ。故に、今において、虎石町といふ。この石、今は深草宝塔寺の方丈の庭にあり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	1巻	虎石旧跡		押小路の南。万里小路の東にあり。本願寺開山親鸞聖人住給ひこゝにて遷化あり。その庭のつき山の立石虎のうづくりたるかたち似たる故に今も虎石町と名づく。中頃聚楽の城に虎石を引とられ。其後此城を伏見にうつし。虎石をも引かれたり石田治部少輔反逆して。城は破れ。石は狼谷にありといふ。物毎にまことを思へ虎石の石に矢のたつ例もぞめる　でき斎
『京雀』	寛文5年	1665		とらいしの町	万里小路通	昔本願寺の開山親鸞上人此町に住給ひて遷化ありその南庭の築山泉水の石に虎に似たる大石あり太閤秀よし公聚洛の城に引とりて築山に居給ふ後に城を伏見に引うつされし時虎石をも引とられたり石田治部少輔反逆して伏見の城代島井彦右衛門をうちとり城は破れてかの虎石は今も狼谷の日蓮宗の寺にありといひつたへし
『京雀跡追』	延宝6年	1678	地	虎石の町	柳馬場通	昔本願寺の開山親鸞上人此町に住給ひ南庭の築山泉水の石とらこ似たる大石有太閤秀吉公じゅゆらくのしろに引とり給ふ後彼石をも引とられぬ石田治部反逆して伏見の城代島井を討取し後は今は狼谷の日蓮宗の寺に有よし
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	虎石町	柳馬場通	むかし此町に一向門徒の開山親鸞上人住給ひ住生し給ふ其所の庭の築山泉水の石に虎に似たる石有しゆへ町の小名とす其後太閤秀吉公の御時聚楽の城に引取て築山に居給ふ後に伏見の城へうつされ又其後狼谷の日蓮宗の寺に此石ありと云伝ふ又今は深草の宝塔寺にありともいふ
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻下	内宮		吉田の唯一宗源の神道をあらはせる心にや但別に宗元堂とて吉田の家庭にたてらる
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	内膳司	殿舎	文徳実録ニ曰天安元年四月癸酉有テレ勅内膳司ノ忌火庭ノ火皇ノ神ニ授クニ五位下ヲ一〔文徳実録にいづく天安元年四月癸酉勅ありて内膳司の忌火庭の神に五位下を授〕中右記ニ曰（中略）内膳司ノ御龜ノ神ニ三所ノ一也平野件美御祭奉仕ノ之神ノ一也一所ノ庭火是ノ尋常ノ御飯ニ奉仕ノ之神ノ一也一所ノ忌火ノ神ノ一也是則ノ十二月新嘗祭六月神今食ノ祭奉仕ノ之神也下略〔内膳司の御龜の神は三所なり、平野件美御祭奉仕の神なり、一所は庭火これ尋常の御飯に奉仕の神なり、一所は忌火の神なり。これすなわち十二月新嘗祭、六月神今食の祭奉仕の神なり〕
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	1巻	内侍所		からかみ庭火櫛弓など神楽の詠物也それにもとす糸のうたひ物といふ事は梁塵愚抄に委し
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	3巻	長嘯旧跡		今の弁財天の社のほとり也歌仙堂ちかくまで有し前庭の池水草ながらのこれりしも今弁財天の池となれり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻上	中河	洛陽部二	榮花物語ニ云粟田殿四月晦日にほかへ渡らせ給ふそれは出雲前司相如といひける人の家なり中川に左大臣ちかき所なりけり父のくらかのみ助信のおそんといひける人のつくりて住ける池やり水山などありていとおかし
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	中御門ノ京極ノ第		著聞集云京極殿は詩歌の道に長せさせ給て寛弘寛治の昔の跡を尋て建永元年三月に京極殿にて曲水の宴を行はんと申し立けり巴の字の潺湲を流し住吉の松を引うへなどしてさまぐ御いとなみ有ける
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	夏野左大臣宅地	双岡	別荘地 仁和寺の法金剛院の地いにしへ右大臣清原の真人夏野山莊のありし所也承和元年夏四月　嵯峨の太上皇此地に降臨ありて水石を愛し同十四年十月双の岡の東垣に従五位の下を授たまふ　天皇遊獵の時墳上を四望の地となし給ふとなり
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	8巻	夏野左大臣宅地	嵯峨行程	紙屋川ノ西ノ方八町略ヲ過キ、宇多河ノ板橋ヲ越ヘ、大阪ヲ過テ、妙心寺ノ北ノ門ニ到リヌ、此宇多河ノ西南、妙心寺ノ中、智勝院ノ後ノ竹藪ノ所、太平記ニ所ニ記ス、六本杉ノ地ト云ヒ伝フ、宇多帝ヲ奉レ葬宇多野ニハ今ノ仁和寺ノ北、山間ニアリ、宇多河ハ、則チ其ノ溪ヨリ流出、妙心寺此地古ハ籍田アリ、其後夏野左大臣宅地トナリ、水石ヲ登ミ花木ヲ種ユ、依レ之ニ称スハ花園トシ
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	8巻	夏野左大臣宅地	嵯峨行程	双丘ノ東南法金剛院トノ間ニ、大ナル岩石数多アリテ、水石ノ跡残レリ、是古ヘニ所謂双ノ池ノ跡ナリ、歌人ノ題詠多シ、衣ノ瀑ナト云ヘルモ此ノ辺ニアリトナン、于レ今豈ミ置キシ石残レリ、今此ノ村ヲ池上ト云ヘリ、三ノ岡東ノ方ニ、法金剛院アリ、是亦旧ト夏野左大臣ノ宅地、于レ今水石ノ形残レリ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	南禅院	愛宕郡部三	濟北集云（文応皇帝）弘安ノ間建ツニ離宮ヲ于城東ニ其地元ト号ニ福地ト山木殷森ト水石明媚ト〔弘安の間、離宮を城東に建つ、その地元と福地と号す、山木殷森とめ水石明媚なり〕
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之二	南禅寺		方丈の林泉は、巨巖そばだちて、雲夢七沢を關くの仙境なり。　（中略）○南禅院（中略）当院の林泉は東南鮮にして、まことに日月を扶助するの靈境なり。（中略）○金地院（中略）この院の林泉佳境にして名巖多く、心といふ文字に双置けりとぞ。（中略）○塔頭聴松院の林泉風色幽雅にして、庭に瑤瑤の水鉢あり。また菅神夢想の名松あり、老木の大神にてありしが、近年衰枯して朽たり、故に植繼あり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻下	南禅寺		南禅寺の十境　獨秀峰　羊角岑　歸雲洞　奉龍池　墨華堂　鎮春亭　蘿月菴　綾戸廟　愈好亭　薔〔神眼〕林
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		南禅寺	上京区之部	唐門　（中略）門前に蓮池あり、拳竜池と名け中央に石橋を架し以て当門に通ず。（中略）方丈（中略）庭園は小堀遠州作にして中央に巨巖を配置せるものなり、世に之を虎の子渡と称す。（中略）鐘楼　仏殿の南岡上にあり、楼の傍に聳ゆる山を羊角嶺と云当寺十境の一なり。塔中南禅院（中略）林泉は著名なものにして中央に池を穿ち其中に四箇の小巖を築く其形心字に似たり、世に心字島と云猶珍石佳木を点綴し頗る韵致あり。又た庭内の南方に　亀山帝御分骨所あり。（中略）同金地院（中略）庭は客殿の前にあり遠州の作りたるものにて鶴亀の庭と云、有名なるものなれども優雅なる趣味に乏しき様思惟す。（中略）同牧護菴　金地院の北にあり、法皇寺と称す。維新前は林泉美なりしと聞も今は庭中の池壇に残れるのみなり。同聴松院（中略）林泉は相阿弥作にして池を穿ち清泉を漾はす。池塘に松樹あり、菅公御夢相松と云

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第27学区 (南禅寺町)之部	南禅寺	字福地	寺院	<p>亀山上皇深く仏乘に歸し。最も禅法を崇信し。永仁元年禅林寺殿を捨て梵刹と為す。当寺是也。始め上皇此地の風光を愛し。弘安年中離宮を造営し。上之宮。下之宮に別ち。宮殿を建て。林泉を築く。壯麗雄大を極む。工成り。之に遣御す。</p> <p>(中略)</p> <p>△勅使門(中略)○拳龍池は勅使門の前にあり。瑞龍に因み此名あり。十境の一とす。石池上に石造反橋を架す。</p> <p>△大方丈(中略)庭園は虎の子渡しと称す。龍安寺に似て非也。畳石の配置按排凡に超越し。平地白沙を敷く頗る快調なり。伝て小堀政一の作庭と云ふ。</p> <p>(中略)</p> <p>南禅寺記云。太上皇亀山院。弘安中置。離宮於此地。(中略)庭中有二大池。橋四隅栽四松。南偏有柳如絲曰官柳。龍淵之北有講茶之堂。(中略)曰南禅院。(本尊釈迦無量寿。有亭臨曹源池上。池者龍之象也。手足可。觀院北砌右有牡丹花。御愛也。其軒曰花王。有御製詩。軒後曰静明。四明東陵興業書後有万年軒。以双松得名。有井曰石。在左方。凡一石一草木皆名。名品住吉松。龍田楓樹難波芦歌津蝦蟇至今尚存焉。)此寺之濫觴也。(中略)祠南有一塔。(中略)塔上有山其形如摩尼宝。神龍窟于此。有水涌出。落澗曰曹源泉。(曹源泉。蓋在南禅院後其泉出自岩竇之罅。洩々西流瀉成池水。瀉為池水。又同其名。池之象者龍也。瀾々伝于庫院。以供合山清衆也。池之尾一橋跨之。空曰合[?]間。々々之水東自駒瀨流出而合也。(中略)瀨之上峯層出者。曰獨秀。天下望也。</p> <p>△南禅院(中略)林泉は山内第一とす。東に羊角嶺ありて。獨秀峰を背ひ。溪谷より落る飛泉は注て曹源泉に入る。西南樹木繁茂し。極めて幽静也。</p> <p>△天授庵(中略)林泉見るべきものあり。茶室を松閑と云ふ。(花洛林泉帖に見ゆ。)</p> <p>△歸雲院(中略)林泉頗る佳作なりしが。明治十八年以来。後方疎水分線路と為り。大に變更を看る。</p> <p>△金地院(中略)○林泉は鶴亀の庭と称し。雄大なる規模とす。(花洛林泉帖に載す)伝て小堀政一の作也と</p> <p>△聴松院(中略)林泉は頗る心匠に富む伝て相阿弥ノ作と云ふ。近時漫りに人工を加え為に旧状を損す。惜しむべし。</p> <p>虎尾長柄帶云。(中略)文明十五年。待得太平。拾砂礫被蒙幕。再造如故。驚聲震飛之美。池亭泉石倍于前矣。</p>
『京華要誌』	明治28年	1895		南禅寺			<p>門前に蓮池あり、衆竜池と号す。石橋を架し南門に通ふ。(中略)</p> <p>方丈(中略)林泉は小堀遠州の作にして、羊角嶺を主山とし、庭前に奇石佳木を点綴し景趣を成す。頗る奇古なり。(中略)</p> <p>南禅院(中略)林泉また名高し、寺記にいふ、凡そ一石一草木、皆是名品、住吉松、竜田楓樹、難波菰、歌津蝦蟇、至レ今猶存焉とあり。当時の築宮善美を極めしを知るべし。現今許多の変遷を経たれとも、昔古幽雅古時を想ひ見るに足る。池に淡紅色の河骨あり、また珍卉なり。</p> <p>(中略)</p> <p>天授庵(中略)書院清潔にして林泉は清爽幽雅、秋李紅葉最もよし。</p> <p>(中略)</p> <p>金地院(中略)庭前林泉及び八窓茶室ともに小堀遠州の作にて、茶道家これを艶稱す。近時修理を加えて保存せり。</p> <p>(中略)</p> <p>聴松院 山門の東北一町はかりに在り。林泉は相阿弥の作にして其名高し。</p> <p>(中略)</p> <p>また、子院中林泉に著名のもの多し、往々佳作あり。むかし当山の盛時には種々の名勝ありしよし、寺僧の文詞に遺れるもの、鎖春亭(綾戸祠のあなたにありしといふ)、逾好亭(南禅院の傍にありしと)・蔵王軒・万年軒(共に南禅院にありしと)・[輿斗] 碧軒・帰心洞・羅月庵・蔵春峽・壑雷橋(共に独秀峯のもとにありしといふ)・羅漢閣(山門の北にありしといふ)、合[?]間] 橋・三級巖(法堂の南南禅院の北にありしといふ)等あり。今多くは廢墟に属すと雖も、撰名雅禽当時の勝景を想見するに足る</p>
『京都新繁昌記』	明治36年	1903		南禅寺 疎水水力 電気			<p>金地院には東照宮の靈廟あり、本堂の建築殊に良材を以てし、金碧燦爛たり。宜なり国宝と認められて修繕の成れるや、林泉亦稀れに見る所のもの、緑樹鬱蒼、砂白く苔青し、八窓の茶席あり、宝物も亦磨からず</p>
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	南禅寺 十境	愛宕郡部 三		<p>獨秀峰(主山駒瀨上一峰) 半角嶺(天授東嶺) 歸雲洞 拳龍池 曇華堂(法堂) 鎖春亭 鶴林五鳳集(鎖春亭 琴房) 拳龍池・畔案山・前亭子鎖・春・輝・九天・文心・上皇旧恩渥花紅柳緑万斯年 羅月菴(在・独秀峰辺) 綾戸庵(鎖主) 愈好亭(在・靈祠之東) 簫笛林(衆寮)</p>
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	1巻	南禅寺	曹源泉	川澤	<p>在南禅寺・釈・義堂・曰曹源泉・在南禅院後・其ノ泉出・自・岩竇之罅・西長瀉・而為・池・亀山上皇ノ之所・命・スル也 [南禅寺にあり、釈の義堂のいわく、曹源泉は南禅院の後ろにあり、その泉岩穴のひびより出つ、西流水たまりて池と為す、亀山上皇の命ずる所なり]</p>
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	1巻	南禅寺	泰龍池	川澤	乃南禅寺ノ池也
『都花月名所』	寛政6年	1793		南禅寺	綾戸池	蓮	南禅寺
『都名所鳥』	元禄3年	1690	四巻	南禅寺	獨秀峯	峯之部 愛宕郡	南禅寺の山にありて。此寺の十景のそのひとつ也
『山州名跡志』	正徳元年	1711	4巻	南禅寺	瑞龍山太平興国南禅寺	愛宕郡	<p>○控門(西向) 中門同前二有、池縣・戴石橋・○池号・黎龍・(此門常・閉・ス) (中略) 以テ告ク三金剛馳スルカニ於庭ニ (中略) ○飯山 在・鳥居・傍南西・ 記・云・築・飯山・以・鎮・風水・。杉檜森列有、亭 云・鎮春・注・云・竺山和上・住山・有・是・設・。大衆・日・築・土・為・山。侍業・一隊・。 閑・為・之・レ・長・。 棧・巖・頭・一隊・崎・為・之・レ・長・争・イ・テ・先・不・レ・及・、車・輿・ヲ・運・載・ス・時・美・談・アリ (中略) ●南禅院 記・云・帝・嘗・テ・以・其・在・ル・禅林寺ノ南・顔・之・焉。曰・南禅院・注・云・本尊釈迦無量寿。締構工妙ノ奇麗。有、亭臨・曹源池ノ上・。池・者・龍ノ之・象・也。首・于・曹源泉・手足可・觀・。太上皇嘗・在・此・宮・水石・愛・蓄・夏天・納・涼・。 (中略) 影響・庚戌・重・鑿・清・冽・。辛亥・六月・朔・大雨・山ノ・左・右・崖・崩・土・裂・大木・摧・仆・。澗・水・春・撞・池・水・不・増・減・ス・。凡・此・一・石・一・草木・皆是・名・品・又・云・弘安・中・置・離宮・於・此・地・。注・云・有・二・宮・今・大・雲・本・房・旧・址・云・上ノ・宮・。旧・号・二・松・木・殿・以・之・双・松・也・。乃・一・条・ノ・左・</p>
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	南禅寺	諸境致	愛宕郡部	<p>合[?]間] 橋 三級岩 不動水 卅六橋 則川水 赤欄橋(大雲小橋) 草河 神仙佳境 蔵春峽 壑雷橋(已上三所在・独秀峰辺・) 霜花岩 半度梯(上生院) 獨木橋 南禅寺記云(中略)庭中有二大池。橋四隅。架・栽・四松。南偏有・柳・如・絲・曰・官柳・ [庭中に大池あり、橋の四隅に四松を植ゆ、南偏に柳あり、絲のごとし、官柳という]</p>
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	2巻	南禅寺	瑞龍山太平興国南禅寺		<p>○拳龍池 在・中門ノ前・(中略)○歸雲院(中略)○飯山 在・鳥居・傍南西・○金地院 在・池ノ南・(中略)○駒瀨 在・同所・</p>
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	南禅寺十境	十境		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	南禅寺十境	十境		<p>歸雲洞 独秀峯 羊角峰 春龍池 曇花堂 鎖春亭 羅月庵 綾戸廟 愈好亭 簫[岬]林</p>
『京雀跡追』	延宝6年	1678	天	に			庭石 北野 さが

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	新玉津島			十一月十三日当社の御火焼有前日社壇をきよめ御湯まいらす上冷泉殿より幣奉らる俊成卿の苗裔にておはせばなるべし替て庭火をなす紀州玉津島の祭礼は九月十三日也
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	西洞院			二条西洞院町 此町西側は左大臣冬嗣公の旧地にして其時の御居館は巨勢金岡水石をたくみ結構美を盡されし家にて有しとぞ池須町 此町往古後鳥羽院の御所の旧地也御庭に池あり故に小名に池須といふとぞ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	西八条	別荘地		いにしへ平相国清盛の別荘此所により今田間に泉石の跡あり年々梅雨の節水草を生じ又は白蓮などひらき出る事あり今其所を御所やしきと云
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	西本願寺*	小醒井	霊泉	西本願寺の庭にあり世に云さめが井通の水を大醒井と号す此所を小さめが井と云也本願寺いまだ此所にうつらざる以前より此水はありしと古老の申侍る
『都花月名所』	寛政6年	1793		西本願寺*	古醒井	清水	西本願寺 一名醒眠泉 滴翠園（俗に御亭といふ）にあり御門主文如上人の碑あり
『都花月名所』	寛政6年	1793		西本願寺*	夜光石	石	境地飛雲閣庭中にあり
『都名所鳥』	元禄3年	1690	三巻	西本願寺*	醒井	井之部 愛宕郡	又小醒井といふは。本願寺の庭に有
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	西宮	乙訓郡		本朝文粹（於-西宮池亭- 源順）永寧坊ノ中ニ有-一ノ仙宮-風烟幽奇ニメ水石清麗ナリ
『近畿歴覽記』	貞享3年	1686	9巻	二条菴*	東北歴覽之記		二条庵村井了設ヲ尋子訪ヒ、暫ク留談ス、其ノ栖居叡山ニ向ヒ、御泥池ヲ前ニス、山水ニノ楽ヲ兼テ構ケルモノナリ、庭ノ設ケ最ヤサシクミユ
『京羽二重』	貞享2年	1685	6巻	庭作	諸師諸芸		からす丸あやノ小路下ル町 道花
『都花月名所』	寛政6年	1793		庭湖石	石		北嵯峨大澤池 山家 西行 庭の石にめだつる人もなからましかとあるさまに立しをかねば
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	4巻	軒端松	名樹		小倉山常寂寺の庭に老松あり世人是を定家御題詠する所ののきばの松と云又一説に軒端の松かならず此松一本にかぎるべからずと
『堀河之水』	元禄4年	1691	下巻	橋上秋月			此橋のこのもかのものは。むかしの皇居の地。月卿雲客の家の跡なり。先七条坊門の北南。西洞院の西二町に。亭子院おはしましき。もとは七条后温子の家といへり 後選歌 後拾遺集に云。亭子院の御前の花いとおもしろくあさ露のをけるをめて。見せさせ給ひて 法皇御製 白露のかはるも何かおしらんありての後もやゝうき物を 御返し 伊勢 うへたてゝ君がしめゆふ花なれば玉と見へてや露もをく覧 本朝文粹に。菅淳茂が八月十五夜。亭子院に侍て。月影秋池-満といふ事を作りたる事見ゆ。其文はここに略し侍る。西八条に御所屋敷といふ所有。平相国清盛公の家の跡也。いまに田間に泉水の跡ありて。五月雨の頃は水草生茂り。蓮などたまく聞き侍ると
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	八幡十二景	十二景		
『堀河之水』	元禄4年	1691	1巻 春部	花			水無瀬の和歌所に、庭をへだてゝ無心座あり、庭に大なる松あり、風吹てことにおもしろき日、有心のかたより、慈鎮和尚 心あるとかなきとが中にまたいかにきけとや庭の松風、といふ歌をよみて、無心のかたへ送らる、宗行卿 心なしと人はのたまへどみゝしあれば、きゝさふらふぞ軒の松風 と返歌を詠じけり、耳しあればかなまさかしきぞと、上皇勅定ありて笑はせ給ひけり云々
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	花園	離宮地		妙心寺の地これなり此地元は左大臣清原の夏野の宅地にして園中にもろくの花をうへ愛す依テレ之ニ花園と号す
『雍州府志』	貞享3年	1686	1巻	花園	山川門	愛宕郡	高野村の北にありと。古へ、洛西、宇多河の西に籍田あり。荒庭の後、夏野左大臣、宅地とす。水石を置み、花園を置く。亀山法皇、その地を受す
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻	播磨大路	乙訓郡		八幡宮年中讃記云（中略）臨 ^ニ 晩陰 ^ニ 一有 ^ニ 日 ^ニ 使 ^ニ 相 ^ニ と列来 ^ル 。自 ^ニ 山崎 ^ノ 之狐村 ^ニ 儀式同 ^ニ 于京洛 ^ノ 之大臣 ^ニ 隨身策 ^ニ 馬 ^ニ 其蹄如 ^ニ 龍 ^ノ 雉色 ^ノ 装束異彩 ^ノ 飾新 ^ニ 愛 ^ニ 主人冠 ^ノ 間 ^ニ 掛 ^ニ 紫藤 ^ヲ 而嫋嫋 ^ニ 舞男巾子 ^ニ 挿 ^ニ 素桜 ^ヲ 而鮮妍 ^ニ 彼等 ^ノ 騎 ^ニ 馬三般先 ^ニ 神庭 ^ヲ 令 ^ニ 下馬 ^ノ 一面 ^ニ 相 ^ニ 対 ^ニ 御殿 ^ニ 各刷 ^ニ 再拝 ^ノ 衣袖 ^ヲ 〔晩陰に臨みて日の使いあり、あい連なりて山崎の狐村より来る、儀式京洛の大臣に同じ、隨身馬にむちうちて、その蹄龍のごとし、雉色の装束異彩の飾り新たり、ここに主人冠の間に紫藤を掛けて嫋嫋たり、舞男巾子に素桜を挿しはさんで鮮妍たり、彼ら馬にのりながら三たびまず、神庭を廻りて下馬を令め、一面に御殿に相対し、各々再拝の衣袖をかいつくろう〕
『堀河之水』	元禄4年	1691	1巻 春部	春月			○玉葉集に 式部卿親王 秋も猶忍ばれぬべきひかり哉花しく庭のおぼろ夜の月 （中略） ○呂中学春月ノ詩二 柳塘漠漠暗二啼鶯一、一鏡晴し飛て玉二有リレ華カリ是レ夜闇人不レ寝、半庭ノ寒影在リ二梨花二一 〔呂中学春月の詩に 柳塘漠漠と啼鶯めぐらし、一鏡晴れ飛びて給ふに華さかりありて、好しこれ夜たけなわにて人寝る、半庭の寒影梨の花にあり〕
『堀河之水』	元禄4年	1691	5巻	春部			乙女巻云、八月には六条院つくりはてゝわたり給ふ、ひつじさるのまちは、中宮の御ふるみやなればやがておはしますべし、たつみには殿のおはすべきまちなり、うしとらはひんがしの院に住給ふ台の御方、いぬみのまちはあかしの御方とおぼしをきてさて給へり、南ひんがしは、山たかく春の花の木数をつくしてうへ、池のさまおもしろくすぐれて、おまへちかき前栽に、五葉こうばい桜藤やまびき岩つゝじなどやうの、春のもてあそびをわざとはうへて、秋の前栽をばむらうほのかにまぜたり云々
『雍州府志』	貞享3年	1686	1巻	東岩倉山	山川門	愛宕郡	この所、京師五山の上、南禅寺の地なり。応仁年中の兵乱に、ことごとく烏有となる。その後、再造の資なし。この菴は、寺中、村菴老師の塔頭、聴松院の跡なりと。使者、歸りて、秀吉公に告ぐ。公、すなはち、三長老を召す。時にこれ初冬なり。三長老、庭前の黄蘗少しばかりを採り、これを携へて秀吉公に謁す。公、その寂寥を感じるたまひ、すなはち、百石の寺産を賜ふ
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	東洞院通			三本木五町目 西側東側二町にわかる此町西側元小野宮の旧地也古記に長和三年正月二日南殿飯山の泉水涌出て流水垣の外へ出る清涼水と云しに今はなし
『都名所因会』	安政9年	1780	巻之二 平安城	東本願寺			臨池殿は小堀遠州の好みなり。風光奇々として真妙なり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京雀』	寛文5年	1665	巻4	聖天の町	大宮通西筋		此町の内東のかたは聖天の社は陰陽の神にて夫婦むかひ立給へり面相は像の兒の如し又西のかたは石神これいにしへ二条御城の南の岩神の町にありしその本体は大石也石の景ことの外に見事ければ内裏に引よせ庭の立石にせんとせられしに靈験の奇特ありて八条宮の御所のまへにすてられしを奇特のありければ石神と名づけて此所に鎮祭れり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	悲田寺	古蹟門上	愛宕郡	本朝において、およそ、毎年臘月二十一日より、この徒、小草笠上に貫首の葉を挿し、頭上に装き、また、赤布巾をもつて面顔を覆ひ、わづかに両眼を出し、四人あるいは六人、人家の庭に入り、踊躍す。これを季節候と称す。倭俗、臘月を節季といふ。候は一決の辞なり。每家、歳の終を告げて米を請ふ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	蕪月池	洛陽部三		同集同屈住-迨江-幾、頃流波間月涌湧、一池、秋風台水樹重々、影人、向、広寒宮裡-遊、 〔屈迨江にとどまる、幾く頃流波間月湧く、一池の秋風台水樹重々の影人は広寒宮裡に向かいて遊ぶ〕
『都花月名所』	寛政6年	1793		日野	燕子花		醍醐の南 法界寺と号す境内に弁天池あり杜若多し
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	平等院			本尊の御前の圓窓の窓に彼岸の頃朝日影うつりて仏の白毫にかまやかんために朝日山にさいむかへる壁には七宝をちりばめ庭の池は弥陀の梵字をほれりといへど年久く成て其かたちわづかにのこれり
『都花月名所』	寛政6年	1793		平等院	蓮		宇治 鳳凰堂の池中に多し
『都名所車』	正徳4年	1714		平等院			いにしへ源三位の頼政合戦にうちまけ此寺の庭に扇を打しきて自害せし跡とて今に扇のなりに芝あり
『京都土産』	明治28年	1895		平等院* 金戒光明寺*	著名事物 二幅対		平等院頼政の鎧掛松 黒谷熊谷の鑑洗池
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	武衛陣御所			拙見記-云永禄十二年二条勘解由、小路ノ前ノ御所ノ焼跡ヲ東北ヘ一町宛押ヒロゲ堀ヲホラセテ石垣ヲ築セテ御所ヲ造ラル云云御庭作ラレケル時故、細川氏綱が旧宅ニ藤戸石トテ名石有ケルヲ引カセ又九山八海ト云昔、慈照院殿ノ御時花ノ御所ニ立置、レシ名石ナルヲ取寄テ御庭ニ立ラル其外名石名木名草取集メテ不日ニ成就ス 〔拙見記にいう永禄十二年二条勘解由の小路の前に御所の焼跡を東北へ一町づつ押し広げ、堀を掘らせて石垣を築かせて御所を造らる云云。御庭作られる時、故の細川氏綱が旧宅に藤戸石とて名石ありけるを、引かせまた九山八海という昔慈照院殿の御時、花の御所に立て置かれし名石なるを取り寄せて御庭に立てらる、そのほか名石名木名草を取り集めて不日に成就ス〕
『洛陽名所集』	万治元年	1658	5巻	深草			墨染寺 日蓮宗なり。この寺の庭に。墨染の桜とて有。古今集にみねお歌に。深草や野への桜し心あらばことしばかりはすみぞめにさけとよみし是なり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	普賢堂	洛陽部三		俊頼隨願ニ云（上東門院）東三条殿に出させ給ひけるに時の後のめづらしく里にいでさせ給ひければ上達部殿上人のこるなくあつまりあそびて池の舟にのりてあそばん云云御舟は紅葉をおほくとりによりて船の屋かたにしてみなりのわかれてやうくさしまはる程に南の普賢堂の内に宇治の僧正僧都の君とて御修法して候けるにかゝる事ありてもろくの僧達あつまりて庭にみなみたり其中に良運と申歌詠ありけるを殿上人みしりてちかく漕よせて良運さりぬべからん連歌などしてまいらせよと人々申されば良運もみぢ葉のこがれてみゆるみふねかな
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之六 後玄武	普陀洛寺*	市原の普陀洛寺		庭に小野小町・四位少将の墓あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	10巻	普明菴	葛野部四		十境 ○獅子岩（中略）○夕陽樓○再来松（中略）○浮梅溪（中略）○寂音堂（中略）○石門（中略）○普龍池（中略）○守愚亭○析藏台（中略）○残月橋（後略）
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	普門寺			当寺の庭中には映山紅鄒躑を数株樹て木の長丈におよぶもの多し、弥生の花盛りにては錦繡の林をなし、紅の連山に灌がごとし、都下の人々其紅艶を賞してこゝに群来る、故に映山紅寺と呼ぶ
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	古田織部京坐舖			雪のあしたといふ石灯炬は東山殿の持物とかや、あるひは利休の寄とらう戸下といひふ庭石、三つ小袖とひふ名の石は鼻祖剣仲千利休に小袖三つと代られけるとかや、其外八坂法親寺の礎、文覚石等は庭中の手水鉢とす、熱田金灯籠の名器、さまゝ庭中に見へたり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	古田織部正重能茶亭	古蹟門上	愛宕郡	今、堀川三条の南、藤堂和泉の第宅、もと、織部正重能の住する所なり。故に、茶亭ならびに露地、なほ存す
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	古田織部宅地	古宅地		堀川通三条の南藤堂和泉守殿今の屋敷もと織部正重能の住せし所也茶庭亭并に露地今あり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	古溪和尚所在	所在地		修学寺村の北山ノ禪庵に居す庭に古溪和尚うける所の松あり今大徳寺金竜院の末寺なり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	遍照心院			方丈の林泉は蘆山を移して諸樹を作り木とし連山の体をあらはし、枝を掬て飛泉とし、白砂を布いて流水とし、風景真妙なり。初めは夢想国師の作なり。後世におよんで伏見の朝霧島之助てふ者補作すとなん。京師庭造の一奇品なり。（中略）○実法院（遍照心院塔頭）は林泉広くして、東北の風景を伏て雪の日の眺望あり。特に、蓮池ありてみな月の花盛には香芬々として紅白色をあらそひ、その外爪紅本紅唐蓮などの名草多し。これを見んとて朝日の出るを待て群来る騷人歌をよみ詩作りて、水芙蓉を賞する事と異異ならず。超女が歌、妃子が歩、芳氣十里に聞え、花の君子とも賞す。蓮を愛する事予に同じき者は何人ぞやと茂叔もつづやきける。（中略）○東林院（同塔頭）（門外の東にあり）林泉広くして東南をうけて、月に雪に美観たらずといふことなし。この院は書聖南谷師の住居にして、庭中の西に書斎あり
『雍州府志』	貞享3年	1686	巻之一	遍照心院	寺院門下	紀伊郡	大通寺方丈に、假山あり。これを、小善が経営するところといふ。南都春日山、中院の屋の假山、善が作するところと称す。しかるときは、この善に対して、小善と称するものか。善、未だ僧俗の別を詳らかにせず
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之一	遍照心院*	万称山大通寺遍照心院		方丈の庭（蘆山の景を摸して庭中絶妙なり）
『扶桑京華誌』	寛文5年	1665	巻之一	遍照心院	西八条池	古跡	在-西八条-相伝源経基靈化為-八尺龍-棲-西八条池-今為-律院-号-遍照心院- 〔西八条にあり、相伝う、源経基靈と化し、八尺の龍となり西八条池に棲む、今律院となり、遍照心院と号す〕
『京都坊目誌』	大正4年	1915	巻之一	遍照心院ノ址	八条町	古蹟	又園芸林泉の技に長し。乙訓郡大原野より樹石を採取し。方丈。東林院。恩徳院。東寺観智院。同坊宮竹内氏の庭園を作る（東林恩徳の庭園は林泉名勝図会に出たり）
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一	法泉寺			法泉井 当寺の庭中にあり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『山城名勝志』	正徳元年	1711	巻之一	法花山寺	葛野郡四	風雅 慶政上人 法の庭空に坐こそ聞ゆなれ雲のあなたに花やちるらむ
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	巻之一	法金剛院	臨幸地	仁和寺の南にあり 承和五年夏四月 嵯峨野太上皇右大臣清原の真人夏野ならびの岡の山荘に臨幸有て水石を愛し給ふ
『雍州府志』	貞享3年	1686	巻之一	法金剛院	寺院門下	葛野郡 承和元年夏四月、嵯峨太上皇、右大臣清原真人夏野双丘山荘に降臨、水石を愛したまふ。同じく十四年十月、双丘の東墳に従五位下を授けたまふ。天皇遊獵の時、墳上に駐蹕、もつて四望の地としたまふ。故に、この恩あり。壬子冬、双丘の下、池水、鳥群をなす。車駕、池辺に臨幸、鶴雉を放ち、これを払ふ。東墳は、今、法金剛院境内、北の方にあり。内山と称す。前にはいはゆる池水のありし所は、今の池上村と称す。石岩、処々に散在す。この院、はじめ、双丘寺と称す。文徳天皇安年中、実に寺となる。改め天安寺と号す。真言宗にして、太秦広隆寺と相通ず。その後、廃壊す。待賢門院、これを再興したまひ、法金剛院と号す
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	巻之一	法金剛院	法金剛院記	古今著聞集第十保延三年九月二十三日宝金剛院仁和寺二行幸十番ノ競馬ヲ御覧アリ并樂アリ統古事記第五待賢門院法金剛院造始ヲ御幸アリ立石ハ大徳寺法印セラレタリ林賢ト云法師蓮ノ石タテノソノ傍ニ札ニカキテタツ 衣ニテなつともつきぬ石の上に万よをへよたきの白糸（興ありといふ人あり又無盆なりと云人もあり）
『山城名勝志』	正徳元年	1711	巻之一	宝伝寺	洛陽部一	白河資益王記云文明十四年閏七月十九日大風雨所々吹損北小路西堀出之之薬師堂ノ屋上中將方ノ庭上口=吹入了。 〔白河資益王記いう、文明十四年閏七月十九日大風雨所々吹き損す、北小路の西堀出しの薬師堂の屋上、中將方の庭上口に吹き入れおわんぬ〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	巻之一	細川三斎塔	陵墓門	愛宕郡 この人、武芸の暇、はなはだ茶を好む。茶亭の庭に、愛するところの石燈台あり。遺言していへらく、死後、これをもつて塔とせよと。故に、これに従ふ
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一	堀川御所 源義経館		油小路五条の南西側に池の形庭石遺し家あり
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之一	本願寺		池は高橋を巡りて常に船を浮む。これを浪浪池といふ。竜背橋を過ぎて踏花場あり。この辺桜樹数品あり。胡蝶亭の傍には夜光石あり。嘯月坡は池の巡りの坡をいふ
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	本園寺		真如院の庭に瓜実灯あり（これは足利将軍義昭公の銘なり）、烏帽子石は義昭公烏帽子を掛置たまひしとなり。また円竜院の庭中奇景なり
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	巻之一	本國寺		○烏帽子石（在-真如院-）
『都花月名所』	寛政6年	1793		本國寺	烏帽子石	石 本國寺
『拾遺都名所図会』	天明8年	1788	巻之一 平安城	本園寺方丈		雛形石灯籠 方丈の庭にあり 飯睡水鉢 同所にあり 駒繫松 同所にあり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	4巻	本能寺	洛陽部三	ふりぬる庭にさゆるまつかせ 本能寺第四世日明
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		本法寺	上京区之部	方丈（中略）庭園は本阿弥光悦の好みにして三軒の庭と称す、其形は築山泉石共に浪の紋を模す。中央の小池を八橋と名く、八角形にして御影石八箇を以て池辺を開くものなり
『京華要誌』	明治28年	1895		本法寺		また方丈の林泉は光悦の作とて名高く、中に開祖の説法石あり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之一	本法寺		林泉は光悦の作にして、世に三巴の庭と賞す。その形築山泉石ともに浪の紋を模す
『京都坊目誌』	大正4年	1915	上京第2学区之部	本法寺	本法寺前町	寺院 方丈の庭園は巴の庭と称し世に有名なり。（天明後荒廃す）
『山州名跡志』	正徳元年	1711	21巻	本法寺*	叡昌山本法寺	○日親説法石 在-方丈ノ庭-
『京城勝覧』	宝永3年	1706		本涌寺*	松が崎	○本涌寺 日蓮宗の談所なり。毎年七月十六日の夜。里の男女此寺の庭にあつまりて。法華の題目をとなへておどる
『雍州府志』	貞享3年	1686	6巻	松葉	土産門上	菓木部 倭俗、書院ならびに茶亭の庭を露地といふ。その径に平石を点す。賓客その上に歩す。これを飛石といふ。また、樹木を種系、山野の風致を模す。その下に枯松葉を撒く。これを松葉を敷くといふ。松葉は赤色を貴ぶ。所々にこれありといへども、近江勢多の山より出づもの、宜しとす。その葉、長大にして、その色、淡紅なり。土人携へ来りて、京師に売る。また、種ゆるところの苔は、専ら龍安寺山の杉苔を用ゆ
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之二	円山		坊舎六宇、山崖に建続て、亭園林泉玲瓏として洛東の佳境なり。（中略）多蔵庵の庭造は相阿弥の作
『都花月名所』	寛政6年	1793		円山	燕子花	洛東 坊中樓前の池中に四季開の燕子花所くに見ゆ
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第15学区之部	円山*	六坊	圓山町寺院 △長寿院（又庵に作る）左阿弥と号す（中略）織田頼長（道八と号す）の建立にして。庭園も同人の作なり。明治十九年公園地に入るを以て之に借地す。 △庵多福庵 也阿弥と号す。（中略）庭園は有斐の作と云ふ。明治十九年公園地に入るを以て。重阿弥、及連阿弥を合し。借地として歌風旅館と為し「也阿弥ホテル」と称す
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之三 左清龍	円山安養寺		当山坊中の書院は昇らずして高樓に至り、清奇典麗いはん方なし。庭中には石を疊んで飛泉を催し、池を鑿りては舟をうかべ、緑樹芳草、四季に花絶えず、鐵轡の履の音涼しく、中には多蔵庵（眼阿弥）の庭は相阿弥なり
『京都坊目誌』	大正4年	1915	下京第15学区之部	圓山公園	圓山町	圓山町寺院 地形錯雑規矩一定せず。之に加ふるに地勢高低あるを以て低汗の地に池を穿ち樹木を栽植し。漸く面目を一変せり。其後再び民友地を買収し。風致を保持するや。（中略）園池は倍々佳趣を添へ。飛泉を作る等。人目を娯ましむるを主とす。四時遊覧逍遙するもの多く。殊に花候に際しては。一大桜樹の下。觀望の士女を以て充滿す。其夜景の如きは庭燎池水に相映し佳絶たり。其他月に雪に杖を曳くもの跡を絶たず
『京華要誌』	明治28年	1895		円山公園。	公園	園池は其名の如く、京都著名の円山一帯を主山として作れる大林泉なれば、風光の明媚佳麗なる、四時宜からさるなく、花天月地吟人の魂を銷し、紫醉金迷転た遊子の腸を断つへし。就中、雪景最もよし。洛中十万家、悉く銀閣瓊樓となる。園中諸樓よりこれを望むときは、身置端山上にありて、水晶瑤宮を下瞰するの概あり。昔時、叡山に附属せし頃より、都人遊樂の所となり、美景良辰には、扇影衣香塗上に絡繰たり。実に洛下唯一の公園にして、都人の僭楽に適する勝地といふべし

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	4巻上	万寿寺			十境の題 十地超閣 大雄宝殿 三山神廟 千松客徑 枯林回春 新花更雨 東軒 南院 琴台 鏡沼
『洛陽名所集』	万治元年	1658	5巻	万寿寺			此寺の十境は 十地超閣 大雄宝殿 三山神廟 千松客徑 枯木回春 新花更雨 東軒 南院 琴台 鏡沼 これなり
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	万寿寺十境	十境		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	万寿寺十境	十境		十池超〔木題〕 大雄宝殿 三山神廟 千松客徑 枯木回春 新花更雨 東軒 南院 琴台 鏡沼
『都花月名所』	寛政6年	1793		万福寺	蓮		黄鰐 樓門の前放生池にあり
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	1巻	三井寺日光院*	三井行程		三井ノ法流ハ龍淵房の阿闍梨智寂房ノ阿闍梨良明コレニ流ナリ今ハ二流ナカラ絶ユ日光院今ノ住ハ俗姓山科ノ比留田氏ナリ比留田ニハ中古佐渡守対馬守トイヘル人アリコノ僧初ハ玉泉院ニ住ス日光院ニ古法眼ノ墨画東坡カ風水洞韓王堂ノ雪等図上ノ間ニアリ次ノ間ニ龍虎アリ秀吉公ヘ三井ノ寺僧敵対ノトキ寺家ヲ悉ク焼ケト被レニ仰付・サレトモソノ時ノ仰ニ古法眼龍虎ノ画アル寺ト御自分ノ御宿坊法泉院トハ焼コトナカレトナリコノ日光院ノ画ハ名物ナリ又客殿ノ前ニ飯山アリ此ノ二百年程以前ノ庭作り小膳ト云モノ、作ト云フ京遍照心院ノ庭ト同作ナリ小膳ハ能相力末ノモノカ又客殿ノ西ニ寛ヨリ四角ナル石鉢ヘ水来ルソノ上山ノ方ニ水石ヲタヘム石鉢ノ向ニ龍虎石トテ小膳カ豎ミシ堅石ト横石トアリコノ形チ龍虎ニ似タリヨツテ此水ヲ龍虎水トモ云フ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻上	道俊卿一条家	洛陽部二		中右記ニ云 寛治八年六月二十二日今朝行ニ向フ新中納言ノ之宅ニ一（道俊卿）治部卿道俊の一条のい糸にて水石契久といふ心を散木集 俊頼 山川を誰そのかみにせきそめて絶ぬ岩間の瀬となしけん
『山城名勝志』	正徳元年	1711	7巻	南池院	葛野部部一		統教訓抄云南池院ト申ハ四条ナハテノ北西ノ宮殿ノ森ノ西四町ハカリ縄手ヨリ北ヘ一町余ノ程ニ島アリ廻リハ池ナリ但当時ハ東ノ方ニハ田ヲ作り西ノ方ハ猶ホ池ニテ侍リ池ノ南ニモ殿ノ跡ト覺シキ所アリウルハシキ御所ハ定テ池ノ北ニ南向ニコソ侍リツラメユ、シク広キ中島今ニ見エ侍ルメリ
『堀河之水』	元禄4年	1691	中巻	南里刈藍			或老圃云。藍は正月の末より二月の初までに種をおろし置て。其苗を三月のすえより。卯月のはじめまでに植わした。扱六月の半に刈侍る。此草東寺九条に。もはら作り侍る。其かり藍を。七条塩小路の民家の門くはしならべて。女は庭に慶び。男は市に歌うたふ。その声屑家の軒をめぐりてやむ事なし
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻	南ノ院	洛陽部四		御くしおろさせ給てのち六条院の池に月のうつりて侍けるを御覧じてよませ給ひける 詞花 小一条院 池水にやどれる月はそれながらながむる人の影ぞかはれる
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	源尊氏卿ノ家			翰林五鳳凰（將軍池亭之泛ノ舟 虎園）看來レハ舞榭ハ便ハチ橋梁巧ニ指メシ沙庭ヲ作シ射場ニ只為メニ恩波寬似タルカニ海ニ扁舟一葉與トレ 鶴忘ル 〔看來れば舞榭す、便ハは橋梁巧に沙庭を指め射場と作す、ただ恩波広き海に似たるか為に扁舟一葉鶴與と忘る〕
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	源義朝屋敷	武館地		紫竹村大徳寺の末寺大源庵方丈の南庭いにしへ源のよしとも宅地の跡なり
『都すゝめ案内者』	正徳5年	1715	下巻	都年中行事	三月		十四日ハ廿四日迄 壬生ねんぶつあり 同比 千本系んま堂ねんぶつ 此寺の庭にふけんざうの桜有此花咲次第始
『山城名勝志』	正徳元年	1711	1巻	雅院	殿舎		文徳実録ニ曰嘉祥三年三月己亥皇太子ヲ下リテ殿ヲ御ス陽成殿ノ東庭ノ倚盧ニ云云 〔文徳実録にいわく嘉祥三年三月己亥皇太子殿を降り、陽成殿の東庭の倚盧に御す〕
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之五前朱雀	妙勝禪寺			方丈の庭は佐川田喜六が好む所なり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	明星野	離宮地		
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	14巻	明神			蹴踏トメ入レハ華表ニ。斑々霜葉鋪。閑庭難護リレ殿ヲ。奇石虎蹲ナルレ隅ニ。蜺レ穢ヲ雨消シレ意ヲ。惡テ狂ヲ雪拍テレ膚ヲ。一枝思ハレレ報シトレ主ニ。勝〔既木〕若 氷壺ノ 〔蹴踏とめ花表に入れば、斑々霜葉しくり。閑庭難殿を護り、奇石虎を隅に蹲る。穢れを洗って、雨意を清し、狂をにくて、雪はだをうつ。一枝主に報わんと思わば、勝〔既木〕氷壺の若
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	6巻	妙心寺			妙心寺十境 万歳山 拈花室 度香橋 百花洞 宇多門 旧籍田 齋宮社 鷄足嶺 高安灘 花園社とて有（続古事談に見ゆ）
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		妙心寺	近郊之部一		山門（中略）門前に工字形の蓮池ありて中央に石橋を架す。 （中略） 大方丈（中略）前庭に唐門ありて南面す、檜皮葺四脚の構造なり。 （中略） 同春光院（中略）庭は其前面にありて前往天人和尚の作る所なりと云、其結構は処々に樹木奇岩を配置し、其間に砂石を布き之を水に擬す、又た一種の雅趣あるものなり。庭内の一方に伊勢外宮を奉祀す。 （中略） 同隣華院（中略）庭は方丈の前にありて松の名木あり、同く西隅に脇坂安治・同安元の碑石あり、高さ丈余大亀の背上にありて賤ヶ岳七本槍の由来を記載せり
『京華要誌』	明治28年	1895		妙心寺			山門（中略）門前工字形の小蓮池あり、中央に石橋を架す。 （中略） 春光院（中略）文政二年改建する所にて、書院庭園共に甚た雅潔なり。 （中略） 当寺区域は双岡の正東、古花園後に在り。塔中子院往時著名の林泉あり、之を遊覧するもの絡繹絶えざりしか、惜しむべし今存するもの少し。然れども、当山玉鳳禪宮をはじめ、殿堂仏閣の雄麗にして、境内の清楚なる、都人多数闌若中稀なる美観なり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之四	妙心寺	正法山妙心寺		○当山に十境の風景あり、万歳山は乾の方の仁和寺山をいふ、高安灘は南の門前にあり、度香橋はこの流れにわたす、宇多川は当山より東の方の少流なり、鶏足嶺は北の山、南華塔は南方遥にして東寺の塔の遠景なり、齋宮社は東方の川端にあり、旧籍田は当寺の内花園の旧跡なり、百花洞は大雄院の南恵林院の北の方の深谷をいふ、麒麟閣は花園法皇の宸影を安ずる所にして、麟徳殿とも号して玉鳳院の中にあり（巳中十景）。（中略）○退蔵院（（中略）庭中は画聖古法眼元信の作なり）（中略）○衡梅院（（中略）当院の庭中奇なり。雪江松の事前に見えたり）（中略）○靈雲院（（中略）庭は相国寺の是庵の作とぞ。（中略）庭中の出水は子建これを作る）（中略）○大通院（開基は湘南和尚なり、この人は初め土佐国守の息にして、山水の勝景を庭中に造る事を好みて、奇石奇木を諸邦より聚る事多し。一歳書を紀州禪林寺来山和尚に奉じ、奇樹靈石を求むる事正法誌に見えたり。庭中の風色当山第一にして二に双ぶものなし。（中略））○蟠桃园（当院の林泉は奇石名岩多し）（中略）○雄華院（林泉は名庭にして、奇石を置て十六羅漢に准へ、釈尊大会の体相を表す、日蓮宗徒玉淵の作なり）（中略）○桂春院（林泉妙境なり（中略））○大鑑院（林泉京師唐軒の作）（中略）○春浦院（（中略）また林泉は虎溪の三笑を象て妙景あり（中略））○大光院（林泉妙境なり）（そのほか妙心寺境内塔頭都而八十余寺あり、何れも高貴諸侯の菩提所にして、林泉の風流あるひは名画名筆記するに際限なし、故に予大略見聞の纔をこゝに著すのみなり）
『山州名勝志』	正徳元年	1711	8巻	妙心寺	正法山妙心寺		妙心寺十境（此中所、注 _{スル} 有 _リ 異説、今、準 _ス 一説 _ヲ ） ○万歳山（指 _ス 双 _ノ 阿 _ヲ ）○雞足嶺○拈華室（今在 _リ 玉鳳院裡 _ニ ）○旧籍田（今玉鳳院ノ地）○百花洞（今在 _リ 微笑庵ノ東 _ニ ）○宇多河（門前曰 _ニ 東南ノ流 _ヲ ）○高安灘（昔在 _リ 同河 _ニ ）○度香橋（同河ノ石橋在 _リ 東 _ニ ）○南花塔（言 _フ 東寺ノ塔 _ヲ ）○齋宮杜社（杜或 _ハ 作 _ル 杜、此所不 _レ 詳言 _フ 四條ノ齋宮 _ヲ 乎杜載 _ス 次ノ巻 _ニ ）
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	妙心寺十境	十境		
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	妙心寺十境	十境		万歳山 拈華室 度香橋 百花洞 宇多川 旧籍田 南華塔 齋宮社 鶏足嶺 高安灘
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	5巻	妙泉寺			松か崎に有妙伝寺の末寺也松か崎の一村なべて日蓮宗にて毎年七月十六日の夜此庭にて法華經の題目をとなへ高躍をなす題目躍といふ
『雍州府志』	貞享3年	1686	4巻	妙泉寺	寺院門上	愛宕郡	毎年七月十六日の夜、男女この庭に聚り、各々法華經題目を唱ふ。踊躍をなす。これを題目躍といふ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	11巻下	紫野	愛宕郡一		今昔物語云門祇院位去せ給テ御卿子ノ日遣通ノ為ニ船岳ト云所ニ出サセ給ケルニ大宮ヨリ上 _リ 御マシケル云云雲林院ノ南ノ大門ノ前ニシテ御馬ニ奉テ紫野ニ御マ _リ 着タレハ船岳ノ北面ニ小松所々ニ群生タル中ニ遣水ヲ遺リ石ヲ立砂ヲ敷テ唐廬ノ平張テ立テ藤ヲ懸云云哥謠モ大中臣能宣平ノ兼盛清原ノ元輔源ノ重之時文等也
『堀河之水』	元禄4年	1691	中巻	村路若草			庭たゞきよく。なれがうごかしめてより。尾上の鐘はあかつきのわかれをもよほし
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	八幡十二景	十二景		徳山靈社 洛城瑞霞 石清水涼 醍醐霽月 天台積雪 淀橋斜照 狐川帆帆 伏沢落雁 難波滄浪 山崎晚鐘 嵯峨暮煙 朝山晴嵐
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	夕顔の墓			五条の北高倉と万里小路との間の人家の庭に有光源氏君のかよひ給ひし夕がほの宿といふとはあやし
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻 冬部	雪			權巻云 冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものゝ身にしみて、此世の外の事まで思ひながされ、おもしろきも哀れさも残らぬ折なれ、すさまじきためにいひをきけん、人の心あさゞよとてみすまきあげさせ給、月はくまなくさし出で、ひとつ色に見へわたされたるに、しほれたる前裁のかげ、こゝろぐるしう、やり水もいといたうむせびて、池の水もえもいはずすごきに、わらはべおろして雪まろばしせされ給、おかしげなるすがたかしらつきども、月にはへて、おほきやかになれたるが、さまぐのあこめみだれき、おびしだけなきとのあすがたなまめいたるに、こようあまれる髪のス糸、しろき庭にはましてもてはやしたるといげさやかなりちいさきはわらはけて、よろこびはしるに肩などもおとして、うちとけがほにおかしげなり（巳上）
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻 冬部	雪			枕草紙云、しはすの十よ日のほどに、雪いとたかうふりたるを、女房ともなどして、ものゝふたにいれつゝいとおほくをくを、おなじくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さふらひめしておほせごとにいていへば、あつまりてつくるに殿守司の人にて、御きよめにまいりたるなどもみなよりいてとたくつくりなす、宮つかさなどまいりあつまりて、ことはへごとにつくれば、所のしう三四人まいりたる殿守つかさの人も二十人ばかりになりけり、里なるさふらひめしにつかはしなす、ける此山つくる人にはろく給はすべし、築山にまいらざらん人にはおなじからずとゞめんなどいへば、聞付たるはまどひまいるもあり、里とをきはえつげやらず、つくりはてつれば、みやつかさめしてきぬ二ゆひとらせてえんになげ出るを、一つゝとりによりて、おがみつゝこしにさしてみなまかでぬ巳上
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	養源院			当院の林泉は風光閑雅にして奇岩多し
『京華要誌』	明治28年	1895		養源院			庭前の林泉頗る風致あり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	3巻	頼有松	謬伝		四条いのくまの西にあり俗に云いにしへ源義経の第宅あり庭上遊覧の時刀を此松にかけ給ふとて今に太刀かけの松と云しかれども義経堀川の館は此所にあらず此地は細川頼有戦死の場にして後人松を植てしとするものなり頼有は建仁寺永源庵の檀越にして着する所の甲冑旗竿等今に此院にあり
『雍州府志』	貞享3年	1686	8巻	頼有松	古蹟門上	愛宕郡	大宮四条の南にあり。俗にいふ、古へ、源義経の宅、この処にあり。庭上遊覧の時、刀を掛く。故に、刀掛松と称す。しかれども、義経堀川館は、この所に非ず
『山城名勝志』	正徳元年	1711	5巻下	四辻殿			修明門院四辻殿におはしましける此庭のくさむら茂りて昔にもあらず見え侍りければ人の許へ申つかはしける 続千載 常盤井入道 わけ佐し露のかけても思ひや君なき宿の庭の蓬生
『京師巡覧集』	延宝7年	1679	15巻	来迎院			此ノ寺ノ梶井門主知 _レ 之 _ヲ 有 _リ 証撫ノ弥陀ノ夫良忍ノ捨ノ願縁ノ之宝ノ間 _ヲ ニ台教ノ受ノ密灌ノ而 _テ 後隠 _レ 之 _ニ 立 _テ 来迎院ノ修 _ハ 文殊ノ法 _ヲ 庭石化ノ獅子ノ依 _テ 毘沙門ノ勸 _ニ 始 _メ 融通念仏 _ヲ 所持ノ之弥陀経常ノ放 _レ 光 _ヲ 又待賢皇后ノ宮人耳 _ヲ 法 _ヲ 為 _レ レニ 〔この寺は梶井門主これを知る。証撫の弥陀あり。それ良忍は願縁の宝を捨て、台教を聞いて、密灌を受ける。後、これに隠れて来迎院に立つ。文殊の法を修めば庭石獅子と化す。毘沙門の勧めによりて、融通念仏を始む。所持の弥陀経常に光を放ち、また待賢皇后の宮人法を聞いて尼となる〕
『出来齋京土産』	延宝5年	1677	5巻	来迎院			良忍は尾州富田の人なり。叡山にのぼりて天台の法を良賀僧都に学し真言の教を永遠阿闍梨にうけ堀川院御宇承德元年大原山にかくれ来迎院を草創し仏法をすゝむその頃。待賢門院の女房つねにまうで来り仏道を聞しにある時思ふやう我女的身として年いまだ若し。おりく来りて堂の奥ふかくまいらんにはかならず世の人のため。ぬれ衣を着て此たうとき上人の徳行をもおとし奉りてはかなしき事なりとてたゞ庭に立ながら法を聞て今より後はまいらじと申す。上人聞給何かくるしかるべき。たゞ心ざしをむなしくすべからずと也女房すなはち髪をそり法名を法性とぞつけられける。上人あるとき八字文殊の法をおこなはれしかば庭の大理石変じて獅子となり。庭をかがめぐり哮さけびたり

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『洛陽名所集』	万治元年	1658	7巻	来迎院		釈良忍は。尾州富田の人也。叡山に登り。台教を。良賀にきゝ。密灌を永意にうけ。承德の初め。大原山にかくれ。来迎院をたて。結界法をなし道をとき待ちぬ。待賢皇后の宮人。常々院に來り。道を問。或とき。思へるは。婦人悪感の身にて。しばしば精藍に入へ。かならず。疑跡をのこさん物をとてそれより。まいらざりければ。忍しかもよこ固レ志のよし。すゝめ侍るゆへ。すなはち。難染し。法性と道号し。八字文殊の法を修し。たうとかりけるうち。庭上の大石変じて。獅子となり。行めぐりさけひぬ。一日。異人きたり。忍に融通念仏となふべきとなどかたり。猶もともに。四海にひろめんといひけり。忍。いとあやしみとへば。鞍馬寺の毘沙門天なるよしづけて。そのまゝ見えざりけり。忍これより。融通念仏となへ。また疏つくり。ひろく四衆をすゝめぬ
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	洛西嵯峨八景	八景	
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	洛西八景		愛宕山 大堰川 仁和寺 釈迦堂 渡月橋 時雨亭 松尾祠 梅津里
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻 冬部	落葉		愚迷発心集云、風葉/身難クレ保テ草露/命易シレ消ヘラツ、昇レ野辺/煙ト在ルナレ今ツヅニ乎アル在ナレ明アスニ乎伴トモナハンニ 芒庭ノ苔ニ待ツヤレ晨ツ哉ツ侍ヤレ暮ツ哉ツ南隣ニ泣キ北里ニ送レ人ツ之泪未レ盡矣 〔愚迷発心集云はく、風葉の身を保ち難く、草露の命は消えやすし。野辺の煙と昇らん、今日あるや明日にあるや某庭の苔に伴わん。明日待つや。暮れを待つようや。南隣にもなし、北里になす、人を送るこの涙未だ尽きず。〕
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	洛陽十境		清水仏閣 知恩鐘声 鞍馬古樹 稲廟紅葉 東山秋月 天台晴雪 獅谷群鷺 宕岩片雲 山階夕照 鳥壁古松
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	洛陽十景	十景	
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	洛陽年中 民間風俗		正月朔日早朝に井花水を汲て（俗に若水と云）手水す（若水桶に汲み年男勤之）年徳神とて恵方に棚をかまてこれをまつる掛鯛注連齒染（ゆすりはをかさる）ひきて鏡餅をすふ（旧年猝也）荒神祓大黒夷其外氏神等平生念ずる所の神々をまつる学者は先師先聖を拝し（江次第に有）或は聖廟人丸を拝す屋内にしまかざり門前に立松かざり竹をせり（尊年立也）庭にわらをしき庭かまとして先大服の茶をたて蓬菜の梅ぼしを用ゆ
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	洛陽八景		祇園夜雨 清水秋月 知恩晩鐘 淀河帰帆 鴨堤晴嵐 五橋夕照 比叡暮雪 鳥羽落雁
『出来斎京土産』	延宝5年	1677	3巻	六道		毎年七月九日十日の両日は諸人こゝにまうで聖霊むかへとて鐘をつき念仏す閻魔王の木像南むきの堂に安置す此日は花香燈明供物をかざりそなふ。庭には石地藏數百体ならべをきたりむかし天上より降たるとて閻魔王の面あり心せよこゝは六道の辻と聞ふみたがへつゝゆくな冥途へ でき斎
『都花月名所』	寛政6年	1793		龍安寺	水鳥	洛北 初冬より池の面に鶯鷺戯て奇観也世に名高し
『開化絵入京都見物 拙案内』	明治18年	1885		竜安寺		当寺の池、玄冬には鶯鷺來る
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之四	龍安寺		龍安寺の林泉は封境に名池あり、鏡容池と号す。冬日鶯鷺多く聚りて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、中の島を伏虎といふ。また水分石よりふあり、霖雨の時この石上へ水越ぬれば西の方の橋を上て水を落すなり。三笑橋といふは東の方にあり。当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。（東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山岷松、隣院紅葉）所謂方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北名庭の第一とす。庭中に樹木株もなく、海面の体相にして、中に奇巖十種ありて島嶼に准へ、真の風流にして他に比類なし、これを世に虎の子渡しといふ。そもそもこの地は文明年中細川右京大夫勝元の別荘なり。この人書院に坐にして遥に八幡神廟を毎事拜せんがために、庭中に樹木を植させずとなん。（西源院）この院の林泉また風流にして、上段の地に茶室あり 塔頭東泉院の林泉は遠景を興とす。坐にして八幡山淀川のながれ、小倉の江伏見鳥羽羽束師など鮮かに見えて、風光微妙なり。同じく大珠院の林泉は、鏡容池西の方に巡りて庭中の美となる。池中の島へ石橋をわたして、島の中に綾杉といふ名木あり
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	6巻	龍安寺		等持寺の西の妙心寺の末寺池あり山林美景あり
『旧都巡遊記稿』	大正7年	1918		龍安寺	近郊之部 一	鏡容池 門内の西側にある大池にして、池中に一二の島嶼あり。其中に天女祠あり、此れ当寺の鎮守なりと云。四辺の景色最も清雅風韻に富み且つ規模雄大なり。 （中略） 方丈 池の北にあり。（中略）方丈の前庭を虎の児渡と称し、相阿弥作と号す。往昔唐土の或帝王揚子江の水源にて虎獵せしとき、虎其兒を携へ溪水を涉り岩石を伝ひ深山に遁逃せりと云へる古事の実景を想像して造り出せるもの、一株の樹木を植ゆることなく唯岩石十五を安配せるのみ、真に一奇観なり
『京城勝覧』	宝永3年	1706		龍安寺	第九日 乾の方	此池に鶯鷺多くあつまる見物の人あり
『京華要誌』	明治28年	1895		龍安寺		前庭は一の樹木を栽ゑす。唯五六箇の奇石を排置せり。其状ち虎の兒を狩ひて溪水を渉るに似たり。世に虎の子渡と称して名高し、相阿弥の作に係る。 （中略） 鏡容池 境内前面に在り。中に一楓を築き、天女祠を設く。四辺の光景最も清雅隠逸なり。伝へいふ、勝元の意匠に成ると。水鳥多く来り遊び、風情他に超絶そ、竜安寺の鶯鷺とて洛北一の奇勝なり
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	龍安寺	仮山地	洛西等持院の西に有此寺の仮山は細川勝元みづから畳所にして大石九つ左右の奇勢凡人の及所にあらず世に築山をこのむもの此仮山を以て標格とす
『宝永花洛細見図』	宝永元年	1704	15巻	龍安寺		春過夏たけ秋くれて、四方のながめもうとき木枯のくれるは、此池の鶯鷺見とてみやこの遊人袖をつらねてにきあふとそ
『山城名所寺社物語』	享保年間	1716～ 36		龍安寺		此寺の池におし鳥おほし
『都名所図会』	安政9年	1780	巻之六 後玄武	龍安寺*	大雲山龍安寺	方丈は勝元の館書院を以ていとなみ、庭前の築山、池辺の風色は勝元の物数奇なり
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻八	龍安寺*	鏡ノ池 名池之部	竜安寺にあり。以上の一池二沢共に水禽多来て群浴す。広沢は雁多し。大沢は鳧多し。鏡池は鶯鷺多し
『花洛羽津根』	文久3年	1863	巻五	龍安寺*	巖平山龍安寺	初めは左大臣実能公の別荘なりしを勝元乞受て庭前に築山池等物数奇せり。いまに池水湛て、其冬には水鳥群りて雪景眺望殊に勝れたれば、遊客愛に来る
『京都土産』	明治28年	1895		龍安寺*	名所見立 秋冬の部	同（前頭） 龍安寺の水鳥
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	龍安寺*	地辺鶯鷺 奇観地	洛西龍安寺の地にいにしへ細川勝元穿開する所の池あり冬に至つて鴨鷺鶯鷺郡集水上にうかむは又洛人奇観とす

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名		庭園に関する記述
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	8巻	龍安寺*	嵯峨行程	庭ニ相阿弥カケル水石ノ跡アリ
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	11巻	龍安寺*	東西歴覧記	〔龍安寺〕 方丈ノ庭ニ石九ツアリ、是ヲ虎ノ子ワタシト云ヘル畧ヤウニテ、庭ヲ作ルモノ、是ヲ手本トス、勝元自畧レシモノト云ヘリ
『山州名跡志』	正徳元年	1711	7巻	龍安寺*	大雲山龍安寺	愛宕郡 前庭の仮山は勝元の所作、姿勢奇也 ○鎮守ノ社 在リ池ノ邊
『山城名跡巡行志』	宝暦4年	1754	4巻	龍安寺*	大雲山龍安寺	○池 云鏡ノ池此池冬日鴛鴦多聚諸人賞之○鎮守ノ社 在池ノ邊（中略）○方丈 勝元ノ亭也前庭ノ石組勝元ノ作也 〔○池 鏡の池という、この池冬日、鴛鴦多くあつまる、諸人これを賞す○鎮守の社 池の辺にあり（中略）○方丈 勝元の亭なり、前庭の石組勝元の作なり〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	龍安寺山	寺院門下	葛野郡 庭に、水石を置む。倭俗、仮山を消す、これを、水石を置むといふ。その石の大なるもの、九箇。これ、勝元のみづから置むところにして、その布置、凡功の及ぶところに非ず。故に、世の仮山説くる者、これをもつて亀鏡とす。豊臣秀吉公、聚楽城にありし時、屢々方丈に來臨し、水石を眺めたまふ。一日、和歌を詠ぜらる。その時、座に陪るところの僧侶ならびに家臣、各々詩歌を献ず。その一会の短冊、今、寺中、養花院にあり。およそ、塔頭二十一箇所あり。その内、養源院は、細川家代々墳墓の地たり。寺産七百二十石あり。これ皆、勝元歸依の余光なり。堂前に、大なる池あり。島嶼、築ひ廻れり。これまた、勝元の鑿開するところなり。冬に至りて、鴨鷺・鴛鴦群り集り、水上に遊泳す。洛人、奇觀とす
『都花月名所』	寛政6年	1793		臨川寺	燕子花	下嵯峨 仏殿の前の池中に四季咲あり花絶ず
『都名所車』	正徳4年	1714		臨川寺		庭の景氣築山すぐれてよし又七本竹とて根は一本にて末は七本の紫竹也
『雍州府志』	貞享3年	1686	5巻	臨川寺	寺院門下	葛野郡 法堂の後に、夢窓作るところの仮山あり。水石の景象、特に、勝れり
『京城勝覧』	宝永3年	1706		臨川時	嵯峨	禪寺なりつき山あり庭よし。夢窓国師の所作なり。川ばたの景よし
『京羽二重織留』	元禄2年	1689	2巻	臨川時	仮山地	嵯峨大井川の水濱なり法堂の後の仮山は夢窓国師のつくる所にして世人のしる所なり又西芳寺は松の尾の南にあり堂前の仮山是また夢窓の水石を登所にして絶景の境地なり古松枝たれて奇石怪岩池辺をかこむ誠に国師は天性仮山を好給ひて妙有り
『京羽二重』	貞享2年	1685	1巻	臨川寺*	七本竹	名木 嵯峨臨川時庭の紫竹也根一本にて末七本あり
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	8巻	臨川寺*	嵯峨行程	臨川寺ニ入ル、是ノ寺元ト、亀山法皇ノ仙居ニシテ、其ノ後醍醐天皇第二ノ皇子、都督世良親王之遺跡ナリ、親王此ノ地ヲ、寺トシ、玉ハント欲スレトモ、不レ遂ニ而覺ス天皇憐ミレ之、終ニ寺トシ、夢窓ヲ開基トシ、建テ親王ノ之塔、方丈ノ庭ニ、夢窓ノ手ヲ登メル水石アリ
『山城名勝志』	正徳元年	1711	13巻	靈岩院	愛宕郡部三	翰林五鳳集（琴叔）酬業叔詩并序 業叔訪余龍阜南澗陰亭清水茂樹賞藏之景一躬之頃而頗有称意之色云云爰泊中李移居靈岩蕉堅祖甘棠之地也官娃宮畔水澗雲多如坐趙渭南佳語中其北若王南有永観桜花開西映乎春山楓葉植而秋水四時幽賞與目相謀者不矣云云余就今之南澗借隙地區ヲ以營之且復借山借水借烟雲花時借花雪時借雪以爲我有我有者成造物之無盡藏也 〔業叔にむくいる詩ならびに序 業叔余が龍阜の南澗を訪ね、南澗の陰亭の清泉茂樹賞蔵の景、一躬の頃を頗る、称意の色あり云云、ここに中李に泊まりて居を靈岩に移す、蕉堅祖の甘棠の地なり、官娃宮畔水澗く、雲多く趙渭南佳語の中に座せるが如し、その北に若王、南に永観あり、桜花開けて西春山を映し、楓葉植ち、秋水四時の幽賞、目をともに謀るはひとつならず云云、余、今の南澗に就きて、隙地の一區を借りて、もつて堵室を営ず、かつまた山を借り、水を借り、烟雲を借りる、花の時は花を借り、雪の時は雪を借り、もつて我が有となす、我有はみな造形物の無盡蔵なり〕
『山城名勝志』	正徳元年	1711	3巻下	冷泉院		無題詩（夏日 泉亭即事藤原周光）聞道林池称勝形冷泉院裏一泉亭傍山宝閣苔猶緑歸浦妓船横自香暇日尋君拂竹戸閑天待我我私茗庭岸風消暑暑何開簾寶ヲ石瀬先秋足浸瓶帝関西廻煙樹暗靈祠南峙暮松青 〔聞道林池、勝形を称す、冷泉院裏一泉亭、山に傍、宝閣苔なお緑に浦に歸る、妓船横を自香りし暇日君を尋ねて竹戸を排く、閑天我を待ちて茗庭を払う、岸風暑を消暑、何ぞ簾を開かん。石瀬秋に先て瓶を浸すに足り、帝関西に廻りて煙樹暗し、靈祠南に峙ちて暮松青し〕
『雍州府志』	貞享3年	1686	6巻	彌砥	土産門上	土石部 石の性、柔らかなり。故に、これを鑿るときは、必ず一片となる。大小長短、欲するところに従う。取り来りて仮山に置き、露地に安ず
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	蓮華王院		林泉は、燕子花咲みだれて初夏の眺幽艶たり
『京華要誌』	明治28年	1895		蓮華王院		夜啼水 本堂の前に在り。古書に、堂傍に醴泉あることを註せらるは此むらなか。其東に池あり。燕子花多し。花ひらくころ、紫白の横能碧水に映じて美観なり。池辺に茶店を設け、都下雅客の来り賞するもの絶へず。又東山の一佳景といふへし
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	9巻	蓮華寺	東北歴覧之記	高野川ノ北前ニ所謂崇道天皇ノ社ノ東ニ蓮華寺アリ、寺僧ニ其ノ由来ヲ尋問此ノ寺旧ト洛陽七条通リ塩小路下町ルニアリ、麓ノ道場ト称ストナン、此ニ依テ思フ時ハ、元來一遍上人派ノ道場ニテ、何ノ山ノ麓ニカリケン、聞マホシキ事ナリ、然ルヲ松平加賀守殿ノ家臣今枝民部ト云ヘル人、斯ノ所ニ移シ、諸堂ヲ建立シ、比叡山ノ末寺トセリ、黄檗隱元禪師蓮華寺ト記セル額アリ、堂ノ前ニ井アリ、其ノ水至テ清冷ナリ、名クニ漱玉泉ト一、方丈ノ内仏銅像ノ釈尊、同ク千手觀音ノ尊像アリ、庭ニ池水アリ、中嶋ニ石碑アリ、則チ民部父今枝宗二ノ碑ナリ、其ノ詞并ニ銘ハ、木下順庵是ヲ作セリ、篆額ハ石川丈山筆也
『菟芸泥赴』	貞享元年	1684	2巻	六孫王社		一清盛公の八条の家は此寺の辺其あとゝいへり池庭いと興あり
『都林泉名勝図会』	寛政11年	1799	巻之三	若松池		むかし五条大納言邦綱卿山莊若松亭ありて林泉に大池あり、故にこの名あり
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻	私月池	乙訓郡	（今勝持寺前有レ池土人は河野沼ト云按私月池ナルヘシ） 拳白集云おしほ山のかたはらに池をほらせて私月池と名づけられけるそのほとりにて堂 分あさる野澤のたての紅葉してからくれなゐにくゝる白鷺
『京之水』	寛政2年	1790	麟之巻	凝花舎	殿舎并二皇居内門	五間四面飛香舎の北にあり。こゝを梅壺といふ。 凝花舎の梅さかりなるを見てよみ停けるに 続後撰 いろくにこりつゝ庭の梅花いく世の春を匂ひきぬらん 前太政大臣 正治院百首 たか袖にかけしてむらん梅つほの軒葉の枝に風わたる也 李保

地誌名	刊行年	西暦	巻数	項目名			庭園に関する記述
『京町鑑』	宝暦12年	1762	縦	源義経旧館	泉水町	醒井通	此町西側に正法印といふ浄土宗の尼寺有又安養院と云浄土宗の寺有此町往昔源義経六条室町の御居館の御庭の泉水ありし旧地也因て号す又一説後白河法皇の御所の跡ともいへり
『京之水』	寛政2年	1790	鱗之巻	淑景舎	殿舎并二皇居内門		五間四面宜陽殿の東にあり、こゝを桐壺といふ
『京之水』	寛政2年	1790	鱗之巻	承明門	宮城内門		紫宸殿の前庭にあり
『京之水』	寛政2年	1790	鱗之巻	飛香舎	殿舎并二皇居内門		五間四面清涼殿の乾にあり。こゝを藤壺といふ。 延喜御時飛香舎にて藤の宴ありしに 家集 うすくこく乱れて咲る藤の花ひとしき夕立あらしとそいふ 清慎公
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	8巻		嵯峨行程		予好山水尋名勝之癖アリ
『近畿歴覧記』	貞享3年	1686	16巻		江東行		切 _ニ 莫 _イ 留 _テ 遺骸 _ヲ 、以 _テ 使 _ハ 人 _ヲ 見 _ル 上 _ニ 之 _ヲ 、掩 _ヒ 土 _ヲ 置 _キ 石 _ヲ 〔切に遺骸を留めてもって人を見せこれを使いなかれ、土をおおい石を置く〕
『堀河之水』	元禄4年	1691	4巻 冬部				草庵集二 東山に住侍し頃雪の朝花山院入道大納言家より 都だにあとなき庭はさびしきに山ざといかに今朝の白雪 返し 頓阿 ことの葉の跡見ざりせば雪ふかき山路は猶やさびしかたまし
『都名所車』	正徳4年	1714					三月十四日より廿四日迄 同頃 千本焰魔堂念仏（此寺の庭にふけんさうのさくらあり此はなさき次第にはじむ）
『山城名勝志』	正徳元年	1711	6巻				日本紀曰（垂仁天皇）十五年二月乙卯朔甲子喚 _テ 丹波ノ五女 _ヲ 納 _メ 於掖庭 _ニ 〔十五年二月乙卯朔甲子、丹後の五女を喚めして、おいて掖庭うちつみやにめしいる〕

表 18 京都の地誌における庭園に関する記述件数一覧

刊行年	西暦	書名	総項目数	庭園に関する記述項目数	割合 (%)	庭園に関する記述分類						
						①庭園	②遺跡	③出来事	④和歌	⑤造園	⑥由来	⑦その他
明暦 4 年	1658	『京童』	87	6	6.9	3	1	1	1	0	0	0
万治元年	1658	『洛陽名所集』	258	17	6.6	5	1	7	2	2	0	0
寛文 5 年	1665	『京雀』	1,164	6	0.5	0	3	2	0	0	1	0
寛文 7 年	1667	『京童跡追』	68	2	2.9	1	0	0	1	0	0	0
延宝 5 年	1677	『出来齋京土産』	270	14	5.2	5	3	3	0	1	1	1
延宝 6 年	1678	『京雀跡追』	130	5	3.8	0	2	1	0	1	1	
延宝 7 年	1679	『京師巡覧集』	460	19	4.1	7	1	6	3	1	0	1
貞享元年	1684	『菟芸泥赴』	696	42	6.0	13	6	18	4	0	1	0
貞享 2 年	1685	『京羽二重』	1,191	11	0.9	4	4	1	0	1	1	0
貞享 3 年	1686	『雍州府志』	2,732	65	2.4	33	16	9	0	7	0	0
元禄 2 年	1689	『京羽二重織留』	1,325	39	2.9	22	12	4	0	1	0	0
元禄 3 年	1690	『名所都鳥』	591	18	3.0	9	3	2	2	1	1	0
元禄 4 年	1691	『堀河之水』	129	15	11.6	3	1	7	4	0	0	0
宝永 3 年	1706	『京城勝覧』	302	11	3.6	9	1	1	0	0	0	0
正徳 4 年	1714	『都名所車』	272	9	3.3	6	0	3	0	0	0	0
宝暦 12 年	1762	『京町鑑』	169	12	7.1	1	6	1	0	0	4	0
安永 9 年	1780	『都名所図会』	599	17	2.8	16	1	0	0	0	0	0
天明 7 年	1787	『拾遺都名所図会』	839	17	2.0	14	2	1	0	0	0	0
寛政 2 年	1790	『京之水』	13	3	23.1	2	1	0	0	0	0	0
寛政 5 年	1793	『都花月名所』	443	11	2.5	11	0	0	0	0	0	0
寛政 11 年	1799	『都林泉名勝図会』	93	33	35.5	31	2	0	0	0	0	0
文政 11 年	1828	『洛陽十二社靈験記』	10	1	10.0	0	0	1	0	0	0	0